

2018 年度

自己点検・評価報告書

目次

愛知東邦大学 事業報告	3
経営学部 地域ビジネス学科・国際ビジネス学科 事業報告	13
人間健康学部 人間健康学科 事業報告	15
教育学部 子ども発達学科 事業報告	18
各種委員会 事業報告.....	20
教員 自己評価報告（経営学部 地域ビジネス学科・国際ビジネス学科）	25
教員 自己評価報告（人間健康学部 人間健康学科）	91
教員 自己評価報告（教育学部 子ども発達学科）	191
教員 自己評価報告（その他）	274

2019 年度入試に向けた募集活動は過去最高の志願者を集め、入学者も 3 学部全てで定員を確保し、入学者も過去最多の 411 名となった。文科省による定員厳格化の外部環境もあったが、知名度向上へ、鉄道駅と幹線街路へ広告を掲出したこと等が、効果を生んだと考えられる。キャリア教育充実に向けて、「東邦 STEP」は 2019 年度から、同一時間帯に学生が受講できる時間割を組むという全学化の方向をまとめた。退学率低減へ諸方策をまとめ、一部実施した。女子サッカー部は大学選手権に 5 年連続で出場し、ベスト 16 に進んだ。

1. 「真に信頼される人格」を育む

《計画》

学園の成り立ちを源流とする校訓の「真面目」、建学の精神「真に信頼される人格の育成」を学生個々が理解し、本学で学ぶ意義を高めるために、自校教育科目「東邦学園と中部圏」に加えて、2018 年度は全学部の「基礎演習」において学長講話を実施し、更なる浸透を図る。

また他大学の FD 活動も参考にしながら、教員の授業改善意欲を高め、学生に学ぶ意欲をもたらす取組みを策定する。授業運営に関するルールを明文化し、徹底する。

《活動実績》

- ・校訓の「真面目」、建学の精神「真に信頼される人格の育成」を学生個々が理解し、本学で学ぶ意義を高めるために、自校教育科目「東邦学園と中部圏」を前期に開講し、42 名が受講した。
- ・全学部の「基礎演習」において学長講話を実施した。
- ・岐阜経済大学において、初めての合同 FD を実施した。本学から教育力向上委員会委員 5 名、岐阜経済大学から 7 名の教職員が参加し、各々の FD 実施状況、中途退学防止策、授業評価アンケート、教員評価制度などに関して意見交換を行った。
- ・学生会と協議を重ねた結果、＜「授業を充実する」ための私たちクレド＞を作成するに至った。

《評価と課題》

- ・計画どおりに事業を進めることができた。FD、SD を実施に当たっては教員、職員の全員が出席できるように配慮する必要がある。

2. キャリア教育の充実

《計画》

2018 年度入学生より、キャリア教育の充実を図る目的で、初年次教育として全学共通科目「キャリア基礎Ⅰ・Ⅱ」を実施するほか、2 年後期では「キャリアプランニングⅠ」、3 年前期には「キャリアプランニングⅡ」を配置する。また、30 日以上長期インターンシップに対応する科目を追加で配置する。

低学年次から体系的に配置されたキャリア科目により、大学生として「学ぶ力」、社会人としての「生きていく力」を醸成するとともに、学生への就業に対する早期の意識付けと課題発見機会を創出し、円滑な就職活動へと導く教育を確立する。

《活動実績》

- ・キャリア教育の充実を図るため、科目数を増やし、体系的にキャリア科目を配置させることができた。
- ・「オンリーワン計画書」を試行することができた。

《評価と課題》

- ・「オンリーワン計画書」の実質化を図る。また、「東邦 STEP」の更なる充実を図っていく。

3. 実践型重視の教育

《計画》

本学では地域をフィールドとする課題解決型の実践学修を推進している。なかでも教育学部においては地域の教育機関と連携し、各種行事への参加など「サービス・ラーニング」を重視して取り組んでいる。次年度では全学的な取り組みとしては、「総合演習Ⅰ・Ⅱ」を軸に地域を学びのフィールドとする実践型教育を推進する。

《活動実績》

〔経営学部〕

- ・経営学部では、「地域と連携した授業・活動報告会」が、発表者によるコンテスト形式に変更されたことを受け、総合演習のみならず、プロジェクト型科目や、専門演習においても、積極的に取り組むように学部執行部で定め、専任教員へ取組を推奨した。

〔人間健康学部〕

- ・人間健康学部の総合演習は、2つテーマを設けた。1つ目は、専門演習につながる「知識と技術」を幅広く学ぶこと、2つ目は、「地域をテキスト」にして学ぶことである。特に、2つ目の「地域をテキスト」として学ぶ「地域重視の教育」では、例えば名東福祉会館での高齢者の軽運動教室「ふまねっと」指導の手伝い（毎月）などに、演習単位で複数参加したことがあげられる。さらに犬山城を中心にして歴史と文化の探索（朱印所めぐりの参拝者調査・城下町観察など）をしたことや、また「明治村」での医療の歴史を探る学習などを実施したこと、そのほかのゼミでは大学祭をはじめ地域で開催される行事に参加したことなどがあげられる。

〔教育学部〕

- ・教育学部では、毎年、総合演習において、名東区猪子石の「劇団うりんこ」と連携して表現力育成を目指す活動を行っている。11月21日に「劇団うりんこ」から川原美奈子さんを招いて、表現力育成のワークショップを行った。
- ・白井総合演習は、うりんこ劇場において12月21日に開催されたクリスマスコンサート「のらねこソクラテス」の裏方として参加した。駐車場の整理や、受付の手伝いも行った。
- ・矢内総合演習は、名東児童館において12月22日、愛知東邦大学吹奏楽団にも参加してクリスマス会を開催、その企画・運営を行った。

《評価と課題》

〔経営学部〕

- ・総合演習においては、地域ビジネス学科の手嶋准教授のゼミ生を中心に、参加学生数が国内最大の「キャリアインカレ 2018」（マイナビ主催）に挑戦し、多くの学生が参加した。その中で、数名の学生が学内予選を通過し二次予選に進出。ビデオ審査や準決勝（東京）を経て、最終的には経営学部の2年生2名のユニットが、自民党が出題した「地方創生策」

部門でトップ（賞金 10 万円）に選ばれ、他部門と競う決勝大会まで進出した。全国 385 校の中から、東京以外の大学で決勝まで進出したのは愛知東邦大学のみであった。

このことは、学部内学生の意識向上となっただけでなく、教職員を含め、やればできるのではないかという自信の形成につながった。言うまでもなく、本学の知名度は飛躍的に向上し、ビジコン関係の企業において本学の評判を飛躍的に向上させる結果となった。

- ・年度末に実施された「地域と連携した授業・活動報告会」では、多くの経営学部生が参加し、年間を通して、様々な地域をフィールドとする活動を報告した。地域連携委員会のリードにより、2018 年度参加学生の動機づけ向上を狙って、コンテスト形式で行われた。経営学部生は口頭発表 16 グループ中、最優秀賞、優秀賞、地域貢献賞、ビギナー賞を受賞した。
- ・2018 年度は、地域をフィールドとする課題解決型の実践学修が飛躍的に増加したが、まだ経営学部の一部の学生が参加しているに過ぎない。こうした活動は継続することが重要であるため、引き続き総合演習を中心に、プロジェクト型授業への参加、ビジネスコンテストへの参画、地域貢献活動に積極的に取り組んでゆく。

〔人間健康学部〕

- ・人間健康学部では、前期と後期に総合演習ごとに、代表学生が「活動報告書」を作成してきた。学生の報告書には、それぞれの演習担当教員がコメントという形で評価をした。参考例として、「参加することの意義は認められるが、それをまとめて報告するときの事実と意見が区別できていない点、観察データをプレゼンするためのスキル不足という点」が挙げられている。それを踏まえて、人間健康学部での評価と課題をまとめると、総合演習をそもそも「地域を学びのテキスト」とするならば、地域への関与だけで完結して教育が終了するのではなく、むしろこの「テキスト」からどの視点を選択し、そこから何を観察し、どのように分析したのかが重要である。そこから教育の内容を改めて考え、「地域というテキスト」への問題意識と問題発見などからレポートやプレゼンまでに至る段階的な学びへ至る教育の一貫性が今後の課題である。

〔教育学部〕

- ・白井総合演習のうりんこ劇場における裏方としての参加は、役者さんとの距離が近く、細かなしぐさや視線などに気付くことができた。劇の内容も子どもが主人公で分かり易く、観劇の子どもたちがどこで興味を持ち、どこで楽しそうかなど、子どもたちを飽きさせない工夫は、学生にとって表現力の学びに繋がった。舞台装置や音響などの工夫も学んだ。できれば、回数を重ねていけることを考えていきたい。
- ・矢内総合演習の名東児童館でのクリスマス会は、前年度に続き、学生主体で企画・運営を行った。今回は、3 歳児と保護者、小学生、100 名程が楽しんだ。学生たちは、子ども理解に繋がり、教材研究の学びの場となった。課題としては、幼児教育コースの学生は、保育所実習が 12 月初旬まであり、十分な準備が難しいこともあり、開催の時期の検討も考えなければならないが、名東児童館は、毎年のクリスマス会を楽しみにしている。また、名東児童館クリスマス会は、「地域と連携した授業・活動報告会」において実施内容をポスター発表し、地域貢献賞を頂いた。

4. 募集力の強化

《計画》

ブランディングを踏まえ、高校生を対象とする「じぶんブランディング」、高大接続改革を先取りする「自己プロデュース入試」、公務員を目指す「東邦 STEP の全学化」を前面に立てながら、認知度向上を重点に置いた広報活動を展開する。具体的には、募集重点地域を愛知県に絞り、マス広告については昨年着手した募集対象高校の所在地域の駅広告や野立て広告の他、東海・北陸地方にあるファミリーマート 3,000 店舗にメディア CM を展開する。また DM（ダイレクトメール）については受験生層の拡大をねらい、認知から一般入試向けまで年間 5 回にわたり受験生の動向にそった戦略的な打ち手を実施する。その他、伝統行事として定着した「就職合宿」をテレビ番組（テレビ愛知）として企画製作（10 分）する。

一方、塾や高校 1・2 年生対象、沖縄を除く他県への募集活動にかかわる媒体やイベントは大幅に見直し削減する。

《活動実績》

- ・重点施策とした認知度向上のためのマス広告（駅・野立て広告、コンビニ CM 等）はすべて計画どおり掲出した。また、TV 番組も予定通り放映し、イベントで二次活用できた。
- ・提携校として、新たに三重県の私立海星高校、愛知県の名古屋市立商業高校、私立聖カピタニオ高校の各校と教育提携を締結した。
- ・高校 1・2 年生を対象とした「じぶんブランディングプログラム」への参加者は、オープンキャンパスや高校での総合学習等を通じて、目標の 600 名を超え 1,500 名程の人数に上った。また「自己プロデュース入試」は、新たな入試へのアプローチとして紹介をして 1 名が受験、入学した。

《評価と課題》

- ・認知度全般について明確な効果測定は困難だが、ファミリーマート CM に関してはステークホルダー対象のアンケート調査から、時期を追うごとに認知度の向上が確認された（7 月 13.5%、8 月上旬 19.5%、8 月下旬 16.4%、11 月 35.8%）。また、駅・野立て広告掲出地域からの資料請求者や接触数が増加している。さらに掲出展開地域の高校（瀬戸北総合、聖カピタニオ）で提携校が増えたこともあるが、通常の高校訪問において、広告掲出のある地域と無い地域を比べると、認知度施策の効果はあると体感する。
- ・課題は、ブランディングの観点から、一定の認知度と共に発信できる教育コンテンツの中身づくりである。教育の充実と情報発信を両輪としたパブリックリレーションズを通して、大学としてのブランド力を築くことが次へのステップとなる。

5. 出口の強化

《計画》

近年の売り手市場という好環境から、優良企業との関係構築に向けて金融系を中心に企業訪問等の取り組みを強化し、学生のキャリア選択の幅が広がるよう推進する。

教職員の就職支援については、小規模大学の強みを一層活かして、学生との個別相談を充実し、一人ひとりと向き合い個性を引き出す指導を徹底する。また、2018 年度で 10 回目を迎える「就職合宿」は、本学の名物行事として学生満足度も高く、内容の充実により学生の第 1 志望企業の内定率アップを図る。さらに、公務員を目指すプログラム「東邦 STEP」の一期生が初めて採用試験に臨むことから、多くの合格者輩出に向けて全学を挙げて支援する。

《活動実績》

- ・公立保育士、公立学校教員採用のための特別対策講座を実施した。公立小学校の教諭として正規採用1名、常勤6名が採用され、また、公立保育所の保育士6名が採用された。

《評価と課題》

- ・東邦STEPの充実が課題である。

6. 地域連携

《計画》

名古屋市名東区、日進市、沖縄県読谷村との協定に基づく事業は、本学の教育的活動と連携と、活用する動きが年々高まってきた。については、各地域を活動のフィールドとしたり、課題と取り組むプロジェクト型授業、読谷村との間で軌道に乗りつつある「Uターンシップ」など、出身地で貢献できる人材を育てる取り組みとしての一層の充実を図る。

《活動実績》

[名東区]

- ・吹奏楽団、学生会らが、第23回名東の日・区民まつり「平和が丘春まつり」に参加、合わせてATUCC寄付講座3科目、第13回名古屋小・中学生将棋大会を実施
- ・教育学部サービス・ラーニングの実施、名東区内8小学校（5月25～26日）、上社幼稚園（6月16日）、東貴船幼稚園（6月30日）、名東文化小劇場（8月7日）
- ・地域連携センター、学生ボランティア活動として、痴漢防止啓発活動を実施。地下鉄一社駅にて啓発ビラを配布（7月11日）
- ・経営学部大勝ゼミ、「第6回トーくん・ホーちゃん争奪杯ドッジボール大会」、総勢300人の参加者で開催（7月29日）
- ・TOHO Learning House、「認知症カフェ」開催（7月29日、10月7日、12月9日）
- ・学術情報センター、マーガレット一家「たっちゃんの紙芝居」開催（11月7日）
- ・和丘祭（学生祭）にて、ATUCC「認知症サポーター養成講座」開催（11月11日）
- ・東邦プロジェクト、5大学50人の学生が参加し、平成30年度名東区学生ミーティングを開催
- ・東邦プロジェクト、平成30年度区民ミーティングに参加し、学生ミーティングを報告（12月15日）
- ・学生有志4名、名東警察署の一日警察官に任命され、名東区内のイベントに参加（1月10日）

[日進市]

- ・経営学部大勝ゼミ、少年野球教室（7月14日）
- ・女子サッカー部、「第5回ガールズサッカーフェスティバル」を名古屋グランパスと開催（8月18日）
- ・女子サッカー部、「女子小学生対象女子サッカー普及及び交流事業」実施（9月～2月、各第2・第4月曜日）
- ・ダンスサークル「Free Style」とTOHO Learning Houseが日進市民祭に参加（11月18日）
- ・経営学部杉谷ゼミ、「第12回愛知東邦大学杯少年サッカー大会」開催（12月23日）

[読谷村]

- ・2018年度連携協議会 第2回沖縄読谷村（9月5～6日） 第3回愛知東邦大学（2月8～9日）、第4回沖縄読谷村（3月21～22日）
- ・読谷村インターンシップの実施、9月（3名）、3月（4名）
- ・経営学部、読谷村をフィールドとするプロジェクト型授業の組み立てと予算化（1月）

《評価と課題》

- ・名東区をフィールドとした活動は質・量ともに増加しているが、イベント型取組が多く、中長期的な視野にたった、地域社会の課題解決に取り組むプロジェクトはまだ少ない。今後は、地域社会と“成果の捉え方”に関するすり合わせが必要である。これまで地域連携の成果とは、参加者数などイベントとしての規模的なスペック、学生の参加状況等、個別の教育イベントとしての捉え方のみであった。
- ・大学としては確かに学生への教育機会の提供であるが、地域社会への貢献性を再度検討してゆく必要がある。地域連携活動の意義とは、イベントとしてのスペックの拡充ではなく、企画者・運営者・学生・地域社会が共有できる価値づくりにある。具体的には、地域連携活動を通じて、参加者同士の人的ネットワークの形成・拡充や、地域社会や他大学との官民学連携・学学連携の契機となることであろう。つまり、地域連携そのものだけでなく、その取組の事前事後のプロセスを通じて、地域社会への関心を持ち、かつ積極的に地域とかかわろうとする（大学生に限らない）人材の発掘育成であり、そのフィールドも名東区や日進市に限定すべきではない。
 - ・日進市は本学のグラウンドがあるが、本学からは車以外のアクセスが困難であるため、地域連携活動は女子サッカー部やTOHO Learning Houseなど既存の組織主体とならざるを得ない。日進市は本学のみならず、複数の大学と教育連携協定を結んでいるが、教育キャンパスがある大学以外は、積極的な活動は見られず、地政学的な問題がある。
 - ・沖縄県読谷村との教育連携は2年目が終了し、村長推薦入学者以外の沖縄出身学生のインターン参加も増加している。Uターン人材の育成がテーマであるが、東海三県出身学生を巻き込んだPBL授業の設計により、Iターン人材の可能性や沖縄と愛知を繋ぐ企画の実施に向けて、経営学部が実験的な授業プログラム開発を行っている。

7. 強化指定クラブの支援

《計画》

強化指定クラブ（硬式野球部、男・女子サッカー部、吹奏楽団）は、クラブ間での高大連携を意識しつつ、全国大会出場や上位昇格を達成目標に掲げる。また、本学ブランド化への一助となるよう、顧問の補強や活動環境の整備等を継続して行う。

《活動実績》

- ・硬式野球部は愛知大学リーグの1部昇格目前まで勝ち進んだが、目標達成とはならなかった。女子サッカー部は5年連続でインカレ出場を果たしたが、目標である8位入賞は果たせていない。吹奏楽団は、高校マーチングバンド部との合同編成による学園公式バンド「TOHO MARCHING BAND」としての活動が順調で、3月に実施したフロリダ遠征が高校硬式野球部の選抜高校野球大会出場とも相まって、連日各種報道機関に取り上げられ声価が高まった。
- ・援助金の見直しについては十分な議論まで至らず、引き続き学生委員会にて議論していく。

《評価と課題》

- ・各部の成績等による成果に関しては各部の努力によるものがほとんどだが、顧問の補強や環境整備等については、各部からの聞き取り等をしながらか具体的な案を作成、援助金の見直しは、財務状況もみながら、具体的な方法を学生委員会にて審議し、来年度からの運用を目指す。

8. ガバナンスの強化

《計画》

学長と各学部との意思疎通を一層緊密化させるとともに、重点課題に取り組むため、学長補佐を4人に拡充し、「学生募集と高大連携」「ブランディング」「教員評価と自己点検・評価」「学生の満足度向上」の担当とする。学内の会議は理事会との関係も念頭に置きつつ、構成員と開催回数を見直して、熟議と意思決定の迅速化を図る。

また、2017年度に教員の資質向上を目的に試行した目標管理制度の実質化を図る。

《活動実績》

[学生募集と高大連携]

- ・別項で掲載済み

[ブランディング]

- ・2018年4月1日より、新しいビジュアル・アイデンティティ(VI)を導入し、VIガイドラインに基づき、様々な変更がなされた。

<主な制作物>

- ・VIガイドライン
- ・大学関連（名刺、ネームプレート、封筒、施設表示、印刷物、ファイル、学内器具、運動部ユニフォーム、学園バス、メディア向けボード、スライドテンプレート、PC壁紙など）
- ・ブランド浸透ツール（コンセプトブック、教職員クレド）
- ・コミュニケーションアイテム（野立て看板、東邦学園表示看板、ホームページ、フェイスブック）
- ・学生配布物（ファイル、クレド、消しゴム、シラバス）
- ・高校生向け（大学案内、他印刷物）

<ブランドコンセプトに基づく活動>

- ・じぶんブランディング（高校生1,500人余りが受講）
- ・自己プロデュース入試、東邦STEPの拡充
- ・学内活動（「キャリアインカレ決勝進出」「地域と連携した授業・活動報告会」などに見られるように、経営学部、人間健康学部、教育学部の各学部それぞれにおいてブランドコンセプトおよびクレドに適した活動が数多く実施された）

<外部への発信>

- ・ファミリーマート広告、朝日新聞広告企画、学研・進学情報、日本マーケティング学会論文発表、地域創造研究所シンポジウム

[教員評価と自己点検・評価]

- ・「教員評価と自己点検・評価」に関して、今年度は自己点検・評価委員会が中心となり、各

教員から提出された「自己点検・評価書」の形式と内容を確認し問題点は訂正を求め、その後外部に向けて公表することにした。ただし、「教員評価」については未だ規程等の制定には至っていない。

[学生の満足度向上]

- ・2018年度後期に、愛知東邦大学在学学生（1,310名）を対象に学修行動ならびに学生満足度調査を行った。調査方法として、2018年9月20日（木）～25日（火）までの各学部の履修登録期間中にGoogle Formを利用した悉皆調査を実施した。また、未回答者には10月3日（水）までの期間に入力するよう個別に依頼し調査した。
- ・学修行動調査のフィードバックに関して、学生用ページにおいて公表し、回答者個人の学修行動の履歴を把握するため大学全体の調査結果を提示した。

《評価と課題》

[学生募集と高大連携]

- ・別項で掲載済み

[ブランディング]

- ・ブランディングの本格推進としての2018年度は、全体として満足できる評価と認識できる。新VIへの変更は大きな混乱もなく、スムーズに進行させることができた。
- ・オープンキャンパス参加者、入学希望者、入学者が過去最高を記録した。これは大学入試における環境の変化もあるが、ブランディングも寄与していると考えられる。
- ・ブランドコンセプトを具現化させる活動においても着実に成果を示している。「じぶんブランディング」活動においては、高校生に対して本学の独自性の認識を促進する活動として着実な成果が見込める。また、「オンリーワンを、一人に、ひとつ。」というブランドコンセプトに基づき実施された授業において、「キャリアインカレ」初参加・決勝という成果は本学の認知を高めたほか、独自性を広く発信することにつながった。同様に、「地域と連携した授業・活動発表会」においては、数多くの「オンリーワンの企画」が発表された。それらは「地域が教室」というクレドの実践としても高く評価することができる。
- ・ブランドコンセプト「オンリーワンを、一人に、ひとつ。」の具体的活動の推進ブランディングは外見（VI）を整えることだけではなく、むしろ内面（具体的活動）を磨くことが最も重要である。各学部、各教員、各授業、教え方、学生との接し方、職員の職務において、コンセプトを実現するためにはどうすれば良いかを絶えず考え、実践していくことが必要である。それらの活動の蓄積が「確固たるブランド」を形作ることにつながる。
- ・本学の独自性の外部発信による認知・理解・共感の獲得として、広告コミュニケーションのみならず、ホームページ、SNS（フェイスブック、YouTubeなど）、ブログなどで積極的に本学の独自性を発信し、認知・理解・共感を獲得する。

[教員評価と自己点検・評価]

- ・「自己点検・評価」についてはほぼ目標を達成できた。「教員評価」については、規程制定等の課題をそのまま次年度に繰り越す結果となった。

[学生の満足度向上]

- ・本学の教育に対する満足度について、70.5%が満足していると回答した。各学部学科のカリキュラムや時間割等の満足度に関して、それぞれ79.4%、59.1%を示した。時間割に対する満足度が6割程度であった要因は、本学の教室数の不足が影響している可能性が考え

られた。

- ・大学生活やキャリア支援を含む総合的な満足度は77.7%を示し、概ね満足度が高いことが明らかとなった。今後、奨学金やキャリアに関する支援体制をさらに充実させ、学生の満足度を向上させていく必要がある。
- ・施設面の満足度について、教室に対する不満が最も多く、次いでトイレに対する不満であった。教室に対する不満は、本学 2001 年に開学して以来長年にわたり指摘されている問題点であり、根本的な解決には至っていないため今後の継続課題である。トイレに関しては、今年度、和式スタイルからウォシュレット付の洋式スタイルに変更になったことで大幅に改善された。

9. 中途退学者低減の対策

《計画》

退学に至るのは、学生個々によって要因が異なる。網羅的、一時的な対策では限界があり、個別的で継続的な取り組みが必要不可欠である。各学部・学科は、学年ごとの実情も踏まえ、退学を現状より増やさないよう、退学者数または率に基づく「管理数値目標」を設定する。各学部長と学長補佐（満足度向上担当）を中心にして、次の項目に取り組む。

- ・入学前、入学直後が最重要の時期と認識し、入学前教育やガイダンスの在り方を見直す。
- ・メンタル面も注視して、入学時に専門的観点から調査し、教職員に新入生の必要な情報を提供する。情報は厳重に管理すると共に、「読み方」について専門家のアドバイスを受ける。
- ・「居場所作り」は、学内の新たなスペースの提供、サークルなど対人関係面からも検討する。
- ・学年が進行したとき、特にゼミ担当教員間で、学生の状況を適確に掴める引継ぎを行う。
- ・学業成績に関して、入学後の努力ぶり＝伸びしろ＝に着目した「表彰」と「褒賞金」の制度を導入する。
- ・学生を大学の諸活動とより積極的に関わらせ、経済的支援強化の側面も取り入れながら、学内ワークスタディの業務範囲の拡大を図る。

《活動実績》

- ・各学部とも、学科会議の後の時間帯を利用して、欠席過多学生のみならず授業を理解することに困難を感じているような学生などの情報を交換することや、GPA1.0未滿学生に関して対象者リストの精査、演習担当教員による学生面談、また保証人への連絡など退学リスクを減らすべくさまざまな対応をとった。退学率の目標値としては、概ね 10 パーセント未滿を設定した。
- ・中退者防止の所管委員会である教育力向上委員会は、本項目との関連では、第1に岐阜経済大学のFD推進委員会と合同のFDを実施した。同規模で学部構成も比較的似ている同大学と初めての合同FD開催にしては踏みこんだ意見や情報を交換でき、そのうちのいくつかは本学にとって次年度以降有効な手法として活用していけるものであった。また第2に、「ユニバーサル大学における中退分析と中退防止施策」というテーマでSD研修会を開催した。嘉悦大学の白鳥成彦教授を招聘して、中退分析と中退防止策に関する講演と質疑応答を行い、中退率低減のために基本的にはできるだけ多くのデータ収集をすべきであると

ということと、本学でも導入可能な一手法 SA (Student Assistant) 制度について教示していただいた。

《評価と課題》

- 各学科会議において行われている、中退リスクが高いと思われる欠席過多学生などに関する情報交換は以前から行われているが、なかなか目に見える程度には効果が上がらない。上記白鳥教授からご教示があったような、本学入学以前の細かい情報も含めてできるだけ多くの情報をも退学要因の分析対象とする手法を開発していかなければならないと考える。また、それと同時に学生と教員との双方を仲介する役割を担う SA 制度の早期導入を検討すべきであろう。経済的理由から退学に追い込まれてしまうような学生を優先的に SA として採用し経済的に支援すると同時に、彼（女）らに下級生（基本的に1年生）の勉学を含めた学生生活全般に関する助言役を担わせ、多面的に退学防止を図ることを目的としたい。
- 学業成績に基づく「表彰」や「褒賞金」制度の導入についてはほとんど検討できなかった。次年度に持ち越さざるを得ない。

I 事業計画の基本方針

1. 経営学部地域ビジネス学科

- (1) 全員参加の学部経営で、課題の共有化と当事者意識を持つ。
- (2) 経営学部としての情報発信力を強化し、話題づくりを行う。
- (3) 地域企業や団体との連携を強化し、教育ニーズの把握に努める。
- (4) 中退者の傾向分析を行い、成果のある施策導入を試みる。
- (5) プロジェクト型授業の魅力度を上げ、履修生を増やす。
- (6) デジタルリテラシー教育に取り組む。
- (7) 2019年度以降のカリキュラム案/教員体制案の早期作成。

2. 経営学部国際ビジネス学科

- (1) 国際ビジネス学科の事業戦略の見直し

II 2018年度重点課題

1. 重点課題

- (1) 国際ビジネス学科事業改善シナリオの策定
- (2) GPA1.0未満学生への対応強化をはじめとする中退率の低減
- (3) 定年及び雇用契約終了に伴う3名の専任教員の採用

2. 重点課題の自己判定

(十分に達成することができた/概ね達成することができた/あまり達成できなかった/達成できなかった)

十分に達成することができた。

3. 自己判定の理由（事実の説明及び自己評価）

- (1) 地域ビジネス/国際ビジネス両学科の定員変更を含む、中期的な学部再編案が策定され、運営委員会及び理事会にて承認された。
- (2) 2018年2月時点で、前年比で中退率が低下した。(2017/2018生の退学者数が想定を下回った)
- (3) 2019年度専任教員の採用は予定通り完了した。

4. 重点課題の改善・向上方策（次年度に向けた計画）

- (1) 学部再編案のさらなる詳細設計とPDCAによる運用プログラムづくり（コース&カリキュラム改編、PIAを含む教員体制再構築、入試及び広報政策など）
- (2) 入学前～入学時を契機とする大学への愛着心・学習意欲の醸成（初年次教育の拡充）
- (3) オンリーワン人材育成の実現にむけた、演習活動・学生生活・学外活動のメニューづくり

III その他課題

1. 課題

- (1) 専門演習での論文指導強化による文章作成力の向上
- (2) 演習活動・個人研究を通じた学生の主体的な学習機会づくりとプレゼン力の向上
- (3) 外部団体・組織との連携による実践的な教育機会づくり

2. 課題の自己判定

(十分に達成することができた/概ね達成することができた/あまり達成できなかった/達成できなかった)

概ね達成することができた。

3. 自己判定の理由（事実の説明及び自己評価）

- (1) 2015 年度入学生の殆どが、ゼミ論文課題を達成できた。
- (2) 2017 年度入学生を中心に課外活動（キャリアインカレ等）への積極的な参加学生が増加、外部へのプレゼンテーション活動への学生の関心が高まった。
- (3) 職業実践力育成プログラム（BP）参加企業、地域連携パートナーなどとの共同プロジェクト取組が活発化し、学外活動取組が増加した。
- (4) しかしながら、こうした活動はまだ一部の学生に限定されており、学生の活躍機会の多様化はまだまだ十分とは言えない。

4. 課題の改善・向上方策（次年度に向けた計画）

- (1) 専門演習での継続的な研究・論文指導。
- (2) 総合演習におけるプレゼンテーション経験機会の増加。
- (3) 基礎演習における学生個人の学習課題発見と意欲づくりへ向けたプログラム開発
- (4) 産学連携/地域連携活動の強化による学外学習フィールドの拡充（プロジェクトテーマ及び対象素材の発掘と入手）

IV その他特記事項

- (1) 授業評価アンケートに限定しない教員評価制度の研究と提言（職位の昇任以外のモチベーション向上をどう設計するか検討）
- (2) 入試広報や学部広報活動における教職員共同取組の拡充（地域創造研究所及び教員の研究発表活動の活性化）
- (3) 中部経済連合会加入を契機とする産学連携体制づくりの強化
- (4) 新任教員を交えた新たなナリカレント教育開発着手

I 事業計画の基本方針

1. 人間健康学部 人間健康学科

- (1) 中途退学者の防止対策を図る。
- (2) 民間資格も含め現行の資格取得を整理する。
- (3) 受験対策も含め資格取得プロセスを明示する。
- (4) 基礎・総合演習とコース教育の見直しを図る。
- (5) 公認心理師の取得プロセスの過程を明示する
- (6) 教育と資格取得と就職という3つの連動を再考する。
- (7) 人間健康学部の学風と文化の創造を図る。

II 2018年度重点課題

1. 重点課題

- (1) 中途退学者の防止対策を図る。
- (2) 民間資格も含め現行の資格取得を整理する。
- (3) 受験対策も含め資格取得プロセスを明示する。

2. 重点課題の自己判定

(十分に達成することができた／概ね達成することができた／あまり達成できなかった／達成できなかった)

- (1) 中途退学者の防止対策については、概ね達成することができた。
- (2) 民間資格も含め現行の資格取得を整理ができて、概ね達成することができた。
- (3) 受験対策も含め資格取得プロセスを明示することができて、概ね達成することができた。

3. 自己判定の理由（事実の説明及び自己評価）

- (1) 中途退学者の防止対策については、1年生の前期では、誰も退学しなかったことを含め、取り組みに効果があったと思われる。特に学科会議の最後に、各教員の演習での学生の授業欠席状況を共有する「中退防止WG」（高柳・渡辺各先生）の役割は大きかったものと思われる。
- (2) 民間資格も含め現行の資格取得については、特別に「学部資格・試験等再編WG」（丸岡・葛原・橘・谷村・丹下・尚・中野各先生）を設けて検討した。そのなかでは、民間資格であって学外で取得することができるものを整理した。それは、レクリエーションインストラクター（地域・学校・企業などでレクリエーションの指導を行う専門家の資格）を取るための授業「レクリエーションインターンシップ」を2019年度から廃止することを確認した。その他、地域防災コースの主だった資格が「健康管理士一般指導員」だけなので、「防災士」を新たに含めた。そしてコースごとに資格とその履修モデルをガイダンス時に配布した。
- (3) 受験対策も含め資格取得プロセスは、前期と後期のガイダンス時に各コースの教員からの説明を実施した。スポーツトレーナーコース（葛原先生）、スポーツ指導者コース（石川先生）、健康づくり指導者コース（尚先生）、心理カウンセリングコース（肥田先生）、教職（すべての教職課程担当教員）が資格と大学の科目との関連を説明した。

4. 重点課題の改善・向上方策（次年度に向けた計画）

- (1) 中途退学者の防止対策を図る。

中途退学防止対策は学部独自での取り組みよりも大学を挙げて取り組むべき課題があるこ

とが嘉悦大学の白鳥先生の「ユニバーサル大学における中退分析と中退防止施策」という研修での講演を聞いて改めて知らされた。とりわけアプローチの方法の完成度の高さを知らされたが基本には学生情報の収集にあった。学部独自の取り組みとしては、この研修を踏まえて、基礎データ(各演習の欠席状況やGPA)の収集と分析を始めることから傾向と対策を立てたい。

(2) 民間資格も含め現行の資格取得を整理する。

次年度からは特に「公認心理師」の授業が開始されるので、授業と資格の関係をより明確に伝える必要があり、同時に来年度からフェイドアウトしていく認定心理士の収束の方向も明らかにする必要がある。とりわけ「公認心理師」は、4年次で実習に出すための実習指導と実習との教育方法の確立が求められる。

(3) 受験対策も含め資格取得プロセスを明示する。

授業と受験対策との関連性を伝達できるのは、ガイダンスの時期になる。次年度からは各コースが資格と連動した教育を実践することになる。例えば「保健体育教員コース」であれば、初年度1年生からコース所属の意識を高揚させて、3年次には小学校2種免許の資格を通信で取得できるようにし、4年生まで教員になるという意識を維持することをコース教育の中心に置くことである。また、それぞれコースには民間資格も含めて資格の受験対策を織り込んだ演習を実践してプロセスを学生と共有する。

Ⅲ その他課題

1. 課題

- (1) 基礎・総合演習とコース教育の見直しを図る。
- (2) 教育と資格取得と就職という3つの連動を再考する。
- (3) 人間健康学部の学風と文化の創造を図る。

2. 課題の自己判定

(十分に達成することができた／概ね達成することができた／あまり達成できなかった／達成できなかった)

- (1) 基礎・総合演習とコース教育の見直しは、十分に達成することができた。
- (2) 教育と資格取得と就職という3つの連動を再考ができて、十分に達成することができた。
- (3) 人間健康学部の学風と文化の創造を図ることが十分に達成することができた。

3. 自己判定の理由(事実の説明及び自己評価)

- (1) 基礎・総合演習とコース教育の見直しは予想を超えて、演習自体の見直しでもあったので、思い切って演習全体を鳥瞰できる制度設計をした。まさに人間健康学部始まって以来の大改造となった。総合演習は、学生からGPA順に個人の教員を選択できる方式を採用して、これまで極端にGPAの低い学生が集中していた演習が比較的消滅した。専門演習では、GPA順に学生がコースを選択した(選択人気は心理が1位、健康づくりが2位、スポーツ指導者とトレーナーが3位、教職が5位)。例えば「スポーツトレーナーコース」では、3人の教員の得意分野を生かすコース教育ができる設計をした。コース教育の内容は事前に説明会を実施し、結果21名(教員3人×学生7人)の学生が配属されたが、4・5人がトレーナーを目指す教育、数名が卒論を書く教育、残りの学生がキャリア教育となる。最後に基礎演習はもともと平準化された共通の内容なので今回は手を付けなかった。
- (2) 教育と資格取得と就職という3つの連動を再考する。これまで上記のようなコース教育、そして、この「3つの連動」という三位一体説は、本来大学という象牙の塔ではありえないことで

ある。演習はあくまで「研究テーマを設定し、調査と分析を進めてプレゼンテーションやレポート、論文の形式で発表、そして卒業論文、卒業研究」を意味するものという固定観念があれば三位一体説はおおいに批判を受けるところである。しかし、「卒業後の人生を学生とともに考える演習」ということで試行を始めた。ともかくコース教育が実現する運びとなり、出発できたことで三位一体説への方向がはっきりした。

- (3) 人間健康学部の学風と文化の創造は、人間健康学部の中心に位置づけている。初年度としての成果は、2人の教員の研究テーマと課題発表で大いに教員間での刺激となった。研究の世界にある「Publish or perish (論文を発表せよ、さもなくば滅びよ)」という課題を人間健康学部のすべての教員に共有できた。

4. 課題の改善・向上方策（次年度に向けた計画）

- (1) 基礎・総合演習とコース教育の見直しは、目標達成できたが、学生の希望選択のなかで一番人気がなかったのは、実は、「保健体育教員コース」である。人間健康学部のコース教育の筆頭コースにありながら、それほど学生が希望しなかった。この希望選択を次年度は、名実ともに一番のコースにすることが喫緊の課題である。
- (2) 教育と資格取得と就職という3つの連動を再考は、次年度から始まる「スポーツトレーナーコース」と「心理コース」のコース教育の展開を見守りながら、達成への道のりを確認したい。「健康づくりコース」は、「地域防災コース」に向けて廃止の準備にとりかかる。「スポーツ指導者コース」と「教職」（「保健体育教員コース」に名称変更）は、当面、コース教育への方向性を検討する。
- (3) 人間健康学部の学風と文化の創造は、もうすでに次年度は、3回の研究発表を予定している。

IV その他特記事項

コース教育は、実質的には次年度から始まり4年後に完成するものだが、1年前の今年度から着手した。まだコース教育は始まっていない。未知の「地域防災コース」は、「健康づくりコース」を換骨奪胎し作り上げるもので、次年度で新たに教員を迎え本格的に地域との連携を視野に、大学が果たせる地域防災の教育機関としての役割を模索していくものである。これを踏まえ、防災教育の可能性をひろげることがこれからの課題である。

I 事業計画の基本方針

1. 教育学部 子ども発達学科

- (1) 「特別支援学校教諭一種免許」取得の検討
- (2) 愛知東邦大学付属園設立の検討
- (3) 基礎演習から「人間力」を培う
- (4) 1年からの「学ぶ」ことの意味を自覚させる
- (5) 退学防止の取り組み
- (6) サービス・ラーニングの取り組み
- (7) 保育実習、幼稚園実習の授業体制の整備
- (8) 就職指導の徹底
- (9) 教職支援センターの充実
- (10) プレ・オープンキャンパスの充実
- (11) 在校生の満足度の向上

II 2018年度重点課題

1. 重点課題

- (1) 教職特講・保育特講による就職指導の徹底
- (2) 退学防止の取り組み
- (3) 保育実習、幼稚園実習の授業体制の整備

2. 重点課題の自己判定

(十分に達成することができた／概ね達成することができた／あまり達成できなかった／達成できなかった)

概ね達成することができた

3. 自己判定の理由（事実の説明及び自己評価）

- (1) 2018年度は、小学校教諭に就職希望者の特講、公務員保育士に就職希望の特講をそれぞれ実施した。結果、小学校教諭に2名（内人間健康1名）、公務員保育士に5名が合格し、就職していく。
- (2) 退学防止の取り組みについては、教育学部では、毎月の会議において演習担当者に留まらないで教員全員が学生対応に取り組むため、「学生動向」を設け個々の学生について情報と対応を共有してきた。2018年度は、更に、教育学部FDの年間テーマを「授業欠席、進路の悩み、経済的事情など、個々に即した具体的な対策について教員が協働して検討、対応の共有」とした。出席チェックを常に行い、休みがちな兆候がみられたら早急に面談をした。科目の成績についても共有を行った。第2回目のFDにおいては、学生面談に活かせるカウンセリングの基礎となる「傾聴」と「共感」について研修も実施した。早急の対応が可能となった。
- (3) 「保育実習ⅠA」（保育所実習）の事前指導を充実させるため「保育実習時前指導ⅠA」の授業を2名体制に2019年度より実施することとなった。学生に自信と主体性をより充実させることに繋がり、公務員保育士に就職へのより高い意識を高めることとなると確信している。

4. 重点課題の改善・向上方策（次年度に向けた計画）

- (1) 特講の充実と共に、教職支援センターの充実を図る

- (2) 退学防止のより一層の取り組みを図る
- (3) 教職の意識を高めるためにも小学校実習の事前事後指導の授業を2名体制に整える

Ⅲ その他課題

1. 課題

- (1) 基礎演習から「人間力」を培う
- (2) サービス・ラーニングの取り組み
- (3) 1年からの「学ぶ」ことの意味を自覚させる

2. 課題の自己判定

(十分に達成することができた／概ね達成することができた／あまり達成できなかった／達成できなかった)

概ね達成することができた

3. 自己判定の理由（事実の説明及び自己評価）

- (1) 1年次より常識・躰の指導を徹底することで学外のサービス・ラーニングの取り組みに繋がった。
学外の現場体験を行うことで学内での「学び」の大切さの意味を理解し自覚できた。
- (2) 教育学部の性格上、目的学部として1年次の最初から将来の「先生と呼ばれる職業に就く」意識を学生1人ひとりに自覚させた。

4. 課題の改善・向上方策（次年度に向けた計画）

基礎演習から総合演習への連携を図る。そして学生の学びや研究が専門演習に完結できる道筋を教示し、学生自身が4年間の充実した学生生活となるべく導きたい。

Ⅳ その他特記事項

小学校教諭、公務員保育士（保育所・施設）、私立幼稚園教諭、民間保育所保育士、施設保育士等により多くの就職に導くことで、より質の高い入学生に繋がりたい。就職をより有利となるための民間資格も含めて考えていきたい。

各種委員会 事業報告

委員会名	課題内容		自己判定			
			4	3	2	1
教育力向上委員会	重点	2018年度全学FDの方針策定並びに学部FDの方針確認			○	
		2018年度授業評価アンケート運用案策定			○	
		2018年度授業運営に関するスタンダード検証と教員表彰基準の確認			○	
		中途退学者対策の検討			○	
		他大学との合同FDの開催			○	
		私立大学等改革総合支援事業タイプ1「教育の質的転換」への対応			○	
学生募集戦略委員会	重点	認知度向上に向けた広報展開	○			
		ブランディングに基づいた表現活動		○		
		直接接触（特にオープンキャンパス、AOガイダンス）での対応向上		○		
		ステークホルダー別（特に高校生、東邦高校内部進学、提携校）の働きかけ		○		
		相談会		○		
		高校教員説明会		○		
		高校訪問		○		
総務委員会	重点	本学の教育・研究活動の環境を改善するための課題解決に向けた提言を行うこと		○		
		防災教育・個人情報保護に関する意識向上に努めること		○		
研究活動委員会	重点	《研究活動》紀要の編集・発行の手続き等を現代化・効率化する。そのために必要な規程等の改定を行う。学術雑誌の標準的手続きに近づける。	○			
		《研究活動》大学リポジトリのあるべき姿・内容の検討を行う。それにより、学術情報のオープン化・オープンサイエンスの時代に相応しい研究成果の公開方法に近づくようにする。			○	
		《研究倫理》公的研究費の適正な運用・管理体制の構築に資する活動方針の策定および実施。		○		
		《研究倫理》公的研究費ガイドラインにより見直しをする。また研究者の行動倫理について周知する。		○		

※自己判定基準

4:十分に達成することができた、3:概ね達成することができた、

2:あまり達成できなかった、1:達成できなかった

委員会名	課題内容		自己判定			
			4	3	2	1
人権問題委員会	重点	「人権侵害の防止等に関する規程」に定められている業務の確認及び着実な実施		○		
		人権侵害、問題に対する啓発活動			○	
		人権侵害に対する相談体制の整備			○	
地域創造研究所 運営委員会	重点	研究助成予算執行について		○		
		定例研究会の活性化			○	
		地域を巻き込んだ研究講演会の開催		○		
		シンポジウムの開催			○	
		叢書、所報の編集		○		
学生委員会	重点	スポーツ音楽推薦枠の新設		○		
		中途退学者防止・低減のための具体策の立案		○		
		クラブ活動支援と活性化		○		
		新たな表彰制度や奨学金制度の立案		○		
		生活指導	○			
		外国人留学生支援		○		
保健・学生相談 委員会	重点	学生状況の把握		○		
		合理的配慮支援の充実		○		
		組織的な支援体制の確立		○		
		教職員への啓発活動			○	
学生寮運営 委員会	重点	TOHO Learning House の安定運営（寮生生活の基盤づくり）		○		
		地域に根ざした連携活動の活発化、「東邦プロジェクト」科目との連動の深耕		○		
		他大学との交流プログラムの実施、学内外の発表や報告会への参加の活性化		○		
		OPC における寮生募集		○		
		リーフレットなど広報物の刷新		○		
		規程の見直し		○		
国際交流委員会	重点	2018 年度の留学生受入と、2019 年度の留学生受入準備【受入】		○		
		海外研修 A の企画・実施と、個別留学の推進【派遣】		○		
		交流協定校との関係強化（交換留学制度創設の模索）と新規協定校の拡大【派遣・受入】		○		
		Teaching Internship 生の受入の継続				○

※自己判定基準

- 4:十分に達成することができた、3:概ね達成することができた、
2:あまり達成できなかった、1:達成できなかった

委員会名	課題内容		自己判定				
			4	3	2	1	
教務委員会	重点	キャップ制の変更に伴う進級要件の再設定				○	
		教務関係事項の学内決定手続き方法の原案作成	○				
		南国商学院から受け入れる科目等履修生の仕組みづくり	○				
		全学共通科目の配当年次の見直し				(次年度課題)	
		「総合演習」の位置づけの検討				(次年度課題)	
			高等教育段階の教育費負担新制度への対応		○		
			シラバスチェック及び冊子の廃止			○	
		概ね達成することができた		○			
産学連携推進委員会	重点	「中小企業のための若手社員活性化プログラム」受講者の確保およびカリキュラムの充実			○		
		私立大学等改革総合支援事業タイプ3「産業界・国内の大学等と連携した教育研究」の検討			○		
キャリア支援委員会		進路決定率の向上		○			
		就職に対する意識向上（就職セミナー、筆記試験対策講座の参加率、資格取得講座の開講、就職合宿の参加率、学内企業展の参加率）		○			
		インターンシップ参加率向上（正課外の自由応募型の増加）		○			
		公立保育士の実績増を図るため学部と連携		○			
		特別推薦枠の企業数拡大		○			
東邦STEP運営委員会	重点	東邦STEP拡大に関するプログラム策定		○			
		東邦STEP1期生採用試験結果				○	
		東邦STEP運営	○				
入試委員会	重点	入試実施（新入試自己プロデュー入試実施）		○			
		2020年度入試の検討		○			
		AO入試課題作成、入試対策講座等の対応		○			
		「高大接続改革」にともなう入試改革の検討		○			

※自己判定基準

- 4:十分に達成することができた、3:概ね達成することができた、
2:あまり達成できなかった、1:達成できなかった

委員会名	課題内容		自己判定			
			4	3	2	1
地域連携委員会	重点	地域連携センター機能の強化		○		
		地域連携パートナーとの取組強化		○		
		地域と連携した授業の質的向上		○		
		ATUCCプログラムの定着		○		
		学生のボランティア活動の活性化			○	
		学内学生組織との連携・情報共有			○	
		地元である平和が丘学区との連携強化			○	
		他地域・他大学との連携			○	
学術情報 センター運営 委員会	重点	情報システムリプレイスの実施（大学分）		○		
		授業時間外学習の確立・活性化の検討：学生活動支援、教員連携模索、利用促進イベント			○	
		L棟機能の確立：ラーニングcommonsとしての機能確立を目指す			○	
		図書利用の拡大に向けた検討		○		
		次期情報システム基盤整備に向けた検討		○		
全学教職課程 運営委員会						
中高教職課程 委員会	重点	教員採用対策強化		○		
		教職登録者の教職履修単位等に関する確認・指導		○		
		学外実習における事前事後指導・訪問指導		○		
		ガイドブックの見直し		○		
幼小教職課程 委員会	重点	教育実習（幼稚園・小学校）を円滑に行う。		○		
		免許・資格を活かした卒業後の進路を確保し、小学校教員採用試験における合格者を輩出する。		○		
		教職課程の再課程カリキュラムにおける科目担当者等の最終調整を行う。		○		
		小学校教員採用試験のための特別講座（筆記試験・面接・小論文対策）の開設		○		

※自己判定基準

- 4:十分に達成することができた、3:概ね達成することができた、
2:あまり達成できなかった、1:達成できなかった

委員会名	課題内容		自己判定			
			4	3	2	1
教職支援 センター運営 委員会	重点	教採対策強化講座の開設		○		
		教採関連情報の収集・管理・相談サービス提供		○		
		教職関連文献資料の収集・管理		○		
		東邦 STEP 教員コース・保育士コースとの連携体制				○
		再課程認定申請	○			
		教員免許状更新講習	○			
文科省教職課程「実地視察」の準備			○			
保育士養成課程 委員会	重点	保育士資格取得のための実習（保育実習ⅠA・ⅠB・Ⅱ・Ⅲ）を円滑に行う。		○		
		実習について委員への周知と理解を図り、報告を行う。		○		
		実習先の保育所・施設等と連携し、愛知県保育実習連絡協議会での実習先の確保と縁故での実習先の確保を測る		○		
		「指定保育士養成施設の指定及び運営の基準について」の一部改正に伴う申請を行う。		○		
		実習により授業を欠席する学生に関する授業担当者への周知を行う。		○		
教職再課程認定 委員会	重点	教職課程の再課程認定	○			

※自己判定基準

4:十分に達成することができた、3:概ね達成することができた、

2:あまり達成できなかった、1:達成できなかった

教員 自己評価報告（経営学部 地域ビジネス学科・国際ビジネス学科）

所属学部 学科	職位	氏 名
経営学部 地域ビジネス学科	教授	船木 恵一
最終学歴	学 位	専 門 分 野
早稲田大学社会科学部	社会科学士	メディア・マーケティング

I 教育活動

○目標・計画

（目標）

学生が興味を持ち、自主的な学習を行いたくなるような教育活動をする

（計画）

演習では、学生ひとりひとりと向き合ったきめの細かい指導を、座学では学生が講義に集中できるような工夫、プロジェクト型授業では活躍する大人との出会い体験を創出すること

○担当科目（前期・後期）

（前期）情報メディア論、地域ビジネス特講Ⅰ、基礎演習Ⅰ、専門演習Ⅰ、専門演習Ⅲ

（後期）東邦プロジェクトA、コンテンツビジネス論、マーケティング論、基礎演習Ⅱ、専門演習Ⅲ、専門演習Ⅳ

○教育方法の実践

演習では「オンリーワンを一人に、ひとつ。」を実践する。具体的には、学生個人との会話・課題共有時間をより多く設け、学生視点を理解した上でのゼミ運営及び指導を行うこと。

講義形式の講義では、TBR方式（当日ブリーフレポート方式）を採用し、事前事後学習の習慣づけ、講義テーマへの興味喚起、双方向コミュニケーションを図れるようにした。

○作成した教科書・教材

前期：情報メディア論、地域ビジネス特講Ⅰ、各演習資料

後期：東邦プロジェクトA、コンテンツビジネス論、マーケティング論

○自己評価

概ね目標は達成した。

専門演習では、4年生の全員がゼミ論文を執筆し自己の学習成果を実感できている。また3年生の全員が個人研究テーマ設定を終了し、4年後期の到達目標文字数である12,000～15,000字に対し、既に最低1/3～最高2/3の文章量に到達している。

講義形式の授業では、TBRを用いた学生とのコミュニケーションを通じて、学生の理解度・関心度に応じた授業運営及び学習機会提供ができていることを実感している。その成果は授業評価アンケート（前後期共）全学平均スコアを全質問項目で上回る結果となったことで確認している。

II 研究活動

○研究課題

AI（人工知能）によるナラティブ分析がもたらす、マーケティング施策の精度向上とビジネスへのインパクトについて

○目標・計画

(目標)

日本国内の企業ケーススタディ研究 (年間 3 件以上)

(計画)

Significance System 社 (豪)、(株) 電通ワンダーマン、(株) ハカルスとの連携活動による事例入手と共同研究

○2011 年 4 月から 2019 年 3 月の研究業績 (特許等を含む)

(著書)

- ・愛知東邦大学地域創造研究所編、大勝志津穂、梶山亮子、手島慎介、加納輝尚、山本恭子、上野真由美、船木恵一、深谷和広、阿比留大吉、河合晋、水野英雄、奥村実樹、若月博延、『地域が求める人材』唯学書房、2019 年 3 月発行予定

(その他)

- ・2018 年 11 月 Significance System 社 (豪) 日本パートナー契約の更新
- ・2018 年 6 月 (株) ハカルスのリブランディング作業 (AI 分析サービスの 카테고리分類とネーミング化、商標登録に向けた準備作業など)
- ・2018 年 4 月 (株) ハカルスのマーケティング顧問就任
- ・2017 年 5 月 (株) 電通ワンダーマン主催の最新マーケティング事例研究会にて講演『ヘルスケアビジネス事業領域におけるナラティブ分析について』
- ・2017 年 6 月 NTT ドコモにおける AI のマーケティング活用研究会にて、ナラティブ分析の成果応用に関する講演を実施『D ポイントのナラティブ分析とビジネス応用について』
- ・2017 年 7 月 大塚製薬の更年期障害緩和サプリ『エクオール』のナラティブ分析レポート解説
- ・2017 年 8 月 再春館製薬所の『ドモホルンリンクル』の国内・海外ナラティブ分析の提案
- ・2017 年 8 月 中央日本総合観光機構『Go Central Japan』にて講演『AI (人工知能) によるナラティブ分析がマーケティングをどう進化させるか』
- ・2016 年 5 月 (株) 電通ワンダーマン主催の最新マーケティング事例研究会にて講演『デジタルマーケティング新潮流 AI (人工知能) によるナラティブ分析がマーケティングをどう進化させるか』
- ・2016 年 5 月 東邦会講演『デジタルマーケティングの新潮流—AI の展望と活用について - データによって、マーケティングが大きく変わる - 』
- ・2016 年 8 月 Significance System 社の研究活動にて資生堂及びリクシルの海外市場におけるナラティブ分析の日本語版レポート作成の共同作業チームに参加

○科学研究費補助金等への申請状況、交付状況 (学内外)

- ・なし

○所属学会

日本経営学会 (2015 年より加入)、日本マーケティング学会 (2015 年度より加入)

日本ビジネス実務学会 (2019 年 2 月入会申請中)

○自己評価

あまり達成できなかった。

- (1) 顧問契約先の電通ワンダーマンの JV が解消され、新たに電通ダイレクト社が設立されたため顧問契約は解消となり、日本企業のケース研究は中断された。

- (2) 顧問契約先の(株)ハカルス社の事業方針展開により、リブランディング作業が優先された。
- (3) Significance System 社(豪)の事例が北米及び欧州市場に限定されたため、日本企業の新たなケース研究にいたらなかった。
- (4) 大阪大学全学教育推進機構教育学支援部主催の阪大デザインセンター AI を使った大学教育の可能性セミナーに参加。プレゼンターは、ロンドン大学のUCL 知識研究所の Rose Luckin 教授。

III 大学運営

○目標・計画

(目標)

- ・経営学部長として、学部生の満足度向上、中退率の低減など。2018 年度事業計画の達成。
- ・地域連携センター長として、連携センターの機能拡充など 2018 年度事業計画の達成。

(計画)

経営学部執行部として、各学年演習担当者と学生のコミュニケーションを強化し、学生情報の収集と分析、対策をタイムリーに実施する。各委員会や学内各部門との連携を強化し、タテとヨコの双方から、ブランドコンセプトである『オンリーワンを一人に、ひとつ』を実現する。

地域連携センターでは学内ワークスタディ制度導入など、学生との協働体制をつくり、在学生のキャンパスライフの拡充を通じて、自発的な地域への貢献活動が行われることを狙う。

入試広報活動として、“夢ナビライブ 2018”に参加し、模擬授業並びに大学ブースでの PR 活動を実施する。

○学内委員等

経営学部長、地域ビジネス学科長、教学法人協議会構成員、高大連携会議構成員、大学再編準備室会議構成員、運営委員会委員、学長会議構成員、教育力向上委員会委員、人事委員会委員、学生募集戦略委員会委員、産学連携推進委員会委員、地域連携委員会委員長

○自己評価

概ね目標を達成した。

詳細は、経営学部事業報告、地域連携委員会及び産学連携委員会などの事業報告にゆだねるが、経営学部長として 2018 年度の主要課題(タスク)はほぼ達成した。GPA1.0 未満学生への対応強化等による中退率の抑制、長期的な学部経営視点にたった国際ビジネス学科と地域ビジネス学科の再編政策の立案と方針決定、専任教員退職に伴う新規採用など。また、地域連携委員会では、地域と連携した授業・活動報告会をコンテスト形式へ変更させ成功した。産学連携委員会では、中小企業のための若手社員活性化プログラムを 3 期連続好評価で終了した。

また、社団法人全国大学実務教育協会(JAUCB)の平成 30 年度会員校代表者交流会に参加。

IV 社会貢献

○目標・計画

(目標)

大学の地域連携活動や産学連携活動を通じて、地域の連携パートナー企業に貢献する

(計画)

地域連携センター機能の拡充による全学的連携事業の拡充、担当する東邦プロジェクトを通じて

名東区へ貢献、地域連携委員会活動を通じて、名古屋グランパス、読谷村など特定パートナー事業への貢献、ATUCC を通じて地域の生涯学習支援の実施

○学会活動等

日本マーケティング学会年次総会出席（2018年9月）

日本ビジネス実務学会入会申請中（2019年2月）

○地域連携・社会貢献等

- (1) 地域連携センター長として、主要連携パートナーである名古屋市名東区役所、平和が丘学区、名古屋グランパスエイト等の地域社会・企業とのコンタクト及び連携調整活動を実施
- (2) 沖縄県読谷村への表敬訪問（2018年9月）と協議会（9月及び2019年2月）への参加
- (3) 東邦プロジェクトA（2018年度後期）履修生を中心メンバーとして、名東区委託事業である平成30年度学生ミーティングの企画・運営・報告活動を実施。今年度は、愛知みずほ大学、愛知淑徳大学、岐阜経済大学、椙山女学園大学等が新たに参加し、過去最大規模のイベントとなった。また、本企画を通じて、学生会と東邦ラーニングハウスを地域社会と他大学へ紹介し、公民学連携、大学連携の可能性を拡大した。
- (4) 平成30年度学生タウンなごや推進会議へ出席し、名古屋市内各大学・名古屋市総務局・中部経済連合会との新たなネットワークを形成し、大学のプレゼンス向上と、産学連携の機会拡大を図った。
- (5) 中小企業のための若手社員活性化プログラムのデジタル時代のマーケティング講義を担当

○自己評価

概ね目標を達成できた。但し、ATUCC については、初期目的である年間開講数にいたらなかった。地域貢献活動については、学部・委員会・個人のどの取組であっても、その成果を数値目標化・視覚化することは容易ではない。大学の価値向上という視点と、学生の学びの機会という視点の両方が必ず混在するため、共通認識の形成はどの軸に重点に置くかによってかなり左右される。その意味では、学務・研究・教育と比較して社会貢献に関する評価軸設定もまた重要な活動であると考えられる。今年度の諸活動は、外部ステークホルダーとの絆形成が多く、まだ取組による成果を外部パートナー等と完全に共有化できる次元にはいたっていないと判断している。

V その他の特記事項（学外研究、受賞歴、国際学術交流、自己研鑽等）

特になし

VI 総括

学部長就任初年度であった本年度は、未経験による判断力の欠如、リーダーシップ不在となる案件や場面が多かったと認識している。学務・教育・社会貢献に多くの時間を割いたため、研究活動を行う時間を創出することができず、バランスを欠いた年度となった。

以上

所属学部 学科	職位	氏 名
経営学部 地域ビジネス学科	教授	中山 孝男
最終学歴	学 位	専門分野
一橋大学大学院経済学研究科博士課程 単位修得満期退学	経済学修士	経済学

I 教育活動

○目標・計画

(目標)

一昨年度から担当している「総合ビジネス基礎」、昨年度から担当している「流通経済論」の授業内容の改善をはかり、さらに今年度から新たに担当することになった「学びの基礎Ⅰ・Ⅱ」の授業を通して学生（とくに1年生）の基礎学力を確かなものにするを第一の目標としたい。他方で、長年担当している「経済学」については、受講生約150名の大人数クラスもあるので、いかにして講義内容に興味を持たせるかに幾重もの工夫が必要となる。受講学生の反応をよくつかみながら毎回、毎回努力していく。

(計画)

アクティブラーニングの視点を持ち、少人数クラスはもとより、大人数クラスであってもできるだけ対話的な要素の多い授業を行う。毎回とは言えないが、小テストの実施及びそのフィードバックは言うまでもない。

○担当科目（前期・後期）

（前期）総合ビジネス基礎、経済学、学びの基礎Ⅰ、基礎演習Ⅰ、専門演習Ⅰ、専門演習Ⅲ

（後期）流通経済論、国際関係論、学びの基礎Ⅱ、基礎演習Ⅱ、専門演習Ⅱ、専門演習Ⅳ

○教育方法の実践

- ・「総合ビジネス基礎」は、受講者数166名で、双方向的授業を実践することは極めて難しい状況だったが、それでも7回の小テストを実施し、毎回採点したうえで返却した。こうしたことにより、昨年までの授業よりも内容的によりよくなったと考える。
- ・「経済学」は、受講者数149名と78名の2クラスであった。人数の少ない方の授業では受講者一人一人の名前を覚え簡単な質問をして答えてもらう方式で授業を実施できた。言うまでもなくこちらの教室では私語はほとんどなく、良好な環境で授業ができた。もう一方のクラスは、さすがにそのようなわけにはいかなかった。私語も多かった。大人数（しかも3学部の学生混合）の授業をどのように行えば、興味と理解とを両立できるのか、私にとって長年の課題である。
- ・「学びの基礎Ⅰ・Ⅱ」とも、約70名の受講者であった。適切な人数であったし、何よりも全員経営学部地域ビジネス学科の学生で、入学前から顔を知っている者も多く、よい雰囲気での授業を進めることができた。今年とはとくに「割合」に関する内容を集中的に扱った。そのため、学生によるアンケートに「割合がわかるようになった」とのコメントが寄せられた。来年度は、より改善していきたい。
- ・「流通経済論」は、今年度が最後の開講であり、4年生以上の学生のみ受講が可能な科目であった。当然、受講者（名簿上18名）は互いによく知っている学生同士がほとんどであり、ほぼ完

壁に双方向的授業が実践できた。

- ・「国際関係論」は、今年度初めて開講する授業であった。国際ビジネス学科第1期生（3年生）のみ受講ができ、時間割の関係からか留学生3名のみ受講者であった。そのこともあり、国際経済に関するテキストを用いて、基礎から丁寧に理解できているかどうかを確認しながら進めた。言うまでもなく、双方向授業は実践できた。

○作成した教科書・教材

- ・前期「学びの基礎Ⅰ」、後期「学びの基礎Ⅱ」用のテキスト『学びの基礎Ⅰ』『学びの基礎Ⅱ』の（一部）執筆と全体を編集した。

○自己評価

学務に対して担当科目数が大幅に超過する、忙しい1年であったが、何とかつつがなく授業できたと思う。来年度は、特に「経済学」で授業の方法を変え、単にテキストを説明すればよい、という姿勢を改め、現実の経済社会を理解できるように授業を組み立てようと考えている。

II 研究活動

○研究課題

D. リカードウ＝T. R. マルサス論争史研究

○目標・計画

（目標）

昨年度に引き続き、上記テーマで主に両者の労働需要論に焦点をあて、『リカードウ全集』第2巻「マルサス評注」を精読しつつ、新たな論点を発見していく。

（計画）

とにかく原典回帰で18世紀初期のイギリス経済学会のようすを部分的にでも復元する気概をもって一步一步読み進める。

○2011年4月から2019年3月の研究業績（特許等を含む）

（学術論文）

- ・中山孝男「リカードウ『機械論』章に関する一考察」『東邦学誌』第42巻第1号、2013年6月
- ・中山孝男「リカードウの新機械論再考（下）——マカアロクとの往復書簡の検討を中心として——」『東邦学誌』第40巻第2号、2011年12月
- ・中山孝男「リカードウの新機械論再考（上）——マカアロクとの往復書簡の検討を中心として——」『東邦学誌』第40巻第1号、2011年6月

（その他）

- ・中山孝男・手嶋慎介・大勝志津穂・正岡元・小柳津久美子「2012年度共同研究：（研究課題）「iPod touch/iPad を利用した教育手法の開発と研究」活動報告」、『東邦学誌』第43巻第2号、2014年12月

○科学研究費補助金等への申請状況、交付状況（学内外）

なし

○所属学会

経済理論学会、経済学史学会、マルサス学会、政治経済学・経済史学会

○自己評価

学務と講義の準備で多忙を極め、十分な研究活動ができなかった。来年度も、今年度のテーマを

引き続き継続して研究活動を続けたい。なお、経済理論学会の東海部会会場大学の担当者として、学会活動にはささやかではあるが貢献している。また、授業評価アンケートの結果に関する学生代表参画FDも本学史上初めて開催することができた。

Ⅲ 大学運営

○目標・計画

(目標)

学内理事として学園全般の運営に責任をもってあたる。とくに、労務担当、自己点検・評価、衛生委員会、情報マネジメント会議、等の各分野では重責を担うこととなるので、視野を広くもち、慎重な判断をしていく。

(計画)

一般の教員とほぼ同数の授業を担当しつつ、上記業務をこなさなければならないので、諸会議の日程を長期的に考慮し、計画的に業務を遂行していく。

○学内委員等

常任理事会構成員、教学法人協議会構成員、衛生委員会委員、自己点検・評価委員会委員、経営政策会議構成員、高大連携会議構成員、情報マネジメント会議議長、運営委員会委員、学長会議構成員、人事委員会委員、教育力向上委員会委員長

○自己評価

学内理事に就任し、今までとはかなり異なる会議体に参加するようになり、それなりに神経を使うことが多かった。来年度もほぼ同様な業務量が待っているが、今年度よりは効率的にこなしていけるよう努力する。

なお、教育力向上委員長として、岐阜経済大学との合同FDを実施できたことは、本学に対して少なからぬ功績であったのではないかと自負している。

Ⅳ 社会貢献

○目標・計画

(目標)

本学での教育・研究活動の成果をできる限り地域社会に還元する。

(計画)

高大連携授業や、高校からの出張講義要請にできる限り応じ、社会貢献をする。また、所属する経済理論学会の東海部会開催校として学会活動にも積極的に協力する。

○学会活動等

上述のように、経済理論学会の東海部会会場校として、年2回の研究会開催に協力した。

○地域連携・社会貢献等

とくになし

○自己評価

東邦高校との高大連携授業に協力した。参加高校生は、2年生の10名程度であったが、約90分間高校生の反応を見ながら「アベノミクス」に関する様々なデータを紹介しつつ経済学の授業を実施した。

V その他の特記事項（学外研究、受賞歴、国際学術交流、自己研鑽等）
なし

VI 総括

- ・教育については、平均並みかそれ以上の実践ができたと考える。
- ・研究については、まったく不十分にしかできなかった。
- ・大学運営については、平均以上の仕事をした。
- ・社会貢献については、例年並みのことしかできなかった。

以 上

所属学部 学科	職位	氏 名
経営学部 地域ビジネス学科	教授	伊藤 恵美子
最終学歴	学 位	専門分野
名古屋大学大学院国際開発研究科博士後期課程修了	博士 (学術)	日本語教育学

I 教育活動

○目標・計画

(目標)

受講生一人ひとりが受講開始時より確実に学力が向上し、人間的にも成長して校訓「真面目」が実行でき、「オンリーワンを、一人に、ひとつ。」になるよう指導する。

(計画)

教職員の心構え「子弟を教育するは、私事に非ず。天に事うるの職分なり」を常に念頭に置き、受講生のレディネスを調査して、本学の学生に合致する教授法を検討・実施する。

○担当科目（前期・後期）

（前期）日本語表現Ⅰ、日本語C、基礎演習Ⅰ、総合演習Ⅰ

（後期）日本語表現Ⅱ、異文化コミュニケーション、基礎演習Ⅱ、総合演習Ⅱ

○教育方法の実践

・「日本語C」

ネパール人留学生2年生の再履修クラスであった。1年次に資格外活動（アルバイト）をやりすぎないようにと過去の事例を話したが、アルバイト収入と消費生活に次第に関心が向いていき、複数の職場を掛け持つようになった。その結果、復習時間がなくなり、毎回の小テストも定期試験も低迷した。学生が初心（入学当初の勉強姿勢）に帰るのを待ちたい。

・「異文化コミュニケーション」

木曜日、金曜日と連続して同じ内容の授業を行った。木曜日クラスは授業に前向きな学生が多く、クラスワークは活発であった。他方、金曜日クラスの数人の学生は毎週のように授業中に教室を出たり入ったりしていた。後期開講科目なので季節がら風邪・インフルエンザ等で体調を崩す学生もいたため（一人ひとりに確認していたら授業を何度も中断しなければならないので）自由にさせていたが、彼らは他の授業でも同じような態度であると聞いている。真面目な（通常の授業態度の）学生に与える影響の大きさを考えて、次年度の授業運営に備えたい。

・「日本語表現Ⅰ・Ⅱ」

講義形式ではなく、アクティブ・ラーニングで授業を進めた。最終授業で学生に行った振り返りのアンケートには「自分で調べて内容を発表するので、とても頭に残りました」「自主的に学習する機会・時間が増え、より効果的な内容になると感じた」「先生が一方的に教えて下さるより、頭をはたらかせたと思う。自分で疑問を探しながら学ぶことの大切さに気づけた」等、非常に好意的な感想ばかりであった。また「今までやってきたアクティブ・ラーニングに比べて楽しかったです」のような高い評価も散見された。専門外で、初めて担当した科目なので授業準備に細心の注意を払ったが、授業は成功裏に終わり、目標は達成できた。

・「基礎演習Ⅰ・Ⅱ」

一般的に基礎演習は中等教育から高等教育への橋渡しに位置付けられるので、2017年度に準じて、前期は基本的な文書の作成とメール連絡ができるようになること、オフィスアワーを活用できるようになること、教員に質問ができるようになることが身に付くようにした。各学生は受講科目の教員をオフィスアワーに訪問して往時の大学生活や勉強方法をインタビューし、大学祭でポスターにまとめて発表した。基礎演習発表大会では、大学での1年間の学びを振り返って印象に残っている科目の概要をプレゼンテーションした。いずれの発表もグループワークとしたので、準備の過程でリーダーシップを取り方も自然に身に付けられた。

・「総合演習Ⅰ・Ⅱ」

卒業研究に向けた前段階として、視野を広げて現代社会（日本だけでなく国際社会）に関する知識を豊かにし、その背景も理解できることを目的にした。受講生は新聞を読んで「私が選んだ今週のニュース」としてクラスでプレゼンテーションを行い、学期末にはレポートにまとめた。身の回りのことから世界のニュースに目を向けはじめた学生もいれば、自分の周囲に関心がとどまっている学生もいる。それぞれのテンポで、それぞれの学生の成長につながっているのだろう。

○作成した教科書・教材

なし

○自己評価

2018年度教育活動の自己評価としては、初めて担当した「日本語表現Ⅰ・Ⅱ」を挙げたい。この科目は国語教育（日本人に母語の日本語を教える分野）のテリトリーであり、これまで本学でも国語が専門の教員が担当していた。選択科目の1時限配置であったが、殆どの受講生の意欲は高く、アクティブ・ラーニングに正面から取り組み、授業中の小テストでは毎回満点を目指して自習を続け、課題も期限内に提出してくれた。全学共通科目なので三学部の学生が受講しており、相互に他学部の学生の考え・発想に新鮮な思いを持ってグループワークに積極的になれたようである。教育学部の特に優秀な学生たちがクラスを上手くリードしてくれ、学生の満足度は高くなり、教育効果も上がり、延いては良い授業、楽しい授業になった。教育者として、第二言語教育から母語話者教育へと射程を広げることができた。

Ⅱ 研究活動

○研究課題

- (1) 応用言語学の課題「第二言語教育のコミュニケーション能力の育成」（究極課題）
- (2) 大学教育の課題「アカデミックスキルの養成」（継続課題）
- (3) 新課題「第二言語習得と母語習得」

○目標・計画

(目標)

周辺分野の最新の研究動向を把握して、研究課題に挑む。

(計画)

- (1) 母語とアイデンティティの関係を分析する。
- (2) アカデミック・ライティングについて実践を行う。
- (3) 言語習得の射程を広げて考察する。

○2011年4月から2019年3月の研究業績（特許等を含む）

(学術論文)

- ・伊藤恵美子「台湾人」という意識：若者のアイデンティティはどこから来たのか？どこへ行くのか？」愛知東邦大学『東邦学誌』、第45巻第1号、2016年6月、79-89頁
- ・伊藤恵美子「外国人留学生の日本語学習の歩み：入学後2年間を中心に」愛知東邦大学『東邦学誌』、第44巻第1号、2015年6月、43-62頁
- ・伊藤恵美子「異文化トレーニングを体験した学生の変容：振り返りから認識した異文化コミュニケーション」愛知東邦大学『東邦学誌』、第42巻第2号、2013年12月、1-14頁
- ・伊藤恵美子「日本語習得における中等教育と高等教育の連携効果：ユウキ・ナツミとサキ・イケの表現力から」愛知東邦大学『東邦学誌』、第41巻第2号、2012年12月、101-114頁
- ・伊藤恵美子「ポライトネス・ストラテジーに反映された社会文化的規範：タイ語・ジャワ語・日本語の断らない表現に焦点を当てて」名古屋大学大学院国際開発研究科『国際開発研究フォーラム』、第41号、2012年3月、1-14頁（査読付）
- ・伊藤恵美子「台湾国立高雄餐旅大学応用日本語学科における日本語教育：国家政策による観光産業の人材育成」下関市立大学学会『下関市立大学論集』、第55巻第1号、2011年7月、107-114頁

(学会発表)

- ・(国際学会) 伊藤恵美子「台湾人の意識：若者のアイデンティティはどこから来たのか？どこへ行くのか？」ICJLE2014日本語教育国際研究大会 (University of Technology, Sydney) 2014年7月11日（審査付）

(その他)

- ・伊藤恵美子「コミュニケーション能力の萌芽：言語習得を幼児の母語習得の側面から」愛知東邦大学『東邦学誌』、第46巻第2号、2017年12月、169-176頁

○科学研究費補助金等への申請状況、交付状況（学内外）

- ・伊藤恵美子 [研究代表者] 平成20～22年度 科学研究費補助金（基盤研究（C））「東南アジアの言語のポライトネス：タイ語の場合」（課題番号：20520475）採択
- ・伊藤恵美子 [研究代表者] 平成23～25年度 科学研究費補助金（基盤研究（C））「アジアの言語のポライトネス：台湾人について」（課題番号：23520641）採択

○所属学会

日本語教育学会会員、社会言語科学会会員、留学生教育学会会員、日本コミュニケーション学会会員

○自己評価

研究課題（2）大学教育の課題「アカデミックスキルの養成」に関して、2018年度に新しく担当した科目「日本語表現Ⅰ・Ⅱ」でアカデミック・ライティングの実践を行った。今後、学生が提出したアンケートを分析し論文にまとめていく。

Ⅲ 大学運営

○目標・計画

（目標）

入試問題作成委員会委員長として職責を果たす。

（計画）

本学着任時から入学試験問題を作成してきたが、今年度はそのまとめ役なので気を引き締めて行きたい。

○学内委員等

入試問題作成委員長

○自己評価

委員を経ずにいきなりの委員長だったので、前年度の業務内容を先ずは理解して踏襲していった。一般入試Ⅰ期でページ区切りによる印刷ミスのため試験時間延長の措置を取ったが、Ⅱ期以降の入学試験は支障なく終わることができた。今年度の経験を教訓とし、来年度の業務に臨みたい。

IV 社会貢献

○目標・計画

(目標)

大学教員として科学的研究を進め、研究成果を広く社会に還元する。(継続目標)

(計画)

所属学会の論文査読等を通して後進の育成に力を尽くし、学術の発展に貢献する。(継続計画)

○学会活動等

- ・日本語教育学会：学会誌『日本語教育』学会誌委員（主査）、審査運営協力員
- ・社会言語科学会：学会誌『社会言語科学』査読協力者
- ・留学生教育学会：学会誌『留学生教育』査読協力者
- ・第二言語習得研究会：学会誌『第二言語としての日本語の習得研究』査読委員
- ・国際学会 Sydney -ICJLE2014：発表論文査読協力者
- ・国際学会 Bali-ICJLE2016：発表論文査読協力者
- ・国際学会 Venezia -ICJLE2018：発表論文査読協力者

○地域連携・社会貢献等

地域連携には該当せず

○自己評価

日本語教育学会学会誌『日本語教育』の査読に2009年から携わり、2013年に学会誌委員会委員の主査（世界でわずか30人）に就任し、世界中から投稿される論文の査読を行っている。2018年度は『日本語教育』への投稿論文の査読を1本行った。今後の学術の発展、及び日本語教育学の研究促進を世界最高レベルで担っており、大学教員として社会貢献を十分に果たしてきた。学会活動は、広告のような商業ベースと異なり、高等教育機関としてあるべき本来のアカデミックな側面において本学の知名度向上に貢献するものなので、高く評価できよう。

V その他の特記事項（学外研究、受賞歴、国際学術交流、自己研鑽等）

特になし

VI 総括

大学教員としての活動の四分野において、目標に向けて具体的な計画が達成できた。特に、大学運営に関して、入試問題作成委員会の新体制構築に向けて休日返上で全力で取り組んでいる。学部FDで学生会から出された項目が配布され、「書く機会をもっと増やしてほしい」「実技を除

いて15回目に試験を行わない」「持ち込み可の試験を禁止すべき」等とあった。「日本語表現Ⅰ・Ⅱ」「異文化コミュニケーション」ではすでに実行していることであるが、学生からの支持を得ていることが分かったので、今後も学生の成長につながるよう続けていきたい。

以 上

所属学部 学科	職位	氏 名
経営学部 地域ビジネス学科	教授	小野 隆生
最終学歴	学 位	専門分野
慶應義塾大学大学院商学研究科博士課程 単位取得満期退学	経済学修士	経営学

I 教育活動

○目標・計画

(目標)

社会についての学問的な話、いわば固い話を聞いて理解する能力、自分の考えを人に説明するための論述能力が鍛えられていない学生が目につくので、自分の生きる社会について彼（女）らに関心を持って貰い、少しでも「真面目に」自分の能力を鍛えてそれを活かすことの社会的責任に気づかせることが目標である。

(計画)

導入部において、学問が本の中の話ではなく自分の身近なところにくらでも転がっている話であることをクイズなどを通して実感させる。講義を本格的に進める時期には、「難しい話を簡単に」のグレドを実践すべく、図表を活用してイメージを抱かせながら理解させるようにする。また、また、重要な用語については、毎時間クイズ形式の問題を出して全員がすぐに正答できるまで繰り返す予定である。

○担当科目（前期・後期）

（前期）経営管理論Ⅰ、生産マネジメント論、基礎演習Ⅰ、総合演習Ⅰ

（後期）経営管理論Ⅱ、基礎演習Ⅱ、総合演習Ⅱ

○教育方法の実践

統計表などを参照しながら講義を進めるためにも、必要に応じてプリントを自作し、受講者に配布した。また、重要な用語を確実に理解させるために、何度も小テストを実施した。

○作成した教科書・教材

必要に応じて、講義で参照する統計表や論理の展開を示す図表をまとめたプリントを配布した。

○自己評価

日本企業の株価の特徴（配当性向、株価）を示そうとしたが、適切な資料を紛失し、再度探し出すのに手間どった。有用な資料を確実に保管することの重要性を再認識した。

II 研究活動

○研究課題

日本型経営システムの限界と今後

○目標・計画

(目標)

電気自動車の開発が進む欧州や中国に比べて日本の電気自動車開発、生産は遅れが目立つ。電気関係モジュールの性能、価格が競争力に大きく関わってくるので、今後の自動車産業と電気産業との関わり方如何で従来の日本型経営システムにどのような影響が生まれるかを考えていく。

(計画)

昨年度はトヨタ、日産の九州工場に聞き取り調査を行った。上記研究目標のための資料が少ない現状においてはまず日経等の新聞記事と調査(記事の真偽確認)を中心にする以外にない。もちろん、それ以外の資料探しと現状理解の方法も使っていきたい。

○2011年4月から2019年3月の研究業績(特許等を含む)

(著書)

・十名直樹、小野隆生「日本企業の現場管理制度」労務理論学会編『経営労務事典』晃洋書房、2011年

○科学研究費補助金等への申請状況、交付状況(学内外)

○所属学会

日本経営学会

○自己評価

追再試期間と経営学会全国大会の日程が重なっており、大会に参加できなかったことが悔やまれる。

III 大学運営

○目標・計画

(目標)

基礎演習、総合演習の担当者会議、教育個別懇談会で演習担当者としての責任を果たしたい。

(計画)

総合演習の参加学生のなかにGPAの低い学生が多いので、個人面談等を重ねていくつもりである。

○学内委員等

○自己評価

大学運営の目標は達成した。

IV 社会貢献

○目標・計画

(目標)

就学機会に恵まれていない東南アジアとアフリカの子ども3人のスポンサーをしている。機会があれば、その他の分野でも積極的に貢献したいと考えている。

(計画)

上記した子ども3人のスポンサーを継続する予定だが、それ以外に現段階では具体的な事案がない。

○学会活動等

○地域連携・社会貢献等

○自己評価

暑さのために、7月だけで二回倒れるなど、健康面での不安がすべてにつきまとい、自分で納得できるだけの活動は実践できなかった。

V その他の特記事項（学外研究、受賞歴、国際学术交流、自己研鑽等）

韓国語検定5級合格

VI 総括

大学の専任教員を32年間務めたが、最後の4年間は健康面での不安を抱えながらの教員生活であった。特に2018年度はときに踏ん張りながら板書するなど、講義がきつかった。リタイア後は、健康に留意しながらも、やり残した研究に力を注ぎたい。

以 上

所属学部 学科	職位	氏 名
経営学部 地域ビジネス学科	教授	上條 憲二
最終学歴	学 位	専門分野
早稲田大第一文学部社会学専修課程	文学士	経営学

I 教育活動

○目標・計画

(目標)

- ①自分のクレドは「その1%を見つけ出し、100%にする」である。本学の学生は、「真に信頼する」ことにより、大きく伸びる余地がある。可能性を丁寧に見極め、一人ずつを大事に育てていきたい。「たのしく、優しく、厳しく」接していきたい。
- ②実務家から転じた教員として、これまでの知見に加えて、現在の状況を踏まえたリアリティのある教育活動を行なう。
- ③学生の主体性を高め、自ら考え行動する学生を育成する。
- ④地域連携をテーマに、地域に具体的な成果をもたらす教育を行う。

(計画)

①講義形式の授業において

- ・毎回かならず復習を行う。
- ・分りやすく、興味をもてるように教材を工夫する。
- ・アクティブラーニングの手法を採り入れ、各自がみずからの意見・見解を発表できるような仕組みを設ける。
- ・外部講師を招き、旬のテーマを語ってもらう。

②ゼミ形式の授業において

- ・自ら考える、計画する、実践する仕組みを設ける。
- ・ゼミの時間にとどまらず、各自のテーマを遂行するために何をいつすべきかを考えさせ、具体的な成果を挙げるように進める。
- ・地域連携を主眼に、知の拠点としての本学らしい活動を行なう。

○担当科目（前期・後期）

（前期）ブランド構築論、現代広告論、専門プロジェクトⅢ、基礎演習Ⅰ、総合演習Ⅰ、専門演習Ⅲ

（後期）入門企画営業、現代マスコミ論、広告・メディア基礎、専門プロジェクトⅣ、基礎演習Ⅱ、総合演習Ⅱ、専門演習Ⅳ

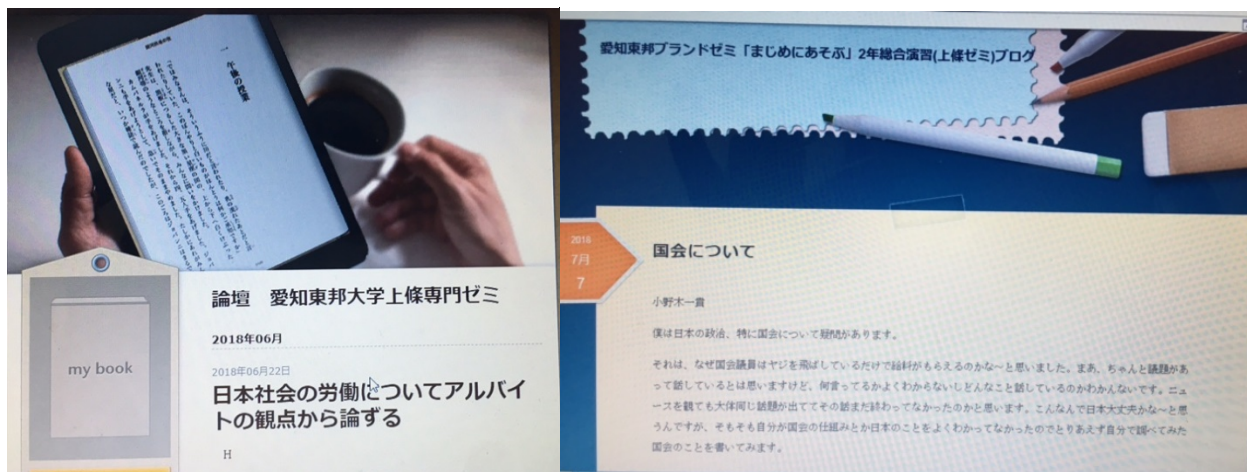
○教育方法の実践

①講義形式の授業において

- ・毎回必ず前回の復習を行い、学んだ内容を確認した。
- ・新聞、雑誌などからテーマに沿った内容を取り上げ、読み合わせを行い話し合った。
- ・自分の考えをまとめ、全員の前で発表させた。（入門企画営業は「愛知東邦大学が地域に貢献できる企画」、現代広告論は「自分の住んでいる街のキャッチフレーズ」）
- ・外部講師は講師の都合がつかず、招くことはできなかった。

②ゼミ形式の授業において

- ・各自、必ず毎回、1分間のスピーチを課した。内容は、自分の生活、社会的な関心事項など。
- ・書く力、話す力を重視した。総合演習においては、各自に3000字のレポートを課し、全体の前で発表させた。
- ・最初に、自分が何をしたいのかを考え、全員の前で発表させた。基本的には、その考えを重視して進めた。
- ・4年生の卒業レポートは一人15000文字以上を課した。
- ・総合演習、専門演習、専門プロジェクトとしてブログを開設し、各自が自分の考えを投稿する形を取った。
- ・総合演習では中京テレビを訪問し、ジャーナリズムの在り方について話し合った。



③キャリアインカレ指導

- ・キャリアインカレ決勝出場の「チームかしこ」の東京における準決勝の立ち合い、テーマ出題者の自民党とのディスカッション、最終プレゼンの指導、決勝立ち合い、などを行った。



④4年生卒業研究指導

- ・卒業研究の指導を行った。やや論理に飛躍はあったが、最終的には承認された。

○作成した教科書・教材

- ・パワーポイントのスライド
- ・パワーポイント印刷
- ・ゼミ形式の授業でのブログ開設

○自己評価

- ・実務家教員として、理論と実践の融合を念頭に置きながら、「分りやすく、ためになり、やる気が出る」授業を心掛けた。
- ・総合演習は21名と人数が多く、進め方に注意が要った。できるだけ、各自の個性が光る内容としたが、メンバーによってばらつきもあり、十分とは言えない。
- ・講義形式の授業では1年生が多い広告・メディア基礎（160人）は興味の持たせ方、集中力の持続性に苦慮した。大人数の講義の進め方については課題が残る。
- ・同じ講義形式の授業でも、現代広告論、現代マスコミ論、入門企画営業は比較的静かに聴講しており、問題は見られない。
- ・大学のコンセプトである「オンリーワンを、一人に、ひとつ。」、自分のクレドである「その1%を見つけ出し、100%にする」を旨に、学生ひとり一人に向き合う姿勢は続けていると考える。

II 研究活動

○研究課題

- ・SUBARU ブランド研究
- ・小規模大学のブランディング

○目標・計画

（目標）

- ・SUBARU ブランドに関する書籍出版「意図のダイナミズム-SUBARU ブランド経営-」
- ・日本マーケティング学会論文応募。「小規模大学のブランディング」

（計画）

- ・SUBARU 研究、原稿執筆
- ・2018.4~7 取材、原稿執筆
- ・2018.10月 出版予定
- ・2018.10月 日本マーケティング学会において「小規模大学のブランディング」発表

○2011年4月から2019年3月の研究業績（特許等を含む）

（学術論文）

- ・上條憲二「小規模大学におけるブランディングの有効性」（日本マーケティング学会プロシーディングス）

（学会発表）

- ・「小規模大学におけるブランディングの有効性」（日本マーケティング学会 マーケティングカンファレンス 2018.10 において発表）



○科学研究費補助金等への申請状況、交付状況（学内外）

なし

○所属学会

日本マーケティング学会、日本経営学会、人を大切にする経営学会

○自己評価

- ・SUBARU に関しては一橋大学大学院・阿久津聡教授と研究を進めてきたが、同社のリコールなどの問題が発生し、書籍の出版は延期となった。非常に残念である。
- ・なお、阿久津教授とは「健康経営ブランディング」をテーマに継続して研究活動を行なっている。
- ・本学のような小規模大学のブランディングの有効性は推進中であり軽々には判断できないが、現在のところスムーズに進行している。認知率の上昇、応募率の上昇、学内活動の活性化、などに関しては一定ブランディングの影響もあると考えられる。
- ・このブランディング活動に関与している自分としては評価できる経過であると判断している。
- ・なお現在、他の小規模大学（札幌学院大学）から、事例を聞かせて欲しいとの依頼がきている。

Ⅲ 大学運営

○目標・計画

（目標）

- ①本学のブランドコンセプトに基づく質的な活動を推進する。
教学改革、キャリア支援
- ②本学のブランディングに関して外部に積極的に発信する。

（計画）

- ①新学部長、他の学長補佐の先生方と共同して改革のため提案を行ない、決定案を積極的に推進する。（1年間を通じて）

②本学のブランドの外部発信

- ・新聞社、雑誌社、テレビ局に対して情報提供を行ないパブリシティ獲得をはかる。
- ・演習などで外部発信方法を考え、ブログなどで発信する。

○学内委員等

ブランド推進委員会委員、運営委員会委員、産学連携推進委員会委員、キャリア支援委員会委員長、東邦 STEP 運営委員会委員長

○自己評価

- ・ブランド推進委員として、日本マーケティング学会で本学のブランディングをテーマに発表した。
- ・学園紙「邦友」において、ブランディングをテーマに座談会を行った。
- ・大学ジャーナリスト・石渡嶺司を招き、本学のブランディングに関して説明した。
- ・学外のセミナーにおいて本学のブランディングをテーマに講演活動を行なった。
- ・マスメディアに対しての（自分自身の）アプローチは少なかった。（中京テレビに留まる）
- ・全学集会において、定期的に説明を行った。
- ・キャリア支援委員長、東邦 STEP 運営委員長であったが、職員の方に推進していただくことが多く、責任者としては不十分であった。
- ・産学連携推進委員としては、BP の講義、豊田信用金庫に対する折衝、中経運加入提案など全体としては評価できる。特に、BP は参加企業である「電子システム」「サン樹脂」の経営者に対して個別相談に乗った。

IV 社会貢献

○目標・計画

（目標）

- ①「知の拠点」としての本学の役割を果たすべく、積極的に地域に対して教育活動を行なう。
- ②ゼミなどにおいて、地域連携、社会貢献をテーマに授業を行う。

（計画）

- ①中小企業ビジネスマンを対象とした社会人就業力講座実施（後期）
- ②専門プロジェクトにおいて「名古屋グランパスエイト」を教材とした実践的な授業を行う。
- ③地域の企業対してブランディングの有効性を講演する。

○学会活動等

- ・ブランドを軸に経営を行うという考え方をテーマとした「日本ブランド経営学会」を設立するために、2018年6月より、有志により毎月勉強会を行ってきた。本年4月に正式に社団法人化し、私が理事長に就任する。メンバーは、大企業、中小企業、スタートアップ企業、職務も異なり、課題も異なる。企業経営とブランディング、地域ブランディング、採用ブランディング、スタートアップブランディングなど、ブランドに関することに関して理論的・実践的に考察する学会である。

VI 総括

- ・「オンリーワンを、一人に、ひとつ。」をテーマとして活動してきた。これは、自分自身がオンリーワンの存在になり、その存在を強化することでもある。そのことが、ひいては愛知東邦大学の個性を強め、「らしさ」を表現することでもあると考える。
- ・学生に対しても、大学の学務に対しても、自分の研究に対しても本学にとって何をするのが大学のブランドを強化することになるのかを判断の基準とし、活動してきた。
- ・しかしながら、いまだ十分とは言えず、不満足な点も多い。
- ・各項目に対する自己評価
授業に関しては「まあ良い」
委員会活動に関しては「どちらでもない」（ブランド推進、BP はスムーズに進んだが、委員会に関しては不十分）
研究活動は「まあ良い」
社会貢献は「よくできた」

以 上

所属学部 学科	職位	氏 名
経営学部 地域ビジネス学科	教授	杉谷 正次
最終学歴	学 位	専門分野
愛知学院大学大学院文学研究科博士課程前期修了	文学修士	スポーツ経営学、経営情報学

I 教育活動

○目標・計画

(目標)

教育力の向上を目指すとともに、校訓「真面目」、建学の精神「真に信頼して事を任せうる人格の育成」を意識した教育活動に努める。教育力の向上については、「魅力ある授業づくり」、校訓・建学の精神を意識した教育活動については、「問題解決能力を備えた、真面目で責任感のある人材」を育成する。また、今年度より始動したブランディングにおける「オンリーワンを、一人に、ひとつを。」を意識しつつ、自らが掲げたクレド「教育も研究も一步一步着実に」をモットーに教育活動にあたる。

(計画)

本年度も、前年度の授業評価アンケートの結果を踏まえ、「事前事後学習を積極的に取りこませる授業」、「わかりやすく興味を持てる授業」を目指した「魅力ある授業づくり」に取り組む。講義科目では、毎時間シラバスで提示した講義の目的と概要を提示するとともに、事前事後学習につなげるための課題提示、小テストやリアクションペーパーなどを活用しつつ、学生ひとり一人の理解度を確認していきながら講義をすすめる。

専門演習では、問題解決能力を身につけさせるため、各自が設定した研究テーマにおける課題を明確にさせ、それに対するレポート作成、プレゼンテーションなどの指導にあたる。特に3年生の専門演習では、研究発表、また経営学部の事業である「愛知東邦大学杯少年サッカー大会」の企画・運営、4年生の専門演習では、ゼミ生全員が卒業レポートを作成できるよう指導する。

○担当科目（前期・後期）

(前期) 入門コンピュータ、スポーツ情報論、スポーツビジネス、スポーツマネジメント、基礎演習Ⅰ、専門演習Ⅰ、専門演習Ⅲ

(後期) ビジネスコンピューティング、クラブ組織論、基礎演習Ⅱ、専門演習Ⅱ、専門演習Ⅳ

○教育方法の実践

映像資料などの教材を積極的に導入し、「わかりやすく興味を持てる授業」を実践した。また、講義科目では、パワーポイント、小テスト、リアクションペーパーなどを活用することにより、学生の理解度を確認しながら授業をすすめた。

○作成した教科書・教材

授業で使用する教材として映像資料を多数作成した。

○自己評価

「学生による授業評価アンケート」等の結果から、本年度の教育活動については、当初の目標を達成することができたと考える。具体的には、以下のとおりである。

「スポーツマネジメント」は、受講者自身に関する評価、授業担当者に関する評価とも、ほとんどの設問項目が4.3～4.7ポイントという評価であったことから、「概ね適切な授業ができた」と

判断する。但し、予習復習などの自主的な学習があまりされていなかったようなので、次年度は予習復習などの自主的な学習がなされるよう授業改善をしていきたい。

「入門コンピュータ」は、アンケート設問内容「この授業の内容について理解できましたか」「この授業の受講によって、学ぶことへの興味関心（意欲）が高まりましたか」「授業におけるテキスト、板書、配布資料、スライドなどは分かりやすかったですか」「教員の声や話し方は聞き取りやすかったですか」「授業の妨げ（私語・携帯電話・遅刻）に対する教員の対応は適切だったと思いますか」などの設問項目の評価が全科目評価平均と同等の評価であったことから、「概ね適切な授業ができた」と判断する。

「クラブ組織論」は、受講者自身に関する評価、授業担当者に関する評価とも、ほとんどの設問項目が4.0～4.3ポイントという評価であったことから、「概ね適切な授業ができた」と判断する。

「ビジネスコンピューティング」は、受講者自身に関する評価、授業担当者に関する評価とも、ほとんどのアンケート設問内容において、全科目平均を上回った評価であったことから、「概ね適切な授業ができた」と判断する。

「専門演習Ⅱ」は、ゼミナール交流会において研究発表を行い、また「第12回愛知東邦大学杯少年サッカー大会」のマネジメントを行うなど、当初の目標・計画を達成することができた。

「専門演習Ⅳ」は、2名を除く学生が卒業レポートを作成し、さらにゼミナール交流会において卒業レポートに関する研究発表を行うなど、当初の目標・計画をほぼ達成することができた。

II 研究活動

○研究課題

スポーツビジネスに関する研究 — スポーツツーリズムを中心として —

○目標・計画

（目標）

今年度は、スポーツビジネス全般について研究をすすめていくが、とりわけ「スポーツツーリズム」に関する研究を行う。年度末までには、スポーツツーリズムにおけるこれまでの研究成果を発表できるよう、一步一步着実に研究活動にあたる。

（計画）

すでにスポーツツーリズムを積極的に展開している地域、またそれを展開しようとしている地域の取り組みについての現地調査を行う。研究方法としては、スポーツ団体、自治体組織（NPO法人等を含む）などに対し、インタビュー調査、アンケート調査を実施するとともに、これまで収集したデータや資料を整理して考察する。

○2011年4月から2019年3月の研究業績（特許等を含む）

（著書）

- ・杉谷正次, 石川幸生『現代スポーツマネジメント—マーケティングからマネジメントの時代へ—』三恵社, 2016年9月, pp. 21-29, pp. 72-127.
- ・杉谷正次, 藤森憲司, 青木葵, 石川幸生, 葛原憲治『スポーツツーリズムの可能性を探る—新しい生涯スポーツ社会への実現に向けて—』唯学書房, 2015年11月, pp. 25-57.
- ・杉谷正次, 石川幸生『現代スポーツビジネス』三恵社, 2012年8月, pp. 107-220.
- ・杉谷正次, 石川幸生, 後藤永子, 青木葵, 山内章裕, 木村典子『超高齢社会における認知症予防と運動習慣への挑戦—高齢者を対象としたクロリティー活動の効果に関する研究』唯学書房,

2012年3月, pp. 35-51.

(学術論文)

- ・杉谷正次「沖縄観光におけるスポーツ・ツーリズムの現状と課題」『東邦学誌』, 第41巻第2号, 2012年12月, pp. 47-64.
- ・木村典子, 杉谷正次, 石川幸生, 青木葵, 後藤永子, 山内章裕「認知症と精神的健康に焦点をあてた介護予防としてのニュースポーツー地域のクロリティークラブチームからの考察ー」『愛知学泉大学・短期大学研究論集』, 第46号, 2011年12月, pp. 41-49.
- ・杉谷正次, 青木葵, 石川幸生, 御園慎一郎, 杉浦利成「スポーツ・ツーリズムの可能性を探るー国際リゾートをめざす北海道ニセコ地域の事例からー」『東邦学誌』, 第40巻第2号, 2011年12月, pp. 1-15.
- ・木村典子, 杉谷正次, 石川幸生, 青木葵, 後藤永子, 山内章裕「高齢者の記憶の自己効力感についての検討ークロリティー選手権大会に参加した高齢者からの考察ー」『東邦学誌』, 第40巻第1号, 2011年6月, pp. 129-139.

(学会発表)

- ・Masatsugu SUGITANI, Yukio ISHIKAWA, Takashi ONO, Mamoru AOKI : Study on the Park-golf of the effects of a lifetime sport, From the survey of the awareness of Park-golf enthusiasts, International Conference of the 66th Japanese Society of Education and Health Science, Dong-A University Sunghak Campus South Korea, Journal of Education and Health Science, Volume 64, Number 1, August, 2018, p75..
- ・杉谷正次, 石川幸生, 青木葵, 脇坂康彦, 小野隆「生涯スポーツとしてのパークゴルフの研究ースポーツツーリズムに着目してー」第64回日本教育医学会大会, 三重大学, 2016年8月, p55.
- ・Noriko KIMURA, Mamoru AOKI, Yukari MATSUI, Yukio ISHIKAWA, Masatsugu SUGITANI : Current state of end-of-life care for older adults with dementia in group homes: Results of a nationwide survey in Japan, 第16回日・韓健康シンポジウム 兼第63回日本教育医学会大会, 関西学院大学西宮上ヶ原キャンパス, 2015年8月, pp. 136-137.
- ・葛原憲治, 柴田真志, 杉谷正次「小学生ジュニアサッカー選手における傷害発生率」第19回日本体力医学会東海地方学術集会, 名古屋大学, 2015年3月, p36.
- ・Noriko KIMURA, Chihiro KIMATA, Yukio ISHIKAWA, Mamoru AOKI, Masatsugu SUGITANI, Masataka TERASHIMA : Perceptions of older people with dementia held by university students and relevant factors, 第15回日・韓健康シンポジウム 兼第61回日本教育医学会大会, 大韓民国済州大学校 アラキャンパス, 2013年8月, pp. 84-85.
- ・杉谷正次, 石川幸生, 青木葵, 御園慎一郎, 杉浦利成, 葛原憲治「スポーツ・ツーリズムの可能性を探るー生涯スポーツとしての『グラウンド・ゴルフ』発祥地大会を事例としてー」第14回日本生涯スポーツ学会, 広島経済大学, 2012年10月, p45.
- ・木村典子, 杉谷正次, 石川幸生, 青木葵, 後藤永子, 山内章裕「地域密着型サービスを拠点としたまちづくりに関する研究ークロリティー活動の事例からー」第60回日本教育医学会記念大会, 筑波大学, 2012年8月, pp. 133-134.
- ・杉谷正次, 石川幸生, 青木葵, 木村典子, 後藤永子, 山内章裕「高齢者を対象としたクロリティー活動の効果に関する研究ー愛知県、島根県のクラブ活動からの考察ー」第60回日本教育医学会記念大会, 筑波大学, 2012年8月, pp. 135-136.

- ・木村典子，青木葵，石川幸生，杉谷正次，後藤永子，山内章裕「地域で暮らし仲間とスポーツをおこなっている認知症の疑われる高齢者についての検討ークロリティー選手権大会に出場した高齢者からの考察」第26回日本老年精神医学会，京王プラザホテル，2011年6月，p245.
- ・木村典子，青木葵，石川幸生，杉谷正次，後藤永子，山内章裕「地域で仲間とスポーツを楽しみながら生活している高齢者の記憶の自己効力感の検討ーA 県クロリティー選手権大会に参加した高齢者からの考察」第53回日本老年社会科学会，ハイアットリージェンシー東京，2011年6月，p297.

(その他)

- ・杉谷正次，石川幸生『パークゴルフにおけるアンケート調査報告書』(共著)，公益社団法人日本パークゴルフ協会(NPGA)設立30周年記念事業，ソーゴー印刷株式会社，2017年9月

○科学研究費補助金等への申請状況、交付状況(学内外)

- 2018年度：愛知東邦大学地域創造研究所共同研究(申請1件、採択1件)
- 2017年度：愛知東邦大学地域創造研究所共同研究(申請1件、採択1件)
- 2016年度：愛知東邦大学地域創造研究所共同研究(申請1件、採択1件)
- 2015年度：愛知東邦大学地域創造研究所共同研究(申請1件、採択1件)
- 2014年度：愛知東邦大学地域創造研究所共同研究(申請1件、採択1件)
- 2013年度：愛知東邦大学地域創造研究所共同研究(申請1件、採択1件)
- 2012年度：愛知東邦大学地域創造研究所共同研究(申請1件、採択1件)
- 2011年度：愛知東邦大学地域創造研究所共同研究(申請2件、採択2件)

○所属学会

経営情報学会、日本情報経営学会、日本教育医学会、日本スポーツ産業学会、日本生涯スポーツ学会、日本スポーツマネジメント学会

○自己評価

研究テーマ「スポーツビジネスに関する研究ースポーツツーリズムを中心としてー」では、スポーツツーリズムの成功例とされている北海道及び沖縄県の取り組みに関する実地調査を実施することができた。

また、本年度の主な研究成果としては、International Conference of the 66th Japanese Society of Education and Health Science)において、学会発表を行った。

III 大学運営

○目標・計画

(目標)

建学の精神、校訓である真面目を基本として、委員会等の諸活動に積極的に関与し、大学運営に寄与する。

(計画)

入試委員会委員長、学生募集戦略委員会委員としての業務をこなし、大学運営に貢献する。

○学内委員等

入試委員会委員長、学生募集戦略委員会委員

○自己評価

本年度は、入試委員会委員長、学生募集戦略委員会委員として積極的に活動することができた。

IV 社会貢献

○目標・計画

(目標)

高・大連携授業等に積極的に関わるとともに、地域貢献、社会貢献としての地域スポーツ振興に寄与する。

(計画)

系列校である東邦高等学校人間健康コースの生徒を対象とした講義（総合学習）や外部の高等学校から要請のあった出張講義を積極的に行う。

また、経営学部の事業である「愛知東邦大学杯少年サッカー大会」、日進市体育協会評議員として同市が主催するスポーツイベント、日進市サッカー協会理事として同サッカー協会が主催するサッカー大会のマネジメントなど、地域スポーツ振興にも貢献する。

○学会活動等

日本情報経営学会第 76 回全国大会自由論題セッション（Ⅱ）のコメントーターとして委嘱を受け、学会発表の運営に寄与した。

○地域連携・社会貢献等

日進市体育協会評議員（2007年4月～）、日進市サッカー協会理事（2008年7月～）

○自己評価

学内では、経営学部の事業である「愛知東邦大学杯少年サッカー大会」のマネジメント、学外では、系列校である東邦高等学校から要請のあった授業を担当した。さらに、社会貢献としては、日進市体育協会が主催する「アウトドアスポーツイベント」運営委員、また日進市サッカー協会理事として同協会が主催するサッカー大会のマネジメントなど、地域のスポーツ振興に貢献することができた。

V その他の特記事項（学外研究、受賞歴、国際学術交流、自己研鑽等）

なし

VI 総括

本年度も入試委員会委員長としての業務でかなりの時間を費やしたが、当初の目標・計画であげた課題を概ね達成することができた。次年度も教育・研究活動のための時間を確保し、さらなる成果をあげることができるよう努力したい。

以 上

所属学部 学科	職位	氏 名
経営学部 地域ビジネス学科	教授	高木 靖彦
最終学歴	学 位	専門分野
名古屋大学大学院理学研究科博士課程 (後期課程) 修了	理学博士	惑星科学

I 教育活動

○目標・計画

(目標)

科学的思考の習慣とその基礎的素養を身につけ、現代社会に対応できる能力を有し、情報化社会で生きていける人間を養成することを目標とする。

(計画)

前年度の授業アンケートの結果から、「わかりやすい授業」を心がけ、自発的な事前事後学習を促すような教科書・教材を作成する。

○担当科目 (前期・後期)

(前期) 入門コンピュータ、自然科学基礎、データベース論、学びの基礎Ⅰ、基礎演習Ⅰ、総合演習Ⅰ

(後期) ビジネスコンピューティング、環境科学、Web ページ作成演習、東邦プロジェクトA、学びの基礎Ⅱ、基礎演習Ⅱ、総合演習Ⅱ

○教育方法の実践

本学学生の現状に適した教科書の類は市販品では見当たらないので、全て講義資料は自前で作成した。また、講義科目においては、プレゼンテーションソフト等を用いて視覚に訴える授業を展開した。さらに、その資料をPDF化したうえで学生用ページに掲載し、後から学生が確認できるようにした。これにより、教育効果をあげることができた。

○作成した教科書・教材

入門コンピュータおよびビジネスコンピューティング、基礎コンピュータ用として、高木 靖彦・成田 良一・正岡 元 (2018)『コンピュータリテラシー (2018 年度版)』。その他の科目においても講義資料は全て自前で作成した。

○自己評価

当初の目標・計画については、おおむね目標を達成することができた。

II 研究活動

○研究課題

太陽系天体表面での衝突現象の研究

○目標・計画

(目標)

室内実験および地上観測、探査手法により、小惑星の表面地形・地質ならびに内部構造、および、それらの形成素過程の研究を総合的に進める。中でも、太陽系天体の進化過程において最も普遍的な現象である衝突現象の研究を室内実験、地上観測、および探査データを有機的に結合して進

める。

(計画)

6月に探査対象小惑星(162173) Ryuguに到達する「はやぶさ2」の近傍観測に参加し、近赤外分光器などの初期成果を論文とする。また、JAXAおよび東北大学との共同研究として行ってきた玄武岩を標的とした衝突実験の結果をまとめ、それを査読論文として公表する。

○2011年4月から2019年3月の研究業績(特許等を含む)

(学術論文)

- K. Kitazato, R. E. Milliken, T. Iwata, M. Abe, M. Ohtake, S. Matsuura, T. Arai, Y. Nakauchi, T. Nakamura, M. Matsuoka, H. Senshu, N. Hirata, T. Hiroi, C. Pilorget, R. Brunetto, F. Poulet, L. Riu, J.-P. Bibring, D. Takir, D. L. Domingue, F. Vilas, M. A. Barucci, D. Perna, E. Palomba, A. Galiano, K. Tsumura, T. Osawa, M. Komatsu, A. Nakato, T. Arai, N. Takato, T. Matsunaga, Y. Takagi, K. Matsumoto, T. Kouyama, Y. Yokota, E. Tatsumi, N. Sakatani, Y. Yamamoto, T. Okada, S. Sugita, R. Honda, T. Morota, S. Kameda, H. Sawada, C. Honda, M. Yamada, H. Suzuki, K. Yoshioka, M. Hayakawa, K. Ogawa, Y. Cho, K. Shirai, Y. Shimaki, N. Hirata, A. Yamaguchi, N. Ogawa, F. Terui, T. Yamaguchi, Y. Takei, T. Saiki, S. Nakazawa, S. Tanaka, M. Yoshikawa, S. Watanabe, Y. Tsuda (2019), The surface composition of asteroid Ryugu from Hayabusa2 near-infrared spectroscopy, *Science* 10.1126/science.aav7432 (2019). doi:10.1126/science.aav8032
- Ken Ishiyama, Atsushi Kumamoto, Yasuhiko Takagi, Norihiro Nakamura, Sunao Hasegawa (2019), Effect of crack direction around laboratory-scale craters on material bulk permittivity, *Icarus* **319**: 512-524. <https://doi.org/10.1016/j.icarus.2018.09.030>
- T. Iwata, K. Kitazato, M. Abe, M. Ohtake, Takehiko Arai, Tomoko Arai, N. Hirata, T. Hiroi, C. Honda, N. Imae, M. Komatsu, T. Matsunaga, M. Matsuoka, S. Matsuura, T. Nakamura, A. Nakato, Y. Nakauchi, T. Osawa, H. Senshu, Y. Takagi, K. Tsumura, N. Takato, S. Watanabe, M. A. Barucci, E. Palomba, M. Ozaki (2017), NIRS3: The Near Infrared Spectrometer on Hayabusa2, *Space Sci Rev* **208**: 317. <https://doi.org/10.1007/s11214-017-0341-0>
- M. Arakawa, K. Wada, T. Saiki, T. Kadono, Y. Takagi, K. Shirai, C. Okamoto, H. Yano, M. Hayakawa, S. Nakazawa, N. Hirata, M. Kobayashi, P. Michel, M. Jutzi, H. Imamura, K. Ogawa, N. Sakatani, Y. Iijima, R. Honda, K. Ishibashi, H. Hayakawa, H. Sawada (2017), Scientific Objectives of Small Carry-on Impactor (SCI) and Deployable Camera 3 Digital (DCAM3-D): Observation of an Ejecta Curtain and a Crater Formed on the Surface of Ryugu by an Artificial High-Velocity Impact, *Space Sci Rev* **208**: 187. <https://doi.org/10.1007/s11214-016-0290-z>
- T. Saiki, H. Imamura, M. Arakawa, K. Wada, Y. Takagi, M. Hayakawa, K. Shirai, H. Yano, C. Okamoto (2017), The Small Carry-on Impactor (SCI) and the Hayabusa2 Impact Experiment, *Space Sci Rev* **208**: 165. <https://doi.org/10.1007/s11214-016-0297-5>
- 高木靖彦 (2012), 微小重力下での天体表面現象, *日本マイクロ重力応用学会誌* **29**, 163-168
- T. G. Müller, J. Ďurech, S. Hasegawa, M. Abe, K. Kawakami, T. Kasuga, D. Kinoshita, D.

Kuroda, S. Urakawa, S. Okumura, Y. Sarugaku, S. Miyasaka, Y. Takagi, P. R. Weissman, Y.-J. Choi, S. Larson, K. Yanagisawa, and S. Nagayama (2011), Thermo-physical properties of 162173 (1999 JU3), a potential flyby and rendezvous target for interplanetary missions, *Astronomy & Astrophysics* 525, A145, DOI: 10.1051/0004-6361/201015599

(学会発表)

- L. Riu, K. Kitazato, R. Milliken, T. Iwata, M. Abe, M. Ohtake, S. Matsuura, T. Arai, Y. Nakauchi, T. Nakamura, M. Mastuoka, H. Senshu, N. Hirata, T. Hiroi, C. Pilorget, R. Brunetto, F. Poulet, J.-P. Bibring, D. Takir, D.L. Domingue, F. Vilas, M.A. Barucci, D. Perna, E. Palomba, A. Galiano, K. Tsumura, T. Osawa, M. Lomatsu, A. Nakato, T. Arai, N. Takato, T. Matsunaga, Y. Takagi, K. Matsumoto, T. Kouyama, Y. Yokota, E. Tatsumi, N. Sakatani, Y. Yamamoto, T. Okada, S. Sugita, R. Honda, T. Matora, S. Kameda, H. Sawada, C. Honda, M. Yamada, H. Suzuki, K. Yoshioka, M. Hayakawa, K. Ogawa, Y. Cho, Y. Takei, T. Saiki, S. Nakazawa, S. Tanaka, M. Yoshikawa, S. Watanabe, Y. Tsuda, Global view of the mineralogy and surface properties of the asteroid Ryugu using NIRS3 Near-Infrared Spectrometer on board Hayabusa2, *50th Lunar and Planetary Science Conference (2019)*, March 19, 2019, The Woodlands Waterway Marriott Hotel and Convention Center, The Woodlands, TX, USA.
- K. Ishiyama, A. Kumamoto, Y. Takagi, N. Nakamura, and S. Hasegawa, Measurements of the permittivity, density, and volume fraction of crack around artificial impact crater, *47th Lunar and Planetary Science Conference (2016)*, March 22, 2016, The Woodlands Waterway Marriott Hotel and Convention Center, The Woodlands, TX, USA.
- K. Kitazato, T. Iwata, M. Abe, M. Ohtake, K. Tsumura, T. Ichikawa, N. Takato, Y. Nakauchi, T. Arai, H. Senshu, N. Hirata, Y. Takagi, and the Hayabusa2 NIRS3 Team, Near-Infrared spectroscopy of the earth and moon during the Hayabusa2 earth swing-by, *47th Lunar and Planetary Science Conference (2016)*, March 22, 2016, The Woodlands Waterway Marriott Hotel and Convention Center, The Woodlands, TX, USA.
- 石山 謙, 熊本 篤志, 高木 靖彦, 中村 教博, 長谷川 直, 衝突実験による玄武岩標的中の密度・誘電率・クラック量の測定, 日本地球惑星科学連合 2015 年大会、平成 27 年 5 月 25 日、幕張メッセ国際会議場
- 石山謙, 熊本 篤志, 高木靖彦, 中村教博, 衝突実験に基づくクレーター周辺のバルク密度と誘電率の測定, 平成 26 年度スペース宇宙科学に関する室内実験シンポジウム, 平成 27 年 2 月 23 日, 宇宙科学研究所
- 高木靖彦, 玄武岩に形成されたクレーターの三次元形状測定とそれから求められる π スケーリング則、低温科学研究所共同利用研究集会「天体の衝突物理の解明 (X) ～日本の衝突研究の未来～」、2014 年 10 月 24 日、北海道大学低温科学研究所講堂
- 石山謙, 熊本 篤志, 高木靖彦, 中村教博, 衝突実験に基づくクレーター周辺のバルク密度と誘電率の測定, 日本地質学会第 121 年学術大会, 平成 26 年 9 月 13 日, 鹿児島大学郡元キャンパス
- Y. Takagi, S. Hasegawa, and A. Suzuki, Scaling law deduced from impact-cratering experiments on basalt targets, *Asteroids, Comets, Meteors 2014*, July 3, 2014, Marina Congress Center, Helsinki, Finland

- K. Wada, M. Arakawa, T. Saiki, H. Imamura, M. Hayakawa, C. Okamoto, K. Shirai, Y. Takagi, T. Kadono, Y. Tsuda, H. Yano, S. Nakazawa, N. Hirata, K. Ogawa, Y. Iijima, P. Michel, M. Jutzi, K. Kurosawa, Large Scale Impact Experiments Simulating Small Carry-On Impactor (SCI) Equipped on Hayabusa-2, *45th Lunar and Planetary Science Conference (2014)*, March 18, 2014, The Woodlands Waterway Marriott Hotel and Convention Center, The Woodlands, TX, USA.
- 高木靖彦, 長谷川直, 鈴木絢子、玄武岩標的に形成されたクレーターの三次元形状測定から導かれるスケーリング則、平成 25 年度スペースプラズマ研究会、2014 年 2 月 28 日、JAXA 相模原キャンパス
- 高木靖彦, 長谷川直, 鈴木絢子、玄武岩標的クレーター形成実験から求められたスケーリング則、日本惑星科学会 2013 年度秋季講演会、2013 年 11 月 22 日、石垣市民会館
- 北里宏平, 岩田隆浩, 安部正真, 大竹真紀子, 平田成, 千秋博紀, 中村智樹, 小松睦美, 荒井朋子, 廣井孝弘, 松浦周二, 津村耕司, 荒井武彦, 仲内悠祐, 高木靖彦, 本田親寿, 松永恒雄, 高遠徳尚, 渡邊誠一郎、はやぶさ 2 近赤外分光計 NIRS3 の運用計画、日本惑星科学会 2013 年度秋季講演会、2013 年 11 月 22 日、石垣市民会館
- 高木靖彦, 玄武岩標的に作られたクレーターの三次元計測、低温科学研究所共同利用研究集会「天体の衝突物理の解明 (IX) -火星の進化-」、2013 年 10 月 24 日、北海道大学低温科学研究所講堂
- T. Iwata, K. Kitazato, M. Abe, M. Ohtake, S. Matsuura, K. Tsumura, N. Hirata, C. Honda, Y. Takagi, 他 16 名, Results of the Critical Design for NIRS3: The Near Infrared Spectrometer on Hayabusa-2, *44th Lunar and Planetary Science Conference*, March 21, 2013, The Woodlands Waterway Marriott Hotel and Convention Center in The Woodlands, Texas, USA.
- M. Arakawa, T. Saiki, K. Wada, T. Kadono, Y. Takagi, 他 16 名, Small Carry - On Impactor (SCI) : Its Scientific Purpose, Operation, and Observation Plan in Hayabusa - 2 Mission, *44th Lunar and Planetary Science Conference*, March 19, 2013, The Woodlands Waterway Marriott Hotel and Convention Center in The Woodlands, Texas, USA.
- 高木靖彦, 長谷川直, 田端誠, 黒澤耕介、玄武岩標的クレーター形成実験から求められたスケーリング則、平成 24 年度スペースプラズマ研究会、2013 年 2 月 26 日、JAXA 相模原キャンパス
- 高木靖彦, 長谷川直, 玄武岩を用いたクレーター形成実験、「天体の衝突物理の解明 (VIII)」研究会、2012 年 11 月 20 日、北海道大学低温科学研究所
- Y. Takagi, S. Hasegawa, K. Kurosawa, Cratering Experiments on Basalt Targets, Asteroids, Comets, Meteors 2012, May 17, 2012, Toki Messe (Niigata Convention Center), Niigata, Japan
- Y. Takagi, S. Hasegawa, and K. Kurosawa, Cratering Experiments on Basalt Targets, 43rd Lunar and Planetary Science Conference, March 20, 2012, The Woodlands Waterway Marriott Hotel and Convention Center in The Woodlands, Texas, USA.
- 高木靖彦・長谷川直・黒澤耕介、玄武岩標的を用いたクレーター形成実験、平成 23 年度スペースプラズマ研究会、2012 年 2 月 28 日、JAXA 相模原キャンパス
- 高木靖彦・はやぶさ 2 衝突装置科学チーム、はやぶさ 2 衝突装置の科学目標、2011 年日本惑星科

学会 秋季講演会、2011年10月8日、相模女子大学・翠葉会館

- ・高木靖彦・矢野創・岡本千里・佐伯孝尚・澤田弘崇・赤星保浩・はやぶさ2プロジェクトチーム、はやぶさ2搭載衝突装置の科学目的、日本地球惑星科学連合2011年大会、2011年5月26日、幕張メッセ国際会議場
- ・高木靖彦・長谷川直、玄武岩標的上の衝突クレーター形成実験、日本地球惑星科学連合2011年大会、2011年5月25日、幕張メッセ国際会議場

○科学研究費補助金等への申請状況、交付状況（学内外）

○所属学会

（公益社団法人）日本地球惑星科学連合、日本惑星科学会、（公益社団法人）日本地震学会、American Association for the Advancement of Science、American Geophysical Union

○自己評価

計画した2編の論文は2編とも出版され、計画はほぼ達成された。「はやぶさ2」は小惑星近傍観測が続けられているのでさらなる成果を来年度中には公表できるようにすすめたい。

III 大学運営

○目標・計画

（目標）

各委員会等に積極的に関与し、大学運営に貢献する。

（計画）

学術情報センターが学生の学びの場となるような施策に努めていく。研究活動委員会に置いては、紀要の発行手順等の近代化に努め学術誌と呼べるものに近づけていく。また、大学レポジトリのあるべき姿を考える。

○学内委員等

情報マネジメント会議構成員、研究活動委員会委員長、学術情報センター運営委員会委員長

○自己評価

全ての委員会において十分な貢献ができた。

IV 社会貢献

○目標・計画

（目標）

大学教員の本質的役割である科学的研究を進め人類の叡智に寄与することに努め、その結果を適切に社会発信していく。

（計画）

講演の依頼があった場合には積極的に対応していく。

○学会活動等

○地域連携・社会貢献等

「はやぶさ2」に関連したNHKの取材2件

○自己評価

大学教員の本質的役割は果たせた

V その他の特記事項（学外研究、受賞歴、国際学術交流、自己研鑽等）

VI 総括

各項目に関して概ね当初目標・計画は達成することができた。

以 上

所属学部 学科	職位	氏 名
経営学部 地域ビジネス学科	教授	成田 良一
最終学歴	学 位	専門分野
東京大学大学院 理学系研究科 相関理化学専攻 博士課程 単位取得満期退学	理学修士	数学、コンピュータ科学

I 教育活動

○目標・計画

(目標)

学生の理解度を上げる

(計画)

個々の学生にきめ細かいフィードバックを返す。Google Classroom を活用する。

○担当科目 (前期・後期)

(前期) 入門コンピュータ、数理の世界、基礎演習 I

(後期) ビジネスコンピューティング、インターネット社会論、基礎演習 II

○教育方法の実践

「入門コンピュータ」「ビジネスコンピューティング」については、提出物が紙・ファイル・メールの3種類があるが、特に紙の提出物については採点したものを個人ごとに返却し、間違いへの注意を喚起した。

「数理の世界」については、後半は Google Classroom で証明の詳細や問題集などの資料を提示して、予習・復習がうまくできるようにした。また欠席者に対する対処ともなった。毎回、その日の授業に関わる問題を解かせて理解の定着を図り、出席をとる手段ともした。

「インターネット社会論」では、Google Classroom を使い、各講義日の2日前に資料を提示した。2回の中間レポートの課題や、日常の連絡にもこれを利用した。毎回、その日の授業に関わる問題に解答させて理解の定着を図り、出席をとる手段ともした。

○作成した教科書・教材

高木靖彦、成田良一、正岡元『コンピュータリテラシー (2018年度版)』, 2018, 三恵社

Google Classroom 「数理の世界 (2018年度版)」

Google Classroom 「インターネット社会論 (2018年度版)」

○自己評価

上記の教育方法により、講義内容の理解が深まったと考える。また「インターネット社会論」の授業評価アンケートによると、授業時間外での勉学が有意に増大した。

II 研究活動

○研究課題

コンピュータプログラミングの数学的基礎

○目標・計画

(目標)

計算論の帰納的関数による再構築

(計画)

数学基礎論の諸分野、特に計算論に関する最近の研究動向を探る。

○2011年4月から2019年3月の研究業績（特許等を含む）

(著書)

なし

(学術論文)

- Hideki Sato, Ryoichi Narita, Regular Polygon Based Search Algorithm for Processing Maximum Range Queries in “Knowledge-Based Information Systems in Practice”, Smart Innovation, Systems and Technologies, Volume 30, Chap.7, 2015 Springer.
- Hideki Sato, Ryoichi Narita, Approximately processing aggregate range queries on remote spatial databases, Int. J. Knowledge and Web Intelligence, Vol. 4, No. 4, 2013, 314-335.
- Hideki Sato, Ryoichi Narita, Approximate Search Algorithm for Aggregate k-Nearest Neighbor Queries on Remote Spatial Databases, International Journal of Knowledge and Web Intelligence, Vol.4, No.1, 2013, 3-19.

(学会発表)

- 成田良一, 「携帯情報機器の数学教育利用」, リメディアル教育学会『学士力を育成する数学教育』研究会, 2014年8月23日
- 成田良一, 「大学におけるモバイル情報端末の活用とセキュリティ」, 国立情報学研究所 平成24年度第1回学術情報基盤オープンフォーラム, 2012年7月4日

<国際学会での発表>

- Hideki Sato, Ryoichi Narita, Efficient Maximum Range Search on Remote Spatial Databases Using k-Nearest Neighbor Queries, KES-2013 17th International Conference on Knowledge-Based and Intelligent Information & Engineering Systems, 2013, 836-845.
- Hideki Sato, Ryoichi Narita, Supporting Sum Range Queries on Remote Spatial Databases Using k-Nearest Neighbor Search, The 6th International Conference on Intelligent Interactive Multimedia Systems and Services, 2013, 1-10.
- Hideki Sato, Ryoichi Narita, Multistep Search Algorithm for Sum k-Nearest Neighbor Queries on Remote Spatial Databases, 5th International Conference on Intelligent Interactive Multimedia Systems and Services, 2012, 385-397.

○科学研究費補助金等への申請状況、交付状況（学内外）

○所属学会

日本数学会、日本ソフトウェア科学会、日本数式処理学会

○自己評価

計算論は、チューリングマシンに基礎を置く理論記述が標準的である。しかし、記述の複雑さを解消したいと言うことが研究の動機であった。計算可能性として同値でまったく見栄えの異なるものが数種類ある。帰納的関数もその一つであり、それで簡明な理論記述を試みたが、帰納的関数ではうまくいかない部分があることが証明されていることがわかった。そこで別の方式としてλ計算を使った理論記述を試みた。広範な書き換えが必要なため、この研究は継続中である。

Ⅲ 大学運営

○目標・計画

(目標)

各種委員会委員として職務を全うする。

(計画)

今年度は入試問題作成委員会副委員長であり、入試問題にトラブルが無いよう細心の注意を払って作成および統括にあたる。

○学内委員等

入試問題作成委員

○自己評価

入試問題作成委員会については、委員長が新しい人に交代したため、新旧委員長を交えて業務の引き継ぎを行った。なお、今年度の入試問題に関して自分自身はそれに対してある程度は適切に対処できたと思う。

Ⅳ 社会貢献

○目標・計画

(目標)

自らの教育活動、研究活動、大学運営などで得た知見を社会に還元する。

(計画)

SNSなどで知見を発信する。可能であれば講演活動を行う。

○学会活動等

なし

○地域連携・社会貢献等

なし

○自己評価

今年度は特に社会的活動は行わなかった。

Ⅴ その他の特記事項（学外研究、受賞歴、国際学術交流、自己研鑽等）

なし

Ⅵ 総括

今年度末で退職する。最後の一年となったが、教育・研究・学務の面で手を抜くこともなく、新しい業務内容も含めて、十分に活動したと思う。水準以上の効果も上がったと自己評価する。

以 上

所属学部 学科	職位	氏 名
経営学部 地域ビジネス学科	教授	深谷 和広
最終学歴	学 位	専門分野
立命館大学大学院経営学研究科企業経営専攻 博士後期課程満期退学	経済学修士	会計学

I 教育活動

○目標・計画

(目標)

建学の精神「真に信頼して事を任せうる人格の育成」に基づいて、経営に必要な知識と技術を修得させ、地域で事業活動を行う企業や組織で活躍できる人材を育成することを目標とする。特に、会計学・財務諸表論等の財務会計分野の専門知識を身に付けた人材を育成する。

(計画)

校訓「真面目」を意識し、学習への真面目な取組みの姿勢を伝え、わかりやすく興味をわく授業活動を行う。授業内容は授業評価の結果を踏まえて改善を加える。また演習では、学生が主体的に学ぶ機会を積極的に設定し、愛情と情熱を持って学生に学ぶことの喜びを感じる教育を実践する。

○担当科目（前期・後期）

（前期）簿記Ⅰ、会計学、原価計算論、基礎演習Ⅰ、専門演習Ⅰ、専門演習Ⅲ

（後期）簿記Ⅱ、財務諸表論、基礎演習Ⅱ、専門演習Ⅱ、専門演習Ⅳ

○教育方法の実践

講義科目では、学生の理解度を高めるために板書とプリント教材を積極的に活用した。演習科目では、視覚的に内容を理解できるビデオ、DVDなどの映像教材を活用した。また文章整理と情報収集及びプレゼンテーションのツールとしてパソコンを積極的に活用した。

○作成した教科書・教材

「簿記Ⅰ」「簿記Ⅱ」「原価計算論」「財務諸表論」の講義科目では、毎週オリジナルのプリント教材を作成した。また事前事後の自主学習できるように教科書を積極的に活用した。

○自己評価

「簿記Ⅰ」「簿記Ⅱ」「原価計算論」「財務諸表論」の講義科目では、毎回の講義内容を分かりやすく説明し丁寧に板書することで学習内容の理解・定着と問題意識の醸成に努めた。またプリント教材を通じてトレーニングを積極的に行う授業を行った。また学生の理解を高めるために、必ず、前回の講義内容を再確認し、学習内容の定着を高めるように工夫した。日々の取り組みの結果、当初設定した教育目標を達成することができた。

II 研究活動

○研究課題

国際化における企業会計制度に関する研究－日・米・英を中心とした比較研究

○目標・計画

(目標)

我が国の企業会計への貢献を目指し、国際化の進む企業会計制度について日・米・英を中心として比較研究を行うことを目標とする。

(計画)

これまでも国際化の下での企業会計制度の比較研究を進めてきた。これまでの研究成果を踏まえ、英国及び国際会計基準における開示基準の現状と諸課題について研究活動を進める。この研究成果は日本会計研究学会等における学会発表で情報発信する。

○2011年4月から2019年3月の研究業績（特許等を含む）

(著書)

- ・伊藤秀俊編著、田端哲夫、相川奈美、林慶雲、遠藤秀紀、深谷和広、長岡正、渡邊智、柳田純也、東田明著『入門商業簿記テキスト第2版』中央経済社、2015年3月、120頁-133、150頁-160頁

(学術論文)

- ・深谷和広：「IASB基本財務諸表プロジェクトの予備的検討－EBITと経営者業績指標の導入の方向性－」、東邦学誌第47巻第1号、2018年6月10日、145頁-157頁
- ・深谷和広：「IASB討議資料『開示原則』の検討」、東邦学誌第46巻第2号、2017年12月10日、203頁-217頁
- ・深谷和広：「『IFRS実務記述書：重要性の適用』の検討－重要性のプロセスを中心に－」、東邦学誌第46巻第1号、2017年6月10日、141頁-153頁
- ・深谷和広：IASB『実務記述書：重要性の適用』の検討、『東邦学誌』第44巻第1号、2016年6月10日、91頁-103頁
- ・深谷和広：IASB「開示に関する取組み」の検討－開示原則プロジェクトの現状調査－、『東邦学誌』第44巻第1号、2015年6月10日、151頁-164頁
- ・深谷和広：「戦略報告指針」の検討－年次報告書における情報配置の論点－、『東邦学誌』第43巻第2号、2014年12月10日、25頁-38頁
- ・深谷和広：「ED：戦略報告書指針」の検討、『東邦学誌』第43巻第1号、2014年6月10日、57頁-70頁
- ・深谷和広：討議資料における表示及び開示に関する諸概念－第7節「表示及び開示」の検討を中心に－、『東邦学誌』第42巻第2号、2013年12月10日、161頁-172頁
- ・深谷和広：財務開示フレームワークの提案－『DP：開示フレームワークロードマップ』の検討を中心に－、『東邦学誌』第42巻第1号、2013年6月10日、137頁-156頁
- ・深谷和広：「財務報告における注記開示の役割－『DP：注記開示フレームワークに向けて』の検討を中心に－」、『東邦学誌』第41巻第2号、2012年12月10日、65頁-84頁
- ・深谷和広：UKGAAPの将来像－『方針提案：UKGAAPの未来』を中心に－、『会計理論学会年報』、第25号、2011年9月1日、108頁-119頁

○科学研究費補助金等への申請状況、交付状況（学内外）

- ・平成30年度（2018年度）科学研究費 基盤研究（C）応募

○所属学会

日本会計研究学会、税務会計研究学会、国際会計研究学会、会計理論研究学会

○自己評価

平成30年度（2018年度）もまた企業財務報告制度における開示の在り方とその意義について基礎的研究活動を進めてきた。本年度は、IASBの開示に関する取組みの一部として顕著な進展を見

せている主要財務諸表プロジェクトの進行状況を検討・分析し、その現状をまとめることができた。東邦学誌に掲載した「IASB 基本財務諸表プロジェクトの予備的検討」はその研究活動の成果の一部である。さらに企業会計制度における開示の在り方とその意義を中心に研究の進化に努めたい。

Ⅲ 大学運営

○目標・計画

(目標)

建学の精神を意識し、真面目に情熱をもって委員の職責をはたし、大学運営に貢献する。

(計画)

学部長補佐及び総務委員長の職責のもとに学部・委員会業務を遂行し、大学の発展に寄与する。

○学内委員等

学部長補佐、総務委員会委員長、地域連携委員会委員長、硬式野球部顧問（部長、強化指定クラブ）

○自己評価

学部長補佐として学部長を補佐し、学部執行部の円滑な運営と学部教育の発展に貢献した。総務委員長として教育・研究活動の環境改善及び防災教育活動の企画・運営に尽力し、大学教育の発展に寄与した。硬式野球部長として硬式野球部の発展に全力を尽く、微力ながら大学の学生活動支援に貢献した。

Ⅳ 社会貢献

○目標・計画

(目標)

2018 年度愛知大学野球連盟の企画・運営に理事として関与し、積極的に連盟活動に貢献する。

(計画)

2018 年度事業計画に基づき、春秋リーグ戦等の事業を実施し、魅力ある大学野球を実現する。

○学会活動等

○地域連携・社会貢献等

愛知大学野球連盟理事、生活協同組合インターカレッジコープ愛知監事

○自己評価

平成 30 (2018) 年度愛知大学野球連盟理事として年間業務を遂行し、連盟活動の推進という目的を達成することができた。また、本年度も生活協同組合インターカレッジコープ愛知監事の役職を受けて微力ながら生協活動に貢献することができた。

Ⅴ その他の特記事項（学外研究、受賞歴、国際学術交流、自己研鑽等）

Ⅵ 総括

大学教員として、教育・研究活動を中心として、本年度も教育・学生指導面において積極的に大

学に貢献することができた。また、大学硬式野球部部長として強化指定クラブ運営・推進の業務を担当し、愛知大学野球連盟理事として連盟活動に貢献することができた。インターカレッジコープ愛知監事として生活協同組合活動にも貢献した。また学部長補佐として学部執行部の運営面において微力ながら貢献し学部長を補佐してきた、また総務委員会委員長として委員会活動の面で大学運営に積極的に貢献することができた。

以 上

所属学部 学科	職位	氏 名
経営学部 地域ビジネス学科	教授	山極 完治
最終学歴	学 位	専門分野
中央大学大学院商学研究科博士課程後期修了	博士 (商学)	商学

I 教育活動

○目標・計画

(目標)

本年度の教育目標は、「Think diversityー『違い』を大切に、多様性を活かす」を掲げる。とりわけ、性別とは何か、これまで人には男性と女性としかないかのように性を二分してきた。LGBT と呼ばれる性的マイノリティの人たちも同じ一人ひとりの人間である。また、長い間、女性には「女性ラシサ」があり、男性には「男性ラシサ」がある、とも考えられてきました。しかし、女性も男性も、性別を超えて個性に満ちたひとりの人間と言える。

大学は 2018 年度始動したブランディングにおいて、教職員と学生が人づくりにかける姿勢として「オンリーワンを、一人に、ひとつ。」をコンセプトフレーズに定めた。私のクレドは「ひとりひとり、違いを大切にする」である。

このコンセプトの深化するために性別を素材に、ジェダーを超え、一人ひとりの多様性を活かすビジネスや社会を一緒に考えていく。

(計画)

現代企業論、地域ビジネス特講（女性とビジネス）、次世代ビジネス基礎といった経営学の基幹となる 3 つの科目を貫くメッセージは、これまで社会のなかで脇に置かれてきた女性、高齢者、障がい者、外国人の Other Voices に耳を傾け、多様性を活かすことである。

そこで、多様性を活かす企業経営とは何か、それを推し進める企業戦略ははじめマーケティングや人事管理論など関連づけてひとりひとりを活かすビジネスを考え、ひいては多様性を受容する市民社会の有り様を教えていく。

○担当科目（前期・後期）

（前期）地域ビジネス特講Ⅴ、専門プロジェクトⅠ、現代企業論、基礎演習Ⅰ、総合演習Ⅰ、専門演習Ⅲ

（後期）女性とメディア、次世代ビジネス基礎、専門プロジェクトⅡ、基礎演習Ⅱ、総合演習Ⅱ、専門演習Ⅳ

○教育方法の実践

授業にあたり担当者が最も重視している点は、学生の目線に近いところで語り、学生の学びにヒットした「生きた学び」になっているかどうか、にある。というのも、本学学生が大学生までどのような社会・生活環境の中で育ってきたのか、今、どういった日常生活をしているのか、に関心を寄せ、これらの問いに目を凝らし、それらと関連づけた講義が、「生きた学び」を引き出す上で肝心なことで承知しているからだ。この点を掘り下げていくことで学生それぞれの学びを動機づけることができる。本年度学生は、学習習慣に欠けると思われるところが散見される。それだけに、学生の自発的な学びを引き出すために、映像や資料を使い、リアルな現実を突きつける授

業を展開した。

○作成した教科書・教材

学生たちが、勉強を社会で自立して生きていくには勉強を必要不可欠だと実感できるところまで噛み砕いた授業開発に努めなければならない。そこで、身近な思わぬ事例を引き出し、わかりやすいデータ、あるいは映像提供や実物提示などを織り込んだ自前の教材を創り進めてきた。

○自己評価

生きた学びになるように授業開発に努めてきたが、その成果が十分とは言えない。30名前後のクラス150人を超える大教室での授業とでは、自ずと成果は見がってくるものだ。大教室でも「生きた学び」につなげるための試行錯誤が続く。

II 研究活動

○研究課題

1. 「女性活躍」の理論的・実証的研究は、内外の市場環境の激変に応えた、今後の日本企業の経営を左右する決定的な課題である。この点にかかわる事例研究を進めている。いかなる取組みが進み、どのような成果があったのか、今後、どのような施策が求められるのか、を明らかにしていく。
2. これからの新しい豊穡なライフスタイルを生み出す、等身大の地域生活圏（ライフエリア）とはどのようなものか、次世代をにやう地域の産業・企業に焦点をあて、その事例研究を進め、その上で魅力のある地域の仕事と生活を提案する。

○目標・計画

（目標）

「Think diversity－『違い』を大切に、多様性を活かす」を掲げる教育目標は、実は Beyond Gender、女性活躍をどうしたら推進するのか、とする研究目標と裏腹の関係である。政治や経営の分野でマイノリティにある女性が活躍できるということは、ひとりひとりの女性が自立できるということと同義といえる。進まない女性活躍を推進する施策・政策に立ち入って研究を進化させる。

生活感覚を持ちえている多くの女性たちの活躍は、企業ばかりでなく地域社会において強く求められるところである。地域のまちづくり、それを支えるコミュニティビジネスにもまた女性活躍が欠かせないことから、この点も大事な研究目標となる。

（計画）

経営学部の新規科目となった「総合演習Ⅰ・Ⅱ」や「専門プロジェクト」は、地域に連携した学習を進めることになっている。個人研究助成費の有効に活かす点でも、この実践的な学びを拠り所にした研究は当該研究を推進させることができるに違いない。教育と研究を連動させた生きた学び、生きた研究を深化させる。

○2011年4月から2019年3月の研究業績（特許等を含む）

（著書）

- ・山極完治「水戸学の教育と学びの今日的意味」（愛知東邦大学地域創造研究所叢書『ならぬことはならぬ－江戸時代後期の教育を中心として』No. 21 唯学書房 2014年3月）

○科学研究費補助金等への申請状況、交付状況（学内外）

○所属学会

日本 NPO 学会、協同総合研究所

○自己評価

研究テーマの縛り込みが進み、研究内容が深まってきているとはいえ、成果の公表が遅れていることを自省している。しかし、草稿段階を終え、公に研究成果の発表できる段階に入っている。次年度に成果を発表するつもりでいる。

III 大学運営

○目標・計画

(目標)

15年を超える地域創造研究所の研究は、地域にある課題を拾い上げ、その課題可決をはかる知の拠点として社会的認知度を上げる。そのための取り組みが、6つの部会の共同研究であり、講演・シンポジウムであり、年2回の叢書の発刊である。本年度は学生寮の運営実践、読谷村の地域連携はじめ文字通り地域と連携した取組みを強化していく。

(計画)

地域連携センターと密接に連携して協働を進め、その成果を講演会・シンポジウムや定例研究会の開催をもって本学の存在を広めていく。

○学内委員等

総務委員会委員、地域創造研究所運営委員会委員長、フットサル部顧問

○自己評価

地域創造研究所の本来の立ち位置にある地域づくりの推進の一環として、「地域を活かすブランディングー掘り起こそう、地域の宝。育もう、地域に文化」と題するシンポジウムが開催された。多彩なメンバーが勢揃いした地域づくりに寄与する意義ある進歩になった。

6つの研究部会が進められ、それぞれの部会ごとの独自の研究成果を生み出した。研究叢書も30号、31号の2冊が発刊された。

とりわけ、地域を学びの舞台にする東邦型 PBL が実を結びつつあり、今後、理論と実践を融合した生きた研究が生み出せるようにしていきたい。

IV 社会貢献

○目標・計画

(目標)

退職年次にあたる本年だけに、例年以上に高校生向けの出張講座、地域依頼の講演会・研究会に積極的に出向き、地域社会から真に信頼される大学づくりに務め、努める。

(計画)

本学の独自性を打ち出す重要な鍵のひとつである地域連携センターの活動を盛り上げ、研究所所長として地域づくりのセンターとして研究所を育てていく。

○学会活動等

○地域連携・社会貢献等

本年、10月6日、長野県上田市で開催された講演会は、大学の地域ビジネス学科設立の趣旨に

沿うものであり、地域づくりの知見を披露する機会になることから引き受けている。テーマは、「違いを活かす多様性が地域にイノベーション in UEDA—オンリーワンで、地域をひとつに」である。上田市長はじめ多くの参加者を得た活気ある講演会になった。

○自己評価

大学は知の拠点、なかでも本学は地域の知の拠点としての役割を持って誕生している。今後、地域が教室とする実践的な学びを裏付けにした研究が望まれる。

V その他の特記事項（学外研究、受賞歴、国際学術交流、自己研鑽等）

VI 総括

本年度をもって、29年になる東邦での教育と研究に終止符を打つ。積み重ねた教育と研究の成果を集約するものとして十分とは言えないが、ようやく地域ビジネス学科の存在理由が広く社会に発信できるようになってきたと感じている。

以 上

所属学部 学科	職位	氏 名
経営学部 地域ビジネス学科	准教授	浅野 和也
最終学歴	学 位	専門分野
中京大学大学院経営学研究科博士後期課程修了	博士	経営学

I 教育活動

○目標・計画

(目標)

学生の多面的な分析視角の形成・発達への積極的な支援

(計画)

学生からの質問・疑問に対して真摯に対応し学生だけでなく自己の成長につなげることを心がける。

○担当科目(前期・後期)

(前期) 人的資源管理論、企業研究、総合演習Ⅰ、専門演習Ⅰ、専門演習Ⅲ

(後期) 人材育成論、経営学Ⅱ、地域労働市場論、総合演習Ⅱ、専門演習Ⅱ、専門演習Ⅳ

○教育方法の実践

パワーポイントは使用せず、なるべく筆記をさせるようにした。同時に受講者に対して様々な角度から考えることの重要性を強調した。また、中間レポートを実施することで受講者の理解度の把握に努めた。出欠カードもただ学籍番号や氏名を書いてもらうだけではなく、自分にとって重要に思ったキーワードを3つ以上書くことを最低条件とし、さらに講義を通じて興味・関心を持ったこと、学びが深まったこと、感想や質問などを書くように指導した。

○作成した教科書・教材

教材として毎回の講義用プリントを作成した。

○自己評価

非常に多くの学生がコメントを書くことが習慣化でき、アンケートでも「面白い講義」「わかりやすい」などのコメントを得られたので、経営学を通じて学生の興味・関心を高める効果を確認できたことから目標は達成できたと思われる。

II 研究活動

○研究課題

自動車産業における働き方の考察

○目標・計画

(目標)

これまで研究を進めてきた自動車産業の働き方を踏まえて、日本企業における働き方の実態を把握すること。

(計画)

継続可能な調査対象へのアプローチを積極的に行いながら、論文、学会発表等の機会を通じて研究成果を発信する。

○2011年4月から2019年3月の研究業績(特許等を含む)

(著書)

- ・猿田正機編著、杉山 直・浅野和也・浅生卯一・宋 艶荅著『安倍政権下のトヨタ自動車』税務経理協会、2018年3月
- ・猿田正機編著、杉山 直・浅野和也・宋 艶荅・櫻井善行・張 永強著『トヨタの躍進と人事労務管理』税務経理協会、2016年3月
- ・猿田正機編著、杉山 直・浅野和也・宋 艶荅・櫻井善行著『逆流する日本資本主義とトヨタ』税務経理協会、2014年3月
- ・猿田正機編著、杉山 直・浅野和也・宋 艶荅・櫻井善行著『日本におけるトヨタ労働研究』文眞堂、2012年3月

(学術論文)

- ・浅野和也「トヨタにおける働き方の一考察」『中京企業研究』第36号、2014年12月
- ・浅野和也「自動車産業における働き方に関する一考察(2)」『東邦学誌』第41巻第1号、2012年6月
- ・浅野和也「自動車産業における働き方に関する一考察(1)」『東邦学誌』第40巻第1号、2011年6月

(学会発表)

- ・浅野和也「トヨタの『ダイバーシティ』推進」社会政策学会第135回大会、愛知学院大学、2017年10月
- ・浅野和也「合評会 十名直喜編著『地域創生の産業システム』水曜社、2015年」経済理論学会中部部会、2015年5月
- ・浅野和也「書評：猿田正機著『日本的労使関係と「福祉国家」—労務管理と労働政策を中心に—』(税務経理協会、2013年)をつうじて」社会政策学会東海部会、中京大学、2014年2月

(その他)

- ・浅野和也「トヨタ・ベトナム工場労働者の労働実態」『愛知労働問題研究所所報』第189号、2016年7月
- ・浅野和也「研究ノート 日本のワーク・ライフ・バランスは何をめざしているのか」『中京経営紀要』第23巻第1・2号、2014年3月
- ・浅野和也「労使関係と労働時間」労務理論学会編『経営労務事典』晃洋書房、2011年6月

○科学研究費補助金等への申請状況、交付状況(学内外)

- ・2013年度日本学術振興会科研費若手研究(B) 一不採択
- ・公益財団法人大幸財団 平成29年度 第6回人文・社会科学系学術研究助成一不採択

○所属学会

社会政策学会、労務理論学会、日本労務学会、労働社会学会、日本経営学会、北ヨーロッパ学会、過労死防止学会

○自己評価

本学の紀要への論文を執筆し投稿を試みたが、諸事情により取り下げることになったので次年度に投稿したい。また、大原社会問題研究所より原稿の依頼があり応諾、すでに脱稿している。出版は次年度になるが、歴史のある研究所からの依頼であり、自身の研究が学界にある程度認知されていると思われる。

Ⅲ 大学運営

○目標・計画

(目標)

大学業務をつうじてさまざまな大学の問題や課題を進言し民主的な大学運営を実現する。

(計画)

大学業務をつうじて現状を把握し問題解決のための情報共有・意思決定の方策を考えて進言する。

○学内委員等

教務委員会委員、学術情報センター運営委員会委員、軟式野球部顧問

○自己評価

担当の委員会において学部の見解をふまえて業務に取り組んだ。教務委員では、RBの入学者が多いこともあり、時間割作成をはじめ各種調整に非常に手間取った。学部執行部に判断を求める案件が多く、意思決定、組織決定のルートがわかりにくいことから混乱することもあった。臨時で委員会が開催されることもあって多忙な1年であった。

Ⅳ 社会貢献

○目標・計画

(目標)

本学が実践できる社会貢献とは何かを理解する。

(計画)

本学が中長期的に社会や地域と連携していく上で必要なこととは何かを考える。

○学会活動等

労務理論学会幹事、社会政策学会秋季大会企画委員

○地域連携・社会貢献等

豊橋中央高校への出張講義

○自己評価

4年連続で同じ高校への出張講義を行った。就職希望生徒に対する社会の厳しさをテーマに実施し、先方からは「とてもよかったです」との言葉もいただいたので一定の評価得たと思われる。

Ⅴ その他の特記事項（学外研究、受賞歴、国際学術交流、自己研鑽等）

昨年度末、授業実践の模範者として表彰されたことを受けて、授業公開および授業実践報告を行った。

Ⅵ 総括

研究活動では、これまで進めてきた自動車産業の労務管理および労使関係分析において、トヨタを事例に掘り下げた分析・考察ができた。論文を執筆したにもかかわらず、紀要への投稿が実現できなかったのが非常に残念であった。とはいえ、自身の研究テーマが学界で一定程度認知されていることも確認できたことから、ライフワークに位置づけられる研究テーマを扱っている自負を持てた。

11月に授業実践報告を行ったが、様々な理由があるにせよ学生から一定の評価を得ているにもかかわらず、報告の場ではネガティブな指摘が多かった。学生から評価を得ている以上、問題はな

い。引き続き努力する次第である。

学内業務では、教務委員会という非常に存在感のある委員会に配属されたことで、カリキュラムや単位認定等のしくみについて、いろいろと考えさせられることが多かった。教授会がなくなって以来、執行部に判断を任せる案件が非常に多いものの、すでに運営委員会で決まっている、学長会議で決まっている、理事会で決まっているなどの文言で下りてくるものが多い。執行部・科目担当者・教務課との意見調整や確認などの「橋渡し」業務が非常に多く私自身混乱が生じた。研究、学生対応などの時間は圧倒的に減少させられた。

以 上

所属学部 学科	職位	氏 名
経営学部 地域ビジネス学科	准教授	大勝 志津穂
最終学歴	学 位	専門分野
中京大学大学院体育学研究科博士課程単位取得退学	修士 (体育)	スポーツ社会学

I 教育活動

○目標・計画

(目標)

演習活動では、地域との連携を重視した実践教育を行う。専門演習Ⅰ・Ⅲではスポーツイベントの企画運営を通して、地域の企業や団体から、信頼される人材を育成する。座学では、様々な視点で物事を見ること、考えることの重要性を享受できるよう、内容を工夫する。実践教育、講義、演習を通して、当たり前なことを当たり前に行える学生を育てる。

(計画)

演習活動では、ドッジボール協会や名東区体育協会、地域の野球指導者やサッカー指導者と関わりをもって取り組む。「TOHO スポーツイベント」は、イベントそのものは継続的に実施できるようになってきたので、学生がより主体的に取り組める状況をつくる。また、4年次には、体験によって得られた経験を振り返り、学生自身が自らの体験の意義をつなぎ合わせられるように支援する。

○担当科目（前期・後期）

(前期) 健康・スポーツ実習、スポーツ社会学、地域とスポーツ、東邦プロジェクトB、総合演習Ⅰ、専門演習Ⅰ、専門演習Ⅲ

(後期) スポーツマネジメント基礎、生涯スポーツ、東邦プロジェクトA、総合演習Ⅱ、専門演習Ⅱ、専門演習Ⅳ

○教育方法の実践

学生が能動的に授業に取り組めるよう、事前事後の課題、授業の資料をネットワーク上に配置し、いつでも見られるようにした。また、ICTを活用し、双方向授業を行った。演習活動では、総合演習はグループ活動を中心に、決めたテーマで情報収集、プレゼン資料の作成・発表を行い、最後は各自でレポートを完成させることができた。また、総合演習、専門演習の学生によってスポーツイベントの運営を無事に実施することができた。さらに、売木村のマラソンボランティアにも参加することができた。4年生は、各自1万字以上の卒業レポートをまとめることができた。

○作成した教科書・教材

ネットワーク上に配置するための学生配布用課題資料及び授業用PPT資料の作成。

○自己評価

ICTを活用した授業に挑戦した。スマホを活用した授業方法を今後も検討していきたい。授業の課題や資料を事前にネットワーク上に置くことにより、学生が自ら資料を準備してくる状況を作り出し、予習ができるようにしたことは評価できる。

II 研究活動

○研究課題

競技団体がスポーツ弱者に対して取り組む支援方策や普及・振興戦略

○目標・計画

(目標)

口頭発表1回以上、査読付論文1本以上、科研費あるいは外部資金の獲得

(計画)

- ・8月の日本体育学会あるいは11月の日本生涯スポーツ学会での口頭発表
- ・博士論文執筆に向けた研究内容の精査及び中間発表

○2011年4月から2019年3月の研究業績(特許等を含む)

(著書)

- ・川西正志・野川春夫編著改定第4版 生涯スポーツ実践論-生涯スポーツを学ぶ人たちに-12章 スポーツクラブの現状と課題 [3] 全国的な総合型クラブの管理運営組織の現状 執筆担当. pp. 197-202. 2018年4月30日
- ・日本スポーツとジェンダー学会編者「データでみる スポーツとジェンダー」3 生涯スポーツとジェンダー 2) ~4) スポーツ推進委員、(公財)日本体育協会公認スポーツ指導者、健康運動士・健康運動実践指導者、(公財)日本レクリエーション協会公認指導者、コラム2、コラム3執筆担当. 八千代出版株式会社 p. 50, pp. 52-61. 2016年7月2日
- ・大勝志津穂・長谷川望・藤重育子・高間佐知子・小柳津久美子・手嶋慎介・宮本佳範・河合晋「学内外における実践活動を通じた人材育成の可能性」第6章執筆担当 『学生の「力」をのばす大学教育-その試みと葛藤』 愛知東邦大学地域創造研究叢書 No. 22 唯学書房 pp. 52-62. 2014年11月10日
- ・大勝志津穂・長谷川望・藤重育子・高間佐知子・小柳津久美子・手嶋慎介・宮本佳範・河合晋「大学における運動部活動を通じた人材育成-ライフスキル獲得に着目した取り組み」第1章執筆担当 『学生の「力」をのばす大学教育-その試みと葛藤』 愛知東邦大学地域創造研究叢書 No. 22 唯学書房 pp. 3-9 2014年11月10日
- ・山羽教文・長ヶ原誠編著者「ジェロントロジー: 身体活動 身体活動世代論」第5章 5-3 執筆担当 『健康スポーツ学概論-プロモーション、ジェロントロジー、コーチング-』 杏林書院 pp. 180-187 2013年6月20日
- ・川西正志・野川春夫編著者「生涯スポーツとニュースポーツ [4] 地域でのスポーツ振興」第11章執筆担当 『[体育・スポーツ・健康科学テキストブックシリーズ] 改定第3版 生涯スポーツ実践論-生涯スポーツを学ぶ人たちに-』 市村出版 pp. 154-159 2012年10月17日

(学術論文)

- ・大勝志津穂「うるぎトライアル RUN ボランティア参加者の意識調査-期待度と満足度の比較」2018年6月 東邦学誌第47巻第1号: pp. 137-144.
- ・大勝志津穂・來田享子「成人期以降の集団球技系種目実施者における過去の同一種目経験の影響-笹川スポーツ財団「スポーツライフに関する調査2012」データの二次分析を中心に」2017年3月 生涯スポーツ学研究 13 (2): pp43-54. (査読有)
- ・大勝志津穂「マラソンイベント開催による村の地域活性化に関する研究-うるぎトライアル RUN 参加者の支出による検討-」2017年6月 東邦学誌 46 (1): pp. 39-48.
- ・大勝志津穂「うるぎトライアル RUN 完走者の大会評価-大会満足度と自由記述のテキスト分析に

よる検討-」2017年12月 東邦学誌 46 (2) : pp.177-186.

- ・大勝志津穂「運動・スポーツ種目の実施率の男女差について-実施率の時系列変化に着目して-」2015年3月 スポーツとジェンダー研究 13 : pp. 56-65. (査読有)
- ・大勝志津穂「平成26年度スポーツライフ・データ2014 (SSF 笹川スポーツ財団) -運動・スポーツ実施レベル別の実施状況-」2015年9月 体育の科学第65巻第9号
- ・中山孝男・手嶋慎介・大勝志津穂・正岡元・小柳津久美子「2012年度共同研究:(研究課題)「iPod touch/iPadを利用した教育手法の開発と研究」活動成果報告」2014年12月 東邦学誌第43号第2号 : pp.127-139 (共著:執筆担当 pp.130-131).
- ・大勝志津穂「愛知県における成人女性サッカー選手のスポーツ経験種目に関する研究」2014年3月 スポーツとジェンダー研究 12 : pp. 31-46. (査読有)
- ・大勝志津穂「プロジェクト実施活動を通じた人材育成の可能性-フットサルイベントの企画・運営の取り組み事例から」2013年12月 東邦学誌第42巻第2号 : pp. 173-181.
- ・大勝志津穂「愛知県における社会人女子サッカー選手の活動環境に関する検討」2013年3月 スポーツとジェンダー研究 11 : pp. 43-56. (査読有)
- ・大勝志津穂「部活動における地域の人材活用方法:名古屋市の部活動外部指導者の取り組みについて」2011年6月 東邦学誌 40 巻第1号 : pp. 35-46.

(学会発表)

- ・大勝志津穂・武長理栄「学校運動部活動の種目別活動実態と生徒の希望活動状況-12~21歳のスポーツライフに関する調査2017の2次分析-」2018年8月 日本体育学会第69回大会
- ・大勝志津穂・高峰修・伊東佳那子・建石真公子・田原淳子・藤山新・松宮智生・來田享子「性的マイノリティの人権に配慮したスポーツ指導環境の構築にむけた調査報告(1)」2018年7月 日本スポーツとジェンダー学会 第17回大会
- ・大勝志津穂・來田享子「現在のスポーツ実施種目に影響する要因-過去のスポーツ経験に着目して-」2016年8月 日本体育学会第67回大会
- ・大勝志津穂・來田享子「女性のサッカー人口増加の背景を探る」2015年8月 日本体育学会第66回大会
- ・大勝志津穂・來田享子「成人男女の実施種目とスポーツ活動歴との関係-スポーツライフ・データ2012の二次分析より-」2014年8月 日本体育学会第65回大会
- ・大勝志津穂「運動・スポーツ種目の実施率の男女差について-実施率の時系列変化に着目して」2014年6月 日本スポーツとジェンダー学会第13回大会
- ・大勝志津穂・來田享子「愛知県における現役社会人女子サッカー選手のスポーツ経験に関する研究」2013年8月 日本体育学会第64回大会
- ・大勝志津穂「女性の生涯スポーツプロモーション-競技系種目について」2012年12月 東海体育学会シンポジウム
- ・大勝志津穂・來田享子「愛知県における現役社会人女子サッカー選手の活動環境に関する検討:地域における生涯スポーツとしての女子サッカーの展望」2012年8月 日本体育学会第63回大会

(その他)

- ・大勝志津穂・來田享子「中央競技団体が取り組む女性のスポーツ振興戦略に関する基礎的研究」2019年3月. 中京大学体育研究所紀要.
- ・大勝志津穂「誰と運動やスポーツを実施しているのか?」2019年3月. スポーツライフ・デー

タ 2018-スポーツライフに関する調査報告書.

- ・大勝志津穂「スポーツ指導に必要な LGBT の人々への配慮に関する調査研究-第 2 報-スポーツ団体のジェンダー課題等への取り組みについて」2019 年 3 月. 日本体育協会スポーツ医・科学研究報告.
- ・大勝志津穂「スポーツ指導に必要な LGBT の人々への配慮に関する調査研究-第 1 報-第 7 章「日体協指導者資格保有者の経験と課題～「スポーツ指導者に求められる指導上の配慮に関する調査について」～」7-1 調査概要及び単純集計結果. 2018 年 3 月. 日本体育協会スポーツ医・科学研究報告 I.
- ・大勝志津穂「中学校・高等学校の学校運動部活動の活動実態：種目別による比較」2017 年 12 月. 子ども・青少年のスポーツライフ・データ 2017-調査報告書：pp. 43-48.
- ・大勝志津穂「現在の実施種目からみる過去のスポーツ経験と今度の希望」2016 年 12 月. スポーツライフ・データ 2016-スポーツライフに関する調査報告書：pp30-34.
- ・大勝志津穂・来田享子「現在のスポーツ実施種目に影響する要因-過去のスポーツ経験に着目して-」2016 年 8 月. 日本体育学会第 67 回大会体育社会学専門領域発表論文集 24 号：pp. 72-77.
- ・大勝志津穂「子どもの運動・スポーツ実施とジェンダー～高頻度（週 7 回以上）実施者の特徴～」2015 年 12 月 青少年のスポーツライフ・データ 2015-10 代のスポーツライフに関する調査報告書：pp22-27.
- ・大勝志津穂・来田享子「女性のサッカー人口増加の背景を探る」2015 年 8 月 日本体育学会第 66 回大会体育社会学専門領域発表論文集 23 号：pp. 147-152.
- ・大勝志津穂・来田享子「成人男女の実施種目とスポーツ活動歴との関係-スポーツライフ・データ 2012 の二次分析より-」2014 年 8 月 日本体育学会第 65 回大会体育社会学専門領域発表論文集 22 号：pp. 24-29.
- ・大勝志津穂・来田享子「愛知県における現役社会人女子サッカー選手のスポーツ経験に関する研究」2013 年 8 月 日本体育学会第 64 回大会体育社会学専門領域発表論文集第 21 号：pp. 135-140.
- ・大勝志津穂・来田享子「愛知県における現役社会人女子サッカー選手の活動環境に関する検討：地域における生涯スポーツとしての女子サッカーの展望」2012 年 8 月 日本体育学会第 63 回大会体育社会学専門領域発表論文集第 20 号：pp. 186-191.

○科学研究費補助金等への申請状況、交付状況（学内外）

- ・科学研究費助成 平成 30 年度（2018 年度）基盤研究（C）「スポーツ競技団体におけるジェンダー平等を実現するための取り組みに関する研究」申請
- ・科学研究費助成 平成 29 年度（2017 年度）基盤研究（C）「スポーツにおける社会的弱者に対する中央競技団体が取り組む戦略に関する研究」申請 不採用
- ・2017 年度笹川スポーツ研究助成「大学資源を活用した地域スポーツクラブ設立に向けた実証研究-子ども達のスポーツ・プラットフォームづくりについて-」申請 不採用
- ・科学研究費助成 平成 28 年度（2016 年度）基盤研究（C）「体力・運動能力の二極化現象に影響する「子どもの貧困」に関する研究」申請 不採用
- ・科学研究費助成 平成 27 年度（2015 年度）若手研究（B）「スポーツにおける「ジェンダー平等推進と女性の地位向上」に向けた支援方策について」申請 不採用
- ・科学研究費助成 平成 26 年度（2014 年度）若手研究（B）「生涯スポーツ社会のあり方を検討す

るための“草サッカー”の実態調査に関する研究」申請 不採用

- ・科学研究費助成 平成 25 年度（2013 年度）若手研究（B）「競技団体が牽引する女性の生涯スポーツプロモーションに関する研究」申請 不採用
- ・公益財団法人ヤマハ発動機スポーツ振興財団スポーツチャレンジ研究助成（2013 年度）「競技団体が行う女性の生涯スポーツプロモーションに関する研究」申請 不採用

○所属学会

日本体育学会体育社会学専門分科会、日本生涯スポーツ学会、日本スポーツ社会学会、日本スポーツとジェンダー学会、イベント学会

○自己評価

口頭発表を 2 回実施することができたことは評価できる。また、博士論文を 12 月に提出できたことは、これまでの研究成果として評価できる。

Ⅲ 大学運営

○目標・計画

（目標）

学生委員として、強化指定クラブやクラブの本学での位置付けを明確にする。スポーツ音楽奨学生について、入り口から出口までのあり方を考える。奨学金制度の見直し。

経営学部執行部として、経営学部の特色の出し方を検討しながら、各コースの魅力・打ち出し方を検討する。また、経営学部の学生確保の方策（特に女子学生）を検討する。

（計画）

本学における強化指定クラブ、クラブの位置付けを明確にするとともに、支援のあり方を検討する。「スポーツ」に関わる資源をどのように活用するのか、施設開放、人材派遣、知識提供など様々な関わり方ができるはずである。日本の大学スポーツのあり方の変化を見ながら、本学が取り組める方法を検討する。奨学金制度として、入り口のスポーツ音楽奨学生だけでなく、学業での奨学生、入学後の活躍による奨学生制度など新たな奨学金制度を検討し、学生がより積極的に学業や課題活動に取り組めるようにする。

○学内委員等

経営学部執行部、学生委員会委員、女子サッカー部顧問（監督、強化指定クラブ）

○自己評価

経営学部執行部として、会議の議題書、資料、議事録の作成を実施した。また、新規教員採用の業務、2020 年に向けた新カリキュラムのあり方、経営学部の進むべき方向性などについて執行部と議論できた。学生委員としては、学生会の支援を行なった。毎月、学生会メンバーと話し合いの時間を持ち、大学祭のあり方やその他のイベントについて議論することができた。

Ⅳ 社会貢献

○目標・計画

（目標）

名東区体育協会との連携事業の推進。幼児・小学生・中学生へのスポーツ環境の提供。2018 年度東海体育学会本学開催。

（計画）

本学が持つスポーツに関わる資源の有効活用を目指し、名東区、名東区体育協会、愛知県サッカー協会、東尾張サッカー協会との連携を強化する。愛知県サッカー協会と連携して、小学生から中学生にサッカーの環境を提供する。今年度10月、本学で東海体育学会を開催する。

○学会活動等

日本スポーツとジェンダー学会幹事、日本スポーツとジェンダー学会編集委員、笹川スポーツ財団研究員、中京大学体育研究所所員、愛知東邦大学地域創造研究所所員、愛知県サッカー協会女子委員会総務委員

○地域連携・社会貢献等

- ・ 東海女子サッカーリーグ運営委員長として、東海女子サッカーリーグの運営を行った。
- ・ 愛知県サッカー協会総務委員として、協会主催のフェスティバルの管理運営業務を行なった。
- ・ 東海体育学会実行委員会において事務局長を務め、無事に大会を開催した。
- ・ 新川大学講座 学問の楽しさを知ろう「スポーツを取り巻く社会環境について」講師（2018年10月25日）
- ・ 第5回野球教室 企画・運営（2018年7月14日）
- ・ 第6回トーくん・ホーちゃん杯争奪ドッジボール大会 企画・運営（2018年7月29日）
- ・ 名古屋グランパス連携企画 第5回ガールズサッカーフェスティバル開催（2018年8月18日）
- ・ 第3回うるぎトライアルRUN 運営ボランティア（2018年10月6日、7日）
- ・ 第6回TOHO少年サッカー大会-8人制- 企画・運営（2019年1月20日）
- ・ 愛知県サッカー協会女子委員会、東尾張サッカー協会との連携事業 小学生女子のサッカースクール企画・運営（年間12回開催）

○自己評価

女子サッカーの普及事業が定着してきた。2018年度から中学生のクラブチームも発足し、本学を中心に小学生から大学生までの女子サッカーの環境が整いつつある。少しずつこの活動を広げ、定着させていきたい。また、演習活動を中心にスポーツイベントも継続して実施できた。特に、ドッジボール大会については、300名近い参加者を集めており、大学周辺の小学生たちに試合経験のできる場を提供できている。

V その他の特記事項（学外研究、受賞歴、国際学術交流、自己研鑽等）

- ・ 学位取得に向けた準備
- ・ 笹川スポーツ財団研究員として全国調査に関わる
- ・ 日本スポーツ協会スポーツ医・科学研究受託研究

VI 総括

2018年度は経営学部執行部として、学部のあり方を考える機会が多くあった。2020年度以降の経営学部の方向性について、2019年度も引き続き議論し、魅力ある学部になるように努力したい。私自身の授業は、受講生が比較的少ないので、学生がより能動的、学生同士が考えられるような授業展開を考えたい。研究については、ようやく博士論文を仕上げ提出するところまでたどり着いた。2019年度中に修正等を行い、完成させて博士号を取得する。一方、博士論文にかける時間が多かったため、今年度は査読付き論文に投稿することができなかった。しかし、口頭発表を2回、研究に関する報告書を3つ書くことができたので一定の評価はできる。

以

所属学部 学科	職位	氏 名
経営学部 地域ビジネス学科	准教授	手嶋 慎介
最終学歴	学 位	専門分野
愛知学院大学大学院経営学研究科博士後期課程 単位取得満期退学	修士 (経営学)	経営学

I 教育活動

○目標・計画

(目標)

キャリアデザインに関する知識を身につけ、ビジネス社会で通用する実践力・オンリーワンの特長を有し、地域で活躍できる職業人を養成する。

(計画)

学生のキャリアデザイン・ビジネス実務能力育成に結びつくような、受講学生に適した授業法・学習法、教材を検討し作成する。

○担当科目 (前期・後期)

(前期) インターンシップ事前事後指導、インターンシップ、ビジネス実務総論、キャリア基礎 I A、
専門プロジェクト I、東邦プロジェクトD、総合演習 I

(後期) キャリアデザイン、ビジネス実務演習、キャリア基礎 I A、総合演習 II

○教育方法の実践

プレゼンテーション交流授業として観光振興をテーマとする椋山女学園大学ゼミと合同ゼミ (総合演習 I) を実施、(株) マイナビ主催「キャリアインカレ 2018」への参加を通して課題発見・解決型学習を行うなど、理論と実践の反復に向けた学習機会の構築に努めた。

○作成した教科書・教材

社会人になる前に身に付けたい、社会人になってからも役に立つことをねらいとした共著書『よくわかる社会人の基礎知識』(ぎょうせい、2019年3月)において、「これからのキャリア形成と就業意識」について執筆した。2019年度より教科書として活用する予定である。

○自己評価

「ビジネス実務演習」「総合演習 I」「総合演習 II」を中心に、協同学習など「アクティブ・ラーニング」の授業を展開、学生のキャリアデザインを主体的に考えさせる教育活動を行うことができ、当初の目標・計画については、おおむね達成することができたといえる。

II 研究活動

○研究課題

地域・産学連携を通じたビジネス系専門教育に資する PBL 等に関する実践研究

○目標・計画

(目標)

経営学・キャリア教育分野に貢献することを目指して、PBL やインターンシップ等の実践的教育に関する理論的・実証的研究や、新しい学習・教育手法の導入のための授業実践を通して研究課題に接近する。

(計画)

本年度は、これまで取り組んできた PBL やインターンシップ等に関する研究を日本ビジネス実務学会等で発表する。なお、研究成果については、学術書等として公刊するなど、広く社会に情報発信する。

○2011 年 4 月から 2019 年 3 月の研究業績 (特許等を含む)

(著書)

- ・愛知東邦大学地域創造研究所編、大勝志津穂、梶山亮子、手嶋慎介、加納輝尚、山本恭子、上野真由美、船木恵一、深谷和広、阿比留大吉、河合晋、水野英雄、奥村実樹、若月博延『地域が求める人材』唯学書房、2019 年 3 月
- ・岡野絹枝、清水たま子編、手嶋慎介、平田祐子、吉田智美、中原亜紀美、若生眞理子、朱宮裕子、岡野大輔、西川三恵子、高宮貴代美、河合晋『よくわかる社会人の基礎知識〜マナー・文書・仕事のキホン〜』ぎょうせい、2019 年 3 月
- ・吉沢正広編著、明山健師、井上善美、関谷次博、手嶋慎介、鳥居陽介、山内昌斗、山縣宏寿、吉沢壮二郎『実学 企業とマネジメント』学文社、2018 年 3 月
- ・折戸晴雄、根木良友、山口圭介編著、日本インターンシップ学会東日本支部監修、手嶋慎介 (分担執筆、他 34 名)『インターンシップ実践ガイドー大学と企業の連携ー』玉川大学出版部、2017 年 3 月
- ・古閑博美編著、中村真典、手嶋慎介、牛山佳菜代、Morgen Chaudeler、須藤功、椿明美、関由佳利『インターンシップ<第二版>ーキャリア形成に資する就業体験』学文社、2015 年 3 月
- ・平野文彦編著、手嶋慎介 第 V 部「人と仕事」をマネジメントする」3.「社会的企業を基盤とした人材育成モデルの検討ー短期インターンシップの実施体制に関する実態調査を中心にー」(分担執筆、他 26 名)『経営者育成の経営学ー脈打つ Goodwill を基盤としたダイナミズム』櫻門書房、2015 年 3 月
- ・吉沢正広編著、井上善美、関谷次博、手嶋慎介、鳥居陽介、平尾毅、藤田順也、祝田学、山内昌斗、山縣宏寿『やさしく学ぶ経営学』学文社、2015 年 3 月
- ・愛知東邦大学地域創造研究所編、大勝志津穂、長谷川望、藤重育子、高間佐知子、小柳津久美子、手嶋慎介、宮本佳範、加納輝尚、河合晋『学生の「力」をのばす大学教育ーその試みと葛藤』唯学書房、2014 年 11 月
- ・愛知東邦大学地域創造研究所編、宗貞秀紀、堀篤実、吉村譲、肥田幸子、宮本佳範、手嶋慎介、松村幸四郎『人が人らしく生きるためにー人権について考える』唯学書房、2013 年 7 月
- ・全国大学実務教育協会編、池内健治監修、鈴木浩子、高橋修、坪井明彦、手嶋慎介『接客のプロを目指す人のためのサービス実務入門』日経 BP 社、2013 年 3 月
- ・古閑博美編著、中村真典、手嶋慎介、牛山佳菜代、Morgen Chaudeler、須藤功、椿明美、関由佳利『インターンシップーキャリア教育としての就業体験』学文社、2011 年 4 月

(学術論文)

- ・米本倉基、大重康雄、坂本理郎、高橋眞知子、手嶋慎介「学会員ニーズ調査に基づくチーム研究の在り方検討ー学会ワーキング・プロジェクトからの報告ー」『ビジネス実務論集』No. 37、2019 年 3 月
- ・手嶋慎介、梶山亮子「地方公務員を目指す学生の内的キャリア形成についての一考察ー公務員試験対策プログラム受講者へのアンケート調査をもとにー」『東邦学誌』第 47 巻、第 1 号、2018 年

6月、pp. 111-135

- ・手嶋慎介「産学連携 PBL の実践事例の検討ー寄付型自販機設置プロジェクトを中心にー」愛知学院大学論叢『経営学研究』第 25 巻第 1・2 合併号、2016 年 2 月、pp. 1-12
- ・手嶋慎介「地域連携 PBL の試行的実施の成果と課題ー名古屋市名東区を舞台としたゼミ活動における就業力育成ー (2)」『東邦学誌』第 43 巻、第 1 号、2014 年 6 月、pp. 47-56
- ・岡野大輔、加納輝尚、河合晋、手嶋慎介「就業力育成を目的とした取組事例の比較検討ー就業力育成融合モデルの構築に向けてー」『金城紀要』第 38 巻、2014 年 3 月、pp. 51-61
- ・加納輝尚、岡野大輔、河合晋、手嶋慎介「ジェネリックスキル育成の観点からみたインターンシップの取組に関するー考察ー中部・北陸地区の高等教育機関におけるインターンシップ及び PBL の取組事例の比較を通してー」『富山短期大学紀要』第 49 巻、2014 年 3 月、pp. 87-102
- ・河合晋、町田由徳、手嶋慎介、岡野大輔、加納輝尚「現代ビジネス学科における PBL の取組みに関する課題について」『学術教育総合研究所所報』第 7 号、2014 年 3 月、pp. 11-24
- ・手嶋慎介「地域連携 PBL の試行的実施の成果と課題ー名古屋市名東区を舞台としたゼミ活動における就業力育成ー (1)」『東邦学誌』第 42 巻、第 2 号、2013 年 12 月、pp. 31-43
- ・手嶋慎介「大学におけるインターンシップの再検討ー質保証と学生支援の充実に関する考察を中心にー (2・完)」『東邦学誌』第 40 巻 第 2 号、2011 年 12 月、pp. 29-39

(学会発表)

- ・手嶋慎介、奥村実樹、加納輝尚、河合晋、黒野伸子、堂野崎融、西川三恵子、信川景子、若月博延 (中部ブロック研究会共同研究者)『JAUCB 受託研究成果報告』2018 年度日本ビジネス実務学会中部ブロック研究会・近畿ブロック研究会合同研究会、新大阪丸ビル別館、2019 年 2 月
- ・手嶋慎介、阿比留大吉、葛岡亮哉『教育寮における起業家育成の可能性ー自主運営寮「TOHO Learning House」の事例をもとにー』関西ベンチャー学会第 3 回中部経済研究部会・第 22 回九州研究部会合同研究会、岡崎・セントラルホテル、2018 年 6 月
- ・加納輝尚、山本恭子、上野真由美、手嶋慎介『地域・産業界との協働をめざすプレゼンテーション教育の可能性ープレゼンテーション基礎教育に基づく取組事例ー』日本ビジネス実務学会第 37 回全国大会、徳島文理大学、2018 年 6 月
- ・山本恭子、上野真由美、加納輝尚、手嶋慎介『ビジネス実務におけるプレゼンテーション教育・学習法の再検討ー他者評価を重視したプレゼンテーション取り組み事例ー』平成 29 年度日本ビジネス実務学会中部ブロック研究会、岡崎女子大学・岡崎女子短期大学、2018 年 1 月
- ・梶山亮子、手嶋慎介『地方公務員を目指す学生の内的キャリア形成支援について』日本ビジネス実務学会第 36 回全国大会、神戸大学、2017 年 6 月
- ・手嶋慎介『職業実践力育成プログラムの開発ー就業力育成教育プログラムからのアプローチー』日本ビジネス実務学会第 35 回全国大会、金城大学・金城大学短期大学部、2016 年 6 月
- ・手嶋慎介『地域活性化のための産学連携事例研究ーNPO 法人寄付型自販機推進機構プロジェクトを中心にー』関西ベンチャー学会中部経済研究部会、岡崎・セントラルホテル、2015 年 10 月
- ・手嶋慎介『ソーシャルビジネスとしての PBL の限界と可能性ー寄付型自販機設置プロジェクトにおける失敗点に着目してー』日本ビジネス実務学会第 34 回全国大会、鹿児島女子短期大学、2015 年 6 月 (日本ビジネス実務学会奨励賞「発表の部」受賞)
- ・手嶋慎介、井上奈美子、奥村実樹、加納輝尚、河合晋、和田早代『2013 年度 JAUCB 助成研究報告「学生の学びを深める学習法の研究ーサービス実務における学習法」』日本ビジネス実務学会第

33 回全国大会、札幌国際大学、2014 年 6 月

- ・坪井明彦、鈴木浩子、手嶋慎介、高橋修『2012 年度 JAUCB 助成研究報告「サービス実務入門テキスト作成」』日本ビジネス実務学会第 32 回全国大会、福島学院大学、2013 年 6 月
- ・手嶋慎介、岡野大輔、加納輝尚、河合晋『「地域活性化 PBL」を通じたジェネリックスキル育成ー「チーム活動」から「個の主体的活動」への展開と意図せざる育成効果ー』、日本ビジネス実務学会第 32 回全国大会、福島学院大学、2013 年 6 月
- ・手嶋慎介、岡野大輔、加納輝尚、河合晋、野添雅義『四大と短大の就業力育成融合モデルの検討』平成 24 年度日本ビジネス実務学会中部ブロック研究会、名古屋経営短期大学、2013 年 1 月
- ・手嶋慎介『地域連携 PBL を通じた「しごと能力」育成の可能性ー地域におけるプロジェクト実践事例の分析を中心にー』しごと能力研究学会第 5 回全国大会、愛知学院大学・楠元キャンパス、2012 年 10 月
- ・手嶋慎介『地域連携による短期インターンシップの実施体制の現状と課題ー大学と社会的企業の連携事例の比較調査を中心にー』日本インターンシップ学会第 13 回大会、玉川大学、2012 年 9 月
- ・手嶋慎介、小柳津久美子『「伸び代のある学生」のための多様なインターンシッププログラム実践の成果と課題』平成 23 年度日本ビジネス実務学会中部ブロック研究会、岡崎女子短期大学、2012 年 1 月

(その他)

- ・パネルディスカッション『ビジネス実務におけるプレゼンテーション教育・学習法の再検討ー企業／起業と商業教育の視点からー』コーディネーター、平成 29 年度日本ビジネス実務学会中部ブロック研究会、岡崎女子大学・岡崎女子短期大学、2018 年 1 月
- ・特色ある取組事例『産学連携による人材育成ー愛知東邦大学×(株)名古屋グランパスエイトの取組を中心にー』コーディネーター、平成 28 年度日本ビジネス実務学会中部ブロック研究会、中部学院大学、2017 年 1 月
- ・手嶋慎介『企業が求める人材 大学で育成できるか』愛知人事問題研究会 講演、愛知学院大学・栄サテライトキャンパス、2015 年 9 月
- ・手嶋慎介『地域をフィールドとしたゼミ／プロジェクト活動に関する考察』愛知東邦大学地域創造研究所第 45 回定例研究会、愛知東邦大学、2015 年 6 月
- ・正岡元、手嶋慎介、大勝志津穂、寺島雅隆、小柳津久美子、成田良一「2013 年度共同研究：(研究課題)「大学におけるスマートフォン・タブレット端末の活用手法の研究と開発」活動成果報告」『東邦学誌』第 44 巻、第 1 号、2015 年 6 月、pp.179-192
- ・愛知県教育委員会及び愛知県産業労働部 共同事業「キャリア教育コーディネート人材育成事業」愛知県地域人づくり事業インターンシッププログラム『がっちりガチ系インターンシップへのりかべプロジェクト～成果報告会』コメンテーター、NPO 法人アスクネット主催、愛知県産業労働センターウインクあいち 1204 会議室、2015 年 3 月 28 日
- ・手嶋慎介、井上奈美子、奥村実樹、加納輝尚、河合晋、和田早代『2013 年度 JAUCB 受託研究報告書「学生の学びを深める学習法の研究ーサービス実務における学習法」』一般財団法人 全国大学実務教育協会 公式 Web ページ (<http://www.jaucb.gr.jp/news/index.php?mode=view&id=115>)、2015 年 3 月 2 日
- ・中山孝男・手嶋慎介、大勝志津穂、正岡元、小柳津久美子「2012 年度共同研究：(研究課題)「iPod

touch/iPad を利用した教育手法の開発と研究」活動成果報告書『東邦学誌』第 43 巻、第 2 号、2014 年 12 月、pp. 127-139

- ・手嶋慎介、奥村実樹、加納輝尚、河合晋『モーニングワークショップ テキスト「サービス実務入門」の授業への導入スキル』平成 25 年度日本ビジネス実務学会中部ブロック研究会、IT ビジネスプラザ武蔵、2014 年 1 月
- ・手嶋慎介『「専門演習」と「総合演習」における PBL 実践の比較検討』全学 FD 研究会、愛知東邦大学、2013 年 8 月
- ・手嶋慎介「企業が求める人材 大学で育成できるか」『中部経済新聞「オピニオン AGORA」』中部経済新聞朝刊、2013 年 5 月
- ・シンポジウム『就業力育成に向けたビジネス実務教育における取組み事例』シンポジスト、日本ビジネス実務学会第 31 回全国大会、広島女学院大学、2012 年 6 月
- ・パネルディスカッション『愛知東邦大学型 PBL の模索～地域と関わることの意味～』パネリスト、「文部科学省平成 22 年度「大学生の就業力育成支援事業」採択プログラム 地域連携 PBL 推進シンポジウム」名古屋ガーデンパレス、2012 年 2 月

○科学研究費補助金等への申請状況、交付状況（学内外）

- ・平成 30 年度（2018 年度） 基盤研究（C）（一般）（研究代表者）不採択
- ・愛知東邦大学地域創造研究所 2018 年度共同研究助成（人材育成研究部会・主査）採択
- ・愛知東邦大学地域創造研究所 2019 年度共同研究助成（人材育成研究部会・主査）申請中

○所属学会

関西ベンチャー学会、経営行動科学学会、組織学会、日本インターンシップ学会、日本経営学会、日本賃金学会、日本ビジネス実務学会、日本労務学会

○自己評価

本年度は、著書 2・学術論文 2・学会発表 3 に加え、地域創造研究所共同研究を主査として新たにスタートさせるなど、研究の基盤整備に注力することができた。当初の目標は概ね達成することができた。

III 大学運営

○目標・計画

（目標）

全学委員会（キャリア支援）、特別委員会（産学連携推進、地域創造研究所運営）および地域創造研究所諸活動に積極的に関与するとともに、経営学部執行部として学部・学科の充実を図り、大学運営に貢献する。

（計画）

キャリア支援に関しては正課のキャリア科目の改善、就職合宿等の学内行事の活発化を通して充実させる。地域創造研究所の運営（新規には大学間連携共同研究）を通して研究機関として大学の基盤整備に努めるとともに、経営学部執行部として学部の特色づくりに取り組む。

○学内委員等

経営学部執行部、地域創造研究所運営委員会委員、産学連携推進委員会委員、キャリア支援委員会委員

○自己評価

就職合宿に関連の深いキャリア支援科目運用に関する検討、産学連携による『専門プロジェクト I』の企画と実施、職業実践力育成プログラム実施、研究所叢書編集発行・シンポジウム運営をはじめ大学広報に繋がる教育研究活動充実に貢献した。当初の目標は概ね達成することができた。

IV 社会貢献

○目標・計画

(目標)

地域企業等との関係を深め、所属する学会・NPO 活動等に積極的に関与し、若年者育成事業等に貢献する。

(計画)

地域連携 PBL 等に関連した地域活動や、愛知中小企業家同友会主催のインターンシップ事業に参画する。学会・NPO の役員としてネットワーク形成に努める。

○学会活動等

日本インターンシップ学会東日本支部運営委員 2015 年 7 月～現在に至る

日本ビジネス実務学会理事 2017 年 6 月～現在に至る

日本ビジネス実務学会中部ブロック研究会運営委員会リーダー 2015 年 6 月～現在に至る

○地域連携・社会貢献等

特定非営利活動法人 寄付型自販機推進機構 副理事長 2013 年 12 月～現在に至る

○自己評価

担当科目でもあるインターンシップに関連し、愛知中小企業家同友会のインターンシップ事業へ参画するなど、地域の若年者育成に貢献することができた。日本ビジネス実務学会では、編集委員・研究推進委員として学会運営に貢献することができた。

V その他の特記事項（学外研究、受賞歴、国際学術交流、自己研鑽等）

2016 年 4 月より「職業能力開発促進法」に規定された「キャリアコンサルタント（国家資格）」名簿に登録しており、その活動基盤を探索した。

VI 総括

教育と研究はバランスよく取り組み、当初の目標は概ね達成することができた。大学運営は、キャリア支援科目担当者として現状の問題点の整理や新たなカリキュラム構築のための検討を行った。キャリア支援科目の新たなカリキュラムが本格化する 2019 年度も、引き続き貢献できるよう取り組む所存である。社会貢献は教育と関連して行うことをめざし、教育・研究・大学運営を三位一体と考え社会貢献につながるよう、行政・NPO・企業との連携構築を継続して進めることができた。今後さらなる充実をはかりたい。

以 上

所属学部 学科	職位	氏 名
経営学部 地域ビジネス学科	准教授	宮本 佳範
最終学歴	学 位	専門分野
名古屋市立大学大学院人間文化研究科 博士後期課程修了	博士 (人間文化)	社会学

I 教育活動

○目標・計画

(目標)

観光に関する専門知識を教授するだけでなく、観光を題材として幅広く社会で活かすことができるスキルを持った人材を育成することを目標とする。

(計画)

ゼミはもちろん、講義科目であってもパソコンでの調べ学習、グループワーク、発表を取り入れたアクティブ・ラーニングを進めていく。

○担当科目（前期・後期）

（前期）観光・サービス概論、国内観光地理、地域観光論、総合演習Ⅰ、専門演習Ⅰ、専門演習Ⅲ

（後期）観光・サービス基礎、海外観光地理、現代観光論、レジャー産業論、東南アジアの文化と社会、総合演習Ⅱ、専門演習Ⅱ、専門演習Ⅳ

○教育方法の実践

講義科目では、その日の講義内容をまとめる作業を重視し、文章を書く力をつける取り組みを行った。また、レジャー産業論、地域観光論、現代観光論、国内観光地理、海外観光地理、東南アジアの文化と社会では、学生による発表を取り入れた講義を行った。

2年のゼミでは「産学連携スタディーツアー企画プロジェクト」として、旅行会社の方のアドバイスを受けつつ海外スタディーツアーを企画し、学内で海外研修（2単位）として実際に参加者を募集するというプロジェクトを行った。また、3年のゼミでは、『海外卒業旅行 企画コンテスト 2017』（日本旅行業協会主催）や『あいち学生観光まちづくりアワード』に向けて取り組んだ。

○作成した教科書・教材

観光・サービスコースの基礎的な科目（観光・サービス基礎、観光・サービス概論）では、穴埋め形式のプリント教材などを作成した。

○自己評価

講義科目では、学生による発表を取り入れたことで学生の主体性、集中力を高めることができた。産学連携スタディーツアー企画プロジェクトや、海外卒業旅行企画コンテストなどへチャレンジすることで、チームで話し合いながら作業する経験や学生の主体的な活動を推進することができた。総合的に、当初の目標をおおむね達成することができた。

II 研究活動

○研究課題

持続可能な観光の実現に向けた観光システムおよび観光者の行為の問題等に関する研究

○目標・計画

(目標)

これまで、科研費を得て、観光者の倫理・責任、行為の問題などについて、主にアジアにおけるエスニック・ツーリズムおよび自然観光の現場を事例として研究してきた。科研費が切れた今年度は、今後の科研費獲得に向けて、観光者の行為の問題および持続可能な観光の実現に向けた観光システム等に関する新たな研究対象地域を探し、オリジナリティのある研究の方向性を見出すことを目標とする。

(計画)

昨年までのベトナムのサパでの研究を継続し、その調査結果を論文として発表する。さらに、上記目標を達するために、これまでの研究対象としてきた地域とは異なる地域の視察を行う計画である。

○2011年4月から2019年3月の研究業績（特許等を含む）

(著書)

- ・宮本佳範「第10章 地域と連携した活動の現実的課題—名東区魅力マップ作りに取り組んで—」愛知東邦大学地域創造研究所編『学生の「力」をのばす大学教育——その試みと葛藤 地域創造研究叢書 No. 22』唯学書房、2014年11月。
- ・宮本佳範「第5章 観光に関わる人権問題」愛知東邦大学地域創造研究所編『人が人らしく生きるために—人権について考える 地域創造研究叢書 No. 20』唯学書房、2013年7月。

(学術論文)

- ・宮本佳範「観光者管理と観光者倫理—ブータンの事例から—」『東邦学誌』第47巻第2号、pp. 1-13、2018年。
- ・宮本佳範「グローバル化するツアー登山の問題と観光者のリテラシー：ベトナムのファンシーパン登山を事例に」『日本山岳文化学会論集』第15号、pp. 91-101、2017年。（査読有）
- ・宮本佳範「ツアー登山問題に関する論点の批判的考察：アクセシビリティとツアー登山者の倫理」『日本山岳文化学会論集』第14号、pp. 67-75、2016年。（査読あり）
- ・宮本佳範「観光倫理研究の課題と展望」『観光学評論』第4巻第2号、pp. 135-148、2016年。（査読有）
- ・宮本佳範「ミャンマーの少数民族観光に関する考察」『東邦学誌』第43巻第1号、pp. 9-25、2014年。
- ・宮本佳範「少数民族観光に関わる人権問題と観光倫理—タイ・ラオス・ベトナムの事例から—」『東邦学誌』第41巻第2号、pp. 85-99、2012年。
- ・宮本佳範・大塚奈美「ルーマニア北西部における伝統的生活文化観光の現状と課題：観光対象へのアクセシビリティとオーセンティシティ」『東邦学誌』第41巻第1号、pp. 29-45、2012年
- ・宮本佳範「観光対象として“持続すべき文化”に関する考察—持続可能なエスニック・ツーリズムへの視点—」『東邦学誌』第40巻第1号、pp. 19-33、2011年。

○科学研究費補助金等への申請状況、交付状況（学内外）

- ・宮本佳範（研究代表者）平成26年度 科学研究費補助金（基盤研究（C））採択：研究課題名「持続可能な観光の実現に寄与する観光倫理の構築に向けた研究」（課題番号：26360080）【最終年度】

○所属学会

観光学術学会、日本山岳文化学会

○自己評価

本年度は、一昨年のブータンでの調査の結果を論文としてまとめ、東邦学誌で発表することができた。また、これまで行ってきたアジアから脱し、研究領域を広げるためにメキシコやキューバの視察を行った（私費）。それ自体で研究成果につながるものではないが、その経験は今後活かすことができると考える。全体として、当初の計画に沿った研究を行うことができた。

III 大学運営

○目標・計画

（目標）

委員会活動やその他各種会議等を通じて大学運営に貢献する。

（計画）

配属された委員会（入試委員会、学生寮運営委員会）で、その職責を果たす。

○学内委員等

学生寮運営委員会委員長、入試委員会委員

○自己評価

入試委員会委員としては、来年度以降の入試の方式に関する検討や入試の円滑な実施に貢献をすることができた。学生寮運営委員会委員長としては、学生寮に関わるのは初めてながら、大きな問題も生じることなく、その職責を果たすことができた。今後は、より良くしていくために、より積極的なかわり方を模索していきたい。

IV 社会貢献

○目標・計画

（目標）

高校への出張講義等で高大連携に貢献する。学生と社会をつなげることを目標とする。また、本学に限らず、関係する大学の学生・教職員の学びやすい環境づくりに貢献する。

（計画）

産官学連携プロジェクト等に積極的に実施することで、教育と社会貢献を両立させる。インターカレッジコープ愛知の理事としての活動を行う。

○学会活動等

○地域連携・社会貢献等

東邦高校で高大連携授業を行った。ゼミでは、名古屋の旅行会社と連携した「産学連携スタディーツアー企画プロジェクト」を行った。

○自己評価

東邦高校で旅行企画に関する体験型の講義を行い、高大連携に貢献できた。インターカレッジコープ愛知理事長として、本学はもちろん、インカレの他大学の含め、学生および教職員のよりよい大学生活の形成に間接的に貢献できた。また、ゼミで行った産学連携のプロジェクトは教育としての側面のみでなく、地域連携としても評価できる。

V その他の特記事項（学外研究、受賞歴、国際学術交流、自己研鑽等）

VI 総括

研究に関しては、限られた時間のなか、おおむね計画通り実施することができた。学生の教育に関しても、アクティブ・ラーニングを意識し、教育改善に努めることができた。大学運営に関する業務については、委員会等で自らの立場に即した仕事を行うことができた。社会貢献に関しては十分とはいえず、その活動の幅を広げるよう努力していきたい。

以 上

教員 自己評価報告（人間健康学部 人間健康学科）

所属学部 学科	職位	氏 名
人間健康学部 人間健康学科	教授	丸岡 利則
最終学歴	学 位	専門分野
大阪府立大学大学院社会福祉学研究科修士課程修了	修士・ 社会福祉学	社会福祉学

I 教育活動

○目標・計画

（目標）

社会福祉教育については、建学の精神を踏まえながら、現代社会における社会福祉制度や社会保障制度に対する視線変更の可能性を考えることにある。それは、制度がわれわれの生活や人生と密接につながっており、それらの制度設計の変更も含めた将来像が常に問われていることを確認しなければならないからである。そのためには、豊かな人間性を涵養し、福祉分野等で即戦力として活躍しつつ福祉社会の創造的担い手となる専門職業人（オンリーワンの人材）の養成として、「健康づくり指導者コース」の一つの専門領域である「社会福祉」を伝授することを第一の目標とするものである。

（計画）

現代社会における問題（社会的孤立や社会的排除・葛藤などの生活不安や精神的不安定状態による社会関係の不備など）を的確に分析し、問題解決の方策を示していくため、「健康づくり指導者コース」における専門家養成をベースにした「社会福祉概論」をより充実したものにする。そのためには、社会福祉の相談援助に関する基礎知識と技術を教授し、福祉・医療現場で活用できる人材の養成にむけて、社会福祉の基本的学問を備え、理念と原則を根底とした、社会福祉の専門的知識、また、高齢者や障害者に対する福祉サービスに関する専門的知識を教授する。

○担当科目（前期・後期）

（前期）人間学概論、社会福祉概論、総合演習Ⅰ、専門演習Ⅲ

（後期）人間と福祉、社会保障論、総合演習Ⅱ、専門演習Ⅳ、卒業研究

○教育方法の実践

上記のすべての講義科目は、毎回レジュメを配布し学習効果が上がるよう記述を促した。各演習では、学生間のディスカッションを毎回実施して、主体性を引き出す学習ができるようにした。

○作成した教科書・教材

上記のすべての講義科目の教材として教科書以外の参考文献の紹介を記載したレジュメを毎回配布した。各演習については、毎回、レジュメを作成し、資料とともに配布した。

○自己評価

講義科目では、テキストにはない独自のレジュメを配布した。これは、学生が書いて覚えるような形式で作成し、講義を聞きながら、空白を埋めることによって学習効果がもたらされるようにしたので、おおむね目標が達成された。

II 研究活動

○研究課題

社会福祉学の原理研究のなかでも、特に社会福祉の原理研究を標榜する領域であり、メタ・クリティックを根底においた「社会福祉学の知識」の確立を課題とする。

○目標・計画

(目標)

「社会福祉学の知識」に関する研究の目標は、社会福祉学の制度的な系譜学的分析として、1つは「制度」の由来や系譜を分析すること、2つは、学問をめぐる成立条件としての「知識の客観性」を探求することにおくものである。

(計画)

社会福祉の知識としての社会資源論とニーズ論の成果と、さらに対象論を踏まえ、社会福祉理論の系譜学的分析と学問の成立条件を総合し、理論モデルの作成にむけた研究を完成することにある。

○2011年4月から2019年3月の研究業績（特許等を含む）

(学術論文)

- ・丸岡利則「社会福祉学の知識Ⅲ—対象論のメタ・クリティック」東邦学誌（第47巻第2号）2018年12月、頁数：21頁（p79-99）
- ・丸岡利則、丸岡桂子「スクールソーシャルワーク実践の可能性」東邦学誌（第44巻第2号）2015年12月、頁数：22頁（p69-90）
- ・丸岡利則「社会福祉学の知識—理論と現実の境界線」東邦学誌（第44巻第1号）2015年6月、頁数：14頁（p87-100）
- ・丸岡利則、丸岡桂子「児童施設ケアの再構成」東邦学誌（第43巻第2号）2014年12月、頁数：12頁（p39-50）
- ・丸岡利則「社会福祉学の知識」高知県立大学紀要（社会福祉学部編）（第63巻）2014年3月、頁数：20頁（p21-40）
- ・丸岡利則「社会福祉学と二元論」高知県立大学紀要（社会福祉学部編）（第62巻）2013年3月、頁数：16頁（p27-42）
- ・丸岡利則「レジデンシャル・ケアの再構成」高知県立大学紀要（社会福祉学部編）（第61巻）2012年3月、頁数：16頁（p53-60）

○科学研究費補助金等への申請状況、交付状況（学内外）

- ・平成27年度科学研究費助成事業（申請）—採択・共同研究（研究課題番号：24390480）

○所属学会

日本社会福祉学会、大阪府立大学社会福祉学会

○自己評価

研究活動は、社会福祉の学問的な理論についての論文発表のみであった。

III 大学運営

○目標・計画

(目標)

変化する社会ニーズと学部の教育理念および教育目的との整合性を常に検証し、学科会議等にお

いて、さらに整合性をめぐるより適切な学部運営のあり方について検討する。本学部および専攻の目的の適切性についての定期的な検証は、必要であり、その検証結果を個々の教員の教育目的にむすびつく取り組みとして、各学科・専攻で検証し設定した教育目標を達成するシステムの構築を検討する。

(計画)

学部長職として責務を果たし、さらに所属する委員会での積極的な取り組み、また大学の行事などでの学生への教育に貢献する。また、中高教職課程委員会委員長として教職課程の円滑な運営と教育指導を高める方策を検討する。

○学内委員等

教学法人協議会構成員、高大連携会議構成員、大学再編準備室会議構成員、運営委員会委員、学長会議構成員、教育力向上委員会委員、人事委員会委員、学生募集戦略委員会委員、全学教職課程委員会委員、中高教職課程委員会委員長、教職課程再課程認定委員会委員

○自己評価

学部長を初めて引きうけて、同時に中高教職委員会委員長はじめ5つの委員会に所属し、学部運営業務全般、委員会活動に専念した。

IV 社会貢献

○目標・計画

(目標)

本学の理念である建学の精神や校訓、オンリーワンのコンセプト、さらに教職員の心構えのような目的達成には、多様化する学生の質と社会ニーズに相応した教育実践が必要といえる。今後ますます進展する少子社会は大学のあり方そのものにも影響すると推測される。そうした影響を直接受ける地方の私立大学においては、社会貢献、とりわけ地域貢献は、大学の存亡にもかかわる重大な社会要因でもある。その中であって、社会から期待される大学として存在するためには、大学構成員が建学の理念がもつ精神を理解し共有するとともに、その具現化に向けた地域貢献への教育目的の適切性と実践活動を広く社会へ公表することが重要である。

そのために、地域福祉実践や地域のボランティア活動において、社会ニーズの分析とともに、本学の理念および目的との整合性について継続的に検討する必要がある。

(計画)

現在では関西地区での精神障害者の作業所の運営にボランティア活動をしているが、今後は名古屋、名東区などの地域の行事や諸活動に参加し、地域福祉活動での実践的役割を果たしたい。

○学会活動等

当該年度は、愛知東邦大学を拠点にし、広島国際大学、神戸女学院大学などとともに「ソーシャルケア学会」の運営に関し、開催計画、実施などに貢献した。

○地域連携・社会貢献等

地域福祉実践や地域のボランティア活動に継続的に参画した。

○自己評価

おおむね社会貢献については、精神障害者の作業所の運営（監事）と理事会参加が中心で、自己研さんにつながった。

V その他の特記事項（学外研究、受賞歴、国際学術交流、自己研鑽等）

自己研鑽については、研究と研究方法や実質的な内容を結びつける研究会や学会への参加への積極的な取り組みであり、特に大阪府立大学の研究者の有志で結成した「ソーシャルケア研究会」は、多様な大学間での研究報告をもとに年1回開催した。

VI 総括

大学は、教育と研究と学内運営、地域貢献、学生のニーズ対応、国際貢献など教員の役割機能はさらに増えてきている。また昨年度に比較して大学運営上の役割では、人間健康学部の学部長を引き受けて邁進したが、その対応ではとりわけ自己の力量不足が目立った。さらに、教育は、研究のバックボーンなしには不可能であるということを再認識させられた。これが総括と今後の課題である。

以 上

所属学部 学科	職位	氏 名
人間健康学部 人間健康学科	教授	石川 幸生
最終学歴	学 位	専門分野
中部学院大学大学院人間福祉学研究科後期博士 課程満期退学	体育学修士、 福祉マネジメ ント修士	生涯スポーツ、 レクリエーション

I 教育活動

○目標・計画

(目標)

建学の精神に基づいて体育・スポーツ・レクリエーションの指導者に必要な知識と技術を習得させ、健康・スポーツ分野で活躍できる人材の育成を目標にしている。特に専門分野を生かし、地域社会に貢献できる生涯スポーツ分野における人材を育成する。

(計画)

校訓である真面目を基本としながら、前年度の授業アンケートやリアクションペーパーの結果から、分かりやすく興味の持てる授業を心掛け、事前事後学習に繋げるための取り組みやすい課題を提供する。また、実習については手引の作成や資料作りを計画し情熱を持って教育実践を行う計画である。

○担当科目（前期・後期）

(前期) レクリエーション論、スポーツ社会学、野外運動論、基礎演習Ⅰ、専門演習Ⅰ、専門演習Ⅲ
(後期) スポーツ原理、生涯スポーツ論、レクリエーション実技、レクリエーションインターンシップ、基礎演習Ⅱ、専門演習Ⅱ、専門演習Ⅳ、卒業研究

○教育方法の実践

学生の理解度を高めるため、ビデオなどの教材やリアクションペーパーを導入し活用した。また、教育効果を高めるため、課題に関するレポートの提出を課した。

○作成した教科書・教材

講義科目では、できる限り最新情報を入れたオリジナルな資料づくりを心掛けた。また、実習科目では、分かりやすい手引書の作成をした。その他、自身が出演したビデオを活用した。

○自己評価

授業アンケート評価から、担当科目である前掲の各講義科目、演習科目、実習科目について良好な評価を学生から得ている。前掲の教育実践スタイルや作成した資料、手引書、レポート課題、リアクションペーパー、ビデオ等の活用により、おおむね目標を達成することができた。しかし、アンケート調査結果から読み取れる事として、改善点としては、事前事後に繋げるための授業工夫が必要であり、そのためには、なるべく双方向の授業スタイルを目指し、理解しやすい分かりやすい興味の持てる学習課題を学生に課題提供することで一層の授業改善に向けた取り組みを試みたい。

II 研究活動

○研究課題

生涯スポーツとしてのニュースポーツ及びスポーツツーリズムに関する研究

○目標・計画

(目標)

生涯スポーツ社会実現の推進に役立つものとして「ニュースポーツ研究やスポーツツーリズム研究」等を行う。

(計画)

本年度は、昨年に続き全国健康福祉祭（ねんりんピック）に焦点を当てニュースポーツ及びスポーツツーリズムの研究調査に取り組む計画である。

○2011年4月から2019年3月の研究業績（特許等を含む）

(著書)

- ・杉谷正次、石川幸生、山内章裕『現代スポーツマネジメントーマーケティングからマネジメントの時代へ』三恵社 2016年9月
- ・藤森憲司、杉谷正次、青木葵、石川幸生、葛原憲治『スポーツツーリズムの可能性を探るー新しい生涯スポーツ社会への実現に向けてー』愛知東邦大学地域創造研究所編 唯学書房 2015年11月
- ・石川幸生、杉谷正次、山内章裕『現代スポーツビジネス』三恵社 2012年8月
- ・石川幸生、杉谷正次、後藤永子、青木葵、木村典子、山内章裕、『超高齢社会における認知症予防と運動習慣への挑戦ー高齢者を対象としたクロリティー活動に効果に関する研究ー』愛知東邦大学地域創造研究所編 唯学書房 2012年3月

(学術論文)

- ・木村典子、石川幸生、青木葵「認知症啓発教育が大学生の認知症高齢者のイメージに及ぼす効果」東邦学誌 第43巻, pp141 - 151 2014年6月
- ・木村典子、石川幸生、青木葵、「大学生の抱く認知症高齢者のイメージと関連要因」東邦学誌第42巻, 第1号, pp. 75 - 85 2013年6月
- ・木村典子、杉谷正次、石川幸生、青木葵、後藤永子、山内章裕、「認知症と精神的健康に焦点をあてた介護予防としてのニュースポーツー地域のクロリティークラブチームからの考察ー」愛知学泉大 学・短期大学研究論集、第46号、2011年12月
- ・杉谷正次、青木葵、石川幸生、御園慎一郎、杉浦利成、「スポーツ・ツーリズムの可能性を探るー国際リゾートをめざす北海道ニセコ地域の事例からー」東邦学誌 第40巻, 第2号, pp. 1 - 15 2011年12月
- ・木村典子、杉谷正次、石川幸生、青木葵、後藤永子、山内章裕、「高齢者の記憶の自己効力感についての検討ークロリティー選手権大会に参加した高齢者からの考察ー」東邦学誌第40巻, 第1号, pp. 129 - 139 2011年6月

(学会発表)

- ・Masatsugu SUGITANI, Yukio Ishikawa, Takashi ONO, Mamoru AOKI 「Study on the Park-golf of the effects of a lifetime sport, From the survey of the awareness of Park-golf enthusiasts」 International Conference of the 66th Japanese Society of Education and Health Science, Dong-A University Sunghak Campus South Korea, 20th-22th August 2018, p75.
- ・杉谷正次、石川幸生、青木葵、脇坂康彦、小野隆「生涯スポーツとしてのパークゴルフに関する研究ースポーツツーリズムに着目してー」第65回日本教育医学会大会、三重大学、2016年8

月 p 55.

- Noriko KIMURA, Mamoru AOKI, Yukari MATSUI, Yukio ISHIKAWA, Masatsugu SUGITANI 「Current state of end-of-life care for older adults with dementia in group homes:Results of a nationwide survey in Japan」第 63 回日本教育医学会兼第 16 回日韓健康教育シンポジウム、関西学院大学、2015 年 8 月 pp. 136-137 .
- Noriko KIMURA, Chihiro KIMATA, Yukio ISHIKAWA, Mamoru AOKI, Masatsugu SUGITANI Masataka TERASHIMA 「Perceptions of older people with dementia held by university students and relevant factors」第 61 回日本教育医学会兼第 15 回日韓健康教育シンポジウム、大韓民国 済州大学校アラキャンパス、2013 年 8 月 pp. 84-85.
- 杉谷正次、石川幸生、青木葵、御園慎一郎、杉浦利成、葛原憲治「スポーツ・ツーリズムの可能性を探る－生涯スポーツとしての『グラウンド・ゴルフ』発祥地大会を事例として－」第 14 回日本生涯スポーツ学会、広島経済大学、2012 年 10 月 p45.
- 木村典子、杉谷正次、石川幸生、青木葵、後藤永子、山内章裕、「地域密着型サービスを拠点としたまちづくりに関する研究－クロリティー活動の事例から－」第 60 回日本教育医学会記念大会、筑波大学、2012 年 8 月 pp, 133-134.
- 杉谷正次、石川幸生、青木葵、木村典子、後藤永子、山内章裕、「高齢者を対象としたクロリティー活動の効果に関する研究－愛知県、島根県のクラブ活動からの考察－」第 60 回日本教育医学会記念大会、筑波大学、2012 年 8 月 pp, 135-136.
- 木村典子、青木葵、石川幸生、杉谷正次、後藤永子、山内章裕、「地域で仲間とスポーツを楽しみながら生活している高齢者の記憶の自己効力感の検討－A 県クロリティー大会に参加した高齢者からの考察－」第 53 回日本老年社会科学会 2011 年 6 月, p245.
- 木村典子、青木葵、石川幸生、杉谷正次、後藤永子、山内章裕、「地域で暮らし仲間とスポーツをおこなっている認知症の疑われる高齢者についての検討－クロリティー選手権大会に参加した高齢者からの考察－」第 26 回日本老年精神医学学会, 2011 年 6 月, p245.

○科学研究費補助金等への申請状況、交付状況（学内外）

- （第 36 回）学術研究振興資金・日本私立学校振興・共済事業団 申請（共同）－不採択
- 平成 22 年度：科学研究費補助金 申請（共同）－不採択

○所属学会

日本教育医学会、日本生涯スポーツ学会、日本体育学会、日本レジャー・レクリエーション学会、日本野外教育学会、日本スポーツツーリズム推進機構

○自己評価

前掲の 8 年間の業績として、著書：2（編著）、2（共著）、学術論文：5（共著）、学会発表 9（共同）を著した。本年度は、学会発表 1 篇（共同）を研究発表することができた。従って、おおむね目標を達成することができた。

III 大学運営

○目標・計画

（目標）

建学の精神に基づき、校訓である真面目を基本として情熱を持って、今までと変わりなく職分を全う出来るように心がけたい。

(計画)

計画は、配属先（学生募集戦略委員会委員、入試委員会委員）の委員会で仕事を十分理解し職分を全うできるよう尽力したい。

○学内委員等

学生募集戦略委員会委員、入試委員会委員

○自己評価

学生募集戦略委員会委員、入試委員会委員として、関連業務の適確な推進と委員会の円滑な審議に貢献できた。愛知東邦大学地域創造研究所「スポーツツーリズム研究部会」副査として研究成果するための調査研究ができた。

IV 社会貢献

○目標・計画

(目標)

地域との連携により行われている国際交流に協力し、地域における文化・生涯スポーツの推進を図り、地域の文化や健康づくりの向上に貢献する。

(計画)

地域の文化や健康づくりを目標に、地域における国際交流や生涯スポーツとしてのニュースポーツに対する楽しさと理解を深める事業や学会活動に参画する予定である。

○学会活動等

- ・愛知東邦大学地域創造研究所「スポーツツーリズム研究部会」副査として研究活動を行った。（名古屋市）
- ・International Conference of the 66th Japanese Society of Education and Health Science, Dong-A University Sunghak Campus South Korea, 20th-22th August 2018, の大会役員として参画した。
- ・日本教育医学会副会長として学会の運営に携わった。（日本全国）
- ・公益社団法人 日本幼少年体育協会 学術委員会委員として参画した。（日本全国）
- ・社団法人 全国大学体育連合東海地区評議員として参画した（東海地域）
- ・東郷町国際交流協会会長として運営に参画した。（愛知県・東郷町）
- ・日本クロリティー協会理事長、愛知県クロリティー協会副会長として運営に参画した。（日本全国および愛知県）
- ・NPO 法人フレンドリー情報センター理事として運営に参加した。（日本全国）
- ・東郷町スポーツ推進会議委員長として会議の運営に携わり参画した。（愛知県・東郷町）

○地域連携・社会貢献等

- ・平成 30 年度 東郷町文化産業祭り協賛事業「国際交流・オーストラリアの紹介」開催した。（東郷町）
- ・ニュースポーツフェスティバル in あいち 2018 年に参画した。（愛知県・モリコロパーク）
- ・第 30 回愛知県クロリティー選手権大会開催した。（愛知県体育館・第 2 競技場）
- ・第 46 回愛知県老人スポーツ大会（正式種目：クロリティー）の開催に携わり参画した。（あいち健康の森大芝生広場）
- ・2018 年度クロリティー日本大会を開催し運営に携わり参画した。（愛知県体育館・第 2 競技場）

- ・2018年度クロリティー名古屋大会を開催し運営に携わり参画した。(愛知県体育館・第2競技場)

○自己評価

学会活動や研究活動等をはじめ、地域における国際交流イベントに参画できた。また、ニューコンセプト・スポーツである「クロリティー」大会等の開催をとおして、日本及び愛知県民の健康づくりや親睦、合わせて地域交流に貢献できた。

V その他の特記事項（学外研究、受賞歴、国際学術交流、自己研鑽等）

『Who's Who in World 2011 28th 2012 29th 2013 30th 2014 31th 2015 32th 2016 33th 2017 34th 2018 35th Edition』（米国）にニュースポーツの研究開発とその社会貢献が認められ人名録に収録された。

『2000 Outstanding Intellectuals of the 21st Century 2014, 2015, 2016, 2017, 2018』（イギリス）大学教員として38年間の教育とニュースポーツの研究開発の成果と業績及び顕著な社会貢献等が高く評価され人名録に収録された。

VI 総括

教育活動、研究活動、大学運営、社会貢献、その他、それぞれの項目について当初の目的をおおむね達成できたように思う。この総括を踏まえて、今後一層の自己研鑽を積み、更なる次の目標を見据えた諸活動に役立てながら成果を得たいと思う次第である。

以 上

所属学部 学科	職位	氏 名
人間健康学部 人間健康学科	教授	葛原 憲治
最終学歴	学 位	専 門 分 野
名古屋大学大学院 教育発達科学研究科博士課程 後期課程修了	博士 (教育)	アスレティックトレーニング

I 教育活動

○目標・計画

(目標)

建学の精神および校訓に沿って、真面目に学業に取り組み、主体的な学びと問題解決できる力を養い、社会で信頼される人格の育成をすることを目標とする。また、健康増進に関わる基礎的な知識とトレーナーの基本スキルやエクササイズノウハウを修得し、スポーツの競技特性やクライアントのニーズに合ったトレーニングプログラムの構築および処方ができる実践力を身に付けたトレーナーや指導者の育成を目指す。

(計画)

基礎的な知識やスキルの修得や専門的な実践力を身に付けるために、実践や実習に重点を置いた双方向型の授業やアクティブラーニングの手法を用いて実践する。また、学生の学力格差を理解しながら、それぞれの授業テーマに沿って資料提示を工夫し、学生が興味を持てるような授業改善に取り組む。特に、専門演習では、学生に対して個別の対応をしながら、現場実習による主体的な学びと問題解決能力を養い、4年間の学びの集大成である卒業研究につなげる。

○担当科目（前期・後期）

(前期) プログラムデザイン、ストレングス・コンディショニング実習、総合演習Ⅰ、専門演習Ⅰ、専門演習Ⅲ

(後期) フィットネステスト・評価、アスレチックトレーニング実習、基礎アスレチックトレーニング、総合野外活動実習Ⅲ、総合演習Ⅱ、専門演習Ⅱ、専門演習Ⅳ、卒業研究

○教育方法の実践

プログラムデザインや基礎アスレチックトレーニングの講義において、学生の理解を深めるために動画や映像などの教材を導入し、実践を含めた内容を授業に盛り込み、さらには授業開始前には前回授業の復習としてクイズ(小テスト)を実施することで教育効果をあげることができた。フィットネステスト&評価の講義において、様々なフィットネステストを実際に実践し、データ収集をし、さらにエクセルを用いてデータ分析することを通して測定方法と評価方法を学びながら学習効果をあげることができた。ストレングス&コンディショニング実習において、2人1組のパートナーで携帯端末機器による撮影を通して、基本動作の確認およびフィードバックによるスキル習得を効果的にできた。総合野外活動実習Ⅲ(スノースポーツ)において、インストラクターによる指導方法および学生個々の動作をビデオで撮影し、その後学生にフィードバックすることでスキル習得をする過程の問題点や改善点を気づかせ、学習効果をあげることができた。その結果、短期間でのSAJ認定のスキー検定3級を20名の学生が合格をした。

○作成した教科書・教材

プログラムデザイン、基礎アスレティックトレーニング、フィットネステスト&評価の講義では、それぞれの講義で用いる教科書をベースに、教科書内容を理解できるような穴埋め式あるいは記述式を含めたオリジナルの教材を作成した。総合野外活動実習Ⅲ（スノースポーツ）において、集中講義期間の学習内容を振り返るための映像を作成し、フィードバックを実践した。

○自己評価

学生の理解を深めるために ICT（映像や学生個々の携帯機器を含む）を活用することで、学生個々に対応したフィードバックが可能となり、多くの実践・実習を含めた授業を展開することで授業改善ができた。また、学力格差がある学生に対して個別指導を強化することで、学生の理解力を高めることができた。今後、さらに学生が興味を持てるように ICT を用いた導入教育の工夫、事前・事後学習や自主的な学びにつながるような教育方法やオリジナルの授業教材の検討・開発をすることが必要である。

II 研究活動

○研究課題

ジュニアスポーツおよびコンタクトスポーツなどの傷害分析および傷害予防トレーニングについて

○目標・計画

（目標）

ジュニアスポーツおよびコンタクトスポーツ、ウィンタースポーツの傷害分析および傷害予防トレーニングについて、①ジュニアスポーツの傷害調査および分析、②ジュニアスポーツ選手の基本的な動作や活動量を分析するために Functional Movement Screen（以下、FMS）やアクチグラフ（3次元加速度計）による測定および分析、③コンタクトスポーツ（バスケットボールなど）などの傷害調査および分析、④コンタクトスポーツやエリートスポーツ選手の身体組成およびフィジカル特性の測定および分析、⑤ジュニアスポーツおよびコンタクトスポーツの傷害予防トレーニングやコンディショニング（アクアエクササイズを含む）の研究をすることを目的とする。

（計画）

本年度は、科研の最終年度となり、中学生のジュニアスポーツの傷害調査の分析やアクチグラフによる活動量の分析、そしてコンタクトスポーツ（サッカー、バスケットボールなど）などの傷害予防の研究に取り組む計画である。

○2011年4月から2019年3月の研究業績（特許等を含む）

（著書）

- ・黒田次郎、石塚大輔、萩原悟一、葛原憲治、他 19 名、『スポーツビジネス概論 3』、叢文社、2018 年 4 月。
- ・杉谷正次、石川幸生、藤森憲司、青木葵、葛原憲治『スポーツ・ツーリズムの可能性を探る－新しい生涯スポーツ社会への実現に向けて』、唯学書房、2015 年 12 月。
- ・葛原憲治、吉部紳介、井口順太、石原慎二『スイメックスによるアクアセラピープロトコル』、唯学書房、2015 年 3 月。
- ・佐野昌行、黒田次郎、遠藤利文、谷釜尋徳、矢野裕介、葛原憲治、他 23 名『図表でみるスポーツビジネス』、叢文社、2014 年 4 月。
- ・黒田次郎、遠藤利文、綿貫慶徳、福井元、福田拓哉、葛原憲治、他 19 名『スポーツビジネス概

論』、叢文社、2012年3月。

(学術論文)

- Iguchi J, Kuzuhara K, Katani K, Hojo T, Fujisawa Y, Kimura M, Yanagida Y & Yamada Y. Seasonal changes in anthropometric, physiological, nutritional and performance factors in collegiate rowers. *Journal of Strength and Conditioning Research*, 2018 (査読有、published ahead-of-print).
- 木野村嘉則、小島正憲、葛原憲治、「DARTFISH を用いて算出した上肢および下肢関節角度の信頼性と妥当性:倒立動作の2次元動作分析を事例として」、*Strength & Conditioning Journal Japan*, 25 (4) : pp.12-18、2018年(査読有)。
- Kuzuhara K, Shibata M, Iguchi J & Uchida R. Functional movements in Japanese mini-basketball players. *Journal of Human Kinetics*, 61: pp.53-62, 2018 (査読有)。
- Kuzuhara K, Shibata M & Uchida R. Injuries in Japanese junior soccer players during practice and games, *Journal of Athletic Training*, 52 (12) : pp.1147-1152, 2017 (査読有)。
- 木野村嘉則、木下達生、波戸謙太、葛原憲治、「野球における二塁までのベースランニング時の走塁コースの分類に関する試案:中学生及び高校生による自由走路選択条件を事例として」、*東邦学誌*, 46 (2) : pp.93-104、2017年12月。
- Kuzuhara K, Shibata M & Uchida R. Injuries in Japanese mini-basketball players during practice and games. *Journal of Athletic Training*, 51 (12) :pp.1022-1027, 2016 (査読有)。
- 葛原憲治、長谷川望、中野匡隆、「スキー・スノーボードの傷害およびその予防対策」、*東邦学誌*, 45 (2) : pp.15-24、2016年12月。
- Iguchi J, Watanabe Y, Kimura M, Fujisawa Y, Hojo T, Yuasa Y, Higashi S & Kuzuhara K. Risk factors for injury among Japanese collegiate players of American football based on performance test results. *Journal of Strength and Conditioning Research*, 30 (12) :pp.3405-3411, 2016 (査読有)。
- 葛原憲治、柴田真志、「ジュニアスポーツにおける傷害予防プログラム」、*Strength & Conditioning Journal Japan*, 22 (4) : pp.2~11、2015年5月(査読有)。
- Hasegawa N & Kuzuhara K. Physical characteristics of collegiate women's football players. *Football Science*, 12 : pp.51-57, 2015 (査読有)。
- 葛原憲治、芝純平、「東海学生アメリカンフットボール1部リーグチームにおける身体特性および体力特性について ~他大学1部リーグチームと比較して~」、*Strength & Conditioning Journal Japan*, 21 (1) : pp.8-13、2015年1-2月(査読有)。
- 澤田節子、古市久子、葛原憲治、寺島雅隆、高間佐知子、「本学学生の意識調査から授業改善を目指して ~アクティブ・ラーニングは効果的な学習の救世主となりうるか~」、*東邦学誌*, 43 (2) : pp.141-159、2014年12月。
- 葛原憲治、「筋の不均衡を改善するためのパートナーストレッチング」、*日本保健医療行動学会誌*, 28 (2) : pp.44-48、2014年2月。
- Iguchi J, Yamada Y, Kimura M, Fujisawa Y, Hojo T, Kuzuhara K, & Ichihashi N. Injuries in a Japanese division 1 collegiate American football team: A 3-year prospective study. *Journal of Athletic Training*, 48 (6) : pp.818-825, 2013 (査読有)。

- ・葛原憲治、黒田次郎、「プロ野球選手の身体特性および体力特性について」、*東邦学誌*、42 (1) : pp. 59~65、2013年6月。
- ・葛原憲治、井口順太、井上鎮子、間瀬泰克、「bjリーグにおけるプロバスケットボールチームの傷害分析～3年間の前向き研究～」、*日本臨床スポーツ医学会誌*、21 (1) : pp. 187~193、2013年 (査読有)。
- ・葛原憲治、柴田真志、「急性傷害にコールドスプレーを使ってはいけない」、*Strength & Conditioning Journal Japan*, 20 (8) : pp. 10~12、2013年10月。
- ・葛原憲治、柴田真志、「集中練習ばかりを繰り返してはいけない」、*Strength & Conditioning Journal Japan*, 20 (4) : pp. 10~12、2013年5月。
- ・葛原憲治、柴田真志、「1年中休みなく同じスポーツをしてはいけない」、*Strength & Conditioning Journal Japan*, 20 (1) : pp. 10~12、2013年1-2月。
- ・葛原憲治、井口順太、柴田真志、「大学アメリカンフットボールチームの下肢傷害分析～2年間の前向き研究～」、*体力科学*、61 (1) : pp. 139~145、2012年 (査読有)。
- ・葛原憲治、「単なる早期専門化をやってはいけない」、*Strength & Conditioning Journal Japan*, 19 (10) : pp. 16~17、2012年12月。
- ・Iguchi J, Yamada Y, Ando S, Fujisawa Y, Hojo T, Kuzuhara K, Nishimura K, Yuasa Y & Ichihashi N. Physical and Performance Characteristics of Japanese Division 1 Collegiate Football Players. *Journal of Strength and Conditioning Research*, 25 (12) : pp. 3368-3377, 2011 (査読有)。
- ・葛原憲治、井口順太、島本英樹、「エリートアイスホッケー選手における身体組成の年間変化について」、*Strength & Conditioning Journal Japan*, 18 (5) : pp. 2~7、2011年6月 (査読有)。

(学会発表)

- ・「中学生バスケットボール選手における練習時の活動強度」(葛原憲治、柴田真志、井口順太)、NSCA ジャパン S&C カンファレンス 2018、日本科学未来館、2019年1月
- ・「中学生バスケットボール選手における傷害発生率の男女比較について～1年間の前向き研究～」(葛原憲治、柴田真志、井口順太)、東海体育学会第66回大会、愛知東邦大学、2018年10月
- ・” Physical and performance characteristics of Japanese division II female collegiate basketball players” (Iguchi J, Satou A, Hojo T, Fujisawa Y, Kuzuhara K) , 第23回 European College of Sport Science, ダブリン、アイルランド、2018年7月。
- ・「中学生バスケットボール選手における傷害発生率」(葛原憲治、柴田真志、井口順太)、NSCA ジャパン S&C カンファレンス 2017、神戸ファッションマート、2017年12月
- ・「構造か指導か：学校プールにおける飛び込みスタートの事故に関する包括的研究」(内田良、井口成明、村田祐樹、葛原憲治)、日本体育学会第68回大会、静岡大学、2017年9月
- ・「初心者倒立における評価指標の提案～体育授業における倒立運動の評価を目指して～」(小島正憲、葛原憲治、木野村嘉則)、日本体育学会第68回大会、静岡大学、2017年9月
- ・“Functional movements in Japanese mini-basketball players” (Kenji Kuzuhara, Masashi Shibata, Junta Iguchi, Ryo Uchida) , 第5回 NSCA カンファレンス、幕張メッセ国際会議場、2017年1月
- ・「スキー・スノーボードにおける死亡事故の分析」(内田良、福田修、野地雅人、葛原憲治、村田祐樹)、第27回日本臨床スポーツ医学会学術集会、幕張メッセ国際会議場、2016年11月

- ・「小学生ミニバスケットボール選手はジュニアサッカー選手に比べて傷害発生率が高い」(葛原憲治、柴田真志、大前拓)、東海体育学会第 63 回大会、愛知県立大学、2015 年 10 月
- ・「小学生ジュニアサッカー選手における傷害発生率」(葛原憲治、柴田真志、杉谷正次)、第 19 回日本体力医学会東海地方会学術集会、名古屋大学、2015 年 3 月
- ・「小学生ミニバスケットボール選手における傷害発生率」(葛原憲治、柴田真志)、東海体育学会第 62 回大会、岐阜大学、2014 年 10 月
- ・「大学におけるサッカーを通じた地域活性化への取り組み ～地元 J クラブとの連携に向けて～」(長谷川望、葛原憲治、御園慎一郎)、地域活性学会第 6 回研究大会、東京農業大学オホーツクキャンパス、2014 年 7 月
- ・「プロスポーツの社会貢献活動の国際比較(その 3) -日米のプロ野球における社会貢献活動-」(平本謙、黒田次郎、葛原憲治、古城隆利)、日本運動・スポーツ科学学会第 21 回大会、玉川大学、2014 年 6 月
- ・「日本プロ野球の球団経営に関する研究-チーム成績・賃金・観客動員数の関係から-」(黒田次郎、内田勇人、平本謙、葛原憲治)、日本運動・スポーツ科学学会第 20 回大会、神奈川大学、2013 年 6 月
- ・「スポーツ・ツーリズムの可能性を探る-生涯スポーツとしての「グラウンド・ゴルフ」発祥地大会を事例として-」(杉谷正次、石川幸生、青木葵、御園慎一郎、杉浦利成、葛原憲治)、日本生涯スポーツ学会第 14 回大会、広島経済大学、2012 年 10 月

(その他)

- ・葛原憲治、長谷川明、増田貴治、山本正彦、吉岡睦博、「第 6 章 三大事業の集中実施」、東邦学園九十年誌、学校法人東邦学園、2014 年 5 月
- ・葛原憲治、「ゴルフボールで柔軟性アップ」、みどりの風、第 34 号、pp. 10～11、2013 年 1 月
- ・葛原憲治、「強みを伸ばす場をつくって待つ」、月刊トレーニングジャーナル、pp. 22～25、2012 年 7 月

○科学研究費補助金等への申請状況、交付状況(学内外)

- ・2019～2021 年度 科学研究費補助金 基盤研究 C(独立行政法人日本学術振興会)「高校生ジュニアスポーツにおける傷害実態の解明と傷害予防プログラムの研究」の研究課題で申請(研究代表者)
- ・2017～2019 年度 科学研究費補助金 基盤研究 C(独立行政法人日本学術振興会)「大学スポーツの傷害分析とパフォーマンステストを用いた予防プログラムの開発」の研究課題で交付(共同研究者) - 2 年目
- ・2016～2018 年度 科学研究費補助金 基盤研究 C(独立行政法人日本学術振興会)「中学生ジュニアスポーツにおける傷害実態の解明と傷害予防プログラムの研究」の研究課題で交付(研究代表者) - 3 年目
- ・2013～2015 年度 愛知東邦大学地域創造研究所共同研究「新しいスポーツ・ツーリズムの可能性を探る」(共同研究者)
- ・2013～2015 年度 科学研究費補助金 基盤研究 C(独立行政法人日本学術振興会)「小学生ジュニアスポーツにおける傷害実態の解明と傷害予防プログラムの研究」の研究課題で交付(研究代表者)

○所属学会

日本体力医学会、日本体育学会、全米アスレティックトレーナー協会 (NATA)、全米ストレングス & コンディショニング協会 (NSCA)、ジャパン・アスレティックトレーナーズ機構 (JATO)、日本臨床スポーツ医学会、日本フットボール学会

○自己評価

本年度は、科学研究費の最終年度であり、中学生ジュニアスポーツ選手の傷害に関する研究成果を2本学会発表することができた。また、共同研究において、査読付論文を2本発表することができた。

Ⅲ 大学運営

○目標・計画

(目標)

全学委員会およびワーキンググループに関わって大学運営に貢献する。

(計画)

学生委員会の委員長として初年度なので、これまでの学生委員会で議論されてきた課題や問題点を引き継ぎ、それらを改善するために取り組む。

○学内委員等

運営委員会委員、学生委員会委員長、愛知東邦大学トレーナー組織 (ATTO) 顧問

○自己評価

学生委員会委員長として初年度となり、これまでの学生委員会で議論されてきたいくつかの課題や問題点について検討し、課外活動に関する問題を改善することができた。また、学生委員会において、通常のルーティーンワークが遂行できるように取り組むことができた。

Ⅳ 社会貢献

○目標・計画

(目標)

建学の精神および校訓に沿って、本学園が実施している地域向けの公開講座や地域イベント、高大連携事業に積極的に関わる地域貢献をする。

(計画)

大学祭や名東区民祭りにおける地域向けの健康増進イベント、高大連携事業として各高校への出張講義や模擬授業や東邦高校との総合学習 (1・2年)、に協力しつつ、学生と積極的に関わりながら企画運営および実践を行う。

○学会活動等

NSCA ジャパン理事 (認定試験・CEU 担当) 2015年6月～現在

○地域連携・社会貢献等

- ・高大連携による東邦高校人間健康コースの総合学習 (4回) を担当 2018年4月～5月
- ・神戸東灘ロータリークラブ主催卓話において「プロ野球選手の七不思議」の講演 2018年5月
- ・第23回名東の日・区民まつりにて健康企画「リラクゼーションマッサージ」を実施 2018年5月
- ・名東クラブ総会&講演会において「プロスポーツ選手から学ぶカラダ作り」の講演 2018年6月

- ・東海体育学会第 66 回大会においてホスト校として学会運営 2018 年 10 月
- ・東海体育学会第 66 回大会において「東京オリンピックから地域スポーツへの転換」のテーマでコーディネーターとしてシンポジウムの開催 2018 年 10 月
- ・2018 年度「和丘祭」の ATTO（愛知東邦トレーナー組織）イベントとして「リラクゼーションマッサージ」を実施 2018 年 11 月
- ・NSCA ジャパン・AC ミラン・愛知東邦大学のコラボセミナーの共同開催 2019 年 1 月
- ・第 22 回全国学生トレーナーの集い（中京大学豊田キャンパス）のオブザーバーとして参加 2019 年 3 月

○自己評価

本年度において、昨年度に引き続き ATTO（愛知東邦トレーナー組織）の学生たちが地域向けに活躍できる場を多く設けたことで、地域貢献ができた。また、本学において東海体育学会を開催することができ学術的に大きな貢献ができた。

V その他の特記事項（学外研究、受賞歴、国際学術交流、自己研鑽等）

なし

VI 総括

本年度も昨年度と同様に、教育活動および研究活動にバランスよく取り組むことができた。特に、研究活動については、科研費の最終年度として学会発表をすることができ、ジュニアスポーツに関する研究成果をあげることができた。今後、ジュニアスポーツの傷害分析および傷害予防トレーニングの研究を継続し、さらなる研究成果を出したい。

以 上

所属学部 学科	職位	氏 名
人間健康学部 人間健康学科	教授	橘 廣
最終学歴	学 位	専門分野
京都大学大学院教育学研究科博士後期課程 単位取得満期退学	教育学修士	教育心理学 発達神経心理学

I 教育活動

○目標・計画

(目標)

脳の発達をふまえた効果的な教育、心身の健康に関わる知識・技能を身につけた指導者の養成、建学の精神「真に信頼して事を任せうる人格の育成」を基盤とした社会から信頼される全人格的な教育を目標とする。また学生一人ひとりの可能性の芽を大切に育て、潜在的な才能や能力を引き出す教育を目標とする。

(計画)

学生の能動的な学習につながるアクティブ・ラーニング手法を取り入れた授業を積極的に行う。難解な理論も楽しみながら理解し、日常生活に効果的に活かせるよう授業を工夫していきたい。また授業評価アンケートの結果をふまえ「わかりやすい授業」をこころがけたい。基本的な事柄を発展させ、創造性を育む授業を行う。演習では、一人ひとりの学生に真摯に向き合い、成長が実感できるよう支援する。心理・教育に関する研究を中心に調査・実験・研究発表を行う中で、プレゼンテーション能力やコミュニケーション能力を高められるよう教育支援をする。

○担当科目（前期・後期）

（前期）発達心理学、教育心理学、専門演習Ⅰ、専門演習Ⅲ

（後期）学習心理学、教育心理学実験実習、心理学研究法、社会心理学実験実習、教職実践演習、専門演習Ⅱ、専門演習Ⅳ、卒業研究

○教育方法の実践

授業では受講者の関心や理解度を高めるため、ビデオ、DVD、キャラクターを使用した小道具などの教材を積極的に導入した。またパワーポイントを用いた授業、体験型学習（心理検査、調査、観察、光イメージング脳機能測定装置を用いた実験体験を含む実験）の導入、次回講義内容についてのレポートによる動機づけと授業設計によって、教育効果をあげることができた。アクティブ・ラーニング手法を取り入れた授業を積極的に行うようこころがけた。演習では、心理・教育に関する研究を中心に調査・実験・研究発表を行う中で、プレゼンテーション能力やコミュニケーション能力を高められるよう教育支援をした。また就職活動に必要な筆記試験や面接試験対策指導も希望者に行った。

○作成した教科書・教材

「発達心理学」の参考書として、『子どもの手指活動と発達』（単著、三恵社）を作成した。

また講義内容の理解を促し関心をもって受講できるような情報を取り入れまとめた補助教材は毎回の授業で配布している。

○自己評価

学生の授業に対する関心や理解度を高めるために、積極的にさまざまな工夫をし、当初の目標・

計画については、概ね目標を達成することができた。授業評価アンケート結果については、受講者数に制限のある「教育心理学実験実習」及び「社会心理学実験実習」ではアンケートのすべての設問に高評価が得られ、ほとんどの受講者がグループで協力して授業外で時間をかけて事前事後学習を行っており、主体的、対話的で深い学びを促すことができたのではないかと思われる。しかし、受講者の多い「教育心理学」「発達心理学」では、授業内容が理解できずに興味を持ってない学生と、とても楽しい授業・これからの生活に役立つ授業と記載したり高評価をした学生との二極化が顕著となった。具体例を多く示し、イラストを用いたりクイズ形式にして説明し、体験学習を行い、できるだけわかりやすく能動的な学習ができるよう努力した点は、ある程度効果があったと思われる。私語についても特に問題はみられなかった。次年度は、わかりやすい授業をこころがけ、難解な理論も楽しみながら理解し、日常生活に効果的に活かせるよう授業を工夫していきたい。深い学びを引き起こすアクティブ・ラーニング手法を授業に取り入れ、受講者の能動的な学習や私語防止につながるよう努力したい。その他、認定心理士資格関連では、資格取得希望学生には個別指導を行う等、学生の資格取得を支援することができた。また国家資格の公認心理師資格関連では、情報収集に加えて、2019年度からの公認心理師資格取得に対応したカリキュラム再編に努力した。

II 研究活動

○研究課題

長期的課題

「脳の発達をふまえた教育及び脳の活性化： 前頭前野の発達を促す教育」

短期的課題

「前頭前野の活性化に関連する手指の遊びの検討」平成 27 年度～平成 30 年度 科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）基盤研究 C 研究課題

○目標・計画

（目標）

他者の気持ちを思いやったり、感情や行動をコントロールしたり、意思決定を行うような、人間ならではの高次な思考活動に関係するのが、前頭前野である。前頭前野の機能に焦点をあてながら、問題行動を予防し、個人のもつ能力を十分に活かすためにはどのような教育が必要なのかを、発達神経心理学的アプローチにより検討することを目標とする。

（計画）

何かを創りだすことを目的に、他者とコミュニケーションをとりながら、手指を使った操作活動をするのが、前頭前野を活性化させ発達させるために効率のよい方法であることが、最近の脳科学研究により認められている。能動的創造的な手指の操作活動を中心に、操作性の高さと、脳の機能分化、一側化の程度との関係について、光イメージング脳機能測定装置を用いて検討する。研究成果については、学会発表や学術論文として公刊するなど、広く社会に情報発信する。

○2011年4月から2019年3月の研究業績（特許等を含む）

（著書）

- ・橘廣『子どもの手指活動と発達』三恵社、2019年3月、152頁

（学術論文）

- ・橘廣「ペグボード課題における手指の巧緻性と前頭前野の活動」『東邦学誌』第47巻、第2

号、2018年12月、109-117頁

- ・橘廣・長谷川望・小島正憲「「教職実践演習」を中心とした教職科目の検討：アクティブ・ラーニングの視点から」『東邦学誌』第46巻、第1号、2017年6月、103-118頁
- ・橘廣「手指の巧緻性と機能的左右非対称性」『東邦学誌』第44巻、第1号、2015年6月、101-109頁
- ・橘廣「幼児における利き手の発達と利き手の変更」『東邦学誌』第42巻、第2号、2013年12月、129-141頁
- ・橘廣「機能的左右非対称性の発達と操作性の高さ」『東邦学誌』第41巻、第3号（人間学部篇）、2012年12月、121-134頁
- ・橘廣「手の活動における機能的左右非対称性と操作性の高さ」『東邦学誌』第40巻、第1号、2011年6月、141-152頁

(学会発表)

- ・橘廣・橘春菜「乳児の手指活動における機能的左右非対称性と前頭前野の活動—近赤外線分光法を用いた検討—」日本発達心理学会第30回大会、早稲田大学、2019年3月、日本発達心理学会第30回大会発表論文集、183頁
- ・橘廣「手指活動における操作性の高さと前頭前野の活動—近赤外線分光法を用いた検討—」日本教育心理学会第59回総会、名古屋国際会議場、2017年10月、日本教育心理学会第59回総会発表論文集、191頁
- ・第31回国際心理学会議(ICP2016)、日本心理学会第80回大会 研究発表 2016年7月 Tachibana Hiro Relationship between functional asymmetry in manual activity and the level of manipulation : A NIRS study in pegboard performance, The 31st International Congress of Psychology, July 24-29, 2016, Yokohama, Japan, PACIFICO Yokohama
- ・橘廣 「手指活動における機能的左右非対称性と操作性の高さの関係性」日本発達心理学会第25回大会、京都大学、2014年3月、日本発達心理学会第25回大会発表論文集、375頁

○科学研究費補助金等への申請状況、交付状況（学内外）

- ・平成27～30（2015～2018）年度 科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金） 基盤研究C（独立行政法人日本学術振興会）

研究課題名：「前頭前野の活性化に関連する手指の遊びの検討」

研究代表者：橘廣

交付総額：4,550,000円

○所属学会

日本心理学会、日本教育心理学会、日本発達心理学会、日本赤ちゃん学会、日本保育学会

○自己評価

科研費の助成を受けて研究成果をまとめ単著を出版することができた。また日本発達心理学会第30回大会で学会発表を行ったり学術論文として公刊し、当初の目標を達成することができた。

III 大学運営

○目標・計画

(目標)

教職課程再課程認定委員会委員長、教職支援センター副センター長、中高教職委員会副委員長と

して、全学教職課程委員会、教職支援センター運営委員会、中高教職課程委員会、教職課程再課程認定委員会の各委員会に積極的に関与し、大学運営に貢献する。

(計画)

全学教職課程委員会、中高教職課程委員会、教職支援センター運営委員会、教職課程再課程認定委員会では、教職課程全般に関わる業務を行い、教職課程の情報公開、実習関連支援、教員採用「合格」に向けた複数の免許取得の支援や採用試験対策の支援などに努力する。また中高教職課程全般にわたり、履修カルテの指導、介護等体験実習・教育実習の支援を行うなど、積極的に活動し大学運営に貢献する。

また教職課程再課程認定委員会では、新学習指導要領と教職課程再編成に伴う再課程認定に向け、円滑に進むよう、大学運営に貢献する。

○学内委員等

全学教職課程委員会委員、中高教職課程委員会副委員長、教職課程再課程認定委員会委員長、教職支援センター運営委員会副委員長・副センター長

○自己評価

教職課程再課程認定委員会では、本学教職課程が2019年4月以降も教職課程を有するための再課程認定申請に係る提出書類作成、中高教職課程関係のとりまとめに貢献した。関連して、2019年度からの新教職課程カリキュラムの作成を行った。委員長として文部科学省からの指摘事項に対応し、関係者にご協力いただいたおかげで、再課程認定を受けることができた。全学教職課程委員会では教職課程の全般に関わる業務、教職支援センター運営委員会では副委員長・副センター長として、教職課程学生の教員採用試験全国公開模擬試験を含む教育活動支援や教員免許状更新講習の準備等に貢献し、更新講習では講師を務めた。また中高教職課程委員会では副委員長として、教育実習等の中高教職課程の全般に関わる業務に努力した。

IV 社会貢献

○目標・計画

(目標)

教員免許状更新講習必修領域の講師として、大学の地域社会への貢献に協力する。

(計画)

教員免許状更新講習必修領域の講師を担当し、子どもの発達に関する脳科学・心理学の最新の知見を取り入れた情報提供と体験学習から、教育現場の先生方に、現代的な教育の課題を考え、子どもたちへの理解を深めていただく。

○学会活動等

特になし

○地域連携・社会貢献等

愛知県単位互換制度による前期科目「発達心理学」、後期科目「学習心理学」担当
教員免許状更新講習必修領域「子どもの発達と脳科学・心理学」担当
高大連携授業講師 1・2年生講座「学習に役立つ心理学」

○自己評価

教員免許状更新講習、高大連携授業、愛知県単位互換制度の講師を担当し、地域社会に貢献した。今後はより多くの社会貢献ができるよう努力したい。

V その他の特記事項（学外研究、受賞歴、国際学術交流、自己研鑽等）

VI 総括

教育活動、研究活動、大学運営、社会貢献に関して、概ね目標を達成することができたと思われるが、質、量ともに、より高いレベルで成果がでるよう努力することが今後の課題とされる。次年度の研究活動では、「前頭前野の活性化に関連する手指の遊びの検討」の研究課題を継続し、研究成果が出るよう努力したい。また、研究成果を生かし教育活動や社会貢献ができればと考える。

以 上

所属学部 学科	職位	氏 名
人間健康学部 人間健康学科	教授	肥田 幸子
最終学歴	学 位	専門分野
金城学院大学大学院人間生活学研究科（修士課程） 人間発達学専攻修了	修士 (人間発達学)	臨床心理学

I 教育活動

○目標・計画

(目標)

「オンリーワンを一人にひとつ」というコンセプトフレーズが掲げられた。私の教育活動においては個々の学生のもつ固有の良さを最大限引き出せるような教育をするということであると考えている。また、具体的な学生像としては、本学の建学の精神「真に信頼して事を任せうる人格の育成」で掲げられているような、責任感があり、心身ともに健全な学生の育成を目指す。

担当する心理の領域においては、学生が心理に関する基礎的知識を修得し、人の心の動きや行動を科学的に考える力をつけることを目標とする。同時に、学生自身が心の健康を保ちながら、青年期課題を乗り越えられるように指導する。

前年度の授業評価はアンケート実施科目においては、ほとんどが学校平均より高く、総じて良いといえる。ただ、多人数クラスが多いためほとんどが一方向的な講義形式にならざるを得ない。これをどのようにして双方向性のある授業にし、それぞれの学生の良さが伸びていくような授業にするかが課題である。私語を押さえながらも自由な発言が飛び交い、学生の着想がどんどん表現され、それを整理していくのが教員の役目というような授業が目標である。

(計画)

カウンセリング基礎演習・演習では模擬カウンセリング実施し、学生が相互に意見を述べ合える授業にする。この授業においては目標に掲げた「個の良さを最大限に引き出す」授業を可能にすることができる。総合演習Ⅰ・Ⅱでは、グループワーク、構成的エンカウンター、サイコドラマ等体験的学習を中心に学生が対人スキルを向上し、他者理解・自己理解を深める。この授業は目標に掲げた「真に信頼して事を任せうる人格の育成」を目指したい。人間と心理、カウンセリング概論では各分野の基礎的な知識を習得させる。教育相談では基礎知識に加え、今の教育現場の現状を伝える。これを行うことで、教員志望の学生がより教育現場に対し興味を持てるようにする。専門演習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳでは、卒業論文を書くという目標のもとに文章力、思考力、プレゼンテーション力を総合的に養う。人数が多くないので、個人の特徴を考慮しながら授業を進める。

○担当科目（前期・後期）

(前期) 心理学研究法、人間と心理、教育相談、カウンセリング基礎演習、基礎演習Ⅰ、総合演習Ⅰ、専門演習Ⅲ

(後期) カウンセリング概論、カウンセリング演習、基礎演習Ⅱ、総合演習Ⅱ、専門演習Ⅳ、卒業研究

○教育方法の実践

卒業研究では、本年度は6名のゼミ学生が卒業論文の単位申請をした。結局書き上がったのは4名であったが、それぞれ質の良いものになったと考える。その内3名はアンケート調査から分

析、先行研究を踏まえた分析とオーソドックスではあるが、時間と手間をかけた研究になった。カウンセリング基礎演習・演習では学生の模擬カウンセリングを録画し、逐語録を作成してカウンセリング方法の検討を行った。自分たちのカウンセリング映像を見ながらの検討というのは独自の方法であるといえる。総合演習Ⅰ・Ⅱでは、構成的グループエンカウンター他を用い、自己理解、他者理解が深まるように体験的学習を行った。総合演習Ⅱのフィールドワークでは、名東福祉センターを利用する高齢者との交流を行った。専門演習Ⅰ・Ⅱではグループで、Ⅲ・Ⅳでは各学生が個別に卒業論文・ゼミ論文を作成した。人間と心理、教育相談、カウンセリング概論は多人数クラスであるため講義形式となりグループワーク等の体験的学習は難しい。しかし、できるだけ相互学習が行えるようにクイズ形式や2人組ワークが行えるよう工夫した。

○作成した教科書・教材

人間と心理、教育相談、カウンセリング概論、保育教育相談ではパワーポイント用スライドを各科目、約150枚を作成。カウンセリング基礎演習、カウンセリング演習では模擬カウンセリングの収録DVDを18枚、各逐語録、箱庭シートを作成。総合演習Ⅰ・Ⅱでは、グループワークのためのワークシート、カード、振り返り用シート等ふまねっと教材を各時間分作成した。

○自己評価

学生アンケートによる授業評価では、前期の教育相談、カウンセリング基礎演習においては平均4.3(全科目平均4.0)、後期のカウンセリング概論、カウンセリング演習においては平均4.4(全科目平均3.9)であり、おおむね目的とした授業効果が発揮されたものと考えている。

今年度の目標として掲げていた多人数クラスにおける相互学習の方法においてはクイズ形式などを取り入れ多少の工夫を加えた。

専門演習のⅠ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳでは、論文作成に関する準備と制作をみっちり行うことができ、研究を通して学生との関わりを深めることができたと考える。

Ⅱ 研究活動

○研究課題

1. 発達障害傾向をもつ学生の就業支援の研究

平成25年度から29年度まで科学研究費の補助を得て「発達障害傾向で就業困難が予測される学生に対する診断によらない支援研究」を進めてきた。発達障害傾向の学生のピックアップのための尺度研究やその妥当性、信頼性の研究についてはほとんど終了し、学会発表、学会誌等多くの発表の機会を得た。次はそれに続くための就業に関する支援研究を行わなくてはならない。ニートという言葉で表される就業困難な若者の問題に対し、教育機関において果たすべき課題は多い。この研究は、発達障害とは診断されていないが、似た特性をもち、就業に困難を示す可能性のある学生に対し、新しい切り口からの支援方法を開発するものである。実際に外部機関、若者ハローワークや就労移行支援所等との連携を行いそれら学生の在学中の就労体験を行う。彼らは個々にもてる能力の強弱に極端な差を有するため、周りからの適切な支援無しでは社会適応が難しい。この研究は本当にオンリーワンが輝くための研究である。

2. 小中高等学校生徒を対象としたメンタルヘルス維持と不適応防止の研究

小中学校では不登校問題が未だに改善をみているわけではない。この不登校つまり学校不適応の状態を、不適応兆候、不登校傾向、スクールカウンセラーへの関心とプロセスを追って展開すると仮定した研究である。平成26年度から多くの学会発表を重ねてきた。本年度は論文と

して発表することが目標である。また、この調査は不応度合いと「見通し力」の関係についても調べている。大学生版「見通し力尺度」(肥田ら 2015)は大学生の就業力向上の一環として作成しているが、中・高校生版では、学校不応やメンタルヘルス維持としての使用を目的とする。

○目標・計画

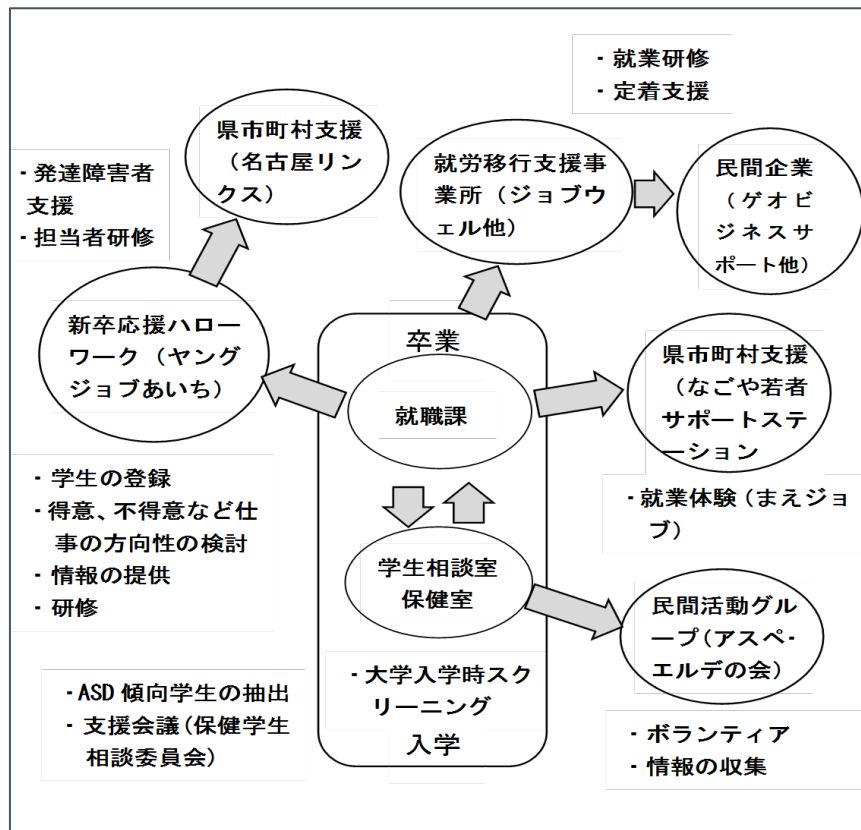
(目標)

1. 「発達障害傾向で就業困難が予測される学生に対する支援研究」に関する論文を発表すること。現在のネットワークを広げて、要支援学生の役に立つこと、またそのシステムを私以外のどの先生でも使用することができる構造化を図る。現在は人的な要素に大きく頼っているのでどの人手もが利用できる要支援学生のための学内外ネットワークを構築する。
2. 小、中、高等学校において収集したメンタルヘルス向上のための資料を分析し数多くの発表をしてきた。今年度はそれらをまとめて論文として発表する。

(計画)

1. 「発達障害傾向で就業困難が予測される学生に対する診断によらない支援研究」尺度の作成に関する研究論文は現在執筆中で、年度内に発表したい。

就労移行支援所(リタリコ、ジョブウェル等)やヤングジョブあいち等、また学内でのネットワーク、(下図)を展開していきたい。



2. メンタルヘルス調査の質的分析結果を日本心理臨床学会(2018年9月、神戸)において発表する。論文に関しては日本心理臨床学会に提出しており、査読中であるため本年度中には発表される見通しである。

○2011年4月から2019年3月の研究業績(特許等を含む)

(著書)

- ・澤田節子、肥田幸子、尚爾華、中野匡隆、谷村祐子、木野村嘉則「地域在住高齢者の心の健康支援」第4章 『地域創造研究所叢書、唯学書房、2017年』
- ・肥田幸子、堀篤実、松瀬留美子、鈴木美樹江、清水紀子、八木朋子、伊藤佐枝子、吉村朋子「発達障害の子どもをもつ親への支援から見えたもの」第8章 『子どもの心を支えるー今を生きる子どもたちの理解と支援』地域創造研究所叢書、唯学書房、2016年、iv-vi、98-116
- ・宗貞秀紀、堀篤実、吉村譲、肥田幸子、宮本佳範、手嶋慎介、松村幸四郎「ドメスティックバイオレンスー女性への人権侵害がなぜなくなるらないかー」第4章 『人が人らしく生きるためにー人権について考えるー』 地域創造研究所叢書、唯学書房、2013年、63-75

(学術論文)

- ・鈴木美樹江、大塚敬子、肥田幸子、向井麻美子、廣浦美穂「小学生の学校不適応感がスクールカウンセラーへの関心に与える影響」『心理臨床学研究』Vol. 36、No. 6、2019年、査読有り
- ・肥田幸子、堀篤実、鈴木美樹江「自閉症スペクトラム障害傾向を有する学生のための“見通し力”尺度作成の試み」『学生相談研究』、第37巻、1号、2016年、27-36 査読有り
- ・肥田幸子「自閉症スペクトラム傾向の子どもをもつ母親の心理的体験過程」『東邦学誌』第45巻、1号、2016年、49-59
- ・肥田幸子、丸岡利則、照屋翔大、正岡 元「大学への帰属感と意味づけが学校不適応に及ぼす影響」『東邦学誌』第45巻1号 2016年、61-71
- ・肥田幸子「発達障害傾向をもつ高校生の自己認知の特性」ー教師の理解との相違点を探るー『学校メンタルヘルス』Vol. 18-1、2015年、22-29 査読有り
- ・澤田節子、肥田幸子、尚爾華、中野匡隆「地域在住高齢者の健康維持活動支援に関する調査」『東邦学誌』第44巻、第2号、2015、147-161
- ・肥田幸子、澤田節子「大学生の進路選択行動に影響を与える要素」『東邦学誌』第41巻、第10号、2012年、147-161
- ・肥田幸子、澤田節子「大学生の就業意識形成のプロセスに関する研究」『東邦学誌』第40巻、第1号、2011年、153-168

(学会発表)

- ・谷口由香莉、肥田幸子、鈴木美樹江、大塚敬子、馬場ひとみ「学校適応に関する SCT (Sentence Completion Test) 研究 (7)」2018 神戸国際会議場 日本臨床心理学会第37回秋期大会論文集 PB1-H
- ・馬場ひとみ、鈴木美樹江、大塚敬子、谷口由香莉、肥田幸子、加藤大樹「小学校におけるロールフルネスに関する研究 (1)」ー小学生版ロールフルネス尺度の因子構造の確認と信頼性の検討ー 2018 神戸国際会議場 日本臨床心理学会第37回秋期大会論文集 PB1-E
- ・大塚敬子、鈴木美樹江、馬場ひとみ、谷口由香莉、肥田幸子、加藤大樹「小学校におけるロールフルネスに関する研究 (2)」ー学年差による検討ー 2018 神戸国際会議場 日本臨床心理学会第37回秋期大会論文集 PB1-F
- ・鈴木美樹江、大塚敬子、馬場ひとみ、谷口由香莉、肥田幸子、加藤大樹「小学校におけるロールフルネスに関する研究 (1)」ー不適応要因とロールフルネスが不適応徴候に与える影響ー 2018 神戸国際会議場 日本臨床心理学会第37回秋期大会論文集 PB1-G
- ・肥田幸子、谷口由香莉、鈴木美樹江、大塚敬子、馬場ひとみ「学校適応に関する SCT (Sentence Completion Test) 研究 (6)」2017 パシフィコ横浜 日本臨床心理学会第36回秋期大会論文

集 PB3-19

- ・谷口由香莉、肥田幸子、大塚敬子、馬場ひとみ、鈴木美樹江「学校適応に関する SCT (Sentence Completion Test) 研究 (5)」2017 パシフィコ横浜 日本臨床心理学会第 36 回秋期大会論文集 PB3-18
- ・大塚敬子、鈴木美樹江、馬場ひとみ、谷口由香莉、肥田幸子「小学生における不適応プロセスの研究 (6) —3 年間の縦断的研究による学年佐野比較検討—」2017 パシフィコ横浜 日本臨床心理学会第 36 回秋期大会論文集 PB3-20
- ・馬場ひとみ、鈴木美樹江、大塚敬子、肥田幸子、谷口由香莉「小学生における不適応プロセスの研究 (7) —3 年間の縦断的研究からみた学校不適応感と欠席日数との関係—」2017 パシフィコ横浜 日本臨床心理学会第 36 回秋期大会論文集 PB3-21
- ・鈴木美樹江、大塚敬子、馬場ひとみ、谷口由香莉、肥田幸子「小学生における不適応プロセスの研究 (8) —3 年間の縦断的研究からみた学校不適応感が欠席日数に与える影響」2017 パシフィコ横浜 日本臨床心理学会第 36 回秋期大会論文集 PB3-22
- ・肥田幸子、堀篤実、鈴木美樹江「ASD 傾向学生のための就業力尺度の作成 (1) —項目の作成と信頼性の検討—」2016 かがわ国際会議場 日本教育心理学会第 58 回総会論文集 PD87
- ・堀篤実、肥田幸子、鈴木美樹江「ASD 傾向学生のための就業力尺度の作成 (2) —尺度の再検査信頼性と妥当性の検証—」2016 かがわ国際会議場 日本教育心理学会第 58 回総会論文集 PD88
- ・鈴木美樹江、肥田幸子、堀篤実「ASD 傾向学生のための就業力尺度の作成 (3) —見通し力が就業力に及ぼす影響—」2016 かがわ国際会議場 日本教育心理学会第 58 回総会論文集 PD89
- ・山内貴恵、肥田幸子、谷口由香莉、向井麻美子、鈴木美樹江「学校適応に関する SCT (Sentence Completion Test) 研究 (3) —学校不適応傾向とクラスの友だち及び通学班の関連—」2016 パシフィコ横浜 日本臨床心理学会第 35 回秋期大会論文集 PB05-03
- ・鈴木美樹江、馬場ひとみ、肥田幸子、廣浦美穂、山脇麻由美、大塚敬子「学校適応に関する SCT (Sentence Completion Test) 研究 (4) —学校不適応傾向とスクールカウンセラー及び教師イメージとの関連—」2016 パシフィコ横浜 日本臨床心理学会第 35 回秋期大会論文集 PB05-04
- ・肥田幸子、堀篤実、鈴木美樹江「見通し力尺度作成の試み (1)」—大学生を対象として— 2015 日本教育心理学会 第 57 回総会 新潟朱鷺メッセ 日本教育心理学会 第 57 回総会論文集 2015
- ・堀篤実、肥田幸子、鈴木美樹江「見通し力尺度作成の試み (2)」—尺度の信頼性と妥当性の検証— 2015 日本教育心理学会 第 57 回総会 新潟朱鷺メッセ 日本教育心理学会第 57 回総会論文集 2015
- ・鈴木美樹江、肥田幸子、堀篤実「見通し力尺度作成の試み (3)」—AQ 下位尺度が見通し力に及ぼす影響— 2015 日本教育心理学会 第 57 回総会 新潟朱鷺メッセ 日本教育心理学会 第 57 回総会論文集 2015
- ・肥田幸子、鈴木美樹江、山内貴恵、廣浦美穂、大塚敬子、向井麻美子「小学生版「見通し力尺度」作成の予備研究」2015 日本臨床心理学会 第 34 回大会 神戸国際会議場 日本臨床心理学会 第 34 回大会論文集 2015 634
- ・廣浦美穂、鈴木美樹江、大塚敬子、向井麻美子、山内貴恵、肥田幸子「小学生における不適応プロセスの研究 (1)」—横断的調査による学年差・性差の検討— 2015 年 日本臨床心理学会 第 34 回大会 神戸国際会議場 日本臨床心理学会 第 34 回大会論文集 2015 629

- ・大塚敬子、鈴木美樹江、山内貴恵、廣浦美穂、向井麻美子、肥田幸子「小学生における不適応プロセスの研究（2）」—縦断的調査による学年差の検討— 2015年 日本臨床心理学会 第34回大会 神戸国際会議場日本臨床心理学会 第34回大会論文集 2015 630
- ・向井麻美子、鈴木美樹江、大塚敬子、山内貴恵、廣浦美穂、肥田幸子「小学生における不適応プロセスの研究（3）」—縦断調査による不適応プロセス尺度間の関連— 2015年 日本臨床心理学会 第34回大会 神戸国際会議場 日本臨床心理学会 第34回大会論文集 2015 631
- ・鈴木美樹江、大塚敬子、向井麻美子、廣浦美穂、山内貴恵、肥田幸子「小学生における不適応プロセスの研究（4）」—交差遅延モデルを用いた影響関係の検討— 2015年 日本臨床心理学会 第34回大会 神戸国際会議場 日本臨床心理学会 第34回大会論文集 2015 632
- ・山内貴恵、鈴木美樹江、肥田幸子、大塚敬子、向井麻美子、廣浦美穂「小学生における不適応プロセスの研究（5）」—学校不適応プロセスと不登校系呼応との関連— 2015 日本臨床心理学会 第34回大会 神戸国際会議場 日本臨床心理学会 第34回大会論文集 2015 629
- ・鈴木美樹江、肥田幸子ほか「小学生版学校不適応プロセス尺度作成の試み（3）」日本臨床心理学会 第33回大会 パシフィコ横浜 2014年 日本臨床心理学会 第33回大会論文集 2014 442
- ・HidaSachiko OkuboYoshimi SuzukiMikie「Perception Gap between Japanese Teachers and High-school Students on Developmental Disorder Tendency」The 35th International School Psychology Association Conference (ECP 2013) 17-20 July 2013 Porto Portugal
- ・鈴木美樹江、肥田幸子ほか「高校生の不適応徴候感が登校状況に与える影響過程」日本臨床心理学会 第32回大会 パシフィコ横浜 2013年 日本臨床心理学会 第32回大会論文集 2013 470
- ・肥田幸子、澤田節子「大学生の進路選択行動を支える大学の支援」第54回教育心理学会総会 琉球大学 2012年11月 日本教育心理学会発表論文集 2012 188

<学会分科会>

- ・肥田幸子 大学教育改革フォーラム2017「発達障害及び発達障害傾向学生への支援の現状」発表者 2018年3月10日
- ・肥田幸子 日本フェミニストカウンセリング学会第10回大会「発達障害と女性支援」コーディネーター2013年

(その他)

- ・肥田幸子、丸岡利則、照屋翔大、正岡元「人間学部中途退学防止調査報告書」2015年
- ・肥田幸子「発達障害と女性支援」『フェミニストカウンセリング研究』Vol.11、2014年、106-109
- ・肥田幸子他「学校と通級指導員にSCの果たせる役割」『学校臨床心理士活動報告書』2014年

○科学研究費補助金等への申請状況、交付状況（学内外）

- ・平成24年度：科学研究費補助金（基盤研究C）交付（代表者）

○所属学会

日本心理臨床学会、日本教育心理学会、日本発達心理学会、日本小児保健協会、日本EMDR学会、日本学生相談学会

○自己評価

メンタルヘルス関係の論文1本と学会発表4点を仕上げる事ができた。ことに論文が掲載された『心理臨床学研究』は1回の発行部数が29300部にのぼり、臨床心理学では最も権威あるジャ

一ナルである。ファーストではないが、若い研究者たちと協力しつつ発表することができた。学会発表も小学生のメンタルヘルスに関するものを数点発表した。

就労支援に関する論文は本年度中には掲載されなかったが、次年度には学術論文として掲載予定である。

また、目標に掲げた「発達障害傾向で就業困難が予測される学生に対する支援現在のネットワークを広げて、要支援学生の役に立つこと、またそのシステムを私以外のどの先生でも使用することができる構造化を図る。現在は人的な要素に大きく頼っているのでどの人でも利用できる要支援学生のための学内外ネットワークを構築する」という点においては、大きく前進したといえる。学内においては保健学生相談センターが立ち上がり、心理的に困難を抱える学生や合理的配慮を求める学生、社会的自立に関して何らかの援助が必要な学生を支援するシステムが立ち上がった。学外では、新しく名古屋市発達障害者支援センター（りんくす名古屋）や若者支援ネットワーク（SyNet）との共同も始まり、要支援学生に対するネットワークの輪は広がっている。

Ⅲ 大学運営

○目標・計画

（目標）

就職委員会の委員としてその責務を果たす。保健学生相談委員会委員として責務を果たす。

就職委員としては現在の自分の研究課題である「発達障害傾向で就業困難が予測される学生に対する支援研究」とも関連があり、力を発揮することができる。一人でも多くの学生が自分にあった仕事を得て個々が輝けるように支援する。

学生相談室の責任者として、高校も含めた学園全体の心理支援を行う。心理的に支援が必要な学生だけでなく、一般学生のメンタルヘルスを向上し、延いては中途退学予防に貢献する。研究課題でもある、大学生・高校生のメンタルヘルス予防システムの構築を図る。

（計画）

大学では新入学生に対して全員のメンタルヘルスチェックを実施した。この結果を分析し、個々の学生が示すメンタル的特徴をゼミ担当教員と話し合いたい。それによって一人でも中途退学、除籍の学生を減らしたい。

年々、心の問題をもつ学生は増えてきている。心理的不適応状態にある大学生のカウンセリングを引き続き行う。

高校においては、新1年生全員のメンタルヘルスチェックを実施し、クラスの担任にフィードバックする。1年生の担任教員全員の面談を行う。本年度はメンタルヘルスチェックの要支援生徒に対して、全員の面談を実施予定である。

○学内委員等

学生・保健相談委員会委員、キャリア支援委員会委員

○自己評価

キャリア支援委員会委員としての責務を果たした。保健学生相談委員会委員としては一委員としての役割のみならず、学生相談室責任者として要支援学生の報告、検討を行った。また、外部カウンセラーと保健担当職員が連携し学生支援が進むように連絡調整を行った。

目標とした新入学時のメンタルヘルス調査を活用した中途退学防止と発達障害傾向学生の支援においては、時間不足で各ゼミ担当と十分な話し合いの時間を持つことができなかった。今後の

課題といえる。

高校においては、本年度より週1回のチームミーティング（メンタルヘルス会議）が開かれることになり、毎回参加をしている。これによってよりきめ細やかな生徒対応ができるようになった。

IV 社会貢献

○目標・計画

（目標）

青少年の心理的不適応、発達障害の研究が広く社会に役立つように臨床や啓発活動を進める。発達障害に関しては中学、高校から現職教育の養成も多く、要請に応じていきたい。DVに関する知識啓蒙のため活動をする。加えて、老年期の心理支援の活動も行う。

（計画）

発達障害に関する講演依頼はすでに小牧工業高校から（2018年5月）と日本教育相談学会愛知支部尾張地区カウンセリング講座（2019年2月）の依頼がある。

DVに関する啓蒙に関しては名古屋市の社会講座において要請があれば実施する。

老年期の心理支援は「ふまねっと」を使って毎年、名東福祉センターで学生と共に実施している。

○学会活動等

- ・日本教育相談学会尾張支部 研修会 「発達障がい理解と対応」講師 2018.2.10

○地域連携・社会貢献等

- ・小牧工業高校 現職教育「発達障害の理解と対応」ー将来に向けての支援ー 2018.6.8
- ・東邦高校 現職教育 「発達障がいの理解を深める」 2018.12.21
- ・名古屋市男女平等参画推進センター 2018年度第9回スーパービジョン 2018.12.19
- ・働くを考える 若者支援フォーラム 2019「診断にとられない支援を実現するために」 2019.2.23

○自己評価

発達障害及び発達障害傾向の学生・生徒の対応に関しては現職の教員たちも対処に苦慮している。教員のための現職教育を2箇所で開催し、大学内でもSDとして全教職員に対して講話を行った。現在、発達障害者支援は草の根的なところでも大きな動きを見せている。これらとネットワークができてきたのは評価できる。

少年院での矯正教育の支援は20年を超えた。この活動は現在休止しているが、DV被害女性対してのカウンセリング、電話相談、社会啓発活動と並んでこれらのボランティアは今後も続けていきたい。

V その他の特記事項（学外研究、受賞歴、国際学術交流、自己研鑽等）

自己研鑽として、国家資格「公認心理師」に挑戦し、その資格を取得した。

VI 総括

メンタルヘルス分野の論文（査読つき）が1本と同分野の研究発表を4点学会で発表することができた。発達障害傾向の学生の就業支援に関しては現在査読中で2019年度にはジャーナル掲載が可能になると考えている。この分野に関しては重点が調査研究からネットワークを作る社会的な活動研究へと変化をしている。どの研究であっても目標とするところは社会貢献であり、成果はい

かに社会に対して有益なものを生み出していけるかである。この研究は最初の調査、尺度作りから現在の行政・民間のネットワークへの協力と社会への啓発活動につながり、今後も成長を続ける可能性がある。

授業に関しては、日常の講義やオープンキャンパス、高大連携授業もよい評価を得ているので、よりいっそうの工夫と開発を心がけたい。

学生相談室の責任者としては学生のケアが面接室内に留まらずいろいろな部署と共働をして学生の支援をしていく必要が生まれてきた。保健・学生相談センターの開設までこぎ着けることができたのは成果であるといえる。今後はこのシステムが有効に機能し、中途退学防止や発達障害傾向学生の就労支援にまで活用できるようにしていかなければならない。

4月に新入生全員にメンタルヘルスチェックを実施した。そのデータを中退防止や就労支援のために十分に生かし切れていないのは今後の課題といえる。高校では同様のメンタルヘルスチェックを実施してそれを各担任と共有し、後半の担任全員面接というシステムを実施している。大学においても前述のセンターを活かしつつ、学生支援のシステムを作っていきたい。

今年度は心理関係の国家資格である「公認心理師」の取得に努力した。本学では新しく「公認心理師」を取得するための科目が置かれるコースを新設する。その中には教員が資格を持っていない科目もあり、「公認心理師」取得は必須であった。今後はこの資格を教育や心理治療に有効に使っていきたい。

以 上

所属学部 学科	職位	氏 名
人間健康学部 人間健康学科	教授	藤沢 真理子
最終学歴	学 位	専門分野
大阪府立大学大学院社会福祉学研究科 博士後期課程修了	博士	社会福祉学

I 教育活動

○目標・計画

(目標)

基本的な福祉の知識を学び、建学の精神である「真に信頼し事を任せうる」人材となるように、教育活動を進める。

(計画)

人間健康学部において 2018 年度前期に担当する科目は、「社会福祉概論」「児童家庭福祉論 a」「児童家庭福祉論 b」「基礎演習 I」「専門演習 I」「専門演習 III」である。

2018 年度後期に担当する科目のうち、「人間と地域」では防災と福祉について授業を進める。ほかに、「地域福祉論」「社会福祉援助技術論」「専門演習 II」「専門演習 IV」「基礎演習 II」を担当する。

医療・福祉・介護関連の企業に多くの学生が就職することを考え、基本的な福祉の知識と技術を学べるように授業を進める。

○担当科目（前期・後期）

(前期) 児童家庭福祉、社会福祉概論、基礎演習 I、専門演習 I、専門演習 III

(後期) 人間と地域、地域福祉論、社会福祉援助技術論、基礎演習 II、専門演習 II、専門演習 IV、卒業研究

○教育方法の実践

「児童家庭福祉」「社会福祉概論」「人間と地域」「地域福祉論」など多人数のクラスでグループワークを実施することは難しいが、2018 年度に方法を工夫し、ディスカッションおよびグループワークを取り入れることができた。学生たちからはグループワーク等で幅広い視点を学ぶことができたと評価された。

○作成した教科書・教材

講義内容に即したパワーポイント資料や動画を作成した。

○自己評価

学生たちが「オンリーワンを一人にひとつ」獲得できるように、授業展開していった。昨年度は本学 1 年目であり、人間健康学部の学生がどのようなニーズを持っているのか把握するのに時間がかかった。今年度は 2 年目となり、学生が何を望んでいるのか理解できたので、学生から将来に役立つと評価された。とくに、「人間と地域」はオリジナルな内容で実施し、毎年学生のニーズに合うように工夫している。積極的に授業に参加し、学生自身も最初はグループワークに戸惑いがあったとのことであるが、回を進めるにしたがって、グループワークの面白さがわかったという評価が多かった。福祉関係の科目はテキストを使用し、人間健康学部の学生が興味関心をもつ内容としているが、さらに工夫していきたいと考えている。

ゼミ活動では、4年生は就職した時に社会で活躍できるよう知識とスキルを獲得できるプログラムを実施した。3年生は防災を勉強するために集まったメンバーであり、防災に関する基礎知識とスキルを獲得できるプログラムを実施した。防災士試験にチャレンジした学生もいる。2018年度大学祭では、名東区と連携して、認知症サポーター養成講座ならびにGPSを使った徘徊高齢者支援訓練のスタッフとして3年ゼミ生が参加し、大学ホームページで紹介された。2019年度は、3年で学んだ防災の知識を地域の人たちに普及啓発する活動に取り組んでもらうよう計画している。

基礎演習の運営を谷村先生と一緒に担当し、10人の基礎演習担当教員が演習をスムーズに実施できるように一年間活動した。前期のスポーツ大会や後期のプレゼンテーションなどが、特に学生から評価が高かった。

II 研究活動

○研究課題

防災福祉について研究を進める。とくに、高齢者や障がい者など災害時避難する際に支援が必要な人たちを避難できるように準備する「避難行動要支援者支援」について研究を進める。

○目標・計画

(目標)

現在、市町村の地域防災計画において、避難行動要支援者名簿の策定は義務化されているが、実際にどのように避難するのか、避難行動要支援者個別避難計画の策定ができていない市町村は少ない。避難行動要支援者個別避難計画策定をする際どのような点に留意すればいいのか研究を進める。

(計画)

大阪府田尻町において避難行動要支援者個別避難計画の作成を支援してきた。その実践をまとめるとともに、名古屋市名東区の「めいとう総合見守り支援事業」と比較検討していきたい。

○2011年4月から2019年3月の研究業績（特許等を含む）

(学術論文)

- ・藤沢真理子「賀川豊彦と関東大震災～100年続く復興支援～」『東邦学誌』第47巻第2号、2018年12月、15～32頁。
- ・藤沢真理子「児童福祉に貢献した女性たち～賀川ハルと村岡花子～」『東邦学誌』第47巻第1号、2018年6月、1～17頁。
- ・藤沢真理子「防災福祉コミュニティと避難行動要支援者支援」『東邦学誌』第46巻第2号、2017年12月、27～46頁
- ・藤沢真理子「VYS運動の歩み～ボランティア学習理念を中心に～」『聖カタリナ大学・聖カタリナ大学短期大学部研究紀要』23号、2011年、75～92頁（査読あり）

(その他)

- ・Mariko Fujisawa “Haru Kagawa and Hanako Muraoka” 賀川記念館（神戸）、2014年
(<http://core100.net/eng/HaruandHanako.pdf>)

○科学研究費補助金等への申請状況、交付状況（学内外）

○所属学会

日本地域福祉学会、日本老年社会科学会、日本社会事業史学会、日本福祉教育・ボランティア学習学会

○自己評価

研究においても、「オンリーワンを一人にひとつ」を目指し、防災と福祉の研究を進めた。2018年度の研究活動としては、防災に関する論文1本と、児童福祉に関する論文1本を作成した。とくに、賀川豊彦の関東大震災復興支援は、その活動が100年続いており、現在、日本の代表的な防災センターである「人と未来防災センター」の礎となっていることを明らかにした。今後30年以内に起こる確率が70～80%となった南海トラフ地震に備えて、賀川豊彦の復興支援はさまざま示唆に富んでおり、神戸の賀川記念館図書室で保管し幅広い人や団体に役立ててほしいと考えている。また、避難行動要支援者支援の研究では、地域との協働は不可欠であり、昨年度研究した神戸市防災福祉コミュニティの取り組みが名古屋市においても役立つことが明らかとなった。さらに、次年度につなげていきたい。

III 大学運営

○目標・計画

(目標)

人間健康学部執行部の一員として学部運営にあたる。また、地域連携センター副センターとして地域連携センターの運営にあたる。さらに、研究活動委員会において、研究活動の活性化に努める。

(計画)

人間健康学部執行部の一員としては人間健康学部の学生がそれぞれの目的を達成し、卒業時に「オンリーワンを一人にひとつ。」を獲得できるように支援する。また、人間健康学部運営が円滑に進むように支援する。そして、地域連携センター副センターとしては、学生や教職員がかかわっている地域連携活動の一覧表を作成し、それらの活動を広報宣伝することで愛知東邦大学のブランディングにつながるのではないかと考えている。第三に、研究活動がさらに活発になるように研究活動委員として活動する。

○学内委員等

人間健康学部執行部、研究活動委員会委員、地域連携委員会委員

○自己評価

人間健康学部執行部の一員として、人間健康学部の学生がそれぞれのオンリーワンを見つけることができるように支援してきた。今年度は専門演習の形式を変更し、今まで各教員で行っていたゼミ活動をコース制度とした。これにより、コースの特徴が明確となった。また、コース選択や総合演習希望教員の選択を、今年度後期の成績GPAによって配置することとし、学生たちが集中して勉強する様子が見られた。

研究活動委員会委員としては、今までの紙媒体の東邦学誌をウェブベースとした。これらの変更にともなって、東邦学誌の規定を大幅に改定した。また、投稿原稿の校閲を行い、より精度の高い原稿内容に寄与した。

地域連携センター副センター長としては、執行部会議により会議内容を精査し、ATUCCの変更や地域連携活動報告会の開催を実施した。昨年度の報告会では学生たちが最後まで残らず、互いの活動をシェアすることができなかつたので、表彰する形式に変え、今年度は盛り上がった。ただ

し、口頭発表の方法では大きな問題がなかったが、ポスター発表については掲示方法が見えにくい、それぞれが離れており、真ん中に人が集まってしまったなど反省点があったので、来年度さらに改良していきたい。

IV 社会貢献

○目標・計画

(目標)

名古屋市名東区において、社会貢献をしていく。

(計画)

5月13日名東の日・区民まつりにおいて、愛知東邦大学コミュニティカレッジとして開催する認知症サポーター養成講座をサポートし、一人でも多くの人に認知症理解をしてもらう。また、学生が地域の避難訓練や避難所開設訓練に参加するよう促す等で、地域の方々に学生の真面目さが伝わる支援ができればと考えている。

○学会活動等

○地域連携・社会貢献等

①認知症サポーター養成講座

5月13日名東区民祭りにおいて、名東区社会福祉協議会と連携して、認知症サポーター養成講座をサポートし、多くの区民と学生たちが参加し、認知症理解を深めた。また、11月11日大学祭においては、名東区役所、名東区社会福祉協議会と連携して、認知症サポーター養成講座とGPSを使った徘徊高齢者支援訓練を実施した。3年の藤沢ゼミ生がスタッフとして参加し、中日新聞にも掲載された。

②防災講座

2019年1月15日、愛知東邦大学コミュニティカレッジとして、「ママのための防災カフェ」を開講した。参加者は大人5名、乳幼児2名であった。受講満足度は高かった。

③防災ボランティア

2018年度に、名東区役所、名東区社会福祉協議会、名東区災害ボランティアの会と一緒に活動した防災ボランティアのイベントは以下の通りである。

- ・5月27日(日) 名古屋市総合水防訓練。
- ・9月2日(日)、なごや市民総ぐるみ防災訓練。
- ・11月17日(土) 名東区ボランティア展 in 藤が丘。
- ・11月24日(土) 名東区避難所設営訓練。
- ・12月8日(土) 名東区避難所リーダー養成講座。
- ・12月27日(木) 名東区保健センターにおいて子ども防災教室を開催。
- ・2019年1月24日、名東区社会福祉協議会において災害ボランティアセンター立ち上げ訓練。
- ・2019年1月26日、27日、2月2日、名古屋市災害ボランティアコーディネーター養成講座。

○自己評価

春の名東区民祭りと秋の大学祭では、地域連携委員会のコミュニティカレッジとして、名東区役所や名東区社会福祉協議会と連携して、認知症サポーター養成講座を実施した。多くの区民や学

生が参加し、認知症理解の普及啓発事業となった。名東区社会福祉協議会からは来年度も開催したいと要望を受けており、実施していきたいと考えている。

防災講座では、小さな子どもを持つ母親たちが、南海トラフ地震のことを心配しているが何から手を付けていけばいいのかわからないという声があり、それに応える目的で、ママのための防災カフェを実施した。非常に評価が高く、また翌日から防災に取り組んでいるという報告をしてくださり、有意義な講座であることを実感した。次年度の課題は、一人でも多くの人に防災の知識を伝えることである。

昨年度はケガのため地域活動に参加することが難しかったが、今年度は名東区役所、名東区社会福祉協議会、名東区災害ボランティアの会と共に、多くの防災イベントを実施した。来年度はさらに、一人でも多くの地域住民に防災の知識や技術を普及啓発していきたいと考えている。

V その他の特記事項（学外研究、受賞歴、国際学術交流、自己研鑽等）

VI 総括

教育活動について、愛知東邦大学2年目となり、学生の興味関心を把握できるようになってきた。学生のニーズに合わせた授業展開が行えるようになり、将来に役立つと評価が高くなっている。特に、防災について「人間と地域」という授業で、2年間で延べ250人近くが防災を学ぶ機会を提供できた。最初、興味がないと言っていた学生たちが、防災を自分の問題として取り組み始める姿は頼もしいものであった。来年度は学生たちが地域の人たちと共に活動できるような機会を提供していきたいと考えている。また、ゼミの学生が防災士試験にチャレンジしたり、試験を受けなかった学生たちも積極的に防災に取り組むようになってきた。グループワークを多く取り入れたことで、グループダイナミクスの効果があり、学生たちが主体的に学習するようになってきた。

研究活動では、児童福祉1本、防災1本の論文を作成した。とくに論文「賀川豊彦と関東大震災」は100年近く続く賀川豊彦の復興支援を伝えた。多くの示唆があると、神戸の賀川記念館関係者からも評価が高く、記念館に保管するとのことであった。

社会貢献活動については、昨年度けがのため、思うように活動できなかったが、今年度は名東区役所、名東区社会福祉協議会、名東区災害ボランティアの会とともに多くの防災イベントを実施し、子どもからお年寄りまで幅広い世代へ防災教育できた。また、コミュニティカレッジ講座として、ママのための防災講座を開催することができた。次年度も一人でも多くの人に防災の知識と技術を普及啓発していきたいと考えている。

以 上

所属学部 学科	職位	氏 名
人間健康学部 人間健康学科	准教授	上田 裕司
最終学歴	学 位	専門分野
兵庫教育大学大学院 学校教育研究科	修士 (学校教育学)	保健体育科教育学

I 教育活動

○目標・計画

(目標)

建学の精神である「真に信頼して事を任せうる人格の育成」を基盤に、人間の健康に関わる諸問題、また、昨今の激変する学校現場に求められる教員を一人でも多く養成する。

(計画)

- ・教職科目である「保健体育科教育法Ⅱ」の授業において良質の授業づくりは、きちっとした「学習指導案」の作成が必須であること。また、指導案作成から模擬授業に発展させ、その活動を通じて保健授業の指導の在り方・考え方の理解を目指す。上記に関連して「教育実習研究」の授業においても良好な態度で実習に臨めるように、私が経験してきた学校現場の状況を反映させながら、教師として求められる資質・能力の理解を図る。同時に、実習中における研究授業実施の際に作成する「学習指導案細案」に求められる必須事項（「教材観・生徒観・指導観」・「単元の評価計画と評価規準」など）を「記す意味」の理解を図るとともに、「記し方」を身に付けさせる。
- ・「生徒指導論」と「特別活動研究」においては、私の学校現場での経験に基づき、様々な事例を基に時代に適う「生徒指導の在り方」を探求する。特別活動研究においては新学習指導要領の内容を踏まえ、演習などを用いて実際の指導の在り方を学ばせる。
- ・「基礎演習」においては、個の個性の伸長を図るために、学生が提出したレポートの添削と必要に応じて面談を施す。
- ・「総合演習」では、「オンリーワンを、一人にひとつ」をコンセプトとして健康教育プログラムを用いながら、ライフスキルを向上させることから自尊感情（セルフエスティーム）の構築を目指す。

○担当科目（前期・後期）

（前期）健康・スポーツ実習、教育実習研究、生徒・進路指導論、基礎演習Ⅰ、総合演習Ⅰ、教育実習Ⅰ

（後期）保健体育教育法Ⅱ、特別活動研究、スポーツ実習、学校保健、基礎演習Ⅱ、総合演習Ⅱ、教育実習研究、教育実習Ⅰ

○教育方法の実践

- ・保健体育教育法Ⅱでは、受講学生全員に学習指導案の作成を求め、その指導案に基づいて模擬授業実践に発展させる活動を行った。その際、リフレクションカードを用いて学生が行う模擬授業での「教師行動」「授業展開」など全7項目の客観的記述から「優れた授業」とは何かについて検討させ、各学生の模擬授業実践での課題及び授業観の変容についてまとめさせ授業力の向上を目指した取組を行った。

- ・特別活動研究においては、学級活動の模擬授業についてテーマを選び、模擬授業後にグループでブレインストーミングを行い、当該模擬授業の有効性を検証する取組を行った。
- ・総合演習では前期、後期とも健康教育に関する6つの危険行動からテーマを選択させレポート作成を行った。

○作成した教科書・教材

- ・生徒・進路指導論（前期）は、担当した後半7回分のスライド（約140枚）を作成するとともにスライドに準拠したワークシートの作成を行った。
- ・保健体育教育法、特別活動研究に、学校保健などにおいてはスライドおよびスライドに準拠したワークシートの作成
- ・総合演習Ⅰ・Ⅱでは、活動シートの作成を行った。

○自己評価

本学の学生によるアンケートからの評価では、前期の教育実習研究の平均値4.6、生徒進路指導論の平均値4.3、後期の保健体育教育法の平均値4.3、特別活動研究4.1、スポーツ実習の平均値4.2であり、概ね授業の目的を果たすことができたと考えられる。特に、担当している教科が教職免許の取得に関わる教科であるということ、また、少人数（18名）の授業であることから学生の理解度を確認しながら進める授業の展開を今後も実践することが大切であると考えている。

Ⅱ 研究活動

○研究課題

- ・中学校教員の喫煙、飲酒、薬物乱用防止教育の指導に対する意識と関連要因—学校保健の推進のための方策の検討—
- ・学習指導要領による「健康と環境」の学習の授業実践研究

○目標・計画

（目標）

《中学校教員の喫煙、飲酒、薬物乱用防止教育の指導に対する意識と関連要因》

近年、我が国の青少年の抱える健康課題が多様化、深刻化する中で、未成年者による喫煙、飲酒、及び薬物乱用に関連する危険ドラッグの使用は大きな社会問題である。このため学校教育のさらなる充実強化が求められている。本研究では、中学校教員の薬物乱用防止教育に対する意識及び喫煙、飲酒、薬物に関する主な指導内容の認知、また、教員が求める研修会（喫煙・飲酒・薬物に関連する内容）等の実態を把握し、防止教育の充実と推進に関わる方策の検討を行う。

《学習指導要領による「健康と環境」の学習の授業実践研究》

近年の社会環境や家庭環境の急激な変化に伴い、児童・生徒の健康課題は多様化してきている。学校教育においては、児童・生徒が生涯に通じて健康な生活を送ることができるように指導することは究めて重要である。そのため保健授業で獲得した正しい知識と、知識を行動に結びつける力を育成することが必要である。本研究では、学習指導要領に示された内容に準拠し「健康と環境」について授業実践を行ない教育上の効果について検討する。

（計画）

《中学校教員の喫煙、飲酒、薬物乱用防止教育の指導に対する意識と関連要因》

K市、約650人を対象にした質問紙調査から関連要因を探る

《学習指導要領による「健康と環境」の学習の授業実践研究》

準実験モデルを用いて、K市、二校の中学生による授業実践前後に質問紙調査を実施し、授業介入群と実験群との比較から授業の効果評価を行う。

○2011年4月から2019年3月の研究業績（特許等を含む）

（著書）

- ・榎本智司，石鍋浩，上田裕司他 「中学校全面実施につながる移行措置実践ガイド」 第3章：新学習指導要領を生かした保健体育科〈保健〉の授業例，pp.82-83. 教育開発研究所 2018年.
- ・入谷仁士，上田裕司，萩原芳彦，笠原賀子，鬼頭英明，黒川修行，西端充志，真下真澄新.『新中学保健体育 教師用指導書 「教授ノート保健Ⅲ」 第4章 pp.88-91, pp94-98. 株式会社 学研教育みらい 2015年.
- ・荒木田美香子，井戸晶子，石坂友司，井上明子，入谷仁士，上田裕司他 24名.『新・中学保健 体育「新・中学保健体育 教師用 指導書」 朱書き編』 第4章 pp118-119, pp120-121. 株式会社 学 研教育みらい 2015.
- ・入谷仁士，上田裕司，萩原芳彦，笠原賀子，鬼頭英明，黒川修行，西端充志，真下真澄.「新・中学保健体育の研究 研究編保健Ⅲ」 第4章 pp130-137, pp138-145. 株式会社 学研教育みらい 2015年.
- ・上田裕司，岡田秀明，鬼頭英明，木全勝彦，佐藤朱美，平 武史，長岡佳孝.「学校環境衛生活動を生かした保健教育 ―小・中・高等学校で役立つ実践事例集―」 第3章，pp.26-40 第4章 pp.69-73. (公財) 日本学校保健会 2014年
- ・上田裕司，加藤哲太，鬼頭英明，田中俊昭，富岡 剛，橋本卓爾，望月真弓，山下和美.「自信をもって取り組める医薬品の教育 ―小・中・高等学校での実践事例集―」 第1章 p4, 第2章 pp8-18 第3章 pp61. (公財) 日本学校保健会 2012年.

（学術論文）

- ・上田裕司，西岡伸紀.「中学校教員の薬物乱用防止教育に対する意識の実態把握及び関連要因」 兵庫教育大学と大学院同窓会との共同論文集 第7号 pp23-29 2017年
- ・鈴木千春，上田裕司，香田由美，永田智子，鬼頭英明.「中学校保健分野の医薬品の学習におけるデジタル絵本教材活用の効果」 兵庫教育大学学校教育学研究 第29巻 pp51-58. 2016年. (査読あり)
- ・上田裕司，清水貴幸，鬼頭英明，西岡伸紀.「中学校保健学習の準備，生徒の反応，使用指導方法等に関する保健体育科教員の意識 ―質問紙調査の小単元別の分析から―」 学校保健研究 第57巻5号 pp.227-237 . 2015年 (査読あり)
- ・上田裕司.「学習指導要領による中学校・高等学校の医薬品の学習」 学校保健研究 第57巻5号 pp.409-411. 2015年 (査読あり)
- ・上田裕司，富岡 剛，鬼頭英明，西岡伸紀.「中学校学習指導要領による医薬品に関する授業実践研究」 学校保健研究第56巻6号 pp.220-227 2013年. (査読あり)
- ・上田裕司，西岡伸紀，鬼頭英明「中学校保健体育科教員の各小単元に関する意識の調査」 兵庫教育大学 学校教育コミュニティ 第3号 pp.53-58 2013年.
- ・富岡剛，上田裕司，鬼頭英明，西岡伸紀.『「新高等学校学習指導要領による「科目」保健の医薬品に関する授業実践研究』 教育実践学研究 第13巻 第1・2合併号 2012年. (査読あり)
- ・上田裕司，西岡伸紀，鬼頭英明.「中学校保健体育教員の各小単元に関する意識の調査研究」 兵庫

教育大学と大学院同窓会との共同研究論文集 第3号 pp. 29-34 2012年

- ・上田裕司, 西岡伸紀, 鬼頭英明. 「中学校保健体育教員の各小单元に関する意識の調査研究」兵庫教育大学と大学院同窓会との共同研究論文集 第3号 pp. 29-34 2012年
- ・上田裕司, 西岡伸紀, 鬼頭英明. 「中学校保健教員の保健学習に対する難易意識の把握及び支援方策の検討」兵庫教育大学と大学院同窓会との共同研究 研究成果報告書 第2号 pp53-58

(学会発表)

- ・山田淳子, 阿倍健太郎, 谷川尚己, 上田裕司. 「小学6年生における人型ロボット (Pepper) を活用した保健学習に関する研究」2018. 京都教育大学 第65回 近畿学校保健学会講演集.
- ・阿倍健太郎, 谷川尚己, 山田淳子, 上田裕司. 「中学3年生における人型ロボット (Pepper) を活用した保健学習に関する研究」2018. 京都教育大学 第65回 近畿学校保健学会講演集.
- ・谷川尚己, 阿倍健太郎, 上島智, 山田淳子, 上田裕司. 「大学教員と学校薬剤師が連携した小学校での保健学習」2018. 京都教育大学 第65回 近畿学校保健学会講演集.
- ・上田裕司, 西岡伸紀, 鬼頭英明. 「中学校教員の薬物乱用防止教育に対する意識」2017. 和歌山県立医科大学 第64回 近畿学校保健学会 講演集
- ・上田裕司, 西岡伸紀, 鬼頭英明. 「中学校保健体育科教員の小单元に対する指導の意識」2014. 関西科学福祉大学 第61回 近畿学校保健学会 講演集・
- ・上田裕司. 「中学校学習指導要領における医薬品に関する授業研究」2013. 兵庫教育大学ハーバランドキャンパス 第60回 近畿学校保健学会 講演集
- ・上田裕司, 鬼頭英明, 西岡伸紀. 「保健学習において使用される指導方法」2013. 兵庫教育大学ハーバランドキャンパス 第60回 近畿学校保健学会 講演集
- ・上田裕司, 西岡伸紀, 鬼頭英明. 「中学校保健学習での指導方法の活用および関連要因」2011. 名古屋大学 第58回 日本学校保健学会 講演集
- ・上田裕司, 鬼頭英明, 西岡伸紀. 「医薬品に関する中学生の意識」2011. 名古屋大学 第58回 日本学校保健学会 講演集

○科学研究費補助金等への申請状況、交付状況 (学内外)

○所属学会

日本学校保健学会、日本保健科教育学会、日本教育医学会、東海学校保健学会、近畿学校保健学会 (幹事)

○自己評価

2018年度の研究課題であった「中学校教員の喫煙、飲酒、薬物乱用防止教育に対する意識と関連要因」の論文投稿が計画通り進まなかった。大学教員として2年目となり大学での学務の様子も分かってきたので2019年度のできるだけ早い時期に投稿する予定である。

III 大学運営

○目標・計画

(目標)

所属する委員会及び大学関連の学内事業を理解して役割を果たす。

(計画)

所属する委員会及び大学関連の学内事業の推進が円滑に運営できるように自己の役割を果たす。

○学内委員等

総務委員会委員、学術情報センター運営委員会委員、中高教職課程委員会委員、教職支援センター運営委員会委員

○自己評価

私の担当教科（教育実習研究）と関わりの深い中高教職支援委員会の一員として教員採用試の現状について把握することができた。今年度、教育実習に送り出した学生においては、実習後に教員を希望する学生が昨年度より約3倍に増加したことについては、一定の成果が見られたと考えられる。今後の課題として現役の合格者を出すことができるようにその方策を検討すると同時に、学生への個別指導の在り方について研鑽を積む必要があると思われる。

IV 社会貢献

○目標・計画

（目標）

- ・近畿学校保健学会の幹事として学会活動の運営と推進に協力する。
- ・京都市における「薬物乱用防止教室」の講演講師の経験を生かして愛知県内においても啓発活動を推進する。
- ・教育現場で必須とされている「医薬品の正しい使い方」の指導方法などについて、啓発団体である「くすりの使用適正協議会」からオブザーバーとして依頼を受け、学校教育における望ましい指導の在り方の情報提供と啓発活動を行う。

（計画）

所属する学会及び教育関連の団体と連携し、学校教育における保健科教育全般の推進を行う。

○学会活動等

日本学校保健学会、日本保健科教育学会、日本教育医学会、近畿学校保健学会（幹事）、東海学校保健学会

○地域連携・社会貢献等

- ・薬の適正使用協議会教育部門オブザーバー：2018年
- ・厚生労働省薬物乱用防止教育中堅指導員（2014年から現在に至る）
- ・医薬品に関する教育の実践事例集作成委員会 委員【設置：（公財）日本学校保健会】
- ・学校環境衛生活動実践事例集作成委員会 委員：【設置（公財）日本学校保健会】

○自己評価

近畿学校保健学会において学校保健関連の研究発表の座長を務めた。また、高大連携授業授業では、健康教育の喫緊の課題である「薬物乱用防止教育」を1・2年生対象に指導を行った。その授業では、高校生が真剣に取り組んでいる様子が窺われ、一定の成果を残すことができたと感じている。

V その他の特記事項（学外研究、受賞歴、国際学術交流、自己研鑽等）

特になし

VI 総括

大学教員1年目であったことから、授業準備と授業実践に追われる一年であった。しかし、担当

している教職関連の科目においては、学生のアンケートの結果において前・後期とも高い評価を得ることができ、授業に向かう指導者の姿勢が反映されることを実感した。次年度もさらに高い評価が得られるようにさらに教材研究をしっかり行い実りある授業を行いたい。

一方、研究面では 2018 年度中に論文投稿を予定していたが実現できなかつたため、次年度の第一番目の自己課題として位置付けた。

以 上

所属学部 学科	職位	氏 名
人間健康学部 人間健康学科	准教授	小島 正憲
最終学歴	学 位	専門分野
日本体育大学体育科学研究科体育科学専攻 博士前期課程	修士 (体育科学)	体育科教育（器械運動）、 運動学、バイオメカニクス

I 教育活動

○目標・計画

（目標）

本学における「三つの言葉」（建学の精神／校訓／教職員の心構え）を念頭に置き、学生指導に従事する。具体的には、担当する授業（座学・実技・演習）すべてを含め「知的に楽しく学ぶ場」として捉え、指導していく。また、授業を通して「生きる力」を育て、社会性の高い教員やスポーツ指導者を目指す学生を育成していく。

（計画）

2017 年度に引き続き、担当する授業のなかで自己啓発の話をする（以下、話とする）。私の経験から、学生は自己啓発類の話をするに興味津々の面持ちで耳を傾けてくれるため、その状況を積極的に利用し、学生教育の一環として用いる。具体的な方法として、授業の節目に（3/15 回）ちょっといい話と題して 5 分程度の話をするこゝで、学生との距離を縮め、学生生活に何らかの刺激を与えたいと考えている。

授業評価（FD アンケート）については、満足のできる高い評価を得られた。一例として、「設問 2：総合的に判断して、この授業に満足できましたか」における学生の評価は 4.5 と高い数値であった。またその結果より、全学 FD 研究会において授業実践優秀教員として表彰して頂き、心より感謝している。今年度の授業においても初心を忘れず、引き続き学生が満足できる授業内容と、学生の教養を高められる授業をしていく。

○担当科目（前期・後期）

（前期）専門スポーツ実習（器械運動）、保健体育教育法Ⅰ、バイオメカニクス、基礎演習Ⅰ、専門演習Ⅰ、専門演習Ⅲ

（後期）教職実践演習、健康・スポーツ実習、基礎演習Ⅱ、専門演習Ⅱ、専門演習Ⅳ、卒業研究

○教育方法の実践

担当授業の演習及び実技全般において、コミュニケーション能力を向上させるためにグループワークを積極的に取り入れた。そのことで授業にまとまりができ、教員側としても非常に授業が運営しやすくなった。また、主に演習の事であるが「私の 1 週間の出来事」と題して、授業のはじめに一人 1 分から 3 分間程度の自己プレゼンテーションを実施し、人前で話すことを習慣化させた。結果として、学生の様子から個人差はあるものの自己プレゼンテーション能力に成長が見られたため、今後はレベルアップし、就職の面接に対応できるような内容と形式に変化させていく。

○作成した教科書・教材

専門スポーツ実習（器械運動）及び教職実践演習において、振り返りの質を向上させるための評価票（リフレクションシート）を作成した。そのことで、充実した授業の振り返りができたと考える。

○自己評価

私自身、納得のできる授業であったと考えている。特に一判断材料となる授業評価（FD アンケート）からは、満足のできる高い評価が得られた。例として、専門スポーツ実習（器械運動）から高評価ベスト3を挙げると、「設問10：教員の意欲や熱意が感じられましたか（4.9pt）」、「設問3：この授業内容について理解できましたか（4.8pt）」、「設問8：教員の声や話し方は聞き取りやすかったですか（4.8pt）」であった。

II 研究活動

○研究課題

器械運動における技の指導法について

○目標・計画

（目標）

バイオメカニクス及び運動学の手法を用いて、器械運動における技の外発的・内発的（コツ・カン）に起こる現象を解明することにより、技の本質的理解を深め、体育の現場指導に寄与することを目指す。現在の主な研究テーマとして、指導が難しいとされる「倒立の指導法」に焦点を当てた研究を進めている。

（計画）

研究日や夏季・春季休暇期間を利用して、研究活動を行う。具体的には、学会・講習会等へ積極的に足を運び、見識を広げつつ年1回以上の学会発表及び1本以上の論文投稿をする。また、自身が担当する授業（専門スポーツ実習：器械運動）から実態調査アンケートや教材ノートをつくり、内発的調査をすることで授業に反映させる。

○2011年4月から2019年3月の研究業績（特許等を含む）

（学術論文）

- ・橘廣、長谷川望、小島正憲『「教職実践演習」を中心とした教職科目の検討：アクティブラーニングの視点から』東邦学誌第46巻第1号、2017年、103頁～118頁
- ・小島正憲『倒立姿勢の「腰が反る」動作を改善するための事例的研究—マット運動から—』東邦学誌第46巻第2号、2017年、79頁～92頁
- ・小島正憲『マット運動における指導法の一考察—マット運動【倒立編】—』東邦学誌第45巻第2号、2016年、1頁～14頁
- ・小島正憲『マット運動における授業方法の一考察—学生のアンケート調査から—』東海学院大学紀要第9号、2015年、137頁～144頁
- ・齋藤義雄、小島正憲、長瀬啓子、安藤雅夫、川崎億子『学科で取り組むカリキュラム改善』東海学院大学紀要第9号、2015年、145頁～162頁
- ・小島正憲『音楽がスポーツパフォーマンスに与える影響—事例的論文の検証による今後の展望—』東海学院大学紀要第8号、2014年、217頁～224頁
- ・小島正憲『大学授業における倒立前転の実態調査—自己評価票の理解度と完成度からみた授業効果—』東海学院大学紀要第8号、2014年、225頁～230頁

（学会発表）

- ・小島正憲『マット運動における倒立の指導法について—新たな指導法「ヤジロベエの導入」—』第65回東海体育学会、2017年、皇學館大学（三重県伊勢市）、口頭発表

- ・小島正憲、木野村嘉則、葛原憲治『初心者への倒立における評価指標の提案ー体育授業における倒立運動の評価を目指してー』第68回日本体育学会、2017年、静岡大学静岡キャンパス、ポスター発表
- ・小島正憲『音楽が体育実技に与える心理的作用ー学生を対象としたアンケート調査ー』第64回東海体育学会、2016年、名古屋学院大学名古屋キャンパス白鳥学舎、口頭発表
- ・小島正憲『音楽がスポーツパフォーマンスに与える影響ー体育実技の授業からー』第63回東海体育学会、2015年、愛知県立大学長久手キャンパス、口頭発表

(その他)

- ・小島正憲『大学生における体力テストの調査報告』東邦学誌第46巻第1号、2017年、155頁～160頁、研究報告
- ・小島正憲『大学授業における体力テストの調査報告』東海学院大学研究年報第1号、2016年、91頁～98頁、研究ノート
- ・小島正憲『大学生における生活実態の調査報告ー教員を目指す学生を対象としてー』東海学院大学研究年報第1号、2016年、99頁～106頁、研究ノート
- ・小島正憲『音楽が体育授業に与える影響ー学生を対象としたアンケート調査ー』東海学院大学紀要第9号、2015年、231頁～235頁、研究ノート

○科学研究費補助金等への申請状況、交付状況 (学内外)

2019年度の科学研究費へ申請中

○所属学会

日本体育学会 (体育科教育学、コーチング学、バイオメカニクス)、スポーツ運動学会、スポーツパフォーマンス学会、体操競技・器械運動学会、日本発育発達学会、日本幼児体育学会

○自己評価

2018年度の研究目標に、「年に1本以上、学術論文を投稿する」及び「年1回以上、学会発表をする」と掲げていた。残念ながらその目標は達成できておらず、論文の投稿については今年度3月末日を目指して執筆中であるが、学会発表については目標を達成できていない。その理由として、私が例年発表している東海体育学会であるが、今年度は本学で開催され、ホスト校としての業務が多く発生したため、発表することができなかった。その反省を踏まえ、来年度は積極的に研究活動を行う。

III 大学運営

○目標・計画

(目標)

2018年度は、「教職課程再課程委員、教職センター委員、中・高教職課程委員」に配属された。その配属先から、教職に関わる委員会が多いため、最も力を入れるべきことは教員を育成することであろうと考える。そのため、教職を目指す学生には教員の魅力を熱く伝えることで教員志望者を増やし、東邦ステップ (教員コース) と連携しつつ、教員採用試験対策の充実も図りたい。また、教職に関わらない学生においても時代のニーズに沿った、将来 (就職) に繋がる指導をしていきたい。

(計画)

2018年度で着任3年目を迎え、少しずつ学内の環境 (授業・校務・研究体制・委員会活動等) に

慣れてきたため、人間健康学部の教員として少しでもリーダーシップを発揮しつつ、与えられた使命と役割を全うしていきたい。

○学内委員等

自己点検・評価委員会委員、教職課程再課程認定委員会委員、教職支援センター運営委員会委員、中高教職課程委員会委員、TOHO アルティメットクラブ顧問

○自己評価

着任 3 年目の 2018 年度は、昨年度と比較すると意見等を含め積極的に委員会活動に従事できたものと考えている。そのため、自己評価としては満足できる 1 年であった。2019 年度も引き続き、委員会活動に従事しつつ、補助的ではなく主要的（リーダーシップ）な活動ができるよう努力していく。

IV 社会貢献

○目標・計画

（目標）

体操競技の元選手及びプロコーチとして培ってきた経験を、子どもたちに伝えていきたいと考えている。特段、今年度もお話を頂いた「子ども大学につしん」（愛知東邦大学連携事業）に力を注ぎ、子どもたちが楽しく学べるような器械運動の指導とプログラムにしていきたいと考えている。また、年齢問わず積極的にスポーツや、体を動かすことの重要性を伝えていきたいと考えているため、本学園と連携する何らかのスポーツイベントを模索していきたい。

（計画）

大学が運営する公開講座・カレッジスクール・大学祭などの催事に、何かスポーツに関わる講義・教室のできる場を設けたい。

○学会活動等

- ・日本幼児体育学会における指導者講習会のサポート
- ・第 66 回東海体育学会における運営（開催校）

○地域連携・社会貢献等

- ・子ども大学につしん（愛知東邦大学連携事業）の体操教室
- ・ヘルピーストレッチの監修（愛知東邦大学連携事業）
- ・ATUCC の講座（体操教室）：10 月 27 日及び 11 月 11 日
- ・愛知東邦大学地域スポーツクラブにおける体験教室（3 月 25 日予定）

○自己評価

2018 年度の社会貢献としては、充実していたと考えている。特に、東海体育学会においてはホスト校としての運営責務を果たし、子ども大学につしん及び ATUCC においては、体操教室を無事に終えることができた。

V その他の特記事項（学外研究、受賞歴、国際学術交流、自己研鑽等）

特記事項なし

VI 総括

2018 年度は、授業及び学生指導、社会貢献、各種委員会活動において積極的に取り組めたため、

主観的であるが充実した1年であったと言える。しかし、研究分野においては自身の目標であった「年に1回以上の論文投稿及び学会発表」は、達成できていない。そのため2019年度は、研究に力を注ぐこととし、目標は科学研究費や研究助成金を獲得できるレベルの研究論文を執筆することである。また研究以外のこととして、各種校務をバランスよく行い、本学専任教員に恥じない姿勢で、何事も責任を持って取り組んでいく。

以 上

所属学部 学科	職位	氏 名
人間健康学部 人間健康学科	准教授	尚 爾華
最終学歴	学 位	専門分野
札幌医科大学大学院医学研究科博士課程修了	博士 (医学)	公衆衛生学、予防医学

I 教育活動

○目標・計画

(目標)

乳幼児、児童生徒から高齢者までの健康に関する基本的な知識を十分身につけることを目標とする。

(計画)

教育にあたっては、建学の精神「真に信頼して事を任せうる人格の育成」に基づいた教職員の心構えを基本として、学生のモチベーションを維持しつつ、効果的な指導を心がける。オリジナル講義科目の教材を開発する。

○担当科目（前期・後期）

(前期) 食と健康、健康管理論、わたしたちの身体、総合演習Ⅰ、専門演習Ⅰ、専門演習Ⅲ、卒業研究

(後期) 小児保健論、学校保健、衛生学、総合演習Ⅱ、専門演習Ⅱ、専門演習Ⅳ

○教育方法の実践

大人数の講義では、学期初めに科目フォルダーに授業の配布資料をアップすることや、オリジナルテキスト（冊子）を導入した。また、明確的な評価方法を示し、毎回の小テスト実施など、学生の授業に対する緊張感を保ち、授業計画通りに実施することができた。

演習では例年よりも多くの学生（6名）が卒業論文に取り掛かり、単位認定された。演習学生に指示出して、卒業ゼミナール発表会をミスなく運営した。一方、学習意欲の低い学生に関しては、個別補習を行うなど工夫した。

○作成した教科書・教材

各授業に講義用スライドを15回分、学生メモ用配布資料15回分をそれぞれ作成した。オリジナルテキスト（冊子）を作成し、授業内容に応じて配布した。

○自己評価

大人数の講義では、学期初めに科目フォルダーに授業の配布資料をアップすることや、オリジナルテキスト（冊子）の導入などによって、教育効果が向上した。また、明確的な評価方法を示し、毎回の小テスト実施など、学生の授業に対する緊張感を保ち、授業計画通りに実施することができた。

演習では実践的な学習を取り入れることにより、学生が習った知識を生かすことができ、自信を持つことができた。また、例年よりも多くの学生が卒業論文に取り掛かり、4年間の集大成として単位認定された。ゼミナール発表会でも演習学生がグループを分けてミスなく運営できた。一方、学習意欲の低い学生に関しては、個別補習を行うなど、演習の単位を全員取得する良い結果につながった。

II 研究活動

○研究課題

- ① 少子高齢化社会における出産・育児および乳幼児・児童生徒の保健に関する国際比較
- ② 地域高齢者を対象とした健康増進に関する調査研究

○目標・計画

(目標)

- ① 日本と中国における少子化対策や乳幼児、児童生徒の健康問題について、昨年度の予備調査結果を踏まえ、更に調査対象者を増やして調査を続ける。その結果を学会にて発表し、論文にまとめる。
- ② 名古屋市にある複数の福社会館において、健康体操教室に参加する高齢者の健康状況に関する調査を継続していく。

(計画)

- ① 名古屋市、上海市（中国）における乳幼児、児童生徒の健康問題について現地調査を行い、調査対象者を増やす。また、世界保健機関や厚生労働省から発表されたデータなどを参照し、国際比較を行う。
- ② 名古屋市内の健康体操教室に参加する高齢者の調査研究を継続する。参加者における健康増進効果に関するデータ収集を行う。特に、今年は聞き取り調査に重点を置き、中高年女性の健康に影響する因子に関する研究を継続して行う。

○2011年4月から2019年3月の研究業績（特許等を含む）

(著書)

- ・ 尚爾華、澤田節子、谷村祐子、肥田幸子、中野匡隆、木野村嘉則。「運動教室に参加している高齢者の健康状況」『長寿社会を健康に生きる—地域の健康づくりをめざして— 地域創造研究所叢書 2』唯学書房、2017年3月

(学術論文)

- ・ 尚爾華、王亜婷、馬利中。「中国上海にある医療機関従事者における出産・子育てに関する意識調査～「二人っ子政策」開始2年間の現状をふまえて～」『東邦学誌』第47巻第1号、2018年6月、91～98頁
- ・ 尚爾華。「大学生の食生活実態と食育の課題～朝食の欠食頻度に焦点を当てて～」『東邦学誌』第46巻第2号、2017年12月、151～153頁
- ・ 澤田節子、肥田幸子、尚爾華、中野匡隆「地域在住高齢者の健康維持活動支援に関する調査」『東邦学誌』第44巻第2号、2015年12月、117～139頁
- ・ Masakazu Washio, Kazuyuki Takeida, Yumiko Arai, Erhua Shang, Asae Oura, Mitsuru Mori. Depression among Family Caregivers of the Frail Elderly with Visiting Nursing Services in the Northernmost City of Japan. *International Medical Journal* Vol. 22, No. 4, pp. 250 - 253, 2015
- ・ Yoshie NAGATA, Fumio SAKAUCHI, Hisako IZUMI, Erhua SHANG, Hirofumi OHNISHI, Mitsuru MORI. Association between salivary alpha-amylase activity and stress-related characteristics. *Sapporo Medical Journal* Vol. 80. No.1-6. December 2011

(学会発表)

- ・尚爾華、加藤利枝子、中川弘子、鈴木貞夫, 女性高齢者における年齢階級別健康状況・生活習慣および主観的な健康度に関する調査～名古屋市内にある体操教室の女性参加者を対象に～, 浜松. 2018. 7. 6
- ・尚爾華、韓萌、森満. 中国における栄養士育成の現状について. 第 63 回北海道公衆衛生学会, 札幌, 2011. 11. 10-11

(その他)

<セミナー・研究会発表>

- ・尚爾華. 日本における小児保健分野の取り組み～健やか親子 21 (第 2 次) について～. 少子高齢社会の健康と福祉セミナー. 中国上海市. 2019. 2. 28.
- ・尚爾華. 平成 30 年度スポーツリーダー養成コース講習会 講師 「スポーツ指導者に必要な医学的知識」. 尾張旭市. 2018. 12. 22.
- ・尚爾華. 日本における少子高齢化に関する政策について. 中国上海市浦東区浦南病院学術交流会. 2018. 3. 12
- ・尚爾華. 中国の公衆衛生現状と課題～最近 10 年の高齢者及び乳幼児の健康と福祉に焦点を当てて～. 名古屋市立大学医学部公衆衛生セミナー. 2017. 12. 23

○科学研究費補助金等への申請状況、交付状況 (学内外)

- ・平成 30 年度 (新規) 地域創造研究所研究補助金少子高齢化社会の健康と福祉研究会代表者一採択
- ・平成 29 年度 (継続) 地域創造研究所研究補助金地域の健康づくり研究会 代表者一採択
- ・平成 28 年度 (新規) 地域創造研究所研究補助金地域の健康づくり研究会 代表者一採択

○所属学会

日本公衆衛生学会、日本疫学会、日本健康学会、日本国際保健医療学会、日本学校保健学会、東海公衆衛生学会、北海道公衆衛生学会

○自己評価

論文投稿と学会発表は概ね計画通りに目標を達成した。その他に 1 本の論文が査読中である。また、地域創造研究所の研究補助金により、中国上海市において、少子高齢社会の健康と福祉セミナーを主催者として半年間をかけて企画・調整し、当日に無事に開催できた。予定よりも多くの日中の専門家が参加し、国際学術交流を実現したことが大きな成果として挙げられる。各参加者の要望に応じて、次年度は日本で開催することが決まり、引き続き研究と交流を続けたい。

III 大学運営

○目標・計画

(目標)

入試委員会委員、学生寮委員会委員として貢献する。人間健康学部 FD・図書・情報ワーキング、入学前教育ワーキング、専門演習運営委員として貢献する。

(計画)

入試委員会、学生寮委員会で参画し、役割を果たす。FD ワーキングのメンバーとともに、授業改善や入学前教育の実施、専門演習の運営に取り組む。

○学内委員等

学生寮運営委員会委員、入試委員会委員

○自己評価

入試委員として、皆勤で入試日（12回）の業務を担当した。1年を通して、面接や試験監督などミスなく仕事をこなした。学生寮委員としては入寮生の面接を担当し、留学生の個人的な相談に乗るなど役割を果たした。

学部FDワーキングメンバーとしては、「卒業論文を書く学生への支援」をテーマに学部内で発表した。図書・情報ワーキングメンバーとして、専門図書の充実のために、先生方の選書をまとめる役割をした。入学前教育ワーキングメンバーとして、入学前課題の選定、入学前セミナーのスケジュールと内容・担当者の調整など、学部長と学術情報課と報告・連絡しながら進めた。専門演習運営委員としては、全4年生の卒業論文の登録、審査、教務課提出まで連絡・調整、卒業論文集の作成を担当した。

IV 社会貢献

○目標・計画

（目標）

- ①地域在住の高齢者と健康づくりサポート活動を通じての交流を積極的に行う。
- ②名古屋市国際交流センターの依頼による国際交流活動を続ける。

（計画）

- ①名古屋市内健康体操教室の主催者の協力者になり、地域住民と交流を深める。
- ②名古屋市国際交流センターの依頼により、愛知県内市民団体や小・中学校での児童・生徒との国際交流活動を続ける。

○学会活動等

地域創造研究所「少子高齢社会の健康と福祉研究部会」を立ち上げ、主査として務めた。主な成果としては、本学教員と中国上海の研究者と協力して、「少子高齢化社会の健康と福祉セミナー」（上海市）を開催し、子どもや高齢者の福祉や健康問題に関する国際学術交流ができた。また、本学の組織や教育内容を紹介するなど、現地大学関係者への広報もできた。

○地域連携・社会貢献等

名古屋市国際交流センターの依頼により、愛知県内観光ボランティア団体、小学校（1校）、高校（2校）の生徒を対象とした講演活動を続けた。また、愛知サマーセミナー2018（椋山女学園大学）で、多文化共生やマイノリティについてゲストスピーカーとして参加した。

○自己評価

地域体操教室を通じて、高齢者と触れ合い、住民の健康づくりに貢献した。また、本学着任と同時に始めた国際交流活動を地道に続けて、名古屋市民の国際相互理解を深めることに微力ながら貢献した。

V その他の特記事項（学外研究、受賞歴、国際学術交流、自己研鑽等）

英語で学会発表や論文執筆のスキルアップ講座を受講している。

VI 総括

昨年に引き続き、学内業務（入試委員会委員、学生寮委員会委員、人間健康学部FDワーキング、図書・情報ワーキング、入学前教育ワーキング、専門演習運営委員）は多く担当した。その役割

を果たし、一定の貢献をしたと思う。

教育面では、授業プリントを学期前にウェブにアップすることを試み、学生から高い評価を得た。次年度も更に教材研究をし、演習に関するオリジナル教材を開発したい。研究面ではテーマに沿って目標達成ができた。次年度にはもっと論文の執筆と学会発表に力を入れたい。

以 上

所属学部 学科	職位	氏 名
人間健康学部 人間健康学科	准教授	谷村 祐子
最終学歴	学 位	専門分野
筑波大学大学院人間総合科学研究科 スポーツ医学専攻修了	博士 (スポーツ医学)	スポーツ医学、運動免疫学

I 教育活動

○目標・計画

(目標)

真に信頼して事をまかせうる人格の育成」、特に人間の健康に関する幅広い知識と実践的な能力獲得のため、医学及び健康科学の基礎知識・技能の定着を目指す。

(計画)

講義科目・演習科目ともに、横のつながりを意識した（お互いに学び合わせる）課題設定、授業運営を行う。どのように教示するかということよりも、どのように学ぶ姿勢を身につけさせるか、どのような環境なら学びやすいかに着目する。彼らがどのように学べば知識・技能の定着につながるかを考え、出来るだけ実行することを計画とする。

○担当科目（前期・後期）

（前期）解剖学、救急処置法、基礎演習Ⅰ、専門演習Ⅰ、専門演習Ⅲ

（後期）スポーツ医学、栄養学、基礎演習Ⅱ、専門演習Ⅱ、専門演習Ⅳ、卒業研究

○教育方法の実践

自主学習の促すための課題設定(解剖学・スポーツ医学確認問題、救急処置法ハンドブック、栄養学レポート)

例) 救急処置法:グループワークや実技試験

栄養学:ルーブリックを利用したレポート課題

演習授業:レポートや卒業論文などを添削指導し、修正を求めた。

ITを使いこなせるよう、デジタル媒体でのやりとりを意識した課題を課した。

○作成した教科書・教材

各科目 15 回分のスライド (30 枚前後/回) を作成、確認問題・学生用資料、基礎演習の教材 (レポートの書き方・プレゼンの仕方など)。演習授業では、「卒論の手引き～第3版～」を作成、配布した。

○自己評価

今年度も知識 (認知的領域)、スキル (精神運動的領域) だけでなく態度 (情動的領域) を学びの要素として授業に入れ込んだ。私の担当授業は1・2年生科目であるため、出来るだけ学習習慣がつくような課題設定を心掛けているものの、習慣とならない学生に対してのフォロー等が必要にも感じている。また、出来るだけ提出物はチェックの上返却するようにしている。昨年度と同様に、その返却物から復習しテストに臨む学生が少なく、単位取得できない学生は多かった。一方で、例年には見られない高得点で単位取得するものも少数だが見られた。

演習授業では、学生同士のつながりを意識して指導しているが、今年は個人での指導にならざる面が多く、演習単位としてのまとまりに欠けた。個々の能力としては時折、目を見張るものがある

るものの協同性に欠けている点は非常に気になるため、その点への課題解決法を模索したい。

II 研究活動

○研究課題

運動による腸内免疫の変化

○目標・計画

(目標)

論文を2本投稿することと科研費課題の実験の実施

(計画)

論文は、積極的に下記進め、研究日は論文執筆日としたい。

実験は特に7月には実験開始ができるように、その前に打ち合わせ・計画を共同研究先と詰めておく。

○2011年4月から2019年3月の研究業績（特許等を含む）

(著書)

- ・尚爾華、澤田節子、谷村祐子、肥田幸子、中野匡隆、木野村嘉則. 長寿社会を生きる一地域の健康づくりを目指して. 愛知東邦大学地域創造研究所編、唯学書房、2017

(学術論文)

- ・Takami M, Aoi W, Terajima H, Tanimura Y, Wada S, Higashi A. Effect of dietary antioxidant-rich foods combined with aerobic training on energy metabolism in healthy young men. J Clin Biochem Nutr. 2019 Jan;64 (1) :79-85. doi: 10.3164/jcbn.18-40. Epub 2018 Aug 8.
- ・Tanimura Y, Aoi W, Takanami Y, Kawai Y, Mizushima K, Naito Y, Yoshikawa T. Acute exercise increases fibroblast growth factor 21 in metabolic organs and circulation. Physiol Rep. 2016 Jun;4 (12) . pii: e12828. doi: 10.14814/phy2.12828.
- ・Murase Y, Shimizu K, Tanimura Y, Hanaoka Y, Watanabe K, Kono I, Miyakawa S. Salivary extracellular heat shock protein 70 (eHSP70) levels increase after 59 min of intense exercise and correlate with resting salivary secretory immunoglobulin A (SIgA) levels at rest. Cell Stress Chaperones. 2015 Nov 25.
- ・Shimizu K, Kon M, Tanimura Y, Hanaoka Y, Kimura F, Akama T, Kono I. Coenzyme Q10 supplementation downregulates the increase of monocytes expressing toll-like receptor 4 in response to 6-day intensive training in kendo athletes. Appl Physiol Nutr Metab. 2015 Jun;40 (6) :575-81.
- ・Liu PH, Aoi W, Takami M, Terajima H, Tanimura Y, Naito Y, Itoh Y, Yoshikawa T. The astaxanthin-induced improvement in lipid metabolism during exercise is mediated by a PGC-1 α increase in skeletal muscle. J Clin Biochem Nutr. 2014 Mar;54 (2) :86-9.
- ・Higashimura Y, Naito Y, Takagi T, Tanimura Y, Mizushima K, Harusato A, Fukui A, Yoriki H, Handa O, Ohnogi H, Yoshikawa T. Preventive effect of agaro-oligosaccharides on non-steroidal anti-inflammatory drug-induced small intestinal injury in mice. J Gastroenterol Hepatol. 2014 Feb;29 (2) :310-7.
- ・Aoi W, Ichikawa H, Mune K, Tanimura Y, Mizushima K, Naito Y, Yoshikawa T. Muscle-enriched microRNA miR-486 decreases in circulation in response to exercise in young

men. *Front Physiol.* 2013 Apr 11;4:80.

- Aoi W, Yamauchi H, Iwasa M, Mune K, Furuta K, Tanimura Y, Wada S, Higashi A. Combined light exercise after meal intake suppresses postprandial serum triglyceride. *Med Sci Sports Exerc.* 2013 Feb;45 (2) :245-52
- Aoi W, Naito Y, Takagi T, Tanimura Y, Takanami Y, Kawai Y, Sakuma K, Hang LP, Mizushima K, Hirai Y, Koyama R, Wada S, Higashi A, Kokura S, Ichikawa H, Yoshikawa T. A novel myokine, secreted protein acidic and rich in cysteine (SPARC), suppresses colon tumorigenesis via regular exercise. *Gut.* 2013 Jun;62 (6) :882-9.
- Ohnogi H, Kudo Y, Tahara K, Sugiyama K, Enoki T, Hayami S, Sagawa H, Tanimura Y, Aoi W, Naito Y, Kato I, Yoshikawa T. Six new chalcones from *Angelica keiskei* inducing adiponectin production in 3T3-L1 adipocytes. *Biosci Biotechnol Biochem.* 2012;76 (5) :961-6.
- Ohnogi H, Hayami S, Kudo Y, Deguchi S, Mizutani S, Enoki T, Tanimura Y, Aoi W, Naito Y, Kato I, Yoshikawa T. *Angelica keiskei* extract improves insulin resistance and hypertriglyceridemia in rats fed a high-fructose drink. *Biosci Biotechnol Biochem.* 2012;76 (5) :928-32.
- Aoi W, Naito Y, Tokuda H, Tanimura Y, Takanami Y, Oya-Ito T, Yoshikawa T. Exercise-induced muscle damage impairs insulin signaling pathway associated with IRS-1 oxidative modification. *Physiological research* 2011, 61 (1) 81-88
- 野上順子, 斉藤陽子, 谷村祐子, 佐藤幸治, 大槻毅, 前田清司, 鱒坂隆一. 一過性の水中運動が動脈スティフネスに及ぼす影響. *体力科学.* 2011, 60 (3) 269-277
- Qin Y, Naito Y, Handa O, Hayashi N, Kuki A, Mizushima K, Omatsu T, Tanimura Y, Morita M, Adachi S, Fukui A, Hirata I, Kishimoto E, Nishikawa T, Uchiyama K, Ishikawa T, Takagi T, Yagi N, Kokura S, Yoshikawa T. Heat shock protein 70-dependent protective effect of polaprezinc on acetylsalicylic acid-induced apoptosis of rat intestinal epithelial cells. *J Clin Biochem Nutr.* 2011 Nov;49 (3) :174-81.

(学会発表)

- 谷村祐子, 青井渉, 井上亮, 水島かつら, 内藤裕二. 自発運動による *Lactobacillus* 属の増加に対する食餌の影響. 第72回日本体力医学会大会, 2017
- Tanimura Y, Aoi W, Naito Y, Takagi T, Mizushima K, Higashimura Y, Yoshikawa T. The effect of voluntary exercise on the composition of gut microbial in mice. 20th Annual Congress of the European College of Sport Science, 2015
- 谷村祐子, 青井渉, 内藤裕二, 高木智久, 水島かつら, 吉川敏一. ワークショップ1「腸と骨格筋のダイナミズム」運動による腸への刺激, 第69回日本体力医学会大会, 2014
- 谷村祐子, 青井渉, 水島かつら, 内藤裕二, 吉川敏一. 一過性運動における盲腸内容物中の腸内細菌叢の変化. 第68回日本体力医学会大会, 2013
- 谷村祐子, 速水祥子, 大野木宏, 東村泰希, 水島かつら, 角田圭雄, 青井渉, 内藤裕二, 吉川敏一. 高ショ糖食摂取による糖尿病モデルマウスにおける明日葉カルコンの脂肪肝抑制作用. 第35回臨床栄養学会総会, 2013
- 谷村祐子, 速水祥子, 安井まどか, 大野木宏, 東村泰希, 内藤裕二, 吉川敏一. 高脂肪食負荷マ

ウスにおける明日葉カルコン粉末の抗肥満効果. 第34回日本肥満学会, 2013

- 谷村祐子, 速水祥子, 小山亜紀, 安井まどか, 大野木宏, 青井渉, 東村泰希, 内藤裕二, 吉川敏一. 加齢マウスにおける運動トレーニング及びトゲドコロエキス摂取は, 加齢による筋量低下を抑制する. 第13回日本抗加齢医学会総会, 2013
- 谷村祐子, 青井渉, 内藤裕二, 東村泰希, 水島かつら, 大野木宏, 速水祥子, 佐川裕章, 吉川敏一. トゲドコロエキスの脂質燃焼亢進による持久力向上作用. 第17回日本フードファクター学会学術集会・第9回日本カテキン学会総会合同大会, 2012
- Tanimura Y, Aoi W, Mizushima K, Naito Y, Yoshikawa T. The expression of FGF21 by mechanical stretching in C2C12 muscle cells. 17th Annual Congress of the European College of Sport Science, 2012
- Tanimura Y, Aoi W, Takagi T, Naito Y, Yoshikawa T. The effect of exercise training on gastrointestinal tract in aged mice. 10th the international society of exercise and immunology symposium, 2011
- Tanimura Y, Aoi W, Takanami Y, Kawai Y, Naito Y, Yoshikawa T. The effect of exercise on fibroblast growth factor 21 of muscle in mice. 16th Annual Congress of the European College of Sport Science, 2011

(その他)

<Letter>

- Tanimura Y, Aoi W, Takanami Y, Kawai Y, Mizushima K, Naito Y, Yoshikawa T. Reply to the letter from Dr. Miao et al. *Physiol Rep.* 2016 Sep;4 (17) . pii: e12964. doi: 10.14814/phy2.12964.

<研究会報告>

- 谷村祐子 糖尿病モデルマウスにおける DPP-4 阻害薬と運動トレーニングの併用 *THR GI FROREFRONT* 2014;Vol 10.No.2.81 (173)

<講演・セミナー>

- 国立健康・栄養研究所 健康増進研究部セミナー 講師 「身体活動・運動と腸内細菌と健康」 (2015年9月15日)

○科学研究費補助金等への申請状況、交付状況 (学内外)

- 平成30年度 (2018年度) 基盤研究 (C) (継続) (研究代表者) 一採択
- 平成29年度 (2017年度) 基盤研究 (C) (新規) (研究代表者) 一採択
- 平成28年度 (2016年度) 若手研究 (B) (継続) (研究代表者) 一採択
- 平成27年度 (2015年度) 若手研究 (B) (継続) (研究代表者) 一採択
基盤研究 (C) (継続) (研究分担者) 一採択
- 平成26年度 (2014年度) 若手研究 (B) (新規) (研究代表者) 一採択
基盤研究 (C) (継続) (研究分担者) 一採択
- 平成25年度 (2013年度) 若手研究 (B) (継続) (研究代表者) 一採択
基盤研究 (C) (新規) (研究分担者) 一採択
- 平成24年度 (2012年度) 若手研究 (B) (継続) (研究代表者) 一採択
- 平成23年度 (2011年度) 若手研究 (B) (新規) (研究代表者) 一採択
- 平成22年度 (2010年度) 研究活動スタート支援 (継続) (研究代表者) 一採択

○所属学会

日本体力医学会、日本体育学会、東海体育学会、日本運動生理学会、肥満学会、臨床栄養学会、日本運動免疫研究会、The International Society of Exercise and Immunology、

○自己評価

1本は投稿して、現在査読中である。また、実験は現在進行中で次年度6月ごろに解剖予定である。しかし、もう一つの論文作成については未着手であり、このままであれば次の科研費を獲得するのに業績不足となるので、その点が非常に心配である。昨年度よりは、「まし」な状況といえるが目指している状況とはとても距離があるため、少しでも近づきたい。

III 大学運営

○目標・計画

(目標)

学科行事、所属委員会に積極的に参加し貢献する。

(計画)

学科行事や所属委員会の内容を十分に理解し、円滑な大学運営に貢献できるよう役割を果たす。また、自身の仕事が属人化しないように、出来るだけ書面化し、目に見える記録を残すことを第一に実行する。

○学内委員等

国際交流委員会委員、教務委員会委員、女子バスケットボール部顧問（部長）、基礎演習運営委員

○自己評価

ほぼ、教務関係のことをしていたように感じる。特に調整事が多かったため、時間を多くとられた。国際交流委員としては日本学生支援機構の留学支援事業への応募が不採択だったものの、学生の支援として提案できたことはよかったように思う。本学は留学に関係する学生は少ないものの、環境は整えていきたいと考えるため今後も積極的に活動したい。バスケットボール部顧問としては、強化指定に関わる部分としての事務作業としては協力的に実施できたと思う。今後も監督のサポートとして活動したい。

IV 社会貢献

○目標・計画

(目標)

研究成果の社会への還元

(計画)

研究内容を論文・学会発表をする。また研究論文の査読も引き続き引き受ける。一般への還元の場としては、一般誌への寄稿依頼はできるだけ引き受けることとしたい。

○学会活動等

- ・愛知東邦大学地域創造研究所所員
- ・学術論文査読委員

Nutrition Journal、Journal of the International Society of Sports Nutrition、Frontiers in Exercise Physiology、DNA and Cell biology、Diabetologia、The Journal of Physical

○地域連携・社会貢献等

特になし

○自己評価

昨年度と同様に、査読はできる限り引き受けるようにしたものの、時間の制約上断ることも多くなってしまった。また、論文発表はすることが出来なかった。

V その他の特記事項（学外研究、受賞歴、国際学術交流、自己研鑽等）

自己研鑽として、国立研究開発法人科学技術振興機構が運営する JREC-IN ポータルにおける「インタラクティブ・ティーチングコース」を修了した。

VI 総括

昨年度に引き続き、学内業務（基礎演習運営委員、国際交流委員、教務委員）は一定の貢献をし、成果を上げることができたと思う。教育活動においては、学びやすい環境づくりに重点を置くことによって、学習意欲のある学生に対しては効果的な手法であったと思われる。今後、学習意欲の低い学生をどのようにその環境になじませるかを考えたい。研究面での活動は、少しだけ進めることができたものの、同分野の研究者と大きく差がついている状況には変わらないので、優先して進めていきたい。

以 上

所属学部 学科	職位	氏 名
人間健康学部 人間健康学科	准教授	山村 伸
最終学歴	学 位	専門分野
順天堂大学大学院スポーツ健康科学研究科 博士前期課程 修了	スポーツ 健康科学 (修士)	スポーツ心理学 バスケットボール

I 教育活動

○目標・計画

(目標)

本学の見学の精神である「真に信頼して事を任せうる人格の育成」と校訓である「真面目」を念頭に、ひとりひとりと向き合いながら学生を教育する。現状に満足せず、何事にも準備を怠らない。

(計画)

大学・学生の特質を理解するよう努める。授業面では履修学生とコミュニケーションを円滑にはかり、学生の意見や興味を持っている事柄に対して理解する。授業外では授業ノートやオフィスアワーを積極的に活用する。

○担当科目（前期・後期）

(前期) 健康スポーツ心理学、スポーツ実習、保健体育教育法Ⅰ、基礎演習Ⅰ、総合演習Ⅰ

(後期) メンタルトレーニング演習、専門スポーツ実習（球技）、スポーツ実習、基礎演習Ⅱ、総合演習Ⅱ

○教育方法の実践

- ・保健体育科教育法Ⅰにおいて、模擬授業を行い学生同士での授業評価を実施した。
- ・総合演習Ⅱにおいて、フィールドワーク（サッカー日本代表の観戦）を実施した。
- ・メンタルトレーニング演習、スポーツ実習、基礎演習Ⅱ、総合演習Ⅰ、総合演習Ⅱ、保健体育科教育法Ⅰ、において、グループワークを実施した。

○作成した教科書・教材

メンタルトレーニング演習において、集中力のトレーニング用具を作成した。

○自己評価

着任初年度という事もあり、様々なことを模索しながらの教育活動であったが、前任校での経験を活かし授業を行った。教職科目や少人数の授業では学生とのコミュニケーションを多くとることができたが、履修者が100名以上の科目では課題が残った。

II 研究活動

○研究課題

バスケットボールにおけるジャッジの整合性に関する研究

○目標・計画

(目標)

現場にフィードバック可能な研究を行い、日本バスケットボール学会で発表する

(計画)

バスケットボールにおける審判のレベルと所属する地域に着目し、映像課題を用いて調査・実験を行う。

○2011年4月から2019年3月の研究業績（特許等を含む）

(学術論文)

- ・山村伸,「本学健康スポーツ専攻教員養成課程における保健体育科教育法体育分野の現状と課題」, 武蔵丘短期大学紀要, 25-1, 39-53, 2017
- ・山村伸, 太田あや子, 福島邦男,「本学学生の体力水準と生活水準に関する調査—平成28年度健康栄養専攻女子学生を対象として—」, 武蔵丘短期大学紀要, 24, 37-39, 2016
- ・山村伸,「教員免許状更新講習実践報告—実技科目バスケットボール—」, 武蔵丘短期大学紀要, 23, 87-91, 2015
- ・中村達也, 太田あや子, 福島邦男, 山村伸,「本学学生の体力水準と評価方法に関する研究—平成27年度健康栄養専攻女子学生を対象として—」, 武蔵丘短期大学紀要, 23, 23-26, 2015
- ・太田あや子, 福島邦男, 玉木啓一, 河合一武, 桂和仁, 杉山仁志, 高橋琴美, 中村達也, 荒川崇, 山村伸, 佐藤亮輔, 鈴木宏, 佐久間淳, 田中忍, 高橋こずえ,「平成25年度文部科学省スポーツを通じた地域コミュニティ活性化事業（大学・企業のスポーツ資源を活用した地域コミュニティ活性化事業）の取り組み」, 武蔵丘短期大学紀要, 22, 53-64, 2014
- ・荒川崇, 田中忍, 河合一武, 杉山仁志, 佐藤亮輔, 山村伸,「武蔵丘短期大学強化指定部活動へのコンディショニングサポート活動報告」, 武蔵丘短期大学紀要, 21, 55-62, 2013
- ・山村伸,「教員免許状更新講習実践報告—実技科目バスケットボール—」, 武蔵丘短期大学紀要 21, 51-53, 2013
- ・中村達也, 太田あや子, 福島邦男, 山村伸,「本学学生の体力水準と評価方法に関する研究—平成25年度健康栄養専攻女子学生を対象として—」, 武蔵丘短期大学紀要, 21, 23-25, 2013
- ・山村伸, 荒川崇,「高校生を対象としたバスケットボールクリニックの取り組み」, 武蔵丘短期大学紀要, 20, 85-87, 2012
- ・山村伸「スポーツの価値意識に関する研究」, 武蔵丘短期大学紀要, 19, 99-103, 2011

○科学研究費補助金等への申請状況、交付状況（学内外）

○所属学会

日本体育学会, 日本スポーツ心理学会

○自己評価

予想していた以上に強化指定部（女子バスケットボール部）の立ち上げ準備に時間が掛かり、予定していた学外での調査研究を行うことができなかった。初年度を終え、次年度以降はある程度見通しが立てやすくなる事が予想されるのでスポーツ現場に還元できる研究を行いたい。

III 大学運営

○目標・計画

(目標)

初年度であるので委員会等の仕事内容を早く覚え、前任校で行っていた内容との整合性を確認しながら、積極的に質問・意見交換を行いながら進めていく。

(計画)

各担当の教職員との連携を密にとる

○学内委員等

中高教職課程委員会委員、女子バスケットボール部顧問（部長）

○自己評価

他の教職員に質問・意見交換しながら委員会等の業務を遂行することができた。特に、教職科目における介護等体験ガイダンスの準備においては教職支援センターの職員、他の教員の助言を受けながら円滑に進めることができた。また、女子バスケットボール部の運営・強化部移行準備の面においては、人間健康学部執行部・部長・担当事務局員・入試広報課・学生キャリア支援課・イープロと連携を取りながら進めていく事ができた。

IV 社会貢献

○目標・計画

(目標)

スポーツ心理学、バスケットボールを基盤とした社会貢献の実施、地域ネットワークの構築

(計画)

出張講義 高等学校への出前授業、主に愛知県内の諸団体と交流する機会を持ち、どのようなニーズがあるかを調査し、どのような形式での貢献ができるか把握する。

○学会活動等

日本バスケットボール学会

○地域連携・社会貢献等

東邦学園高大連携授業（スポーツ心理学）

女子バスケットボール部、三河地域リーグ参加

東海学生バスケットボール連盟監督会議

○自己評価

スポーツ心理学においては、東邦学園高大連携授業として「高校生のうちに知っておきたいスポーツ心理学」を実施した。高校教員のサポートも多分にあったが、興味を持って聴講している生徒が多い印象であった。バスケットボールにおいては学連の監督会議への出席、合同チームでの試合参加などを実施した。今後、大会や練習会の企画・運営などを検討しているが、まずは本学のチーム運営を軌道に乗せる事が急務である。

V その他の特記事項（学外研究、受賞歴、国際学術交流、自己研鑽等）

日本バスケットボール協会の発行する公認コーチ（C級）取得へ向け通信教育課程への登録等準備を進めている。

VI 総括

あっという間に1年が過ぎた印象である。初めて経験することも多く、内容の殆ど分からない業務等もあったが、教職員の方々のアドバイスを受けながら遂行することができた。その点には大変感謝したい。授業においてはこれまでの経験を活かしてある程度は円滑に進める事ができたが、反省・改善点も得られたので今後に繋げて行きたい。部活指導・リクルート活動・授業・学生対

応・各種委員会・その他社会貢献等、大学教員を取り巻く環境は多忙であるが、その中でいかに研究活動時間・研究フィールドを確保することが重要になる。部活指導・研究活動共に終わりの無いテーマではあるが、自己の折り合いをつけ進めていく必要がある。

以 上

所属学部 学科	職位	氏 名
人間健康学部 人間健康学科	准教授	渡辺 弥生
最終学歴	学 位	専門分野
愛知医科大学大学院看護学部	修士	老年看護学

I 教育活動

○目標・計画

(目標)

- ・「真に信頼して事を任せうる人格の育成」を念頭に教科の目標の達成および資格取得を促し、学生の受講姿勢がよくなり、学習意欲が高まり、関心のもてる講義を展開し、出席率を高める。」
- ・信頼されるためには、いつもそこにいるということが大切であると考え。健康学部で学ぶ意味は健康に毎日活動することであることを伝えていきたい。そのためクレドにも健康について示した。
- ・「オンリーワンを、一人に、ひとつ。」のコンセプトを意識し一人一人の学生の思いを尊重し目標が見えてくるように関わりたいと考える。
- ・学生に対してユーモアや親しみやすさは必要と考えるが教員が「真面目」に取り組むことで学生にも自ら「真面目」に取り組む姿勢を持ってもらえるような姿勢を持ちたいと考える。
- ・「子弟を教育するは、私事に非ず。天に事（つか）うるの職分なり」を念頭に自らが謙虚にまじめに教育に専心したいと考える。

(計画)

<基礎演習>

この科目は対象が1年生であり、大学生活に適応し、大学での学び方を学ぶ。学生は入学し、初めての必修科目としてこの演習に参加する。大学では自主自立であり、単位習得には自己の計画的な取り組みが必要であることの自覚を促す。自分を律して、自分で文章を書いたり図書館を活用できるよう進めていく。演習内容は学部で企画されているため、内容を理解しすすめていく。

<総合演習>

この科目は2年生が対象である。内容は家庭看護とし、自己の健康管理また健康を害した場合の対応、家族（小児～高齢者）への家庭での看護を学ぶ。バイタルサインの測定や救急処置など実習を取り入れ学ぶ。2年生は学年が上がり将来に向けて考えていく必要がある一方目標を見失う時期でもあるため、一人一人の思いを引き出せるよう個人面接も取り入れる。

<人間と健康>

この科目は対象が1年生（一部他学年）であり、学部の名称とも重なる。健康がもたらす人間の幸福を念頭に健康が一人の幸せにとどまらず社会に影響することを伝える。健康に関心がもてるよう、また健康管理を実践し、将来的に指導・アドバイスができるよう、基礎的内容から活用できる内容とする。受講人数が多いが毎回小レポートを課し、学生は学び始めの大切な時期であるため学びの確認とコミュニケーションを図り進める。

<環境保健論>

この科目は3年生が主たる受講生である。環境は地球規模から身近なことまで多岐にわたる。

基本的な環境の知識を持ちながら個人の健康への影響を考え、今後将来を担う世代として考えられるような内容としたい。特に健康を維持するうえで一人一人の環境対策が大切なことから身近な対策について意識させたい。講義が中心の教授方法となるが DVD ノ活用や個人の考えが述べられる機会をもつなど主体的な意見交換ができる機会を持てる講義の進行とする。

<医療概論>

医療への学生の関心を確認し医療の歴史、医療の概念、医療の現状と問題点について内容を精選して教授する。

<養護概説>

児童・生徒の健康について学ぶ。学生は高校まで自ら養護を受けているが、そのことに気づかせ、どんな場面で守られてきたのかディスカッションなど取り入れ、主体的に考えさせ、学ばせたい。

<看護学>

看護を専門教育としてではなく、一般の学生に対して講義することは初めてであり、興味深い。看護の現状と問題、歴史、さらには日頃から看護の視点で健康を維持するための方策について学んでもらいたい。看護は心が大切だが、他人を思いやること、気づき、環境を整えることで疾病予防ができることを学生とともに新しい視点で学びたい。この科目でも場面設定しグループワークなど行いたいと考える。

○担当科目（前期・後期）

（前期）人間と健康、環境保健論、基礎演習Ⅰ、総合演習Ⅰ

（後期）医療概論、養護概説、看護学、基礎演習Ⅱ、総合演習Ⅱ

○教育方法の実践

計画に沿って進めた。80人以上の学生が受講した養護概説以外の科目では、講義毎に配布した資料に、学んだ内容や感想、テスト形式で回答をしてもらおう等、一方的な講義とならないように工夫した。少人数の養護概説ではロールプレイなど取り入れ対話型の講義を行った。看護学ではバイタルサインの測定や車いす移動の技術習得等ができるように実習を取り入れた。

○作成した教科書・教材

なし

○自己評価

多人数の講義では席の指定や資料の工夫、DVD など視聴覚教材の活用など行ったが、関心を持ってもらえないこともあった。今後は学生が興味をもって講義や実習に臨めるよう、さらに内容の精選と教授法の工夫を行いたい。多人数の講義では資料を配布し、ノート形式としてその資料を持ち込むテストとした。このことは資料の作成、テストに活用という点で学習効果があったと考える。その内容については後から学び直ししやすいようなノートづくりをする必要がある。また、多人数の講義では発言をしづらいようであるが、皆の前で発言することも経験となるため講義する者が余裕をもち、学生も意見や質問ができるような雰囲気づくりをしていきたい。

少人数であった養護概説では、学生と対話し、よい講義となった。

医療概論など科目によって、途中で受講をやめてしまう学生が多い科目もあり、対象の興味を確認した講義計画を立てる必要を感じたので今後、学生のニーズを把握した内容や方法の検討していく。

II 研究活動

○研究課題

- ・看護を学ぶ社会人の問題点について検討し、学習環境を改善する。
- ・看護学を学ぶことでの一般学生の健康観への影響を検討し、一般学生が看護学を学ぶ意味を明らかにする。

○目標・計画

(目標)

- ・社会人が看護師資格を取得するために看護実習を行う上での困難感について調査し実習指導者、指導教員の関わり方を検討し実習環境の改善を図る。
- ・一般学生が看護学を学ぶことの意味(仮)は特に健康観への影響について検討する。

(計画)

- ・前任校で対象学生へのアンケート調査を行い、データの分析は行っている。現在日本看護学会(教育)へ投稿中である。採択されれば8月に学会発表予定で、発表後は論文投稿予定である。第1報では、社会人が医療職の常識をどうとらえたかに焦点をおきまとめる。第2報は、評価などについて焦点をおきまとめ、愛知県看護教育研究学会へ投稿予定である。
- ・本年は文献検討を行い、基礎データとして後期に行う看護学受講者にこの科目を学ぶ目的や看護へのイメージを調査できればと考えている。

○2011年4月から2019年3月の研究業績(特許等を含む)

(学術論文)

- ・渡辺弥生、野口健太、麻績恵 「看護を学ぶ社会人学生の臨地実習での思い」 愛知県看護教育研究学会第22回(p23~29) 2019
- ・渡辺弥生、野口健太、柴田竹晴 「基礎看護技術テストにおける模擬患者体験をした卒業生の思い」 愛知県看護教育研究学会第21回(p32~37) 2018
- ・渡辺弥生、野口健太、三井美智 「看護専門学校における学生への欠席に対する指導 A 県内看護専門学校の教務主任の調査」 日本看護学会(教育)(p43~46) 2018
- ・野口健太、島田美奈、渡辺弥生、井本英津子 「看護専門学校における新人看護教員のストレス要因と支援状況 講義・演習に焦点をあてて」 愛知県看護教育研究学会第19回(p45~52) 2016
- ・野口健太、林由利江、島田美奈子、渡辺弥生 「看護専門学校における新人看護教員のストレス要因と支援状況 臨地実習に焦点をあてて」 愛知県看護教育研究学会第18回(p35~43) 2015
- ・井本英津子、島田美奈子、渡辺弥生 「看護専門学校における海外研修旅行の取り組み 旅行後のアンケート分析」 愛知県看護教育研究学会 第18回 (p18~27) 2015
- ・野口健太、島田美奈子、渡辺弥生、井本英津子 「看護専門学校におけるケーススタディの学習方法の現状」 愛知県看護教育研究学会 第15回 (p54~60) 2013
- ・青木由利江、井本英津子、稲葉太香子、渡辺弥生 「看護技術チェックを受ける学生の思い」 愛知県看護教育研究学会 第15回 (p21~31) 2013
- ・青木由利江、渡辺弥生、 「在宅看護方法論の授業に自助具の作製を取り入れての学び」 愛知県看護教育研究学会 第13回(p46~56) 2011

(学会発表)

- ・渡辺弥生、野口健太、麻績恵 「看護を学ぶ社会人経験者の臨地実習での困難感 医療職の常識と一般職の常識」 日本看護学会(看護教育) 2018

- ・渡辺弥生、野口健太、麻績恵 「看護を学ぶ社会人経験者の臨地実習での困難感 実習評価に焦点をあてて」 愛知県看護教育研究学会第7回 2018
- ・渡辺弥生、野口健太、三井美智 「看護専門学校における欠席状況に関する調査 欠席を少なくするための取り組み第1報」 愛知県看護教育研究学会 2016
- ・渡辺弥生 「病棟看護師の高齢者への退院支援に関わる行動と高齢者理解とその関連要因」 日本看護学会（管理） 2016

(その他)

- ・渡辺弥生、今井範子 「3年課程カリキュラムにおける実習調整と実習指導の進め方 基礎看護学編」 看護人材教育.Vol.7.No5.48-58. 日総研. 2011
- ・渡辺弥生、今井範子 「3年課程カリキュラムにおける実習調整と実習指導の進め方 精神看護学編」 看護人材教育.Vol.8No1.125-134. 日総研. 2011
- ・渡辺弥生、今井範子 「3年課程カリキュラムにおける実習調整と実習指導の進め方 老年看護学編」 看護人材教育.Vol.7No6.128-134. 日総研. 2011
- ・渡辺弥生 「学内で学生が抱える問題とその対応方法 学生が欠席しないための取り組み」 看護人材教育.Vol.12No2.85-91. 日総研. 2015

○科学研究費補助金等への申請状況、交付状況（学内外）

なし

○所属学会

愛知県看護教育研究学会、日本看護教育学会、日本看護学会、日本老年看護学会

○自己評価

研究発表は2回行い、その2回分を統合して1本論文とした。論文は採択されたので評価したい。当初目標とした「健康観」に関する研究は文献検討を行った。次年度に繋げていきたいと考える。

III 大学運営

○目標・計画

(目標)

地域連携委員会のメンバーとして積極的に活動する。
人間健康学部の中での役割を理解し行動する。

(計画)

- ・地域連携委員会の一員として参加できる行事には積極的に参加し貢献する。
- ・人間健康学部の一員として学務を理解し、主体的に活動する。
- ・年間の行事に参加する。
- ・本年は着任初年度であるため、まず指示を受けたことに関し責任をもって遂行していく。
- ・他の教員とコミュニケーションを図り信頼されるように努める。

○学内委員等

地域連携委員会委員

○自己評価

地域連携委員会では、平和が丘春祭りや納涼音楽祭など各種行事に参加した。地域連携活動報告会では、企画運営に関わり、よい発表会となった。初めての参加ではあったが各行事とも大学が地域に貢献しようと教員・事務の方が努力されていることが理解できた。微力ではあるが今後も

貢献できるよう努力していきたいと考える。

学部の役割では、中退防止の取り組みとして情報をまとめていく役割を担った。情報を教員間で共有し、学生の立場になり教育を行うことで少しでも中退が防止できれば良いと考える。来季もこの役割は担っていくため貢献していきたい。

IV 社会貢献

○目標・計画

(目標)

看護専門教育に関わり看護師育成に貢献する

(計画)

後期【老年看護学概論】を講義の依頼をされているため、許可を得て実施

9月名古屋市の臨地実習指導者研修講師を依頼されているため、許可を得て出向く予定

○学会活動等

愛知県看護教育研究学会 理事

○地域連携・社会貢献等

名古屋市臨地実習指導者研修 講師

まつかけ看護専門学校老年看護学概論 講師

○自己評価

本業の支障にならないように外部の講義を行った。専門教育に貢献することで、新しい情報を得、学内での講義や研究に生かすことができた。

V その他の特記事項（学外研究、受賞歴、国際学術交流、自己研鑽等）

愛知県看護教育研究学会査読者

VI 総括

初年度としては、学生の反応を見ながら講義の進行ができた点では、十分ではないが、自分なりに努力できたと考える。2年生の演習の学生からは3年次の演習の希望を出してもらうことができ、興味を持ってもらうことができた。演習学生とのコミュニケーションも良好であった。また保護者との面談でもよい評価をいただいた。学生が学ぶことに意欲を持てる環境づくりをしていきたいと考える。多人数の講義では、スマホの持ち込みや居眠りなど学生の受講態度を注意することはできたが、講義の妨げとなったこともあり、問題学生以外の学生に配慮しながら注意をするということの困難さを感じた。学生を信じたい面と教員の甘さを見ているなという面があり毅然とした態度で学生には接していきたいが、細かく声掛けしたりしながら信頼を得た上で乗関わりをしていきたい。社会に出て恥ずかしくない態度の育成も重要と考える。

大学運営では、最低限の仕事しかできていなかったと考えるが、委員会活動以外の大学祭への参加、各種行事の参加など積極的に参加し、本学の教員としての役割が果たせるよう努力した。次年度は研究活動にも力を入れていきたいと考える。

以上

所属学部 学科	職位	氏 名
人間健康学部 人間健康学科	助教	木野村 嘉則
最終学歴	学 位	専門分野
筑波大学大学院体育科学研究科 スポーツ科学専攻修了	修士 (体育学)	体育方法学

I 教育活動

○目標・計画

(目標)

スポーツを指導する立場となるための基礎知識を教授し、指導者としての態度を育成する。この際には、建学の精神である「真に信頼して事を任せうる人格の育成」が重要となること理解させる。特に専門演習に際しては、興味があるテーマを見つけ、論理的な問題解決を行えるように指導し、校訓の「真面目」にあるように真摯に取り組み結論まで書きあげることにより成長を実感させる。

(計画)

講義では、スポーツのコーチングやトレーニングに関する実践に関する事例を用いながら、学生が理論について具体的なイメージを持てるよう工夫する。また、ミニツツペーパーなどを用いたフィードバックをさらに促していく。また、課題の量を変化させることなく、課題の種類を増やし、より多様な学習機会を提供する。

演習では、自ら考え情報収集し行動する資質を高めること促し、収集した情報から意見を作り上げ他者に伝えることに取り組む。その際には、学生が自ら興味を持つようなテーマや内容について解決することをサポートする。また、チームにて課題に取り組めるよう、お互いの取り組みに興味を持てるよう工夫する。そして、よい計画を立てて、着実に実行していくことで得られる成果が大きいことを実感できるよう取り組む。昨年度のゼミ生の研究成果の抄録をテキストとして用いることで、道筋をイメージしやすくするとともに、達成できるという実感を持たせたい。

○担当科目（前期・後期）

(前期) トレーニング科学、コーディネーショントレーニング演習、コーチング論、スポーツ実習、総合演習Ⅰ、専門演習Ⅲ

(後期) 専門スポーツ実習（陸上競技）、総合演習Ⅱ、専門演習Ⅳ、卒業研究、体育科教育法（3回分）

○教育方法の実践

学生の理解を深めるために、図や動画を含みつつ事例を盛り込んだ教材を作成した。そして、授業で用いる資料については学生が予習・復習に使用できるようにメーリングリストを用いて事前に共有した。

講義科目では授業の最初に本時の課題レポートを提示し、授業の終わりに提示した課題を解けるようになることを求めた。このことで授業の焦点が明確になることを意図した。また、課題を用いて次の授業にて前時の復習を行い、知識の定着を狙った。また、授業内容について質問を収集し、次の授業での開設に用いた。

演習科目では、知識の定着、知識を基にした自身の考えの構築、考えの伝達ができることを重点に置き、プレゼンテーション資料の作成・発表の機会を設けた。特に専門演習では、希望者に学

外にてプレゼンテーションやディスカッションを行い、多様なフィードバックが得られるようにした。総合演習ではレポートを構成する章立てやそこで求められる内容について説明しながら、最初に既に取り上げているレポートの構成や内容について評価した。次に、学生ごとに調査のテーマ設定を行い、調査報告書を作成しながらレポート作成のフィードバックを学生の相互評価と教員による評価によって行った。

実習科目では、日々の取り組みの振り返りとともに、学習テーマごとにまとめのレポート作成とレポートに関するフィードバック資料による振り返りを行った。また、実習で作成したレポートが特に教職課程の学生にとっては次年度以降の教職課程科目にて資料となるよう配慮した。

○作成した教科書・教材

それぞれの授業内容に関連した専門図書、学術論文、動画をベースにオリジナルの教材を作成した。レポートに際しては、フィードバックを円滑に行えるように工夫した。

専門演習にて前年度のゼミ論文の抄録集をテキストとして用いるとともに、論文の読み方に関するドリル形式のワークを作成した。

○自己評価

講義科目および実習科目では事後のアンケートにて復習の時間に知識の定着ができたか、解説が興味深いかを確認したところ一定の手ごたえを得たため、今後も継続していきたい。レポートやプレゼンテーション資料の作成に際しても、適宜フィードバックをかけながら行うことで学生の進捗に良い影響を与えたと思う。一方で、特に卒業研究作成に際したルーブリック評価の作成を目指したが、こちらは今年度未達成となってしまった。次年度以降の課題としたい。

II 研究活動

○研究課題

跳躍選手の踏切動作の変容

○目標・計画

(目標)

跳躍選手が行う踏切について、各種ジャンプ運動時の踏切動作や力発揮の特徴を明らかにする。

(計画)

トレーニング時のデータ収集を行う。特に一般的に練習で用いられるジャンプ運動時の地面への力発揮の特徴を、種目の差および競技力の差、競技力向上時の変化に着目してまとめる。

○2011年4月から2019年3月の研究業績（特許等を含む）

(著書)

- ・尚爾華，澤田節子，谷村祐子，肥田幸子，中野匡隆，木野村嘉則．「指導者がもつ健康の運動指導上の位置づけ—高齢者と青少年対象の指導者の事例をとおして」第6章『長寿社会を生きる—地域の健康づくりをめざして』唯学書房，pp. 100-116，2017.

(学術論文)

- ・相川悠貴，木野村嘉則，兼安真弓．2型糖尿病モデルラットの糖代謝異常発現に対する田七人参摂取と運動の効果．紀要，Vol. 66，pp. 1-8，2018.
- ・木野村嘉則，木下達生，波戸謙太，葛原憲治．野球における二塁までのベースランニング時の走塁コースの分類に関する試案：中学生及び高校生による自由走路疾走条件を事例として．東邦学誌，Vol. 46 (2) pp. 93-104，2018.

- ・西村三郎, 木野村嘉則, 松崎鈴, 松下翔一, 池田延行. 小学校高学年児童を対象とした走り幅跳びにおける助走歩数が跳躍距離に与える影響. 国士舘大学体育研究所所報, Vol. 36, pp. 35-42, 2017
- ・西村三郎, 木野村嘉則, 小林育斗, 松崎鈴, 松下翔一, 池田延行. 小学校高学年児童を対象とした走り幅跳びの体育授業における学習成果の検討: より大きな鉛直速度を獲得できる踏切は学習可能か? 体育学研究, Vol. 62 (2), pp. 647-663, 2017.
- ・藤林献明, 木野村嘉則, 関子浩二. ジュニア男子アスリートを対象とした Rebound Long Jump Test と疾走及び水平跳躍能力との関係. びわこ成蹊スポーツ大学研究紀要, Vol. 14, pp. 105-114, 2017.
- ・古市直樹, 鎌田公寿, 木野村嘉則, 小嶋季輝. 教室環境における共同注視に関する共同分析による試論. 琉球大学教育学部紀要, Vol. 90, pp. 9-26, 2017.
- ・鎌田公寿, 木野村嘉則, 小嶋季輝. 小学校道徳教育において育まれるケアの実際—理論的枠組みを用いて抽出・分析した2事例の比較検討を通して—. 未来教育研究所紀要, Vol. 4, pp. 5-14, 2016.
- ・鎌田公寿, 木野村嘉則, 小嶋季輝. 小学校道徳教育における「ケアされる人」の発達動態—子どもの主観に着目した調査に基づいて—. 琉球大学教育学部紀要, Vol. 88, pp. 257-266, 2016.
- ・古市直樹, 鎌田公寿, 木野村嘉則, 小嶋季輝. 教室場面における共同注意の分析方法に関する試論. 東邦学誌, Vol. 45, No. 1, pp. 29-47, 2016.
- ・鎌田公寿, 木野村嘉則, 小嶋季輝. 「ケアされる人」がケア主体へと発達する契機を分析するための枠組み: 道徳教育における Noddings 理論の援用妥当性を論点として. 琉球大学教育学部紀要, Vol. 87, pp. 113-120, 2015.
- ・鎌田公寿, 小嶋季輝, 木野村嘉則. 道徳教育におけるケア場面を抽出するための枠組みの構築—Noddings の理論に依拠して—. 東邦学誌, Vol. 44, No. 1, pp. 71-86, 2015.
- ・藤林献明, 荏山靖, 木野村嘉則, 関子浩二. リバウンドロングジャンプテストの遂行能力からみた水平片脚跳躍において高い接地速度に対応するための踏切動作. 陸上競技学会誌, Vol. 12, pp. 33-44, 2014.
- ・藤林献明, 荏山靖, 木野村嘉則, 関子浩二. 水平片脚跳躍を用いたバリスティックな伸張—短縮サイクル運動の遂行能力と各種跳躍パフォーマンスとの関係. 体育学研究, Vol. 58, No. 1, pp. 61-76, 2013.
- ・坂口将太, 天野秀哉, 木野村嘉則, 大島雄治. 幼児における発育を考慮に入れた運動能力発達評価の試み—認定付属こども園の幼児を対象として—. 茨城キリスト教大学紀要. II, 社会・自然科学, Vol. 46, pp. 273-280, 2012
- ・木野村嘉則, 村木征人, 関子浩二. 走幅跳における助走歩数を増やして踏切るための踏切動作: 短助走跳躍から長助走跳躍に至る踏切動作等の変化率に着目して. 体育学研究, Vol. 57, No. 1, pp. 71-82, 2012.
- ・木野村嘉則, 森信二. ジュニア走幅跳選手における助走歩数が跳躍距離, 助走速度, 踏切時間に及ぼす影響. 茨城工業高等専門学校研究彙報, Vol. 46, pp. 105-111, 2011.

(学会発表)

- ・熊野陽人, 下嶽進一郎, 木野村嘉則, 東中友哉, 松尾彰文. 走幅跳の助走において選手の感覚とデータは一致するのか?—各歩の助走速度と接地時間に着目して—. 日本陸上競技学会大会第 17

回大会, p. 28, 2018

- 木野村嘉則, 下嶽進一郎, 熊野陽人, 松尾大介, 越川一紀, 松尾彰文. プライオメトリクストレーニングにおける力発揮特性の経変変化～自己記録を向上させた選手の特徴～トレーニング科学, Vol. 30 (3), p. 173, 2018
- Yoshinori Kinomura, Natsuki Sado. Case study of the effect of high-intensity intermittent exercise on the distance traveled during high-speed running in a football game. 2018 KNSU International Conference - Asia-pacific Conference on Coaching Science - Constructing a happy sport field of future generations. pp.76-77, 2018
- Saburo Nishimura, Yoshinori Kinomura, Shoichi Matsushita, Rei Matsuzaki, Nobuyuki Ikeda. Influence of approach distance of long jump on jump characteristics of 5th graders. 2018 KNSU International Conference - Asia-pacific Conference on Coaching Science - Constructing a happy sport field of future generations. pp.132-133, 2018
- 小島正憲, 葛原憲治, 木野村嘉則. 初心者の倒立における評価指標の提案. 日本体育学会大会予稿集, Vol. 68, p. 235, 2017.
- 波戸謙太, 木野村嘉則. 野球初心者の全力投球からみたスピードトレーニングの適正反復投球数, 日本体育学会大会予稿集. Vol. 68, p. 235, 2017.
- 木野村嘉則, 波戸謙太. 全国高校野球選手権において無死1塁場面で用いられた攻撃戦術の分析, 日本体育学会大会予稿集. Vol. 68, p. 235, 2017.
- Nobuaki Fujibayashi, Mitsuo Otsuka, Yoshinori Kinomura, Shota Sakaguchi, Tadao Isaka. Coaching method of triple jump takeoff in frontal plane movement-Evaluation using side-inverted pendulum model. The 2015 International Conference for the 35th Anniversary of the Japanese Society of Sport Education and The 4th East Asian Alliance of Sport Pedagogy Conference, Vol. 60, p. 63, 2015
- Yoshinori Kinomura and Nobuaki Fujibayashi. Analysis of the takeoff motion in long jump and high jump among students-High jump for learning to takeoff powerfully in long jump-The 2015 International Conference for the 35th Anniversary of the Japanese Society of Sport Education and The 4th East Asian Alliance of Sport Pedagogy Conference, Vol. 60, p. 62, 2015.
- 木野村嘉則. 一般男子大学生の走幅跳における踏切動作と技術的課題の検討, 日本スポーツ教育学会第34回大会号 p. 21, 2014.
- Yoshinori Kinomura, Nobuaki Fujibayashi, Koji Zushi. The changes in the long jump takeoff as increasing the number of step during the approach run. The 1st Asia-Pacific Conference on Coaching Science, 2014.
- Yoshinori Kinomura, Nobuaki Fujibayashi, Koji Zushi. Characteristics of the long jump take-off as the novice increases the number of steps in the approach run. The 6th Asia-Pacific Conference on Sports Technology, Proceedia Engineering, Vol. 60, pp.313-318, 2013
- 藤林献明, 荻山靖, 木野村嘉則, 関子浩二. 身体の屈伸運動と回転挙動からみた水平加速型跳躍と水平減速型跳躍の特性. 第25回日本トレーニング科学大会号, p. 85, 2012.
- 木野村嘉則, 藤林献明, 関子浩二. 一般学生を対象にした走幅跳授業における助走歩数の設定と

指導法. 第 25 回日本トレーニング科学会大会号, p.93, 2012.

- ・仲田愛, 木野村嘉則, 関子浩二. 女子棒高跳選手における競技史およびトレーニング史に関するコーチング学的研究～4m23 までの記録を高めた女子選手の実践事例を手掛かりにして～. 日本コーチング学会第 23 回大会号, 71-72, 2012
- ・Yoshinori Kinomura, Koji Zushi. Kinematics of the long jump take-off for increasing steps of approach run. The 5th Asia-Pacific Conference on Exercise and Sports Science, 2011.
- ・木野村嘉則, 村木征人, 関子浩二. 走幅跳における助走歩数と跳躍距離の増加パターンを決定する要因. 日本コーチング学会第 22 回大会特別論文集, pp.46-47, 2011.
- ・木野村嘉則, 天野秀哉, 田渕舞, 関子浩二. ジュニア選手の走幅跳における助走歩数の増加と跳躍距離の推移の関係. 人類働態学会会報, No, 94, pp.61-64, 2011.
- ・田渕舞, 木野村嘉則, 藤林献明, 曾田宏, 関子浩二. ハンドボールレフェリーにおける試合中の行動規範に関する研究. 人類働態学会会報, No, 94, pp.65-67, 2011.

(その他)

- ・木野村嘉則, 小島正憲, 葛原憲治. DARTFISH を用いて算出した上肢および下肢関節角度の信頼性と妥当性 : 倒立動作の 2 次元動作分析を事例として. Strength & conditioning journal : 日本ストレングス&コンディショニング協会機関誌, 25 (4) , 12-18, 2018
- ・下嶽進一郎, 熊野陽人, 東中友哉, 松尾大介, 木野村嘉則, 松尾彰文. パフォーマンス向上のトレーニング測定合宿の事例 : 客観的データ・選手の主観・指導者の眼は一致するのか? Training Journal, Vol. 40 (3) , pp.22-26, 2018.
- ・小嶋季輝, 木野村嘉則, 小山雄三. 多視点型教材の開発—「背面跳び」教材の 3 視点での試作—. 琉球大学教育学部教育実践総合センター紀要, Vol. 23, pp.1-13, 2016.
- ・木野村嘉則. 走り幅跳びの技能学習の焦点はどこか. 体育科教育, Vol. 63, No. 3, pp.18-21, 2015.

○科学研究費補助金等への申請状況、交付状況 (学内外)

- ・平成 30 年度科学研究費助成事業若手研究申請—不採択
- ・平成 29 年度科学研究費助成事業若手研究申請—不採択
- ・平成 28 年度科学研究費助成事業若手 B 申請—不採択
- ・平成 27 年度笹川科学研究助成申請—不採択
- ・平成 27 年度大幸財団人文・社会科学系学術研究助成申請—不採択
- ・平成 26 年度科学研究費助成事業研究活動支援スタートアップ申請—採択

○所属学会

日本体育学会, 日本コーチング学会, 日本トレーニング科学会, 日本スポーツ教育学会, 日本教材学会, 日本体育科教育学会

○自己評価

研究テーマに関わる調査を行った。しかしながら論文の投稿が遅れている。

III 大学運営

○目標・計画

(目標)

所属委員会、大学および学内事業にて、情報の確認・把握をしっかりと行い役割を果たす。また、学外授業、出張授業に積極的に参加する。

(計画)

所属委員会（キャリア委員会、中高教職課程委員会、東邦 STEP 運営委員会、）やキャリア WG など、大学および学内事業にて自身の役割を果たし、それぞれの場面に貢献する。

○学内委員等

キャリア支援委員会委員、東邦 STEP 運営委員会委員、中高教職課程委員会委員、男子バスケットボール部顧問

○自己評価

キャリア支援委員、東邦 STEP 運営委員、中高教職課程委員として関連業務についての的確な遂行と審議への貢献を果たした。キャリア WG の一員としてキャリア科目の円滑な遂行に貢献した。

IV 社会貢献

○目標・計画

(目標)

研究成果を社会活動に活かす。学外授業などに積極的に参加し、専門分野を社会に広める。2014年3月から取り組んでいる瑞穂区のクラブチームでの小学生へのサッカーの指導を継続する。この際には、子弟を教育するは天に事うる職分であると捉え、広く社会に報告できる取り組みを目指す。

(計画)

所属学会にて研究成果の報告を行う。学外授業にて高校生と接する際には、スポーツ科学分野に興味を持てるような授業を心がけ、進路選択の一助となるよう取り組む。週に1~2回取り組んでいるサッカーの指導においては2018年度もアシスタントコーチとしてチームをサポートする。サポートに際して、専門分野の知見の提供を求められているため、子どもたちに伝わるように知見提供を行う。

○学会活動等

特になし

○地域連携・社会貢献等

出張授業 東邦高等学校

少年サッカークラブの指導

埼玉県の高校陸上部での依頼講演

○自己評価

出張授業においては生徒が実践しているスポーツ活動の方針を決定する際に、スポーツ科学が成果を出すためには大きな貢献を果たすことが伝わった。依頼講演は今年度2回行ったが、生徒の状況を鑑みて内容を精査し、知識が定着し活用できるよう演習形式となるよう形式の変更を提案して実施した。

V その他の特記事項（学外研究、受賞歴、国際学術交流、自己研鑽等）

陸上競技の授業づくりや体育科教育学に関わる教員との情報交換会、近隣の陸上競技選手への講演などといった、近隣の大学教員と行っている私的な勉強会は自己研鑽に大きく貢献しているた

め、継続して役割を全うしていきたい。また、今年度は海外のクラブチームにてトレーニング遂行やコーチングについての取り組みを見学し、また参加者にて意見交換を行いプロコーチや研究者との交流を行って来た。新たな視点や、これまでの自身の取り組みの整理につながるため、今後も継続していきたい。

VI 総括

学内業務では所属委員会や学部での役割を果たし、一定の成果を挙げていると思う。一方で研究について論文執筆が遅れてしまい、論文投稿に比重を置く必要がある。

以 上

所属学部 学科	職位	氏 名
人間健康学部 人間健康学科	助教	高柳 伸哉
最終学歴	学 位	専門分野
兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科 学校教育臨床連合講座博士課程修了	博士 (学術)	臨床心理学・発達心理学

I 教育活動

○目標・計画

(目標)

学生の教育では、本学の建学の精神である「真に信頼して事を任せうる人格の形成」を基盤に、自他の尊厳と多様性を尊重し、社会の一員として関わり合う中で行動としても真摯に取り組む人材の育成を目指す。講義・演習では、心理学に関する知識・技法を基盤に、日常生活における心身と行動のつながりや心身の健康の増進・問題予防を考えられる力を育てる。また、学生の教育成果として、一面的な評価でなく幅広い知識の獲得と多面的な視点を身につけ、互いの個性を尊重し活かしあった協力体制と相互援助の姿勢を作る。教員の立場としては「子弟を教育するは、私事に非ず。天に事うるの職分なり」を心に据え、教員個人のクレドである「未来の社会づくりにつながる取り組みを行う」を基に、学生個々の特徴の把握と潜在能力等の開花を促進する相互成長の教育を目指す。

(計画)

講義においては、社会的ニーズの高まりが予想される公認心理師資格カリキュラムへの対応を考慮して授業内容を再編成していく。特に、人間の理解・支援の視点だけでなく、現代の社会的背景や社会状況、将来的な社会政策の方向性の理解や地域における他機関・多職種との連携は、従来の臨床心理学に加えて公認心理師に強く求められる要素となっている。さらに、学術的な知見を探究するだけでなく、現実社会への実装と社会的貢献が重視されている状況を合わせ、心理の専門職を目指す学生だけでなく、本学の建学の精神と校訓に込められている社会的人材の養成として、学生教育において身近な生活や卒業後の社会生活の向上に資する心理学の授業を構成する。具体的には、心理学の知見の提示に加え、企業・組織における集団の心理的影響や社会人としてのメンタルヘルス予防の検討、災害時における心理的配慮や支援、多職種との連携など、近年重要な課題とされるテーマを取り入れていく。総合演習Ⅰ・Ⅱでは学生同士のコミュニケーション力の向上と他者の尊重・連携体制の構築をテーマに、実践活動を通じた相互援助スキルの獲得を行う。専門演習Ⅰ・Ⅱでは、学生の人間・社会への興味関心を深めるとともに具体的な課題の設定を促し、心理的問題や社会的問題への考察や対策の検討を通して、健全な心と充実した生活、社会的貢献を両立しうる人材の教育を進める。

○担当科目（前期・後期）

（前期）臨床心理学、障害者心理学、集団心理学、福祉心理学、総合演習Ⅰ、専門演習Ⅰ

（後期）心健康・心の病、心理検査法、特別支援教育論、総合演習Ⅱ、専門演習Ⅱ

○教育方法の実践

講義形式では、基本的な資料・進行方向は前年度を踏襲し、A3サイズ資料両面印刷1枚の講義資料と、出席確認と考察課題・小問題による平常点評価を兼ねたA4サイズ1枚の出席確認票を用

いて授業を行った。一方で、災害支援や依存問題、子育て支援など近年の社会的課題に関して授業の内容を関連させて検討する話題を提供するなど、学生が知識の獲得だけでなく生活での出来事と関連づけた考察ができるように工夫を行った。また、受講人数が140名超登録となった授業については座席指定の上で目視で出席を確認するシステムを導入し、代返の問題を改善した。演習では学生同士のコミュニケーションや多様性の尊重を中心的なテーマとして運営した。

○作成した教科書・教材

既存の授業においては内容を概ね踏襲したが、先述の通り部分的に近年の社会的な課題を加えたり、新たな考察課題を設定したりと改善を試みた。また、映像教材についてもあらたな内容に応じた選別・編集を行い、より効果的な教材となるように工夫した。

○自己評価

演習授業において、総合演習では4・5人の小グループに分かれた活動が効果的であったものの、普段関わりのない学生同士の交流が少なく、全体的な交流が課題として残った。専門演習では、研究テーマの探索と学生自身のライフ・プランニングを含めた活動を行ったが、学生ごとでの取り組みの差が顕著となり、成長が見られた学生もいる一方で全体的な底上げが困難であった。これらの課題については次年度の改善に反映する。

講義形式の授業では、授業評価は概ね平均と同程度か上回る評価が得られた。一方課題として、受講人数が140人程度の授業では座席指定と目視による出席確認を行ったが、管理的な枠組みの強さが学生のアクティブな学びに悪影響を及ぼす可能性もあるため、授業によって使い分けを検討することも必要と思われた。その他、私語等の管理に課題が残ったことや学生理解の底上げの工夫について、次年度の授業運営で検討を重ねていくべき点であろう。

II 研究活動

○研究課題

発達特性を踏まえた強みの探索的検証と心の健康、社会適応との関連の検証

○目標・計画

(目標)

これまで取り組んできた発達障害児者に関する研究を発展させ、発達障害・発達特性による心理・社会的不適応へのリスク・保護要因だけでなく、発達特性を含めた個人的特徴としての「強み」に焦点を当てた検証を進める（本研究課題はH30年度科研費補助金の基盤研究（C）に採択）。また、他大学研究者らとのネットワークにおける取り組みを継続し、福祉分野の要支援者における発達障害・発達特性の関連の研究や子育て支援プログラムの普及・効果検証など、生涯発達に関わりうる多面的な要因について研究を行い、生物・心理・社会的側面からの人間理解と地域資源を活用した生活の質の向上を実現しうる社会体制の構築に貢献する。

(計画)

科研費に採択された研究課題の遂行を中心に、協力都市における調査研究とNPO法人アスペ・エルデの会に所属する発達障害当事者・保護者らへの聴き取り調査を行う。また、他大学の研究者らとともに、発達障害に関する複数の研究プロジェクトに参画する。得られた知見に関して公開可能な範囲で、論文化や地域における講演、教育活動などに反映し、社会への情報発信による貢献を行う。

○2011年4月から2019年3月の研究業績（特許等を含む）

(著書)

- ・辻井正次・伊藤大幸・浜田 恵・村山恭朗・高柳伸哉 (他名) 肯定的・否定的養育行動尺度マニュアル, 総 p, 2018 年, 金子書房, 監修: 辻井正次
- ・辻井正次・伊藤大幸・浜田 恵・村山恭朗・高柳伸哉 (他 27 名) 保育・指導要録のための発達評価シート (TASP) 解説書・記録用紙, 総 33p, 2017 年, スペクトラム出版社, 監修: 辻井正次
- ・高柳伸哉 不登校・学校での不適應の背景として 必携発達障害支援ハンドブック, 総 560p, pp. 54-58, 2016 年, 金剛出版, 編著: 下山晴彦・村瀬嘉代子・森岡正芳 ISBN: 978-4-7724-1503-3
- ・高柳伸哉 子どもの怒りのコントロールをどうするか 最新子どものこころの医学, 総 277p, pp. 234-243, 2014 年, 金芳堂, 編集者: 中村和彦 ISBN: 978-4-7653-1609-5
- ・高柳伸哉 子どものトラウマについてどのように対応していけばよいのか, 家族・保護者を含めたサポート 子どもの PTSD—診断と治療—, 総 307p, pp. 275-281, 2014 年, 診断と治療社, 編集者: 友田明美・杉山登志郎・谷池雅子 ISBN: 978-4-7878-2102-7
- ・高柳伸哉 発達障害のアセスメント事例: 事例 5 就学前健診が絡んだ発達障害児のケース 発達障害児者支援とアセスメントのガイドライン, 総 440p, pp. 341-347, 2014 年, 金子書房, 監修者: 辻井正次, 編集者: 明翫光宜・松本かおり・染木史緒・伊藤大幸 ISBN: 978-4-7608-3257-6

(学術論文)

<査読有>

- ・村山恭朗・伊藤大幸・中島俊思・浜田 恵・片桐正敏・田中善大・高柳伸哉・野田 航・辻井正次 一般小中学生におけるいじめ経験と養育行動の関連に関する横断的検証, 日本健康心理学研究, 第 31 卷, 31-41, 2018 年
- ・Masaki Adachi, Michio Takahashi, Nobuya Takayanagi, Satomi Yoshida, Sayura Yasuda, Masanori Tanaka, Ayako Osato-Kaneda, Manabu Saito, Michito Kuribayashi, Kazuhiko Nakamura Adaptation of the Autism Spectrum Screening Questionnaire (ASSQ) to preschool children, PLOS ONE 13 (8) : e0203254, 2018 年
- ・浜田恵・野村和代・伊藤大幸・村山恭朗・高柳伸哉・明翫光宜・辻井正次 ペアレント・プログラムによる保護者支援と支援者研修の効果, 小児の精神と神経, 第 57 卷, 313-321, 2018 年
- ・伊藤大幸・浜田恵・村山恭朗・高柳伸哉・野村和代・明翫光宜・辻井正次 クラスサイズと学業成績および情緒的・行動的問題の因果関係——自然実験デザインとマルチレベルモデルによる検証——, 教育心理学研究, 第 65 卷, 451-465, 2017 年
- ・Michio Takahashi, Masaki Adachi, Nobuya Takayanagi, Sayura Yasuda, Masanori Tanaka, Ayako Osato-Kaneda, Takahito Masuda, Akio Nakai, Manabu Saito, Michito Kuribayashi, Kazuhiko Nakamura Coordination difficulties in preschool-aged children are associated with maternal parenting stress: A community-based cross-sectional study, Research in Developmental Disabilities, 70, 11-21, 2017 年
- ・村山恭朗・伊藤大幸・高柳伸哉・上宮愛・中島俊思・片桐正敏・浜田恵・明翫光宜・辻井正次 小学校高学年児童および中学生における情動調整方略と抑うつ・攻撃性との関連, 教育心理学研究, 第 65 卷, 64-76, 2017 年
- ・村山恭朗・伊藤大幸・片桐正敏・中島俊思・浜田恵・高柳伸哉・上宮 愛・明翫光宜・辻井正次

小学高学年および中学生における反応スタイルの調整効果とストレス生成効果 健康心理学研究第 29 卷, 1-11, 2017 年

- ・村山恭朗・伊藤大幸・大嶽さとこ・片桐正敏・浜田 恵・中島俊思・上宮愛・野村和代・高柳伸哉・明翫明宜・辻井正次 小中学生におけるメンタルヘルスに対するソーシャルサポートの横断的効果 発達心理学研究第 27 卷, 395-407, 2016 年
- ・足立匡基・高柳伸哉・吉田恵心・安田小響・大里絢子・田中勝則・増田貴人・栗林理人・斉藤まなぶ・中村和彦 ASSQ 短縮版の 5 歳児適用における妥当性 児童青年精神医学とその近接領域第 57 卷, 603-617, 2016 年
- ・Satomi Yoshida, Nobuya Takayanagi, Masaki Adachi, Sayura Yasuda, Kazuhiko Nakamura Comprehensive review of current findings of callous and unemotional traits. 弘前医学第 67 卷, 1-12, 2016 年
- ・野田航・伊藤大幸・浜田恵・上宮愛・片桐正敏・高柳伸哉・中島俊思・村山恭朗・明翫光宣・辻井正次 小・中学生の攻撃性はどの程度安定しているか: 潜在特性-状態モデルを用いたコホートデータの多母集団同時分析 発達心理学研究第 27 卷, 158-166, 2016 年
- ・浜田恵・伊藤大幸・片桐正敏・上宮愛・中島俊思・高柳伸哉・村山恭朗・明翫光宣・辻井正次 小中学生における性別違和感と抑うつ・攻撃性の関連 発達心理学研究第 27 卷, 137-147, 2016 年
- ・伊藤大幸・村山恭朗・片桐正敏・中島俊思・浜田恵・田中善大・野田航・高柳伸哉・辻井正次 一般小中学生における食行動異常の実態とメンタルヘルスおよび社会的不適応との関連 教育心理学研究第 64 卷, 170-183, 2016 年
- ・Nobuya Takayanagi, Satomi Yoshida, Sayura Yasuda, Masaki Adachi, Ayako Kaneda-Osato, Masanori Tanaka, Takahito Masuda, Michito Kuribayashi, Manabu Saito, Kazuhiko Nakamura Psychometric properties of the Japanese ADHD-RS in preschool children. Research in Developmental Disabilities, 55, 268-278, 2016 年
- ・浜田恵・伊藤大幸・田中善大・高柳伸哉・片桐正敏・中島俊思・村山恭朗・野田航・辻井正次 一般小中学生における日常生活習慣と抑うつ傾向の関連 小児の精神と神経第 56 卷, 47-56, 2016 年
- ・伊藤大幸・野田航・中島俊思・田中善大・浜田恵・片桐正敏・高柳伸哉・村山恭朗・辻井正次 保育士の発達評価に基づく就学後の心理社会的不適応の縦断的予測: 保育要録用発達評価尺度の開発 発達心理学研究第 27 卷, 59-71, 2016 年
- ・片桐正敏・伊藤大幸・上宮愛・浜田恵・村山恭朗・中島俊思・高柳伸哉・明翫光宣・辻井正次 低学年児童の書字能力と抑うつ, 攻撃性との関係 LD 研究第 25 卷, 49-58, 2016 年
- ・田中善大・伊藤大幸・村山恭朗・野田航・中島俊思・浜田恵・片桐正敏・高柳伸哉・辻井正次 保育所及び小中学校における ASD 傾向及び ADHD 傾向といじめ被害及び加害との関連 発達心理学研究第 26 卷, 332-343, 2015 年
- ・片桐正敏・伊藤大幸・中島俊思・田中善大・野田航・浜田恵・村山恭朗・高柳伸哉・辻井正次 一般児童生徒の強迫傾向が後の抑うつ, 攻撃性を予測するか—単一市内コホート調査に基づく縦断的検討— 小児の精神と神経第 55 卷, 117-126, 2015 年
- ・村山恭朗・伊藤大幸・浜田恵・中島俊思・野田航・片桐正敏・高柳伸哉・田中善大・辻井正次 いじめ加害・被害と内在化/外在化問題との関連性 発達心理学研究第 26 卷, 13-22, 2015 年
- ・中島俊思・大西将史・伊藤大幸・高柳伸哉・野田航・原田新・田中善大・望月直人・大嶽さとこ・

- 辻井正次 就学前の保育園生活における低出生体重児の発達の特徴：保育記録による発達尺度（NDSC）の横断データによる検討 小児の精神と神経第 54 巻, 345-355, 2015 年
- ・村山恭朗・伊藤大幸・高柳伸哉・松本かおり・田中善大・野田航・望月直人・中島俊思・辻井正次 小学高学年・中学生用反応スタイル尺度の開発 発達心理学研究第 25 巻, 477-488, 2014 年
 - ・大嶽さと子・伊藤大幸・野田航・中島俊思・望月直人・大西将史・高柳伸哉・辻井正次 遊び・余暇活動と子どもの精神的健康との関連 小児の精神と神経第 54 巻, 209-219, 2014 年
 - ・伊藤大幸・中島俊思・望月直人・高柳伸哉・田中善大・松本かおり・大嶽さと子・原田新・野田航・辻井正次 肯定的・否定的養育行動尺度の開発：因子構造および構成概念妥当性の検証 発達心理学研究第 25 巻, 221-231, 2014 年
 - ・伊藤大幸・田中善大・村山恭朗・中島俊思・高柳伸哉・野田航・望月直人・松本かおり・辻井正次 小中学生用社会的不適応尺度の開発と構成概念妥当性の検証 精神医学第 56 巻, 699-708, 2014 年
 - ・伊藤大幸・松本かおり・高柳伸哉・原田新・大嶽さと子・望月直人・中島俊思・野田航・田中善大・辻井正次 ASSQ 日本語版の心理測定学的特性の検証と短縮版の開発 心理学研究第 85 巻, 304-312, 2014 年
 - ・田中善大・伊藤大幸・野田航・高柳伸哉・原田新・望月直人・大嶽さと子・辻井正次 保育記録による発達尺度改訂版（NDSC-R）を用いた就学後の適応及び不適応の予測 保育学研究第 52 巻, 80-89, 2014 年
 - ・田中善大・伊藤大幸・高柳伸哉・原田新・野田航・大嶽さと子・中島俊思・望月直人・辻井正次 小中学校における友人関係問題に対する ASD 傾向及び ADHD 傾向の影響の検討 精神医学第 56 巻, 501-510, 2014 年
 - ・原田新・伊藤大幸・望月直人・中島俊思・野田航・染木史緒・高柳伸哉・田中善大・大嶽さと子・辻井正次 日本語版 Strengths and Difficulties Questionnaire 教師評定フォームの構成概念的妥当性 小児の精神と神経第 54 巻, 17-28, 2014 年
 - ・田中善大・伊藤大幸・高柳伸哉・原田新・染木史緒・野田航・大嶽さと子・中島俊思・望月直人・辻井正次 保育記録による発達尺度（NDSC）を用いた学校適応の予測：保育所年長時から小学 1 年時までの縦断調査を通して 発達心理学研究第 25 巻, 58-66, 2014 年
 - ・望月直人・伊藤大幸・原田新・野田航・松本かおり・高柳伸哉・中島俊思・大嶽さと子・田中善大・辻井正次 中学生の非行行為と攻撃性、抑うつとの関連 精神医学第 56 巻, 4-11, 2014 年
 - ・原田新・伊藤大幸・望月直人・田中善大・大嶽さと子・高柳伸哉・中島俊思・野田航・染木史緒・辻井正次 日本語版 Strengths and Difficulties Questionnaire 自己評定フォームの構成概念的妥当性：抑うつ、攻撃性、親評定フォームとの関連から 小児の精神と神経第 53 巻, 343-351, 2014 年
 - ・高柳伸哉・伊藤大幸・田中善大・原田新・大嶽さと子・望月直人・染木史緒・野田航・中島俊思・辻井正次 小中学生における欠席行動と保護者評定による行動的・情緒的問題との関連 臨床精神医学第 42 巻, 1563-1572, 2013 年
 - ・Wataru Noda, Hiroyuki Ito, Chikako Fujita, Masafumi Ohnishi, Nobuya Takayanagi, Fumio Someki, Syunji Nakajima, Satoko Ohtake, Naoto Mochizuki, Masatsugu Tsujii Examining the relationships between attention deficit/hyperactivity disorder and developmental coordination disorder symptoms, and writing performance in Japanese second grade

students. Research in developmental disabilities. 34: 2909-2916. 2013 年

- ・伊藤大幸・田中善大・高柳伸哉・大嶽さと子・原田新・中島俊思・野田航・染木史緒・望月直人・辻井正次 保育記録による発達尺度改訂版 (NDSC-R) の標準化：月齢区分ごとの標準値およびカットオフ値の検討 精神医学第 55 巻, 549-560, 2013 年
- ・伊藤大幸・望月直人・中島俊思・瀬野由衣・藤田知加子・高柳伸哉・大西将史・大嶽さと子・岡田涼・辻井正次 保育記録による発達尺度 (NDSC) の構成概念妥当性：尺度構造の検討と月齢および不適応問題との関連 発達心理学研究第 24 巻, 211-220, 2013 年
- ・高柳伸哉・伊藤大幸・野田航・田中善大・大嶽さと子・染木史緒・原田新・中島俊思・望月直人・辻井正次 小中学生における欠席行動と教師評定による学校適応との関連 精神医学第 55 巻, 355-362, 2013 年
- ・中島俊思・大西将史・伊藤大幸・野田航・望月直人・高柳伸哉・染木史緒・大嶽さと子・瀬野由衣・林陽子・辻井正次 3歳児健診における保健師による PARS 短縮版活用の可能性と課題 小児の精神と神経第 53 巻, 47-57, 2013 年
- ・伊藤大幸・田中善大・高柳伸哉・望月直人・染木史緒・野田航・大嶽さと子・中島俊思・原田新・辻井正次 保育記録による発達尺度改訂版 (NDSC-R) の開発：信頼性および妥当性の比較 精神医学第 55 巻, 263-272, 2013 年
- ・野田航・伊藤大幸・中島俊思・大嶽さと子・高柳伸哉・染木史緒・原田新・望月直人・田中善大・辻井正次 小中学生を対象とした日本語版 Strengths and Difficulties Questionnaire 教師評定フォームの標準化と心理測定学的特徴の検討：単一市内全校調査を用いて 臨床精神医学第 42 巻, 247-255, 2013 年
- ・野田航・伊藤大幸・原田新・中島俊思・高柳伸哉・染木史緒・田中善大・大嶽さと子・望月直人・辻井正次 日本語版 Strengths and Difficulties Questionnaire 自己評定フォームの信頼性・妥当性の検討：単一市内全校調査を用いて 臨床精神医学第 42 巻, 119-127, 2013 年
- ・中島俊思・伊藤大幸・大西将史・高柳伸哉・大嶽さと子・染木史緒・望月直人・野田航・林陽子・瀬野由衣・辻井正次 3歳児健診における広汎性発達障害児早期発見のためのスクリーニングツール PARS 短縮版導入の試み 精神医学第 54 巻, 911-914, 2012 年
- ・高柳伸哉・伊藤大幸・大嶽さと子・野田航・大西将史・中島俊思・望月直人・染木史緒・辻井正次 小中学生における欠席行動と抑うつ、攻撃性との関連 臨床精神医学第 41 巻 (7), 925-932, 2012 年
- ・大嶽さと子・伊藤大幸・染木史緒・野田航・林陽子・中島俊思・高柳伸哉・瀬野由衣・岡田涼・辻井正次 一般中学生における自傷行為の経験および頻度と抑うつとの関連：単一市内全校調査に基づく検討 精神医学第 54 巻, 673-680, 2012 年
- ・野田航・伊藤大幸・藤田知加子・中島俊思・瀬野由衣・岡田涼・林陽子・谷伊織・高柳伸哉・辻井正次 日本語版 Strengths and Difficulties Questionnaire 親評定フォームについての再検討 一単一市内前項調査に基づく学年・性別の標準得点とカットオフ値の算出— 精神医学第 54 巻, 383-391, 2012 年 4 月
- ・高柳伸哉・伊藤大幸・岡田涼・中島俊思・大西将史・染木史緒・野田航・谷伊織・林陽子・辻井正次 一般中学生における自傷行為のリスク要因—単一市内全校調査に基づく検討— 臨床精神医学第 41 巻, 87-95, 2012 年

<査読なし>

- ・野田航・高柳伸哉・望月直人・中島俊思 発達障害者支援における認知行動療法 愛知県知的障害者福祉協会研究紀要第17巻, 36-49, 2012年
- ・辻井正次・望月直人・中島俊思・高柳伸哉・野田航・野村和代・大嶽さと子・伊藤大幸 福島県の学校における子どものこころの支援(1) — “こころの教育”プログラムの実践— 中京大学現代社会学部紀要第6巻, 137-145, 2012年

(学会発表)

<国際学会発表>

- ・Masaki Adachi, Nobuya Takayanagi, Michio Takahashi, Sayura Yasuda, Satomi Yoshida, Tamaki Mikami, Akio Nakai, Manabu Saito, Kazuhiko Nakamura Behavioral problems in preschool children with Developmental Coordination Disorder, 12th International Conference for Developmental Coordination Disorder, Perth in Australia, 2017年
- ・Tamaki Mikami, Manabu Saito, Takahito Masuda, Masanori Tanaka, Ayako Osato-Kaneda, Yui Sakamoto, Satomi Yoshida, Nobuya Takayanagi, Masaki Adachi, Sayura Yasuda, Michio Kuribayashi, Kazuhiko Nakamura The parental and teacher's recognition for Developmental Coordination Disorder in preschool-aged children, 12th International Conference for Developmental Coordination Disorder, Perth in Australia, 2017年
- ・Manabu Saito, Ayako Osato-Kaneda, Masanori Tanaka, Takahito Masuda, Satomi Yoshida, Yui Sakamoto, Yuri Matsubara, Nobuya Takayanagi, Masaki Adachi, Michio Takahashi, Sayura Yasuda, Michio Kuribayashi, Akio Nakai, Motohide Miyahara, Kazuhiko Nakamura Prevalence and comorbidities of DCD Using DSM-5, comparison of motor and cognitive functions at preschool age in a Japanese community, 12th International Conference for Developmental Coordination Disorder, Perth in Australia, 2017年
- ・Masanori Tanaka, Manabu Saito, Ayako Kaneda-Osato, Takahito Masuda, Nobuya Takayanagi, Michio Takahashi, Masaki Adachi, Sayura Yasuda, Satomi Yoshida, Michio Kuribayashi, Akio Nakai, Motohide Miyahara, Kazuhiko Nakamura, Yui Sakamoto Evaluation of factor structure equivalence of the Developmental Coordination Disorder Questionnaire across genders in Japanese preschool children: HFC study, 12th International Conference for Developmental Coordination Disorder, Perth in Australia, 2017年
- ・Michio Takahashi, Masaki Adachi, Nobuya Takayanagi, Sayura Yasuda, Ayako Osato-Kaneda, Tamaki Mikami, Akio Nakai, Manabu Saito, Michio Kuribayashi, Kazuhiko Nakamura Developmental Coordination Disorder trait in Japanese preschoolers impact on parenting stress, 12th International Conference for Developmental Coordination Disorder, Perth in Australia, 2017年
- ・Manabu Saito, Masaki Adachi, Satomi Yoshida, Sayura Yasuda, Michio Kuribayashi, Yui Sakamoto, Kazuhiko Nakamura, Nobuya Takayanagi Gaze Abnormality Can Distinguish Between Autism Spectrum Disorder and Typically Developing Children through Screening in 5-Year-Old Children By a Double Blind Study in a Japanese Community Based Population, International Meeting for Autism Research, San Francisco in USA, 2017年(査読有)
- ・Yui Sakamoto, Manabu Saito, Satomi Yoshida, Masaki Adachi, Nobuya Takayanagi, Sayura Yasuda, Michio Kuribayashi, Kazuhiko Nakamura Prevalence and Comorbidities of Autism

Spectrum Disorder and Study of the Developmental Health Checkup in a Japanese Community-Based Population Sample of Five-Year-Old Children, International Meeting for Autism Research, San Francisco in USA, 2017年 (査読有)

- Masaki Adachi, Nobuya Takayanagi, Satomi Yoshida, Sayura Yasuda, Ayako Kaneda-Osato, Masanori Tanaka, Takahito Masuda, Michito Kuribayashi, Manabu Saito, & Kazuhiko Nakamura Applicability of the Autism Spectrum Screening Questionnaire Parent Form to 5-year-old children. International Meeting for Autism Research, Baltimore, USA, 2016年 (査読有)
- Nobuya Takayanagi, Masaki Adachi, Sayura Yasuda, Satomi Yoshida, Michito Kuribayashi, Kazuhiko Nakamura Risk and protective factors of depression in children with ASD tendency in Japan. International Meeting for Autism Research, Baltimore, USA, 2016年 (査読有)
- Yui Sakamoto, Manabu Saito, Ayako Kaneda-Osato, Masanori Tanaka, Takahito Masuda, Nobuya Takayanagi, Sayura Yasuda, Kazuhiko Nakamura Epidemiology of Autism Spectrum Disorder and Attention Deficit Hyperactivity Disorder in a community-based population sample of five-year-olds Children. 16th International ESCAP Congress, Madrid, Spain, 2015年
- Nobuya Takayanagi, Hiroyuki Ito, Yoshihiro Tanaka, Shin Harada, & Masatsugu Tsujii A relation between autism spectrum, school absenteeism and behavioral and emotional problems of elementary and middle school students. International Congress Autism Europe 10, Budapest, Hungary, 2013年
- Nobuya Takayanagi, Syunji Nakajima, Naoto Mochizuki, Masafumi Ohnishi, Kazuyo Nomura, Wataru Noda, Hiroyuki Ito, Toshiro Sugiyama, & Masatsugu Tsujii The features of juvenile delinquents in a children's self-reliance support facilities in Japan (4) : An examination of factor index and subscale scores pattern of IQ. 7th International Conference on Child and Adolescent Psychopathology, London, UK, 2012年
- Masafumi Ohnishi, Naoto Mochizuki, Syunji Nakajima, Nobuya Takayanagi, Kazuyo Nomura, Wataru Noda, Hiroyuki Ito, Toshiro Sugiyama, & Masatsugu Tsujii The features of juvenile delinquents in a children's self-reliance support facilities in Japan (3) : The examination of the IQ profile. 7th International Conference on Child and Adolescent Psychopathology, London, UK, 2012年
- Syunji Nakajima, Hiroyuki Ito, Masafumi Ohnishi, Naoto Mochizuki, Wataru Noda, Kazuyo Nomura, Nobuya Takayanagi, Toshiro Sugiyama, & Masatsugu Tsujii The features of juvenile delinquents in a children's self-reliance support facilities in Japan (2) : PDD and ADHD tendency. 7th International Conference on Child and Adolescent Psychopathology, London, UK, 2012年
- Naoto Mochizuki, Masafumi Ohnishi, Syunji Nakajima, Nobuya Takayanagi, Wataru Noda, Kazuyo Nomura, Hiroyuki Ito, Toshiro Sugiyama, & Masatsugu Tsujii The features of juvenile delinquents in a children's self-reliance support facilities in Japan (1) : The examination of the psychiatric disorders and childhood adversities. 7th International Conference on Child and Adolescent Psychopathology, London, UK, 2012年
- Wataru Noda, Iori Tani, Ryo Okada, Hiroyuki Ito, Nobuya Takayanagi, & Masatsugu Tsujii

Comparison of the motor coordination among Japanese children and early adolescents with/without PDD using the Japanese version of the Developmental Coordination Disorder Questionnaire. Asia Pacific Autism Conference, Perth, Australia, 2011 年

- ・Nobuya Takayanagi, Iori Tani, Ryo Okada, Hiroyuki Ito, Wataru Noda, & Masatsugu Tsujii Relationship between the motor coordination and difficulty of adaptation in Japanese children with PDD using the Japanese version Developmental Coordination Disorder Questionnaire. Asia Pacific Autism Conference, Perth, Australia, 2011 年

<国内学会発表>

- ・吉田恵心・高柳伸哉・足立匡基・安田小響・大里絢子・斉藤まなぶ・栗林理人・中村和彦 発達特性傾向、ストレス要因と攻撃性の関連について 日本児童青年精神医学会第 56 回大会, 015-5, 横浜, 2015 年
- ・高柳伸哉・足立匡基・安田小響・吉田恵心・大里絢子・斉藤まなぶ・栗林理人・中村和彦 小中学生における発達特性と抑うつ、不適応の関連 日本児童青年精神医学会第 56 回大会, 015-1, 横浜, 2015 年
- ・伊藤大幸・高柳伸哉・野田航・田中善大 小中学生の発達とメンタルヘルスに関する縦断コホート研究(2)一思春期の問題行動の予測と因果的メカニズムの探索一 日本発達心理学会第 25 回大会, SS5-5, 京都, 2014 年
- ・原田新・高柳伸哉・望月直人・辻井正次 単一市内の大規模調査から見えた, 子どものメンタルヘルスとその支援③ 一学校臨床支援に必要なアセスメント:SDQ の三者評定の有用性一 日本心理臨床学会第 32 回秋季大会, SB3-04-3, 横浜, 2013 年
- ・高柳伸哉・原田新・望月直人・辻井正次 単一市内の大規模調査から見えた, 子どものメンタルヘルスとその支援②一児童生徒の不登校(欠席日数)とメンタルヘルス, 保護者からみた適応との関連一 日本心理臨床学会第 32 回秋季大会, SB3-04-2, 横浜, 2013 年
- ・望月直人・原田新・高柳伸哉・辻井正次 単一市内の大規模調査からみえた, 子どものメンタルヘルスとその支援①一中学生の非行行為と抑うつ・攻撃性との関連一 日本心理臨床学会第 32 回秋季大会, SB3-04-1, 横浜, 2013 年
- ・高柳伸哉・望月直人・辻井正次 民間 NPO 法人における HF-ASD 児者の実態把握調査と実証的介入プログラムの試み②~中期介入プログラム, 怒りのコントロールプログラムの紹介~ 日本心理臨床学会第 31 回秋季大会, B-3-18, 愛知, 2012 年
- ・高柳伸哉 身体感覚増幅が心気症傾向と身体症状に及ぼす影響一中学生を対象とした 1 年間の継続調査一 日本健康心理学会 第 24 回大会, PB-15, 東京, 2011 年
- ・高柳伸哉 中学生における身体感覚増幅と心気症傾向, 身体症状の学校生活ライフイベントとの関連 日本心理臨床学会 第 30 回秋季大会, B2-4-03, 福岡, 2011 年

(その他)

- ・村山恭朗・高柳伸哉・浜田 恵 TASP の臨床的活用法, アスペハート, 48: 40-49, 2018 年
- ・高柳伸哉 第 5 章 5-2 就学時健診 効果的な巡回相談支援のための基本と実践, 総 56p, pp. 21-23, 2018 年, アスペ・エルデの会, 編著:辻井正次・浜田 恵, 平成 29 年度厚生労働省障害者総合福祉推進事業
- ・高柳伸哉 第 6 章 6-4 効果的な子ども支援のためのカテゴリー別アプローチ③個別の療育を行う(発達障害者支援センター、医療機関など) 効果的な巡回相談支援のための基本と実践, 総 56p,

pp. 33-36, 2018 年, アスペ・エルデの会, 編著: 辻井正次・浜田 恵, 平成 29 年度厚生労働省
障害者総合福祉推進事業

- ・高柳伸哉 第 3 章巡回相談支援の活用 巡回相談支援活用マニュアル, 総 15p, pp. 6-12, 2018 年,
アスペ・エルデの会, 編著: 辻井正次・浜田 恵, 平成 29 年度厚生労働省障害者総合福祉推進事
業
- ・高柳伸哉 第 3 章 2 節 臨床心理学的プロフィール検討 無料低額宿泊所等を利用する被保護者
等の利用者の状態像を明らかにするための調査研究, 総 98p, pp. 39-56, 2018 年, 中京大学現代
社会学部辻井正次研究室, 編著: 辻井正次・明翫光宜, 平成 29 年度厚生労働省社会福祉推進事業
- ・高柳伸哉 特別企画「整理整頓アンケート調査」 アスペハート第 44 巻, 22-31, 2016 年
- ・高柳伸哉 ADHD のスクリーニングと診断・評価—CAARS/CAADID 臨床心理学 第 16 巻, 33-37,
2016 年 ISBN: 978-7724-1470-8
- ・高柳伸哉 発達障害のある不登校の子どもへの心理療法 アスペハート第 38 巻, 26-31, 2014 年
ISBN: 978-4-904809-15-0
- ・高柳伸哉 成人の ADHD, その特徴 こころの科学増刊 DSM-5 対応 神経発達障害のすべて, 80-
84, 2014 年 ISBN: 978-4-535904-31-6
- ・田中善大・高柳伸哉・野田航 発達障害のパニックに関する研究の展望 —パニックに対する支
援方法を中心に アスペハート第 35 巻, 48-53, 2013 年 ISBN: 978-4-904809-12-9
- ・野田航・高柳伸哉・中島俊思・望月直人 成人期以降の支援の実際 臨床心理学 第 13 巻, 523-
528, 2013 年 ISBN: 978-4-772413-25-1
- ・辻井正次・望月直人・高柳伸哉 子育て支援として, 地域で保育士がペアレントトレーニングを
実施する 月刊地域保健, 第 44 巻, 42-48, 2013 年
- ・高柳伸哉 海外の自閉症スペクトラム障害への怒りと不安対応 CBT 研究のレビュー アスペハー
ト第 29 号, 8-12, 2011 年 ISBN: 978-4-904809-06-8

○科学研究費補助金等への申請状況、交付状況（学内外）

- ・辻井正次・井上雅彦・岩永竜一郎・加賀佳美・黒田美保・笹森洋樹・鈴木勝昭・高柳伸哉・西牧
謙吾・浜田 恵・日詰正文・三上珠希・明翫光宜・吉村優子 厚生労働科学研究費補助金（障害
者政策総合研究事業） 課題 ID: 19189603「国立機関・専門家の連携と地域研修の実態調査によ
る発達障害児者支援の効果的な研修の開発」 2018 年度応募中
- ・高柳伸哉 科学研究費補助金 基盤 (C) 課題 ID: 18K03158「発達障害児者における強みの探
索的研究と精神的健康・社会適応との関連の検証」 2018 年 4 月～2021 年 3 月（予定） 日本
学術振興会
- ・高柳伸哉 科学研究費補助金 若手 (B) 課題 ID: 17848247「発達障害児のきょうだいにおけ
る心理的影響の質的・量的検証の試み」 2016 年応募 不採択
- ・斉藤まなぶ・高柳伸哉・足立匡基・尾崎拓・中村和彦・大里絢子 科学研究費補助金 基盤研究
(C) 課題番号: 16807666「5 歳児における発達障害の診断手法の開発と疫学研究」 2016 年
4 月～2017 年 3 月（研究分担者として 1 年間参画） 日本学術振興会
- ・森則夫・大隅香苗・高貝就・土屋賢治・高柳伸哉・野田航・伊藤大幸 科学研究費補助金 基盤
研究 (C) 課題番号: 14468047「小中学校教員のメンタルヘルスについての現況調査と支援プロ
グラムの構築」 2014 年 4 月～2015 年 3 月（研究分担者として 1 年間参画） 日本学術振興会
- ・高柳伸哉 科学研究費補助金 若手研究 (B) 課題番号: 26780383「自閉症スペクトラム児の適

応を促進するプロテクト要因の検証と支援授業の開発」 2014年4月～2017年3月 日本学術振興会

- ・高柳伸哉 科学研究費補助金 研究活動スタート支援 課題番号：24830039「自閉症スペクトラム児の精神的健康と適応に関連するプロテクト要因の縦断的検討」 2012年9月～2014年3月 日本学術振興会

○所属学会

日本健康心理学会、日本教育心理学会、日本心理臨床学会、日本認知療法学会、日本小児精神神経学会、日本発達心理学会

○自己評価

研究活動においては、2018年4月に研究代表者として応募したH30年度科研費補助金の基盤研究(C)に採択されたことに加え、厚生労働省研究事業への調査協力者としての参画やこれまでの研究ネットワークを活かした調査研究・支援活動への取り組みを継続し、概ね目標を達成することができた。

具体的な内容では、発達障害当事者・保護者らへの聴き取りなど当初の計画通りに進んでいない面もあるものの、愛知県田原市子育て支援課との数年に及ぶ研究連携の構築など、計画外の進展もあり、今後の研究活動の推進に寄与する成果が得られた。

課題として、多様な活動に携わる反面、第一著者としての学術論文採択には至らず、研究ネットワーク成果の共著者や総論への掲載が中心となってしまった。すでに研究協力者らとの相談は進めているが、次年度以降は積み重ねられた研究データを活用して第一著者として学術論文への採択を目指すことを目的とする。

III 大学運営

○目標・計画

(目標)

地域連携委員として周辺地域と連携した活動を推進すると共に、住民へのワークショップなどにより地域に貢献する。人権問題委員として、世界的な動向や近年高まる人権尊重のニーズを踏まえた検討を行う。また中途退学防止ワーキンググループ(WG)の一員として、学生の早期リスク把握や教員間の情報共有を推進し、退学の防止に取り組む。

(計画)

本学の運営方針・計画と各委員会での方向性を踏まえつつ、今後の地域連携の枠組みや人権尊重の在り方につながるよう、近年ニーズの高まる発達障害やLGBTなど、心理学等の専門性や知見を活かした提言や実践を行う。中退防止WGとしては教員間での情報共有システムを継続するとともに、職員との連携したサポートの共有など、教員間における一貫した予防的取り組み方針の推進に貢献する。

○学内委員等

人権問題委員会委員、地域連携委員会委員、人権問題相談員
人間健康学部中退防止WG、人間健康学部総合演習WG

○自己評価

各委員会において、概ね委員としての役割を果たし、委員会活動の進展に貢献できた。人権問題委員会では心理的な視点から対応の提案や話し合いを行った。地域連携委員会では地域と連携し

た授業・活動報告会で初の試みとなるコンテスト形式の導入について責任者を務め、渡辺委員とともにシステムの構築・運営を行った。実施上でいくつか課題も挙げられたものの、学生の発表や担当教員らの指導の素晴らしさから報告会には高い評価が得られたようである。

学部における WG メンバーとして、中退防止や総合演習の運営に引き続き取り組んだ。総合演習については今年度の活動の振り返りから、2019 年度における運営の効率化と改善の提案を行った。また、人間健康学部の入学前セミナー担当講師として内容の作成と実施、心理教員として 2019 年度より開始する公認心理師カリキュラムの策定に携わった。さらに、発達障害や心理学へのニーズの高まりを背景に、大学を通して依頼を受けた学校教員への教員免許講習の講師や高等学校における教員研修講師、高校への出張講義の講師、高大連携授業の講師を務め、大学の取り組みに貢献した。

IV 社会貢献

○目標・計画

(目標)

発達障害児者とその家族による NPO 法人アスペ・エルデの会における支援活動を継続し、ボランティア学生の指導・管理や地域住民への発達障害の啓発活動に努める。また研究活動や委員会活動とも連動し、連携市町村や ATUCC における子育て支援講座を開催する。

(計画)

地域からの支援ニーズは継続して高い状況にあり、今年度も自治体等とスケジュールを調整した上で活動を進めていく。アスペ・エルデの会を通して講演・研修依頼に対応する派遣講師も務め、対応可能な範囲で全国の発達障害理解・支援に関する啓発活動を行う。また、ATUCC では前期・後期ともに子育て支援講座を試行的に開催し、子育ての困り感や子どもへの対応に関する周辺地域のニーズを把握する。

○学会活動等

なし

○地域連携・社会貢献等

- ・ 田原市立神戸小学校教員研修講師 2019 年 1 月 31 日
- ・ 田原市立田原中部小学校教員研修講師 2019 年 1 月 24 日
- ・ 一宮市中央子育て支援センター アスペ・エルデの会ペアレント・プログラム・スーパーバイザー 2018 年 12 月 25 日・2019 年 1 月 28 日 (2 回)
- ・ 碧南市役所・福祉センター アスペ・エルデの会ペアレント・プログラム・スーパーバイザー 2018 年 11 月 27 日・2018 年 12 月 18 日 (2 回)
- ・ 田原市立田原東部小学校教員研修講師 2018 年 11 月 26 日
- ・ 田原市立福江小学校教員研修講師 2019 年 11 月 19 日
- ・ 一宮市いずみ学園 アスペ・エルデの会ペアレント・プログラム・スーパーバイザー 2018 年 10 月 16 日・11 月 13 日・12 月 11 日 (3 回)
- ・ 海津市社会福祉課 アスペ・エルデの会ペアレント・プログラム・スーパーバイザー 2018 年 9 月 26 日～12 月 6 日 (5 回)
- ・ 安城市子育て支援センター アスペ・エルデの会ペアレント・プログラム講師 2018 年 8 月 30 日～年 11 月 22 日 (7 回)

- ・アスペ・エルデの会西三河支部星の子倶楽部 セミナー講師 2018年9月29日
- ・福島県浪江町立浪江中学校 心の健康相談心理士 2018年9月4日
- ・福島県富岡小中学校 心の健康相談心理士 2018年8月29日
- ・アスペ・エルデの会 日間賀島合宿きょうだいプログラム・ディレクター 2018年8月16～20日
- ・アスペ・エルデの会 西三河支部ディレクター 2018年4月1日～現在

○自己評価

2011年度より専門家として関わっているアスペ・エルデの会を通じた子育て支援活動への対応をはじめ、中京大学や弘前大学等の研究ネットワークによる被災地支援活動や発達障害の啓発活動に取り組んだ。特に、発達障害や子育て支援、心の問題への関心・ニーズは社会的にも高まっていることから、こうした取り組みを担うことは、心理的支援に携わる大学教員として地域に貢献する重要な役割の一つであると考えられる。

V その他の特記事項（学外研究、受賞歴、国際学術交流、自己研鑽等）

- ・伊藤大幸・浜田恵・村山恭朗・高柳伸哉・野村和代・明翫光宜・辻井正次 クラスサイズと学業成績および情緒的・行動的問題の因果関係—自然実験デザインとマルチレベルモデルによる検証—, 日本教育心理学会 2017年度優秀論文賞受賞, 2018年9月
- ・2017年度に引き続き、厚生労働省社会福祉推進事業「無料低額宿泊所等において日常生活上の支援を受ける必要がある利用者の支援ニーズ評定に関する調査研究事業（中京大学）」の研究協力者として参画した。
- ・中京大学の辻井正次教授や名古屋学芸大学の黒田美保教授らとの研究協力の一貫として、UCLAのConnie Kasari教授が開発した自閉症スペクトラム障害児への早期支援プログラム JASPERの実践見学研修や支援職員対象の勉強会に参加した。
- ・中京大学の辻井正次教授との研究協力の一環として、RISTEX 安全な暮らしをつくる新しい公／私空間の構築プロジェクト：辻井PJ「アプリを活用した発達障害青年成人の生活支援モデルの確立」による、「発達障害と関わる“暮らしにくさ”を考える—複合的な当事者の困り感への支援につながる研究開発のためのセミナー」などに参加した。
- ・アスペ・エルデの会ら主催、厚生労働省後援によるペアレント・プログラム交流会に参加し、講師となる専門家や地域職員らとの意見交換を行い、全国における子育て支援ペアレント・プログラムの実施状況や各地域における工夫・課題を共有・検討した。この交流会をきっかけに、社会貢献に記した田原市との連携構築につながる成果ともなった。
- ・2018年度より開催された公認心理師試験に合格し、公認心理師資格を取得した（公認心理師登録番号：第2861号）。

VI 総括

2018年度は従来の授業・業務の継続と発展を進め、いくつか課題が残されたり新たな課題が発見されたりしたものの、概ね一定の成果を出すことができたと言える。公認心理師カリキュラムの策定や資格取得は達成できた一方、心の健康や発達障害といったテーマは学生や社会一般の関心も高いため、学内業務と研究、社会的活動を効果的にリンクさせた成果に昇華させていくことが今後の目標となる。

研究活動では従来計画以上にネットワークや地域連携の広がりが得られた反面、業務量の調整の面が課題となり、第一著者としての学術論文採択が引き続き課題となった。研究データの蓄積は十分にあるため、研究活動や地域連携と並行して執筆活動に取り組む計画・管理を重視していきたい。

社会的貢献では多くの支援ニーズがあったことから多忙になった面はあるが、個人クレドである「未来の社会づくりにつながる取り組みを行う」の観点からは、少なからず社会的還元につながったと考える。研究活動とともに、これらの活動における知見・成果を、学生教育や大学運営にもつなげて成果としていくことを今後も継続的に検討していくこととする。

以 上

所属学部 学科	職位	氏 名
人間健康学部 人間健康学科	助教	丹下 悠史
最終学歴	学 位	専門分野
名古屋大学大学院教育発達科学研究科教育科学専攻 博士課程前期課程 修了	修士 (教育学)	教育方法学

I 教育活動

○目標・計画

(目標)

真に信頼して事を任せうる人材の育成、「真面目」な人間の育成を包括的な目標として、「子弟を教育するは、私事に非ず。天に事（つか）うるの職分なり」の精神にもとづき、教育活動を通して各々が目指す将来像を共に追究していくことを目指す。

とりわけ中高教職課程の指導について、教科の指導力や基礎学力の育成、モチベーションの維持向上等、学生への万全なサポートに努めたい。

(計画)

学生が納得感や達成感を得ながら資質・能力を高めていけるよう、具体的には以下の点に取り組む。

- ・講義科目では、学生一人ひとりが自らを学習の主体として意識できるよう、課題へのフィードバックや学習内容の外化（発表、グループワーク、課題作成）を授業の各回に取り入れる。
- ・演習科目では、少人数制のメリットを生かし、個々人の経験や知識に応じた課題を設定する。課題内容は、卒業後の進路を見据えた基礎的な知的・社会的スキルの伸張をねらったものとする。

○担当科目（前期・後期）

（前期）教育学概論、教育経営論、教育方法論、道德教育の理論と方法、基礎演習Ⅰ、専門演習Ⅰ、専門演習Ⅲ

（後期）教職概論、教育経営論演習、道德教育論、教職実践演習（中・高）、基礎演習Ⅱ、専門演習Ⅱ、専門演習Ⅳ、卒業研究

○教育方法の実践

- ・「教育方法論」「道德教育の理論と方法」における模擬授業の実施・記録作成・分析
- ・「教職実践演習」における東邦高等学校の保健体育授業の観察・分析

○作成した教科書・教材

- ・教職科目における授業の準備・実施・分析の補助教材多数
- ・演習科目における個人研究の調査・論文執筆の補助教材多数

○自己評価

計画に記した通り「学生一人ひとりが自らを学習の主体として意識できる」ことを目的として上記の取り組みを行った。科目の特質を問わず、個別のフィードバックは学生が前向きに学習する上で効果的であると思われる。学生による授業評価も前年度に比べおおむね改善した。今後はGoogle クラウド等 ICT ツールを駆使することで、準備を効率化し学生の ICT スキルを向上させることが課題である。

II 研究活動

○研究課題

「小中学校における道徳授業の分析・評価手法の開発」

○目標・計画

(目標)

小学校および中学校の道徳授業における子どもの発言から、そこに介在する判断の特質や相互の影響関係を可視化する手法を開発する。また、開発された手法を道徳以外の授業に適用する場合の可否や方法を検討する。

(計画)

上記の研究について、年度前半は既存の事例にもとづく手法開発、後半は各所属学会および東邦学誌を通じた成果報告に充てたい。

○2011年4月から2019年3月の研究業績（特許等を含む）

(学術論文)

- ・丹下悠史 (2018) 「道徳教育における読み物資料のモデルとしての機能」『平成28年度 大学院生の教科書研究論文助成金論文集』公益財団法人教科書研究センター。
- ・丹下悠史 (2017) 「道徳教育における教師の授業洞察力を高める研修方法の開発」『東邦学誌』46(2), 159-168.
- ・小出禎子・丹下悠史 (2017) 「小中連携教育における学校経営--校長から見た「子どもの学び」と「教師の学習」に関する意義と課題を中心に」『東邦学誌』46(1), 17-27.
- ・柴田好章・須田昂宏・丹下悠史・中道豊彦・水野正朗・深谷久美・野村昂平・胡田裕教・坂本篤史 (2016) 「授業記録にもとづく授業分析のための手法に関する試験的研究」『名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 (教育科学)』62(2), pp. 87-106.
- ・丹下悠史 (2014) 「問題解決学習の道徳教育としての意義と課題」名古屋大学大学院教育発達科学研究科教育科学専攻, 修士学位論文.
- ・柴田好章・中道豊彦・水野正朗・副島孝・坂本篤史・中島淑子・須田昂宏・埜寄志保・丹下悠史・付洪雪・堀田貴之・横山真理・近藤茂明・深谷久美・タン シャーリー・野村昂平・満田清恵・キラチワリ (2014) 「中間項による授業の記述とデータ解析に関わる諸問題の検討」『名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 (教育科学)』60(2), pp. 105-128.
- ・的場正美・柴田好章・水野正朗・中島淑子・堀田貴之・近藤茂明・福村美希・新谷裕・須田昂宏・埜寄志保・丹下悠史・付洪雪・伊倉剛 (2012) 「子どもの発言に内在する授業諸要因の抽出に関する事例研究」『名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 (教育科学)』59(1), pp. 121-149.

(学会発表)

- ・丹下悠史 (2018) 「学習対象への自我関与を通じた子どもの価値観の形成—地域社会の問題を追究する中学校公民の授業を事例に」日本教育方法学会第54回大会
- ・Kikuchi M, Suda T, Tange Y, Murakami K, “An Analysis of student’ learning in career course with comment sheets” The World Association of Lesson Studies International Conference 2017
- ・菊池美由紀・須田昂宏・丹下悠史・村上恭子 (2017) 「大学のキャリア科目における学生の学びの可視化—コメントペーパーの分析を通して」日本キャリア教育学会第39回研究大会

- ・丹下悠史 (2016) 「学校教育における直接経験の道德教育的機能の検討」 日本教育学会第 75 回大会
- ・丹下悠史 (2016) 「読み物資料の道德教育的効果に関する一考察：現実のモデルとしての役割に着目して」 中部教育学会第 65 回大会
- ・丹下悠史 (2015) 「社会科授業における子どもの道德的意思決定プロセスの分析」 日本教育方法学会第 51 回大会
- ・Tange Y, “Deepening Analysis students learning process in Moral Education by means of ‘Transcript-Based Lesson Analysis (TBLA)’ ” CitizED International Conference 2015
- ・Tange Y, “Transcript-based Lesson Analysis: Pathway for Research on Student Thinking and Learning Process Focusing on Student’s Set of Values” The World Association of Lesson Studies International Conference 2014
- ・水野正朗・丹下悠史・柴田好章 (2014) 「対話において差異性が重要なのはなぜか：諸概念の動的な相互関連構造の形成」 日本協同教育学会第 11 回大会
- ・丹下悠史・水野正朗・田中眞帆・柴田好章・胡田裕教 (2014) 「オントロジーを援用した授業分析手法の提案-複雑な対立関係にある発言間の関連構造の解明」 日本教育方法学会第 50 回記念大会
- ・柴田好章・坂本篤史・須田昂宏・付洪雪・丹下悠史・副島孝・中道豊彦・水野正朗・埜寄志保 (2013) 「中間項による授業の記述とデータ解析に関わる諸問題の検討」 日本教育方法学会第 49 回大会
- ・Tange Y, “Moral Education in a Junior High School Social Studies Lesson: Impact of Ueda’s theory in Practice” The World Association of Lesson Studies International Conference 2013
- ・柴田好章・中島淑子・須田昂宏・埜寄志保・丹下悠史・付洪雪 (2013) 「中間項を用いた授業分析における解釈の明示化」 中部教育学会第 62 回大会
- ・的場正美・柴田好章・新谷裕・須田昂宏・埜寄志保・付洪雪・丹下悠史 (2012) 「授業記録の解釈と概念化に関する事例研究」 中部教育学会第 61 回大会

(その他)

- ・丹下悠史 (2013) 「上田薫の道德教育論についての研究ノートー『動的相対主義』に着目して」 名古屋大学大学院教育発達科学研究科教育科学専攻『教育論叢』56, pp. 27-36.

○科学研究費補助金等への申請状況、交付状況 (学内外)

- | | |
|---|-----|
| ・平成 31 年度 若手研究 (新規) (研究代表者) | 申請中 |
| ・平成 31 年度 基盤研究 (B) (一般) (新規) (研究分担者) | 申請中 |
| ・平成 30 年度 愛知東邦大学 地域創造研究所 共同研究助成 (共同研究者) | 採択 |
| ・平成 29 年度 研究活動スタート支援 (新規) (研究代表者) | 不採択 |
| ・平成 29 年度 基盤研究 (B) (継続) (研究分担者) | 採択 |
| ・平成 28 年度 (公財) 教科書研究センター大学院生の教科書研究論文助成金 | 採択 |

○所属学会

中部教育学会、日本教育方法学会、日本教育学会、World Association of Lesson Study

○自己評価

論文 1 本、研究発表 1 件、科研費の新規申請代表 1 件と分担 1 件と、最低限のアウトプットは達成したが、研究の内容的進捗はほとんどなかった。次年度から授業数等の業務量が増加したため、今後はこれを基準にした研究サイクルの構築が課題である。

Ⅲ 大学運営

○目標・計画

(目標)

学部学科、委員会、全学的業務それぞれの領域で、他の教職員から学びながら与えられた役割を果たす。

(計画)

所属学部、委員会、その他ワーキンググループの目標に即し、授業等を通して主たるステークホルダーである学生の要望を意識しながら、積極的に運営に参加したい。

○学内委員等

教務委員会委員、中高教職課程委員会委員、教職支援センター運営委員会委員

○自己評価

主に人間健康学部における中高教職課程の運営に取り組み、一定の貢献をすることができた。上記の委員会活動に加え、学部カリキュラムの再編に参画し教育効果の向上に努めた。

Ⅳ 社会貢献

○目標・計画

(目標)

研究成果を研究職や教育職のコミュニティ、さらに市民社会において広く共有することを目指す。

(計画)

主に所属する国内、国際学会での研究発表を通して、研究により得られた知見を共有する。さらに高校の出張講義や本学の開催するコミュニティカレッジを通して地域社会への知識の還元、関心の喚起を図る。

○学会活動等

なし

○地域連携・社会貢献等

- ・2018年度教員免許更新講習講師
- ・高大連携授業開講（不開講）
- ・2018年度愛知東邦大学コミュニティカレッジ開講（不開講）

○自己評価

教員免許更新講習では必修科目「教育の最新事情」を分担し、専門的知識を生かし本学の行う教師教育の一端を担うことができた。一方で高大連携授業とATUCCは受講希望者が足りず不開講となったため、高校生や地域住民のニーズを把握し有意義な場を提案することが課題である。

Ⅴ その他の特記事項（学外研究、受賞歴、国際学術交流、自己研鑽等）

なし

Ⅵ 総括

着任2年目となり、教育活動と大学運営への貢献度は1年目より高まったと感じている。とりわけ教育面では専門とする授業研究・授業分析の方法を取り入れることで学生に充実した学習の場

を用意することができた。今後は多様なレディネスの学生が前向きに学習に取り組める方策を場当たりのでなく学術的根拠にもとづき組み立てていくことを課題とする。

ただし研究活動は昨年度に引き続き順調に進展しているとは言い難い。教育活動（とりわけ準備の面）において ICT ツールの活用により省力化・効率化が行える見通しがあるので、次年度はこれを進めることでフィールドワークや他機関との研究交流の機会を増やし、持続可能な研究サイクルの構築に努めたい。

以 上

所属学部 学科	職位	氏 名
人間健康学部 人間健康学科	助教	中野 匡隆
最終学歴	学 位	専門分野
中京大学大学院体育学研究科博士前期課程修了	修士 (体育学)	スポーツ生理学

I 教育活動

○目標・計画

(目標)

スポーツ生理学やトレーニングの基礎知識の学修について「真面目」に自ら学ぶことを創出し、「真に信頼して事を任せうる人格の育成」を達成することを目標とする。

(計画)

自ら主体的となつての学修を評価する指標を「事前事後学習」とし、その機会を増やすため、教材を大学内サーバーへアップロードしたり、授業の前後に復習の小テストなど多く用いたり、その点数を振り返り、一定以上の点数が取れなかった場合の再チャレンジの用意をしたりすることは継続しつつ、自ら考えたレポート作成ができるようにルーブリックなどを活用する。

○担当科目（前期・後期）

(前期) 生理学、運動生理学、総合野外活動実習Ⅰ、東邦プロジェクトB、総合演習Ⅰ、専門演習Ⅰ、専門演習Ⅲ

(後期) トレーニング実習、総合演習Ⅱ、専門演習Ⅱ、専門演習Ⅳ、卒業研究

○教育方法の実践

学生がイメージしやすいようにできるだけ動画や図表を多く使用し、視覚的に理解できる授業を行うよう努めた。また、復習のための小テストなどを毎回実施することで事前事後学習を誘導しようとしたがアンケート結果には反映されなかった。

○作成した教科書・教材

授業の内容をより理解しやすくするための動画や配布資料を作成した。

○自己評価

演習では専門知識量と学修へのモチベーションの改善を試みるも全体的にはうまく出来なかった。どうしても個別対応が多くなり、現在の授業方法、運営方法では限界を感じた。今後は学生同士が横のつながりで切磋琢磨できるような運営方法を模索していきたい。

II 研究活動

○研究課題

- ①運動・スポーツ・トレーニングにおける人工炭酸泉足浴の効果の検証
- ②地域高齢者の体力測定
- ③キャンプ実習における生理学的指標の測定

○目標・計画

(目標)

- ①運動・スポーツ・トレーニングにおける人工炭酸泉足浴の効果に関するデータ収集

②地域高齢者の体力測定を実施する。

③キャンプ実習における生理学的指標の測定を実施する。

(計画)

①共同研究者の協力を得て、新たな実験を実施し、データを収集する。

②地域に学生と一緒に高齢者の体力測定と活動量の測定をできるだけ多く実施する。

③キャンプ実習中における生理学的指標の測定を実施する。

○2011年4月から2019年3月の研究業績(特許等を含む)

(著書)

- ・尚爾華・澤田 節子・谷村祐子・肥田 幸子・中野匡隆・木野村嘉則、高齢者の健康維持と運動『長寿社会を生きる 一地域の健康づくりをめざして一』地域研究創造叢書 唯学書房 2017年3月

(学術論文)

- ・中野 匡隆『運動によって誘発される遅発性筋痛に対する人工炭酸泉浴の影響』東邦学誌 47 (2), 101-107, 2018.12
- ・葛原憲治、長谷川望、中野匡隆『スキー・スノーボードの傷害について Skiing and snowboarding injuries』東邦学誌 45 (2), 15~24, 2016.12
- ・T. Kato, T. Matsumoto, A. Tsukanaka, M. Nakano, R. Ito, M. Amano, M. Cole, and SM. Yamashiro, Effect of hypercapnic severity on plasma ammonia accumulation and respiratory exchange ratio during incremental exercise, International Journal of Sports and Exercise Medicine 2015
- ・澤田節子・肥田幸子・尚爾華・中野匡隆『地域在住高齢者の健康維持活動支援に関する調査』東邦学誌 44 (2), 117-139, 2015.12
- ・山下直之、伊藤僚、中野匡隆、松本孝朗『高校生アマチュアボクシング選手のウェイトコントロールの状況分析』スポーツ健康科学研究 36 : 11~19, 2014
- ・水野貴正、中野匡隆、松本孝朗、梅村義久『人工炭酸泉への入浴時間の違いが関節可動域に与える影響』日本生気象学会雑誌 49 (4) : pp.149-155、2012
- ・中野匡隆『人工炭酸泉浴へ期待される効果-入浴施設利用者へのアンケート調査より-』東邦学誌 41 (1), 163-168, 2012
- ・加藤貴英、中野匡隆、伊藤僚、天野雅斗、松本孝朗『高炭酸ガス吸入が漸増負荷運動時の心循環系応答に及ぼす影響』中京大学体育学論叢 52 (2) : pp.11-16, 2011
- ・中野匡隆、伊藤僚、天野雅斗、加藤貴英、坂口結子、山下直之、勝又信征、深谷高治、成田龍生、松岡大介、松本孝朗『学生トライアスロン競技のエネルギー消費量と運動強度の推定』中京大学体育学論叢 52 (2) : pp.1-9, 2011
- ・水野貴正、中野匡隆、松本実、松本孝朗、梅村義久『人工炭酸泉浴が関節可動域と筋の弾性に与える影響』日本生気象学会雑誌 48 (1) : pp.15-22, 2011

(その他)

[研究報告、研究ノート等]

- ・松本孝朗、中野匡隆、伊藤僚、天野雅斗、山下直之、勝又信征、道家三穂、大坪鷹人、松岡大介『市民ランナーにおけるフルマラソンの運動強度とエネルギー消費量』中京大学体育研究所紀要 25 : pp.17-21, 2011

○科学研究費補助金等への申請状況、交付状況（学内外）

○所属学会

日本体力医学会、日本体育学会、日本生気象学会、日本運動疫学会、運動と体温の研究会

○自己評価

①②③ともに、まったく研究を進めることができず、評価できない。次年度は業務内容の効率化も考えながら、進めていきたい。

Ⅲ 大学運営

○目標・計画

（目標）

学生委員会で積極的に提案する。

（計画）

学生委員会で今まで積み上げてきた協議をもとに、とくにクラブ活動の活性化について、より良い大学を目指した提案を行う。

○学内委員等

地域創造研究所運営委員会委員、学生委員会委員、硬式野球部顧問（副部長、強化指定クラブ）

○自己評価

所属委員会にて提案は幾つがしたが、達成はできなかった。

Ⅳ 社会貢献

○目標・計画

（目標）

地域高齢者のいきがづくりへの寄与

（計画）

2014年から名東区内および近隣にて、延べ複数回のペースで教室などを開催している。2018年度は、さらに積極的に、学生に関わってもらい、規模を拡大し、社会で健康に関する知識を実践する学びの場とする。

○学会活動等

○地域連携・社会貢献等

○自己評価

ゼミ学生募集の段階から実施内容を詳細に説明し、取り組んだが、予定していた学生の関りを作ることはできず、社会で健康に関する知識を実践する学びの場とすることが、一部でしかできなかった。ゼミで集まった学生のモチベーションや興味のベクトルの違いからなかなか難しい側面があることを去年に引き続き感じた。次年度は、学生を巻き込まない方法も加えて効率的な運営を目指したい。

Ⅴ その他の特記事項（学外研究、受賞歴、国際学術交流、自己研鑽等）

VI 総括

年々と、教育活動および研究活動にバランスよく取り組むことができなくなっている。しつかりを研究を実施していくこと考えて年間計画を立て、そのうえで、教育活動が効率よく運営できるようにしたい。

以 上

所属学部 学科	職位	氏 名
人間健康学部 人間健康学科	助教	正岡 元
最終学歴	学 位	専門分野
広島大学大学院総合科学研究科博士課程 後期単位取得退学	博士 (学術)	情報通信ネットワーク

I 教育活動

○目標・計画

(目標)

教科書にある知識そのものではなく、それらの知識を見つけ出す、あるいは作り出す方法を学生が身に着けられるような教育を目指す。中でもコンピュータの演習科目では、コンピュータを利用する意義の理解を深めることを目標とし、操作方法の習得のみに偏らないようにする。

(計画)

毎回の講義の冒頭で講義の意義、当該回の内容について示し、コンピュータ科目を学ぶ意義を確認することで目的意識を持たせる。また、実際に動くプログラムを小課題として多く取り入れ、達成感やものづくりの楽しさを体感できるようにする。

また、毎回講義中に課す課題は採点后速やかに返却し、間違いそのものの修正ではなく、自らが間違いやすいポイントの見直しに利用するように誘導する。

○担当科目（前期・後期）

（前期）入門コンピュータ、基礎演習Ⅰ

（後期）基礎コンピュータ、OS とプログラミング、コンピュータ概論、基礎演習Ⅱ

○教育方法の実践

コンピュータ概論では、コンピュータやネットワークの技術的な側面だけでなく、日常生活や他分野での実際の活用事例を写真や動画を利用を毎年追加し、より分かりやすく改善を続けている。また、技術を「何のために」「どのようにして」利用するのか、背景や必要性についての理解を向上させることにつとめた。

また、入門コンピュータをはじめとするコンピュータを利用する演習科目についても、まず「なぜコンピュータを学ぶのか」「コンピュータの何を学ばよいか」について話し、学生が学ぶ意欲を感じられるようにした。特に入門コンピュータでは、タイピング速度がその後のレポート作成や学修に影響を及ぼすと考え、タイピング練習に力を入れた。また OS とプログラミングでは、プログラミングを学ぶ意義を「論理構成力」「状況判断力」「予測・推理力」「想像力」としてとらえる。そしてプログラムを作ることを通してそれらのコンピュータとは直接関係のない業務でも必要な力を養うことを重視した。

いずれの科目でも毎回の講義で課題を出し、その回の内容を振り返ることができるようにしているが、そのフィードバックを早めることで、自分が間違いやすい個所に早く気が付き、次の課題で改善できるようにつとめた。

○作成した教科書・教材

入門コンピュータ： コンピュータリテラシー2018年度版（高木靖彦先生、成田良一先生と共著）

基礎コンピュータ： コンピュータリテラシー2018年度版（高木靖彦先生、成田良一先生と共著）

コンピュータ概論： スライド資料 Vol.2018, No.01-15

基礎演習 I： 情報リテラシー 2018 年度版

OS とプログラミング： 配布資料、実習課題等 Vol.2018, No.01-15

○自己評価

入門コンピュータでは昨年度までの経験から期末試験を廃した。再試験の対象者に対して受験者数が圧倒的に少ないため、単位の修得率に影響はなかった。

OS とプログラミングでは受講者数が少なかったこともあり、個別に丁寧な指導を行うことができた。しかし、それでも十分に学修効果を上げられたとは言えず、プログラミング教育の難しさを実感した。どのような場で役に立つのか説明を心掛けているが、そもそも「プログラムを作ってやりたいこと」がない限りプログラミングの学修に力が入ることはなく、どのように学修意欲を持たせるかが課題となる。

II 研究活動

○研究課題

ID ベース暗号の応用による学内情報共有システムの研究と開発

○目標・計画

(目標)

これまで研究、開発してきた学内情報共有システムに ID ベース暗号を応用した技術を導入し、だいで学内で共有する情報をより安全に管理するシステムの実現を目指す。

(計画)

まず研究室のハイパーバイザー上に構築したストレージサーバにデータを共有するシステムを開発する。ストレージサーバでは、共有するファイルを学内のファイルサーバや学外の Google Drive 等のオンラインストレージを利用して保管するシステムを実装する。さらにこのシステムの性能を測定する実験を行う。ファイルサイズやファイル数により暗号化および復号のスピードがどう変化するかを確かめ、スケーラビリティについて評価する。

また研究室のハイパーバイザー上に属性ベース暗号に必要な鍵生成センターを構築する。鍵生成センターは AD と連携し、大学のアカウントをベースにした ID ベース暗号のプライベート鍵を生成するシステムを開発する。最終的には上記の機能を統合し、安全に情報を共有できるシステムを開発する。

○2011 年 4 月から 2019 年 3 月の研究業績（特許等を含む）

(学術論文)

- ・正岡元. 「学生の持ち込み端末の学内無線 LAN 接続のための MAC アドレス自動登録システムの開発と運用」. 『東邦学誌』, 第 44 号, 第 1 号, 2015 年, 63~70 号.

(その他)

- ・肥田幸子, 丸岡利則, 照屋翔大, 正岡元. 『2015 年度中途退学防止 WG 報告書』. 2016 年
- ・正岡元, 手島慎介, 大勝志津穂, 手島雅隆, 小柳津久美子, 成田良一. 「2013 年度共同研究：(研究課題)「大学におけるスマートフォン・タブレット端末の活用手法の研究と開発」活動成果報告」. 『東邦学誌』, 第 44 巻, 第 1 号, 2015 年, 179~192 頁.
- ・今津孝次郎, 正岡元, 大勝志津穂, 照屋翔大, 伊藤龍仁. 「[調査報告] スマートフォン等の利用に関する実態—愛知東邦大学 1 年生と東邦高校全生徒—」. 『東邦学誌』, 第 44 巻, 第 1 号, 2015

年, 179~192 頁.

- ・正岡元, 大勝志津穂, 寺島雅隆, 中山孝男, 手嶋慎介, 小柳津久美子, 成田良一. 「iPod touch/iPad を利用した教育手法の開発と研究」. 『MAT ワークショップ 2012』. 2012 年.

○科学研究費補助金等への申請状況、交付状況（学内外）

なし

○所属学会

情報処理学会

○自己評価

今年度の研究計画は一部しか達成できず, その成果を発表することもできなかった。昨年度以前の研究成果を論文にまとめる作業も進んでおらず, 今後の課題としてそのまま残してしまった。

III 大学運営

○目標・計画

(目標)

委員会や WG など、情報工学分野の教員として積極的に関わり、「事を任せうる人格」と認められるよう努力する。

(計画)

学部の FD 担当として、教育、研究活動の補助となる ICT 技術の普及に努める。

○学内委員等

入試問題作成委員

○自己評価

学部の FD 担当として教育力向上の発表や意見の取りまとめ等を行った。また Google Classroom や Google ドライブ等のツールや TOPOS の活用方法の紹介等の活動を行った。

IV 社会貢献

○目標・計画

(目標)

研究成果など、最先端の知見を公表する活動を行う。

(計画)

論文の投稿、学外の研究会等における研究発表などを行う。出前授業や教員免許状更新講習などに参加する。

○学会活動等

○地域連携・社会貢献等

愛知県立名古屋西高等学校の総合学習のサポーターとして生徒にアドバイス, および名古屋西高校にて講演を行った。

○自己評価

講演として高校生に対して情報リテラシーについて話した。高校生に面白く聞いてもらうことができ, こちらも勉強になった。

V その他の特記事項（学外研究、受賞歴、国際学術交流、自己研鑽等）

VI 総括

昨年度と変わらず学内で移動できる範囲が限られ、教室配置や会議室の設定等で迷惑をかけてしまう状況を改善できなかった。引き続き来年度も体調の回復に努め、教育、研究活動ともに充実できるように努めたい。

以 上

教員 自己評価報告（教育学部 子ども発達学科）

所属学部 学科	職位	氏 名
教育学部 子ども発達学科	教授	後藤 永子
最終学歴	学 位	専門分野
名古屋女子大学大学院修士課程生活学研究科修了、 同大学院博士課程単位取得満期退学	修士 (生活学)	保育（障害児保育）

I 教育活動

○目標・計画

（目標）

毎年、保育者養成に携わる私にとって揺らぐことはない。今年度からの職位を鑑み、保育者・教育者の養成に力を尽くしたい。保育者も教育者も、子どもの健全な成長・発達を願うことが最大の目標である。「人として育てる」こと、これはまさに建学の精神「真に信頼して事を任せうる人格の育成」そのものである。校訓の「真面目」でなければ保護者の信頼は得られないし、自分の子どもの命を託すことはない。

（計画）

まずは「人」として、「社会人」として、教育以前の約束を守ること、人としての常識、躰についても教えます。本学の学生の特徴と言うか、年々、学生が幼い・未熟さが目立つ、生活の基盤が弱い、自己中心的振る舞いからの問題が増えている。子どもたちの援助者になるための学び、人の手本になるべく生き方も教えていく。

○担当科目（前期・後期）

（前期）保育内容総論、特別支援保育、保育実習事前指導 I A、幼児理解の理論と方法

（後期）保育原理、保育実習指導 I A、保育実習 II 事前事後指導、教育・保育相談、保育実践演習、保育実習 I A、保育実習 II

○教育方法の実践

保育実習事前指導 I A、保育実習指導 I A、保育実習 II 事前事後指導の現場実習に関わる授業において、約束を守ること、人としての常識、躰を徹底して教えた。

幼児理解の理論と方法、教育・保育相談、保育実践演習においては、グループディスカッションを多く取り入れた。指導案を作成し実践実証、ロールプレイなどグループワークを取り入れた。

○作成した教科書・教材

毎回、授業プリントを作成した。幼児理解の理論と方法では、事例に基づいて演習ワークシートを作成した。

○自己評価

概ね 90%の達成だった。

II 研究活動

○研究課題

・今年度は、平成 29 年度告示の「保育所保育指針」、「幼稚園教育要領」、「幼保連携型認定こども

園教育・保育要領」について

- ・子どもの育ちの援助となる子ども理解について
- ・新しい保育指針、教育要領を踏まえた実習指導のあり方について

○目標・計画

(目標)

今年度は、平成 29 年度告示の「保育所保育指針」、「幼稚園教育要領」、「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」がスタートした。この三つに共通する子どもの「育みたい資質・能力」と「幼児期の終わりまでに育ってほしい 10 の姿」について理解を深め、より良い子どもの育ちへ繋がりたい。更に、新しい保育所保育指針を踏まえた実習指導を行いたい。

(計画)

子どもの「育みたい資質・能力」は、「知識及び技能の基礎」、「思考力、判断力、表現力等の基礎」、「学びに向かう力、人間性等」を育てることである。これらは、大学生を育てる教員にも繋がることである。子どもの主体的な深い学びを実現していくプロセスは、小学校教育への基盤を作ることとなる。養成校教員が学生を育てることは、学生が社会人となり、「先生」となることに共通目標と感じ、子どもたちのために、学生たちのために、積極的に研究を進めて行きたい。

○2011 年 4 月から 2019 年 3 月の研究業績（特許等を含む）

(著書)

- ・後藤永子『子ども理解—かかわりを通して—』、三恵社、2019 年 3 月、99 頁
- ・後藤永子『障害児保育—共に生きる保育者のために—』、相川書房、2012 年 12 月、115 頁
- ・石川幸生・杉谷正次・後藤永子・青木葵・山内章裕・木村典子『超高齢社会における認知症予防と運動習慣への挑戦—高齢者を対象としたクロリティー活動の効果に関する研究』、地域創造研究叢書 No17、2012 年 3 月、127 頁
- ・田中まさ子・荒木照子・飯尾雅典・江崎幸代・奥美佐子・後藤永子・白幡久美子『幼稚園教諭・保育士養成課程三訂「幼稚園・保育所実習ハンドブック」』(株) みらい、2011 年 4 月、183 頁

(学術論文)

- ・田辺恭子・後藤永子「保育所保育指針・幼稚園教育要領から読み取る『領域』と学生が認識する領域の研究—ファシリテーションを用いて—」東邦学誌 第 46 巻 第 2 号、2017 年 12 月
- ・田辺恭子・後藤永子「保育養成校学生の保育実習に対する不安の解明」東邦学誌 第 45 巻 第 2 号、2016 年 12 月
- ・鹿渡よしみ・後藤永子「人として育つ、保育者の質を考える」東邦学誌 第 42 巻 第 2 号、2012 年 12 月
- ・木村典子・杉谷正次・石川幸生・青木葵・後藤永子・山内章裕「認知症と精神的健康に焦点をあてた介護予防としてのニュースポーツ—地域のクロリティークラブチームからの考察—」愛知学泉大学・短期大学『研究論集』 第 46 号、2011 年 12 月
- ・木村典子・杉谷正次・石川幸生・青木葵・後藤永子・山内章裕「高齢者の記憶の自己効力感についての検討—クロリティー選手権大会に参加した高齢者からの考察—」東邦学誌 第 40 巻 第 1 号、2011 年 6 月

(学会発表)

- ・後藤永子、八木朋子「年齢からみる保育所における障がい児受け入れ」第 66 回日本保育学会、2012 年 5 月

- ・木村典子・青木葵・石川幸生・杉谷正次・後藤永子・山内章裕「地域で仲間とスポーツを楽しみながら生活している高齢者の記憶の自己効力の検討ーA 県クロリティー選手権大会に参加した高齢者からの考察ー」,第53回日本老年社会科学会,2011年6月
- ・木村典子・青木葵・石川幸生・杉谷正次・後藤永子・山内章裕「地域で暮らし仲間とスポーツをおこなっている認知症の疑われる高齢者についての検討ークロリティー選手権大会に参加した高齢者からの考察ー」,第26回日本老年精神医学会,2011年6月
- ・八木朋子、後藤永子「保育学生のメディアへの意識ーコンピュータ不安を中心に」第64回日本保育学会,2011年5月

○科学研究費補助金等への申請状況、交付状況（学内外）

○所属学会

日本保育学会、日本教育医学会、日本病跡学会、日本発達障害学会、日本特殊教育学会、日本小児精神神経学会

○自己評価

「幼児理解の理論と方法」が書籍として纏まり、出版ができました。

III 大学運営

○目標・計画

（目標）

与えられた任務を「真面目」に果たすことはもちろんのこと、大学運営のスムーズな運びに全力を尽くします。年々、教員間、教職員間のスムーズな連携が難しく感じています。今年度より、教育学部長として、運営委員会、学生募集戦略委員会、全学教職課程運営委員会等の他、様々な関連職にも取り組み、大学運営に貢献していく。

（計画）

タイミングよく決断する場面が多々あり、急な会議、打ち合わせも多く、何度も同じ確認が必要となる事案も多い。引き続き学部内での連携が図れるように具体案を出していきたい。教育学部長として学生や教員の不利益とならないようにスムーズな大学・学部運営に尽力を尽くすことと、ミスのないように計画的にこなしていきます。

○学内委員等

教学法人協議会構成員、高大連携会議構成員、大学再編準備室会議構成員、運営委員会委員、学長会議構成員、教育力向上委員会委員、人事委員会委員、学生募集戦略委員会委員、全学教職課程委員会委員、幼小教職委員会委員、保育士養成課程委員会委員、教職課程再課程認定委員会委員

○自己評価

すべてに全力で挑みました。何事にも責任と強い自覚を持って役割を果たしました。

IV 社会貢献

○目標・計画

（目標）

保育養成校の教員として現職保育士の研修を行いたいが、難しい立場になっている。昨年は、全

国保育士養成協議会中部セミナーの第3部会の実行委員、清洲市公立保育園の保育士研修を行ったが、今年度の全国保育士養成協議会全国セミナーの実行委員は、新任にお願いすることとなった。現職保育士の研修は、時間を作り続けて行きたい。

(計画)

依頼を受けた現職保育士の研修、障がい疑われる子どもの指導など、時間を作り続けて行きたい。

○学会活動等

学会参加も大学行事等で、2回の参加になってしまった。

○地域連携・社会貢献等

保育園から依頼を受けた障がい疑われる子どもの指導が、依頼を受けた半数ほどしか対応できなかったことが残念でした。

○自己評価

保育養成校の教員として現職保育士の研修を行いたいが、学務に追われ難しくなっている。現職保育士の研修は、時間を作り続けて行きたい。

V その他の特記事項（学外研究、受賞歴、国際学術交流、自己研鑽等）

自己研鑽については、学校心理士・臨床発達心理士として、大会、研修会、学会に参加し、より良い子どもの育ちのために貢献できた。

VI 総括

学生1人ひとりが意欲を持って、達成感が得られるように授業に挑んできました。学生の満足度向上は、学生を甘やかすことではありません。学生の質の向上が大学の質の向上に繋がることを念頭に置き、教員の協働の下、学生の教育にこれからも全力を尽くします。現職保育士の研修、保育園からの依頼について十分な対応が出来ず次年度の課題として残った。

以 上

所属学部 学科	職位	氏 名
教育学部 子ども発達学科	教授	伊藤 龍仁
最終学歴	学 位	専門分野
日本福祉大学大学院社会福祉学研究科修士課程修了	修士	社会的養護

I 教育活動

○目標・計画

(目標)

各教科の授業改善を継続し、本学の建学の精神を具現化するための教育活動に取り組むことを目標とする。その中で重点科目は保育実習指導科目である。

(計画)

- ①講義系科目はブリーフ・レポートの導入と小テスト方式を採用したアクティブ・ラーニング型授業に取り組む。
- ②保育実習指導系授業は、学生の実践力及び実習への対応力向上のためサービス・ラーニングへの参加を義務付けるとともに、ロールプレイや意見発表等に取り組ませる。
- ③ゼミナール系授業においては少人数できめ細やかな個別指導を重視する。専門演習では地域連携活動を授業の柱に据え、保育者に求められる資質と実践力向上を図る。

○担当科目（前期・後期）

(前期) 保育実習事前指導ⅠB、児童家庭福祉、社会福祉概論、サービス・ラーニング実習Ⅰ、基礎演習Ⅰ、専門演習Ⅰ、専門演習Ⅲ

(後期) 社会的養護、社会的養護内容、保育実習指導ⅠB、保育実習Ⅲ事前事後指導、サービス・ラーニング実習Ⅱ、基礎演習Ⅱ、専門演習Ⅱ、専門演習Ⅳ、保育実習ⅠB、保育実習Ⅲ、卒業研究

○教育方法の実践

- ①講義系科目はブリーフ・レポートの導入と小テスト方式を採用したアクティブ・ラーニング型授業に取り組んだ。
- ②保育実習指導系授業は、学生の実践力及び実習への対応力向上のためサービス・ラーニングへの参加を義務付けるとともに、ロールプレイに取り組ませ、実習の準備を行った。
- ③専門演習では地域連携活動を授業の柱に据え、保育者に求められる資質と実践力向上を図った。基礎演習は学生の初年次教育と交流活動、課題研究と発表に取り組ませた。

○作成した教科書・教材

- ・各回の要約を資料として印刷するとともに各科目に必要なワークシートの作成を行った。
- ・「サービス・ラーニング実習」のテキスト『サービス・ラーニングハンドブック』の作成を学科教員と協力して行った。

○自己評価

- ・本年度の教育活動は、アクティブ・ラーニング型の授業運営を強化しながら取り組み、概ね目標を達成したと考える。

II 研究活動

○研究課題

・家庭養護の構造と機能に関する研究(仮)を研究テーマに据え、①ファミリーホームの危機対応の調査・研究、②スリランカの社会的養育に関する調査・研究を今年度と研究課題と設定する。今年度は博士論文執筆に向けた2年計画の1年目と位置づける。

○目標・計画

(目標)

- ①研究成果を論文にまとめて査読誌(社会福祉学など)に投稿する。
- ②研究成果を論文にまとめて東邦学誌に投稿する。

(計画)

- ①文献調査に加え、複数の里親・ファミリーホームへの訪問調査を実施して分析する。
- ②文献調査に加え、スリランカの施設・教育機関への訪問調査を実施して分析する。

○2011年4月から2019年3月の研究業績(特許等を含む)

(著書)

- ・白井克尚・今津孝次郎・伊藤龍仁・堀篤実・伊藤数馬・梶浦恭子・新實広記・橋村晴美(2019) サービス・ラーニング委員会編『「サービス・ラーニング」ハンドブック 第5版』, P17, 愛知東邦大学教育学部子ども発達学科.
- ・今津孝次郎・西崎有多子・白井克尚・中島弘道・新實広記・伊藤龍仁・柿原聖治・伊藤数馬(2019) 愛知東邦大学地域創造研究所編『地域創造研究業書 No. 30 教員と保育士の養成における「サービス・ラーニング」の実践研究』, 73-74, 唯学書房.
- ・浅沼裕治・天池洋介・荒井和樹・有尾正子・伊藤龍仁・岩田正人・大谷誠英・金本秀韓・小塚光夫・佐々木将芳・田中高久・谷村和秀・中島健一郎・中村明成・藤林清仁・松岡宏明・松木宏史・武藤敦士・山崎ちひろ・吉田祐一郎・吉野真弓・吉村美由紀・吉村譲(2017) 喜多一憲監修, 堀場純矢編『みらい×子どもの福祉ボックス 児童家庭福祉』106-123, みらい.
- ・浅沼裕治・荒川まゆ・伊藤龍仁・井上穂乃日・岩崎元彦・岩田正人・加藤潤・加藤智功・倉橋幸彦・小菅ゆみ・児玉あい・児玉俊郎・近藤日出夫・佐々木将芳・関貴教・隣谷正範・橋本喜予・橋本達昌・藤田哲也・藤林清仁・古田優佳・宮地菜穂子・武藤敦士・安田華子・吉田祐一郎・吉田幸恵(2017) 喜多一憲監修, 堀場純矢編『みらい×子どもの福祉ボックス 社会的養護』10-28, みらい.
- ・丹羽咲江・萬屋育子・伊藤龍仁・明石雅世・涌井規子・谷口由希子・多久島睦美・加藤久美子・賀屋哲男・竹村万知子・小島祥美・本岡恵・小島俊樹・幸伊知郎・安藤ふみ・田中弘美・荒井和樹・加藤正志・小池田忠・岡本祥浩・重原惇子・渡邊ゆりか・藤田榮史(2016) 特定非営利法人子ども&まちネット編, 藤田榮史監修『なごや子ども貧困白書』20-24, 風媒社.
- ・藤園秀信・打保由佳・川田誉音・飯塚哲男・伊藤龍仁・榎原直美・大井智香子・加藤大輔・五味保教・杉浦真生・須藤昌寛・高橋洋介・谷口真由美・福嶋正人・福田洋一郎・藤森一浩・山口みほ・吉田祐一郎(2016) 中部学院大学通信教育部監修, 藤園秀彦・打保由佳・川田誉音編『社会福祉相談援助演習 ソーシャルワークの理論と実践をつなぐ』156-162, みらい.
- ・今津幸次郎・新實広記・西崎有多子・柿原聖治・伊藤龍仁・白井克尚(2015)『「サービス・ラーニング」ハンドブック 第1版』愛知東邦大学教育学部子ども発達学科平成26年度「基礎演習」

担当教員団編，愛知東邦大学教育学部子ども発達学科。（年度毎に新版発行）

- ・安形元伸・浅野壽枝・伊藤貴啓・伊藤龍仁・伊藤文人・岩田正人・遠藤由美・蛭沢光・大久保稔・小川英彦・加藤智功・金田敦子・上鹿渡和宏・黒川真咲・小塚光夫・斉藤理紗・澤田和夏・清水真一・鈴木二光代・関貴教・高松暁子・中村強士・永井健・西川信・藤原桂子・藤田哲也・堀場純矢・山口薫・安田華子・湯原悦子・吉村美由紀・吉村讓（2013）堀場純矢編『子どもの社会的養護内容ー子ども・職員集団づくりの理論と実践』，115-121，福村出版。
- ・飯島優子・石川京子・伊藤龍仁・大坪勇・大藪元康・神戸賢次・新川泰弘・丹羽正子・松木宏史・松島京・宮内康彦・山本伸晴『新選 社会福祉第2版』（2013）後藤卓郎編，みらい，2013年。
- ・片桐多恵子・鈴木恒一・冲中秀子・伊藤龍仁・岡田康子・志村真・安藤恭子・ダリツル規子・有川一・白幡久美子（2011）中部学院大学短期大学部幼児教育学科編集委員会編『五感で感じる遊びの価値を広げる保育者養成プログラム』，17-31，ヤツウメ印刷。

（学術論文）

- ・伊藤龍仁（2018）「ファミリーホームの人材確保と育成について」『子どもと福祉』（11）26-29，明石出版。
- ・伊藤龍仁（2018）「新ビジョンよ何処へ行く」『社会的養護とファミリーホーム』（8）32-40，創英社。
- ・浅井彰子・伊藤龍仁（2017）「乳幼児の言葉の発達と絵本の楽しみ～「親子で絵本を楽しむ会」の取り組みを通して～」『東邦学誌』（46-2），113-125，愛知東邦大学。
- ・伊藤龍仁（2016）「特別企画 ファミリーホームと地域小規模児童養護施設ーどこがどう違うのかまとめにかえてーファミリーホームとは何かを考えるために」『社会的養護とファミリーホーム』（7）118-121，福村出版。
- ・伊藤龍仁（2015）「家庭養護に関する政府定義の再考ー里親制度の歴史を踏まえてー」『東邦学誌』（44-2）49-67，愛知東邦大学。
- ・伊藤龍仁（2015）「ファミリーホームと石井十次ーその遺志と実践を受け継ぐために」『社会的養護とファミリーホーム』（6）128-133，福村出版。
- ・今津幸次郎・正岡元・大勝志津穂・照屋翔大・伊藤龍仁（2015）「スマートフォン等の利用に関する実態ー愛知東邦大学1年生と東邦高校全生徒」『東邦学誌』（44-1）193-210，愛知東邦大学。
- ・今津幸次郎・新實広記・西崎有多子・柿原聖治・伊藤龍仁・白井克尚（2015）「教員と保育士の養成における「サービス・ラーニング」の試み」『東邦学誌』（44-1）211-231，愛知東邦大学。
- ・伊藤龍仁（2014）「家庭的養護の推進と地域子育て支援に関する一考察」『東邦学誌』（43-2），117-126，愛知東邦大学。
- ・伊藤龍仁（2014）「ファミリーホーム制度と実践の充実を求めてー第8回ファミリーホーム全国研究大会を終えて」『社会的養護とファミリーホーム』（5）25-30，福村出版。
- ・伊藤龍仁（2012）「「家庭養護」を担うファミリーホーム制度の充実を求めて～第8回ファミリーホーム全国研究大会における議論から～」『福祉研究』（107）33-42，日本福祉大学社会福祉学会。
- ・伊藤龍仁（2012）「第2章 保護を必要とする子どもの家族と子育て支援」『「条件不利家族」を対象とした子育て支援ネットワークの類型化と評価指標の開発』23-33，2009-2011（平成21-23）年度 文部科学省科学研究費補助金基盤研究C研究成果報告書。
- ・伊藤龍仁（2012）「震災被災地で課題を抱える子どもたちに関する調査報告（第一報）～避難所となった児童養護施設で暮らす子ども達～」『中部学院大学・中部学院大学短期大学部研究紀要』

(13) 133-143, 中部学院大学総合研究センター. (査読誌)

(学会発表)

- ・伊藤龍仁 (2019年2月28日)「日本の少子化・子どもの貧困・虐待問題」『少子高齢社会における日中の子どもの健康と福祉のこれからを考える』愛知東邦大学地域創造研究所・復旦大学人口研究所共催研究例会報告 (中華人民共和国, 上海復旦大学).
- ・伊藤龍仁 (2018年10月6日)「家庭養護における「公」と「私」の相互関係とバランス—ファミリーホームの措置委託と措置解除に着目して—」日本福祉大学大学院博士課程論文構想発表会.
- ・伊藤龍仁 (2016年2月27日)「ファミリーホームの自立支援計画」『2015 (平成27) 年度ファミリーホーム東海・北陸・静岡ブロック協議会研修会 (愛知東邦大学)』実践報告.
- ・伊藤龍仁 (2016年2月18日)「家庭養護寮の歴史的再評価—日本における小集団家庭的養護の歴史」『日本福祉大学大学院社会福祉理論史研究会2月定例会 (日本福祉大学)』研究報告.
- ・伊藤龍仁 (2014年7月5日)「里親・ファミリーホームにおける子育て支援という課題」『東海社会学会第7回大会 (愛知県立大学)』一般報告部会 (B) 口頭発表.
- ・伊藤龍仁 (2014年6月29日)「ファミリーホームにできること・できないこと」『第43回全国児童養護問題研究会全国大会 (愛知大会・ウィルあいち)』第7分科会報告.
- ・伊藤龍仁 (2013年11月8日)「e-chubu 導入からこれまで」『名古屋大学高等教育センター主催セミナー FD・SD 教育改善支援拠点事業「ポートフォリオが学習支援に活用されるための条件」(名古屋大学)』シンポジウム報告.
- ・伊藤龍仁 (2012年4月22日)「震災被災地で避難所となった児童養護施設で暮らす子ども達に関する調査報告」『日本社会福祉学会中部部会2012年度研究例会 (日本福祉大学)』自由研究口頭発表.
- ・伊藤龍仁 (2011年9月18日)「保育士養成校のeポートフォリオを活用した学習支援に関する考察—「e-chubu」導入1年後の現状と課題—」『日本教育工学会 (首都大学東京)』自由研究分科会口頭発表.

(その他)

<講演>

- ・伊藤龍仁 (2019年3月23日)「里親制度の可能性を考える—ファミリーホームの実践をとおして—」なくそう!子どもの貧困ネットワークあいち連続学習会(31)(名城大学ナゴヤドーム前キャンパス).

<評論・エッセイ等>

- ・伊藤龍仁 (2019) 取材記事「「公私混同」「距離感無し」の降りていく子育ての必要性」『社会的養護とファミリーホーム』(9), 創英社.
- ・伊藤龍仁 (2016)「里親・ファミリーホームの現状と課題」『平成28年度 大学生・青少年指導者・施設職員対象の「指導者養成講座」講義レジメ集』, 51-52, NPO 法人「こどもサポートネットワークあいち」.
- ・伊藤龍仁 (2016).「特別企画 ファミリーホームと地域小規模施設—どこがどうちがうのか 鼎談 特別企画の取材を終えて—ファミリーホームの課題を考える」『社会的養護とファミリーホーム』(7), 90-95, 福村出版.
- ・伊藤龍仁 (2015)「社会的養護にかかわる平成27年度予算の衝撃」『社会的養護とファミリーホーム』(6) 8-11, 福村出版.

- ・伊藤龍仁 (2014) 「ファミリーホームにできること・できないこと 制度と実践から考える」『朋2014年』(5) 10-13, 愛知県児童福祉施設長会.
- ・伊藤龍仁 (2013) 「子どもの「最善の利益」を保証できるファミリーホーム制度を目指して」『親和会通信』, 名古屋市親和会
- ・伊藤龍仁 (2013) 「里親になって思うこと」『ラルーラ通信』, 中部学院大学子ども家庭支援センター.

<書籍編集委員>

- ・日本ファミリーホーム協議会『社会的養護とファミリーホーム』, 創英社, 2014年以降今日に至る.
- ・保育福祉小六法編集委員会『保育福祉小六法』, みらい, 2010年以降今日に至る.

○科学研究費補助金等への申請状況、交付状況 (学内外)

なし

○所属学会

- ・社会事業史学会
- ・東海社会学会
- ・日本福祉大学社会福祉学会
- ・日本社会福祉学会
- ・全国児童養護問題研究会

○自己評価

- ・今年度の研究活動は、一部に計画の遅滞等が見られ、計画通りには進まなかった部分がある。特に、博士論文に関する研究計画を大幅に見直す必要が生じたための遅滞があった。また、予定したスリランカ研究が中国上海市の調査に変更され、研究計画の変更につながった。研究成果に関しては一定の成果を上げることができたが、論文誌への投稿が不十分な点に課題が残る。

III 大学運営

○目標・計画

(目標)

学内委員会活動と教育学部における学科運営を中心に職責を果たして大学運営に協力する。高大接続及び広報業務等への協力依頼がある場合にはできる限り協力していく。

(計画)

- ①人権問題委員会委員長として委員会を運営し、学内の人権問題に対応するとともに教職員・学生に対する人権意識の向上を図る。
- ②入試委員会委員として委員会活動に参加し、オープンキャンパスや入試業務等の職責を果たす。
- ③学生募集戦略委員会委員として委員会活動に参加し、与えられた職責を果たす。
- ④教育学部学科教員の一人として学科会議及び保育士等養成課程委員会に参加しながら与えられた職責を果たす。

○学内委員等

学生募集戦略委員会委員、人権問題委員会委員長、入試委員会委員、幼小教職委員会委員、保育士養成課程委員会委員

○自己評価

- ・今年度の大学運営に関しては概ね目標を達成したと考える。特に、今年度から就任した人権問題委員長として困難事例に対応して職責を全うした。

IV 社会貢献

○目標・計画

(目標)

本学教授という地位にふさわしい社会貢献活動を展開することが本年度の目標である。

(計画)

- ・本年度は、ファミリーホーム事業、名古屋市親和会（里親会）役員活動等を中心とした名古屋市児童福祉事業への貢献、名古屋市、岐阜県、瑞穂市等が主催する研修・講習会等への協力、社会福祉法人桜友会評議員、日本ファミリーホーム協議会機関誌編集委員として社会貢献に取り組む。

○学会活動等

- ・社会事業史学会が発行予定の社会事業辞典（予定）への分担執筆依頼を受けて原稿を執筆した。全国児童養護問題研究会より、次年度全国大会シンポジストとしての参加依頼を受けるとともに、
- ・次年度発行予定の出版物への執筆依頼を受けた。

○地域連携・社会貢献等

- ・日本ファミリーホーム協議会機関誌編集委員会活動、名古屋市の里親及びファミリーホーム事業、名古屋市のびのびサポート子育て支援事業（ファミリーサポートセンター事業）研修会講師、瑞穂市子育て支援員研修会講師、および社会福祉法人桜友会評議員、児童心理治療施設桜学館苦情解決第3者委員としての地域・社会貢献を行った。
- ・新たに、名古屋市社会的養育推進計画会議に委員として参加した。

○自己評価

今年度の社会貢献活動は目標を十分達成し、当初の計画以上の取り組みを行った。

V その他の特記事項（学外研究、受賞歴、国際学術交流、自己研鑽等）

- ・愛知東邦大学地域創造研究所の一員として上海復旦大学人口研究所との研究交流活動に参加した。
- ・愛知県社会福祉協議会より児童福祉活動への貢献に対する感謝状を贈呈された。

VI 総括

- ・今年度は、教育活動、大学運営、社会貢献については概ね目標を達成したといえる。一方で、研究活動が不十分な結果に終わった印象がある。今年度の課題を踏まえて次年度の計画を立案したい。

以 上

所属学部 学科	職位	氏 名
教育学部 子ども発達学科	教授	今津 孝次郎
最終学歴	学 位	専門分野
京都大学大学院教育学研究科博士課程 (単位取得満期退学)	博士 (教育学, 名古屋大学)	教育学, 教育社会学, 学校臨床社会学

I 教育活動

○目標・計画

(目標)

教育学部が完成年度を無事終えることができ、次の段階に向けてさらに独自の教育を具体的に実現していくのが最大の課題である。子どもの命の成長を支援する保育士と幼稚園・小学校の教員にとって求められる資質能力は、「人間力」である。本学のスクールモットーである「真に信頼して事を任せうる人格の育成」を真正面から受け止めて提起する「人間力」とは、表現力や感性を中核にしつつ対人関係力や忍耐力、探究心そして知力などの諸能力や態度を総合した総合的な力を言う。この総合的な「人間力」を培うためのさらなる環境整備に努めることが目標である。

(計画)

- ①「サービス・ラーニング実習」が授業化・単位化され3年目に入る。この新たなカリキュラムが「プレ保育・教育実習」として成功するように、サービス・ラーニング委員会を中心に全面的に取り組んでいきたい。
- ②学生のなかにはわずかではあるが、過少単位や進路の揺らぎ、実習途中取り止めなど、難しい課題を抱えたケースがある。これらについては個別に丁寧に指導を施して、卒業を迎えさせる努力を払う。そしてそれらのケースを通じて、今後とも学生指導上必要な一般的な指導法の工夫点を見つけ出す。
- ③初等教育コースの第1期生2人が小学校教員採用試験に合格した。いっそう着実に成果をあげることが、学生本人にとっても、また教育学部の評価にとっても切実な課題である。すでに教職支援センターとも連携しながら強化対策を積み重ねているが、さらに教育学部全体としてもさらに支援していきたい。
- ④久しぶりに総合演習を担当することになった。総合演習の教育課題と独自の教育方法を開発する。
- ⑤昨年度の学部FDとして、「演習」授業改善を集中しておこなうことができた。その成果を踏まえて、本年度はサービス・ラーニングに続く教育学部の次の独自性を創造できるようなFD活動を展開できればと願っている。

○担当科目 (前期・後期)

(前期) 教育原理、生徒・進路指導の理論と方法、教育実習Ⅰ事前事後指導、総合演習Ⅰ、専門演習Ⅲ、教育実習Ⅰ(幼稚園)

(後期) 教職概論(幼・小)、多文化理解教育、教育社会学、教職実践演習(幼・小)、総合演習Ⅱ、専門演習Ⅳ、卒業研究

○教育方法の実践

文献・資料の輪読（音読）をさらに定着させ、国語力の向上にも寄与すること。

○作成した教科書・教材

サービス・ラーニング委員会編『「サービス・ラーニング」ハンドブック』第5版、愛知東邦大学教育学部、2019年2月

○自己評価

・サービス・ラーニングが5年目（授業化して3年目）を終え、選択科目とはいえ、前期はほとんどの学生が履修し、後期は特に熱心な半分ほどの学生が引き続き参加し続けている。サービス・ラーニング先のリストも固まり、全体授業とサービス・ラーニング実習の配分や評価法など、方法論も確定して、ようやく最初の段階が完成したという印象である。次は2年次以降の学生について、さらにレベルアップした授業形態を開発することが目標である。

・多人数の必修授業で文献・資料の輪読（音読）がどれだけの効果を上げているかについては、今津孝次郎「古典に親しむ楽しさ」『邦苑』No. 401（2019年3月）で報告した。

・総合演習では「文献紹介」をねばり強く推進することができ、大学での学び方の手法をかなり習得できたのではないかと思う。次年度も同じ課題を追求していきたい。

・教職支援センターが試みに運営した前期の「教採対策特別講座」で、校長経験者による筆記・集団面接・個人面接を4年生対象に実施することができた。また集団面接（集団討議）は早期から可能であると判断し、後期に1～3年生を対象にして、これも試みにおこなったところ、学生は大いに啓発を受けることができた。もっと回数を増やしてやってほしい、との要望が寄せられたほどである。

II 研究活動

○研究課題

昨年から継続するテーマと、本年度の新規テーマが以下の三つである。

- ①新規「社会人のリカレント教育の開発」
- ②継続「教師教育の研究」の一環として、「チーム学校」の検討
- ③継続「多文化理解の教育プログラム開発」

○目標・計画

（目標）

①科研「社会人を対象にした教員養成の研究」の4年目延長した最終年度では、3年目に引き続き国内での本格的な調査を実施し、社会人を対象にした教員養成および一般市民の大学入学に関する基本的課題を浮き彫りにした。そのなかで、リカレント教育がなぜ日本で盛んにならないのか、という根本的な疑問を抱くに至った。キャリア変化に関する文化的特徴などを探る必要があると感じ、科研仲間と引き続き総合的研究を展開する。

②20年ぶりに『新版 変動社会の教師教育』（名大出版会）を刊行し、教師教育研究に一区切りをつけたが、関連する研究テーマが浮かび上がった。まずは中教審答申で提起された「チーム学校」の検討である。

（計画）

- ①研究仲間と、リカレント研究の計画を具体的に立案する。
- ②「チーム学校」に関する中教審答申など文書類の読み解きからはじめたい。
- ③一般にはあまり知られていない「多文化保育」がようやく学生の間でも話題になるようになって

た。昨年度も5人の専門演習受講の4年生と共に、外国人園児の多い保育園でフィールドワークをおこなった。さらに新たな保育プログラムの具体化をはかりたい。

○2011年4月から2019年3月の研究業績（特許等を含む）

（著書）

- ・〔共著〕愛知東邦大学地域創造研究所編『教員と保育士の養成における「サービス・ラーニング」の実践研究』唯学書房、2019年2月、全110頁
- ・今津孝次郎『新版 変動社会の教師教育』名古屋大学出版会、2017年、全360頁
- ・今津孝次郎監修・著、子どもたちの健やかな育ちを考える養護教諭の会編著『小学校保健室から発信！先生・保護者のためのスマホ読本』学事出版、2017年、全118頁
- ・今津孝次郎『学校と暴力 - いじめ・体罰問題の本質 - 』平凡社新書、2014年、全239頁
- ・今津孝次郎監修、金城学院中学校高等学校編著『先生・保護者のためのケータイ・スマホ・ネット教育のすすめー「賢い管理者」となるために』学事出版、2013年、全95頁
- ・今津孝次郎監修・著、金城学院中学校高等学校編著『中高生のためのケータイ・スマホハンドブック』学事出版、2013年、全96頁
- ・今津孝次郎『教師が育つ条件』岩波新書、2012年、全214頁
- ・今津孝次郎『〈ワードマップ〉学校臨床社会学ー教育問題の解明と解決のためにー』新曜社、2012年、全249頁

（学術論文）

- ・久野千津・今津孝次郎「新学習指導要領とカリキュラム・マネジメント」『東邦学誌』第47巻第2号、2018年12月
- ・今津孝次郎『「チーム学校」の光と影』『中部教育学会紀要』第18号、2018年6月
- ・今津孝次郎・加藤潤・白山真澄・田川隆博・長谷川哲也・林雅代「現職教員の潜在的学びニーズー大学への『社会人入学』に関する質問紙調査を通じてー」『東邦学誌』第47巻第1号、2018年6月
- ・川崎勝彦・今津孝次郎「秋の虫取りによる『保育内容（環境）』学習の試みー平和公園のフィールドワークからー」『東邦学誌』第46巻第1号、2017年6月
- ・今津孝次郎・加藤潤・白山真澄・田川隆博・長谷川哲也・林雅代「大学における現職教員の学び直しに関するニーズー2015年度予備調査の結果からー」『静岡大学教育学部附属教育実践総合センター紀要』No. 26、2017年3月
- ・今津孝次郎「教員養成における『大学中心』と『学校現場中心』ー『サービス・ラーニング』と『学校インターンシップ』ー」『東邦学誌』第45巻第1号、2016年6月
- ・今津孝次郎「改訂 情報メディア社会の生徒指導」『教員免許更新講習・印刷教材集』（ラジオ）放送大学、2015年7月
- ・今津孝次郎「改訂 生徒指導のサポートネットワーク」『教員免許更新講習・印刷教材集』（ラジオ）放送大学、2015年7月
- ・今津孝次郎「学校臨床社会学の『介入参画』法」『教育学研究』第78巻第4号、2011年12月
- ・今津孝次郎「教育専門職博士課程 EdD の可能性と課題」『日本教師教育学会年報』第20号、学事出版、2011年
- ・今津孝次郎「生徒指導とスクールソーシャルワーク」『教員免許更新講習・印刷教材集』放送大学、2011年7月

- ・今津孝次郎「情報社会の生徒指導」『教員免許更新講習・印刷教材集』放送大学、2011年7月
(学会発表)
- ・田川隆博・加藤潤・今津孝次郎・白山真澄・長谷川哲也・林雅代「現職教員の潜在的学びニーズ—大学への「社会人入学」に関する質問紙調査を通じて—」日本教育社会学会第69回大会、一橋大学、2017年10月21日
- ・今津孝次郎・田川隆博、加藤潤、白山真澄、長谷川哲也、林雅代「大学への社会人入学に関するニーズ—一般市民への質問紙調査の結果から—」中部教育学会第66回大会、福井医療大学、2017年6月17日
- ・今津孝次郎・田川隆博「大学への社会人入学の促進要因と抑制要因」日本教育社会学会第68回大会、名古屋大学、2016年9月17日
- ・今津孝次郎・田川隆博・長谷川哲也「大学における現職教員の学び直しに関するニーズ—予備調査の結果から—」(中部教育学会第65回大会、中部大学、2016年6月25日)
- ・今津孝次郎「私立大学は教員養成制度の大改革にどう立ち向かうのか」全私教協「2015年度教職課程運営に関する研究交流集会」シンポジウム「今後の教員養成政策と私立大学教職課程の課題」(金城学院大学、2015年11月7日)
- ・長谷川哲也・菅野文彦・今津孝次郎「教師を目指す学生による『学校現場体験』の再検討—静岡大学と愛知東邦大学の実践を事例として—」(日本教師教育学会第25回大会、信州大学、2015年9月20日)
- ・今津孝次郎「教員養成における『経験学習』法としての『サービス・ラーニング』—愛知東邦大学教育学部の試み—」教員養成における新方法開発シンポジウム、静岡大学教育学部、2015年3月26日
- ・今津孝次郎「体罰問題の教育言説論的考察」日本教育社会学会第66回大会、松山大学、2014年9月14日)
- ・今津孝次郎「移民時代の異文化理解と自文化認識」名古屋多文化共生研究会シンポジウム「外国につながる子どもたちのために今何ができるか」、名古屋市立大学、2014年7月26日
- ・今津孝次郎『『勉強』と『学び』』シンポジウム：学びに向かう子どもを育てる」日本教育会愛知県支部「第34回教育問題研究会」、愛知県女性総合センター、2014年7月24日
- ・今津孝次郎「名古屋大学のEdDプログラムの成果と課題—PhDとの相違を中心に」愛知教育大学・静岡大学共同教科開発学シンポジウム、愛知教育大学、2014年3月9日
- ・今津孝次郎「教師の『資質・能力』概念の再検討—六層構成の視点から—」日本教育社会学会第64回大会、同志社大学、2012年10月27日
- ・今津孝次郎「外国人児童生徒教育の実践的研究課題—学校臨床社会学の立場から—」日本教育学会第71回大会・公開シンポジウム「グローバル化時代の教育と職業—移民の青少年におけるキャリア形成をめぐる—」、名古屋大学、2012年8月25日
- ・今津孝次郎「臨床社会学の『介入参画』法」関西社会学会第63回大会、皇學館大学、2012年5月27日
- ・今津孝次郎「教育専門職博士 EdD の可能性」日本教育社会学会第63回大会、お茶の水女子大学、2011年9月24日
- (特許)
- ・無し

(その他)

<事典項目>

- ・今津孝次郎「教職専門性の変容」日本教育社会学会編『教育社会学事典』丸善出版、2018年
- ・今津孝次郎「ライスステージの変化とライフコース」日本教育社会学会編『教育社会学事典』丸善出版、2018年
- ・今津孝次郎「文化遅滞 (W・F・オグバーン)」作田啓一・井上俊編『命題コレクション 社会学』ちくま学芸文庫、2011年(初版 筑摩書房、1986年)

<評論>

- ・今津孝次郎「古典に親しむ楽しさ」『邦苑』NO. 40、愛知東邦大学後援会、2019年3月
- ・今津孝次郎「高大接続を目指す『キャリア教育』－『ボランティア』から『サービス・ラーニング』そして『インターンシップ』へ」名古屋大学高大接続研究センター「レクチャーシリーズ」、2018年1月
- ・今津孝次郎「<巻頭言>教師教育にとって『大学』と『学校現場』との関係を問い直す」『教育展望』教育調査研究所、2017年10月号
- ・今津孝次郎「私の教育学部50年－大学の春夏秋冬－」『京都大学教育学部同窓会会報』第33号、2017年3月
- ・今津孝次郎「大学の社会人獲得－土日授業・学費軽減を－」『日本経済新聞』、2016年11月7日付
- ・今津孝次郎「多文化地域社会の保育を考える」「フレンズ・TOHO」会報『みどりの風』第40号、2016年2月24日
- ・今津孝次郎「学校現場ネットワークと教師の『同僚性』」『教職大学院ニュースレター』79号、福井大学大学院教育学研究科教職開発専攻、2015年12月23日
- ・今津孝次郎「『いじめ防止対策推進法』をどう受け止めるか」『月刊高校教育』2014年5月号、学事出版
- ・今津孝次郎「いじめ認識の弱点を乗り越える－『事件対処型』発想と『教育対応型』発想－」『教育と医学』2013年11月号、慶應義塾大学出版会
- ・今津孝次郎「学校の体罰防止－『懲戒』のガイドライン作れ－」『朝日新聞』[私の視点]、2013年2月23日
- ・今津孝次郎「<巻頭随筆>いじめ問題の基礎知識」『教育と医学』2013年2月号、慶應義塾大学出版会
- ・今津孝次郎「ケータイの賢い管理責任者となる－金城学院中高校 PTA 研修会の試み－」『月刊高校教育』2012年8月号、学事出版
- ・今津孝次郎「<巻頭随筆>子どもが地域と出会う場を創り出す学校」『教育と医学』2012年2月号、慶應義塾大学出版会

<書評>

- ・今津孝次郎「志水宏吉・高田一宏編著『マインド・ザ・ギャップ－現代日本の学力格差とその克服－』」大阪大学出版会、2016年4月、『教育社会学研究』第100集、2017年7月
- ・今津孝次郎「自著『学校と暴力』の書評に答えて」(書評リプライ)、『教育社会学研究』第98集、2016年6月
- ・今津孝次郎〔図書紹介〕「アンディ・ハーグリーブス(木村優・篠原岳司・秋田喜代美 監訳)『知

識社会の学校と教師—不安定な時代における教育—』金子書房、2015年」、『教育学研究』第82巻第3号、2015年9月

- ・今津孝次郎「酒井朗『教育臨床社会学の可能性』勁草書房、2014年」、『教育展望』2014年11月号
- ・今津孝次郎「自著『教師が育つ条件』の書評に答えて（書評リプライ）」、『教育社会学研究』第93集、2013年12月
- ・今津孝次郎「副田義也『教育基本法の社会史』有信堂高文社、2012年」、『社会学評論』64巻1号、2013年6月
- ・今津孝次郎「人間関係の解明に向けた生涯発達社会学的視点」【書評シンポジウム】高橋恵子『人間関係の心理学—愛情のネットワークの生涯発達—』東京大学出版会、2010年、『児童心理学の進歩 2013年版』金子書房、2013年6月
- ・今津孝次郎「志水宏吉[編]『格差をこえる学校づくり—関西の挑戦—』大阪大学出版会、2011年」、『教育社会学研究』第90集、2012年6月
- ・今津孝次郎「自著『人生時間割の社会学』」【書評シンポジウム】・「著者による原著の紹介」「書評にこたえて」（小嶋秀夫・岡本祐子・菅原育子・上野千鶴子・各氏の書評へのリプライ）『児童心理学の進歩』2011年版、金子書房、2011年6月

○科学研究費補助金等への申請状況、交付状況（学内外）

- ・平成 26～29（2014～2017）年度 科学研究費補助金（基盤研究（C））研究課題名：「社会人を対象にした教員養成プログラムの開発」研究代表者：今津 孝次郎（研究分担者：長谷川哲也・他4名）交付総額：4,550,000円
（3年間だったが、課題が残ったので、平成 29（2017）年度まで1年間延長した）

○所属学会

日本教育学会、日本教育社会学会、日本教師教育学会、中部教育学会、関西社会学会

○自己評価

- ・「社会人のリカレント教育の開発」については、5人の研究仲間とすでに4回の研究会を持ち、平成31年度基盤研究（C）（一般）の研究計画書「リカレント教育の抑制要因に関する文化的・制度的分析」（研究代表者：加藤潤）を作成して共同申請した。
- ・「教師教育の研究」の一環として、「チーム学校」の検討をおこない、『中部教育学会紀要』第18号に「『チーム学校』の光と影」と題した論文が掲載された。その後は、「チーム学校」だけでなく、近年の教育政策に関するキーワード（児童虐待、体罰、いじめ、学校安全など）をめぐる諸言説の検討に発展したので、次年度に向けて一冊にまとめる計画で執筆を続けている。
- ・「多文化理解の教育プログラム開発」については、これまで自由に参観が可能であった、名古屋市最大外国人園児を擁する公立保育園への訪問について条件が厳しくなった関係上、訪問しづらくなったので、フィールドワークをおこなうことが困難になった。その代わりに、2019年4月より外国人労働者の受け入れ拡大が急遽、国会で審議される状況になったので、この目の前の動きをいかに受け止めていくか、新聞報道やテレビドキュメントなどを資料にして、共に考える「多文化理解教育」の授業を展開した。学生はアルバイト先でさまざまな外国人労働者と接しており、身近な関心をいかに国全体の一般的な課題と結び付けていくか、互いの経験を相互に対話させていく方法もプログラムに取り入れられてよいのではと考える。

Ⅲ 大学運営

○目標・計画

(目標)

学部長職を終え、教職支援センター長として、センター業務をさらに充実させることが役割である。

(計画)

- ①教職支援センター主催で教採合格強化講座を立ち上げる。
- ②他大学の教職センターとの交流をはかる。

○学内委員等

地域連携委員会委員、幼小教職委員会委員、保育士養成課程委員会委員

○自己評価

- ・教職支援センターが試みに運営した前期の「教採対策特別講座」で、校長経験者による筆記・集団面接・個人面接を4年生対象に実施することができた。また集団面接（集団討議）は早期から可能であると判断し、後期に1～3年生を対象にして、これも試みにおこなったところ、学生は大いに啓発を受けることができた。もっと回数を増やしてやってほしい、との要望が寄せられたほどである。そこで、次年度も実施する予定である。また、一時的な特別講座でなく、体系的で、より学校インターンシップに近い「東邦プロジェクトー教職の実践的探究ー」の構想案を策定した。この案を実現するのが次年度の課題である。
- ・教職センターの環境を調べるために、6月4日に南山大学、6月25日に中部大学の各教職センターを本学センター関係者6～7人で訪問して、施設などを見学すると共に、担当者から詳しい話を聞くことができた。本学のセンターの環境整備をするうえで啓発を受けた。
- ・地域連携委員会では、新たなコンセプトの下での公開講座規程の改訂について、基本的な考え方を問題提起するレポートを作成した。

Ⅳ 社会貢献

○目標・計画

(目標)

サービス・ラーニングを通じて学校・園などへの訪問を進めるなかで、名東区内のいくつかの小学校、幼稚園、保育所、児童福祉施設などとの連携がすっかり定着するとともに、名東区役所や名東文化小劇場、名東図書館との連携も具体的なプロジェクトを介して生まれた。そうした地域連携をさらに深めていく。

(計画)

- ①サービス・ラーニングの成果も報告しながら、学校・園など諸機関の行事の支援を進める。
- ②名東区子育て支援ネットワーク協議会の正式メンバー（大学機関としては初）であり、独自の公開コミュニティカレッジ講座も開設しているので、さらに地域の社会貢献をはかる。
- ③名東文化小劇場から依頼された「あつまれ！ KIDS たいけん」を引き続き開催するとともに、名東図書館の「子ども広場」をさらに継続していく。

○学会活動等

科研費による研究期間が終了したこともあり、本年度は特に学会活動はおこなっていない。

○地域連携・社会貢献等

- ・愛知県いじめ問題調査委員会で委員長役を務めた。この役目は次年度も継続する。
- ・松本大学外部評価委員会委員長を務めた。この役目は次年度も継続する。

○自己評価

①～③の計画通り、地域との連携をさらに深めている。

V その他の特記事項（学外研究、受賞歴、国際学術交流、自己研鑽等）

1990年代末から今日まで20年余りにわたって継続している教育言説研究に関する諸論考を一冊にまとめる作業を10月からおこなっており、原稿を8割方書き終えて、3月中には草稿がすべて出来上がる見通しである。

VI 総括

- ・教育活動では、サービス・ラーニングを5年間続けてきて、そのスタイルを確定することができた。地域創造研究叢書 No. 30『教員と保育士の養成における「サービス・ラーニング」の実践研究中間』はその中間総括であり、本書の発行が本年度最大の成果である。
- ・研究活動では、20年に及ぶ教育言説論集の集大成原稿がおおよそできあがりつつあるのが、最大の成果である。
- ・地域貢献では、名東区子育て支援ネットワーク連絡会への参加が4年間続き、本年度でひとまず委員としての役目を終えて、次の委員への引き継ぎをおこなったところである。
- ・社会貢献では、愛知県いじめ問題調査委員会委員長として、いじめ問題への対応の審議の取りまとめをおこなった。また、学部構成が共通しているということで、松本大学より依頼され、外部評価委員会に参加し、委員長を務めた。啓発される点が多々あった。

以 上

所属学部 学科	職位	氏 名
教育学部 子ども発達学科	教授	柿原 聖治
最終学歴	学 位	専門分野
広島大学大学院 教育学研究科 単位取得満期退学	教育学修士	理科教育、算数教育

I 教育活動

○目標・計画

(目標)

一人ひとりの学生を大切にし、親身になって寄り添い、学生の学業成績の向上に努める。
建学の精神「真に信頼して事を任せうる人格の育成」に沿うような人材の育成に努める。
教員採用試験に1人でも多く合格させる。

(計画)

授業では、教師によるデモンストレーションではなく、学生一人ひとりが自分たちで実験や制作活動ができるように、教材や道具を学生の数だけ準備し、学生が自由に学習できる環境を作る。
安全に配慮し、学生の主体性を引き出す。

空き時間にはできるだけ研究室を開放し、教員採用試験の勉強会を行う。試験対策で困っている学生をできるだけ多く救う。

○担当科目（前期・後期）

(前期) 理科、幼児の科学、総合演習Ⅰ、専門演習Ⅰ、専門演習Ⅰ、専門演習Ⅲ

(後期) 生活、生活科教育法、理科教育法、東邦プロジェクトA、総合演習Ⅱ、専門演習Ⅱ、専門演習Ⅳ、卒業研究

○教育方法の実践

おもちゃ作り等で、コンパスを多用した授業を計画し、実践した。頭だけで考えるのではなく、手を使った具体的な活動を多く取り入れた教育方法を実践した。

○作成した教科書・教材

なし

○自己評価

幼児教育で用いられるおもちゃ作り、季節の遊びや活動などの見識を深めることができたことは成果だと言える。

また、全国の小学校教員採用試験の過去問をほぼすべて入手し、理数の問題を解いて出題傾向を分析した。それを学生に還元することができ、それなりの手応えを感じた。しかし、まだ十分とは言えず、学生の成績向上のために、更なる研鑽を積む必要があると思った。

II 研究活動

○研究課題

理科の実験教材づくりと算数的活動の開発

○目標・計画

(目標)

理科の授業が楽しくなるような実験を取り上げ、その教材開発を行う。算数も、理科と同様、道

具を使った活動を中心とした授業を考える。

(計画)

理科も算数も、頭だけで考えるのではなく、道具を使って視覚的・感覚的に理解させる教材開発を行う。折り紙の利用やコンパスを使った作図などを多く取り入れ、楽しい算数・理科にする。

○2011年4月から2019年3月の研究業績（特許等を含む）

(著書)

- ・今津孝次郎、西崎有多子、白井克尚、中島弘道、新實広記、伊藤龍仁、柿原聖治、伊藤数馬、『教員と保育士の養成における「サービス・ラーニング」の実践研究』、2019年、唯学書房

(学術論文)

- ・柿原聖治「錯覚や意外性を取り入れた図形の指導—小学校の数学的活動—」、『東邦学誌』、第47巻 第2号、p. 33-43、2018
- ・柿原聖治「作図によるルーローの三角形、正六角形づくり—算数的活動—」、『東邦学誌』、第47巻 第1号、pp. 49-56、2018
- ・柿原聖治「パズル作りを取り入れた算数的活動」東邦学誌 第46巻 第2号、p. 105-112、2017
- ・柿原聖治「正四角錐、正四面体を折り紙で作る方法とその利用」東邦学誌 第46巻 第1号、p. 119-126、2017
- ・柿原聖治「正三角形を折り紙で作る方法の実践的研究」東邦学誌 第45巻 第2号、p. 117-124、2016
- ・柿原聖治「燃焼の仕組みを理解させる—火おこし器で発火させる方法を通して—」東邦学誌 第45巻 第1号、p. 73-78、2016
- ・柿原聖治「化合の実験材料としてのカルシウムの活用」東邦学誌、第44巻 第2号、p. 111-115、2015
- ・柿原聖治「ポンプを利用した日用品のモデル作り」東邦学誌、第44巻 第1号、p. 139-149、2015
- ・今津孝次郎、新實広記、西崎有多子、柿原聖治、伊藤龍仁、白井克尚「教員と保育士の養成における「サービス・ラーニング」の試み」東邦学誌、第44巻 第1号、p. 211-231、2015
- ・柿原聖治「気体の分子運動に関するモデル実験と授業展開」東邦学誌、第43巻 第2号、p. 105-116、2014
- ・柿原聖治「ヘアの装置につなげる授業」物理教育、第60巻 第4号、p. 264-265、2012
- ・柿原聖治「液体の分子運動モデルの開発と授業展開」物理教育 第60巻 第3号、p. 179-183、2012
- ・柿原聖治「教訓茶碗から発展させた授業」物理教育、第60巻 第1号、27-28、2012
- ・柿原聖治「灯油ポンプ作り—その仕組み—」物理教育、第59巻 第3号、194-195、2011
- ・柿原聖治「基本的な用語、実験に関する大学生の誤解」科学教育研究、第35巻 3号、287-288、2011
- ・柿原聖治「浮力と液体の密度測定—その指導法—」物理教育、第59巻 第4号、267-268、2011
- ・柿原聖治「ヘアの装置による水溶液の濃度測定」平成22年度 東レ理科教育賞 受賞作品集、p. 22-26、2011

(学会発表)

(特許)

(その他)

・月刊誌『理科の教育』各号の目次を英語に翻訳

○科学研究費補助金等への申請状況、交付状況（学内外）

科学研究費補助金に申請したが、不可であった。

○所属学会

日本理科教育学会、日本物理教育学会

○自己評価

身近なものを科学的・数学的に調べ、教材として活用する方法を研究した。それを論文としてまとめることができた。

III 大学運営

○目標・計画

(目標)

大学の発展のために、自ら努力して貢献する。信頼して事を任せられた職務は、全力を挙げてまっとうする。大学運営がスムーズになるように努力を怠らない。

(計画)

教育は天に事うる職分なので、与えられた校務は真面目に取り組む。

○学内委員等

地域連携委員会委員、学術情報センター運営委員会委員、幼小教職委員会委員、保育士養成課程委員会委員

○自己評価

学内の運営方針・慣行に沿い、それなりに努めたが、まだまだ貢献できる余地があると思うので、努力したい。

IV 社会貢献

○目標・計画

(目標)

教育現場に求められているニーズを読み取る。それに応えるには何ができるかを考え、できることから実践していく。学生がサービス・ラーニングができる素地を増やしていく。

(計画)

今年度「東邦プロジェクト」を担当するので、小学校や保育・幼稚園などに足を運び、教育現場と連携を図る。

大学連携講座を日進市と行っているので、今年も理科実験・算数的活動について講座を持つ。

○学会活動等

なし

○地域連携・社会貢献等

主に北一社小学校でのサービス・ラーニングの支援を行った。日進市と大学連携講座をもち、11月から4回、土曜日に実験を伴った講座を行った。

瀬戸北総合高校で模擬授業を行った。

○自己評価

学生を地域の学校にサービス・ラーニングの場として送り出し、いい勉強になった。また、大学連携講座を日進市と行い、小学生から社会人まで幅広く交流することができ、有意義だった。

V その他の特記事項（学外研究、受賞歴、国際学術交流、自己研鑽等）

なし

VI 総括

実習先の保育所や幼稚園などに行って、現場の先生方と話を交わすことで、現場の様子をよく知ることができた。講義や研究の中で、生かしていきたいと思う。

「東邦プロジェクト」を初めて担当した。その発表会に参画し、それなりの手応えを感じた。また、サービス・ラーニングに関する叢書を一部執筆して形のあるものにした。地域連携の仕方を他の先生方と一緒に、さらに模索していきたい。

以 上

所属学部 学科	職位	氏 名
教育学部 子ども発達学科	教授	西崎 有多子
最終学歴	学 位	専門分野
コロンビア大学大学院修士課程修了	MA	英語教育

I 教育活動

○目標・計画

(目標)

- ①全学共通の英語科目に関しては、英語の習熟度に大きな差がある学生に対して、それぞれのレベルにおいて学生が興味を持ち自ら学ぼうとする気持ちを持って授業に臨み、授業の教材だけでなく今後授業外で出会う英語に対して自らの力で理解していこうとする気持ちと解決していける実力をつけることを目標とする。専門科目へ繋ぐことができるよう、基礎を固める。アクティブラーニングを積極的に取り入れる。
- ②「専門演習Ⅰ・Ⅱ」(3年生ゼミ)においては、真面目で社会に出て信頼を得られる人材を育成するために、礼儀や物事に対して真摯に取り組む姿勢を徹底させる。企画力、指導力、分析力を養い、将来に向けて具体的で着実な実力をつける内容とする。子ども英語・小学校英語について入門的内容を取り上げ、興味を深める指導について実技を行ない考えさせる授業を行なう。
- ③「専門演習Ⅲ・Ⅳ」(4年生ゼミ)においては、社会人となる前の最終学年として、社会に出て信頼を得られる人材を育成するために、礼儀や物事に対して真面目に真摯に取り組む姿勢を徹底する。遅刻や無断欠席などをすることなく、一人ひとりが卒業論文の完成に向けて、資料を収集し、構成を考え、文章を書き、完成させる過程をきちんとかなし、大学教育の最後の仕上げに値する論文を書く。このプロセスは、教員と楽をしたい学生とのある意味で戦いでもあり、お互いに真剣に向き合い、学生は苦し紛れを経験しながら、それまでの自分を超えていくことの意味を理解してほしい。一度到達したら、次はその上に到達できるようになることを、実感としてわかってもらい、成長してほしい。

(計画)

- ①語彙の面では授業には必ず辞書を持参させ、いくつもの意味の中から最適な解釈を選び出す力をつけながら、文法その他の面では、基本的説明を繰り返し取り入れながらスパイラルに授業を進める。学生が今後の専門科目ならびに現場で役立つ英語を学んでいるという自覚が持てる教材を使用し、同時にアクティブラーニングを積極的に取り入れる。
昨年同様、英語での紙芝居やペープサート、絵本の読み聞かせ、絵本理解のアレンジ等実際に人の前で発表をする機会を増やし、力を付ける。
- ②授業のスタイルとして、学生が企画するチャレンジ、最新のニュースや課題を扱うテーマ、英語力を養う英語、の3部構成を基本とする。チャレンジは、総当たりで2名1組となり、将来役に立つ内容で自由に企画、運営する。徐々に簡単な指導案を用意できるように指導する。テーマは、教員または学生から提案されたテーマについて、討論を行い、必要に応じて調査やレポート作成につなげる。英語については、総合的英語力向上を目指す。
英語教材の使用法についても、有名な絵本を取り上げ、読み聞かせだけでなく、アレンジして子どもの理解を深める工夫を実技で行なっていく。学外演習では、親睦をはかり、学内のゼミ

とは異なる貴重な時間を過ごしたい。

- ③真面目で信頼される新卒として、社会に受け入れられるよう、礼儀、言葉使い、何事にも意欲的に取り組む、締切を守る、授業に遅刻、欠席等をしない等、学生として規律正しく一生懸命卒業論文等に取り組むゼミとする。学外演習では、親睦をはかり、学内のゼミとは異なる貴重な時間を過ごしたい。

○担当科目（前期・後期）

（前期）英語基礎ⅠC、英語ⅠC、英語Ⅲ、小学校英語、専門演習Ⅰ、専門演習Ⅲ

（後期）英語基礎ⅡC、英語ⅡC、英語Ⅳ、小学校英語教育法、専門演習Ⅱ、専門演習Ⅳ、卒業研究

○教育方法の実践

「英語基礎ⅠC」「英語ⅠC」「英語基礎ⅡC」「英語ⅡC」においては、今後の専門科目を見据えて、幼稚園・小学校で使用される英語教材を併用しながら、教科書の文章を使ってグループでペーパーサートとして発表するなど、自主的で対話的な授業を行った。「小学校英語」「小学校英語教育法」では、再課程認定を受けた来年度以降のシラバスを前倒しにして採用し、実践力を付けるために教材研究や模擬授業を多く行った。岐阜の小学校における研究発表会等に希望する学生と参加し、実際の授業を観ることで教室での講義や模擬授業の重要性をフィードバックできた。

○作成した教科書・教材

講義内容を学生が自己学習によって整理し振り返るためのプリントを用意、小テストでは、間違っていたところを確認して復習するプリントを作成する等フィードバックのための教材の作成を心掛けた。小学校外国語アクティビティに関する図書は、授業でも取り上げ、使用した。

○自己評価

概ね達成できたが、多忙により授業準備の時間の確保が十分にできなかった。

II 研究活動

○研究課題

小学校英語教育からぶれることなく、更なる研究を続けていく。

○目標・計画

（目標）

新学習指導要領の移行期を迎え、移行期用新教材の分析と活用法、それに伴う指導と研修について最大限の効果を上げるための研究を行なう。新学習指導要領下で教員になる学生たちの指導力向上についても、専門科目の授業改善を行なっていく。

（計画）

学会への参加、研究開発校での研究授業等の観察・参加、最新の資料の入手と分析等より常に変化に対応し、最新の情報に基づいて、研究を行なう。授業においてもそれらから得た情報を還元し、アクティブラーニングを積極的に取り入れる。

○2011年4月から2019年3月の研究業績（特許等を含む）

（著書）

- ・西崎有多子・鈴木由季子・久保田香直・加藤拓由・山田幸子・岡井崇・藤田しおり・鷹巣雅英・清水万里子・山下桂世子（以上執筆者）、川村一代編著『1日10分 語彙・表現がしっかり定着！小学校外国語アクティビティ50』明治図書、2019年2月、アクティビティ9・14・21・29・35担当、共著

- ・今津孝次郎・西崎有多子・白井克尚・中島弘道・新實広記・伊藤龍仁・柿原清治・伊藤数馬『教員と保育士の養成における「サービス・ラーニング」の実践研究』地域創造研究叢書 No. 30、唯学書房、2019年2月、113頁の内、第2章担当、共著
- ・小学生のための英語教育研究グループ著『英語好きな子に育つたのしいお話 365』誠文堂新光社、2016年12月、416頁の内7頁（7編）を担当、共著
- ・西崎有多子『国語と英語の連携を意識した授業を考えるー小学校におけることばの教育の相乗効果をめざしてー』三恵社、2016年3月、170頁、単著
- ・西崎有多子・古市久子・金澤延美・加藤拓由・藤重育子『ことばでつなぐ子どもの世界』地域創造研究叢書 No. 25、唯学書房、2016年3月、137頁の内、第6章担当、共編著
- ・古市久子・澤田節子・西崎有多子・荒川紘・山極完治『ならぬことはならぬ 江戸時代後期の教育を中心として』地域創造研究叢書 No. 21（2014年3月発行）、132頁の内第5章担当、唯学書房、共著
- ・西崎有多子他委員『高等教育における英語授業の研究ー学習者の自立性を高めるリメディアル教育ー』（2012年3月）大学英語教育学会・第2次授業学研究特別委員会、共編著
- ・古市久子・澤田節子・西崎有多子・荒川紘・高橋衛『江戸時代の教育を現代に生かす』地域創造研究叢書 No. 16（2012年1月発行）唯学書房、168頁の内、第5章担当、共著

（学術論文）

- ・西崎有多子「小学校教員養成課程における授業実践に必要な英語力の養成一次期学習指導要領を踏まえたアクティビティラーニングをとおしてー」『東邦学誌』2018年12月、第47巻、第2号、pp. 119-125、単著
- ・西崎有多子「小学校教員養成課程における「小学校英語教育法」への段階的学びを考えるー苦手意識の克服と指導時の不安軽減をめざしてー」『東邦学誌』2017年12月、第46巻、第2号 pp. 69-77、単著
- ・西崎有多子「小学校英語を指導する際に押さえておきたいポイントー小学校教員養成課程における限られた条件の下でー」『東邦学誌』2016年12月、第45巻、第2号 pp. 25-36、単著
- ・西崎有多子「ネーミングの工夫からことばへの気付きへと発展させる指導ー小学校におけることばの教育の一案としてー」『東邦学誌』2015年12月、第44巻、第2号 pp. 1-11、単著
- ・西崎有多子「商品のネーミングからことばへの気付きに導く指導ー小学校における国語、英語、外国語を連携させてー」『東邦学誌』2014年6月、第44巻、第1号 pp. 111-122、単著
- ・西崎有多子「新しいことばの創造と受容を通して日本語と外国語を考える指導ー小学校国語科と外国語活動の連携の試み」『東邦学誌』2014年12月、第43巻、第2号 pp. 77-86、単著
- ・西崎有多子「外国語を用いて「国語」と「外国語活動をつなぐ〜ことばへの気付きと考察へと導く試案〜」2014年3月、『平成25年度国際理解同好会研究集録第17号』、計6ページ分、単著
- ・西崎有多子「外来語を使って「外国語活動」と「国語」を連携させる授業を創る」『東邦学誌』2013年12月、第42巻、第2号 pp. 45-64、単著
- ・西崎有多子「外国語活動における小学校国語教科書の活用と”Hi, friends! 2” Lesson 7の指導」『東邦学誌』2013年6月、第42巻、第1号 pp. 19-28、単著
- ・西崎有多子『『桃太郎』を発展させるオリジナル英語劇の持つ意味』『国際理解教育へのとびら』2013年3月、『平成24年度国際理解同好会研究集録第16号』、計4ページ分、単著
- ・西崎有多子「小学校外国語活動における「桃太郎」を使った授業展開ー英語劇化への過程と民話

としての側面一」『東邦学誌』2012年12月、第41巻第3号人間学部篇 pp.1-21、単著

- ・西崎有多子「小学校外国語活動におけるオリジナル劇の可能性—新教材”Hi, friends!”より「桃太郎」を使って—」『東邦学誌』2012年6月、第41巻、第1号 pp.75-88、単著
- ・西崎有多子「小学校外国語活動における『言語や文化に対する気付き』の指導」『東邦学誌』2011年6月、第40巻、第1号 pp.77-86、単著

(学会発表)

- ・西崎有多子「小学校教員養成課程における「小学校英語教育法」のアクティブラーニングを考える—教材の世界から一歩踏み出し、自分らしく楽しく創造する—」小学校英語教育学会、第18回小学校英語教育学会長崎大会（全国大会）、長崎大学、2018年7月29日、単独
- ・西崎有多子「小学校教員養成課程における「小学校英語教育法」への段階的学びを考える」小学校英語教育学会、第17回小学校英語教育学会兵庫大会（全国大会）、神戸市外国語大学、2017年7月30日、単独
- ・西崎有多子「小学校で英語を教える際に押さえておきたい英文法—小学校教員養成課程の限られた条件の下で—」小学校英語教育学会、第16回小学校英語教育学会宮城大会（全国大会）、宮城教育大学青葉山キャンパス、2016年7月24日、単独
- ・西崎有多子「小学校外国語活動と小学校英語教科化への今とこれから」日本メディア英語学会、中部地区第67回研究例会、愛知大学名古屋キャンパス、2016年7月9日、単独
- ・西崎有多子「国語と英語の連携を意識した授業を考える—小学校におけることばの教育の相乗効果をめざして—」中部地区英語教育学会、第46回中部地区英語教育学会三重大会、鈴鹿医療科学大学白子キャンパス、2015年6月26日、単独
- ・西崎有多子「商品のネーミングからことばへの気付きに導く指導—小学校における国語、英語、外国語を連携させて—」小学校英語教育学会、第15回小学校英語教育学会広島大会（全国大会）、広島大学東広島キャンパス、2015年7月26日、単独
- ・西崎有多子「江戸時代以降の日本語における翻訳語からことばを考える—小学校国語・外国語活動（英語）、中国語を関連させて—」第22回九州沖縄支部研究大会、久留米大学福岡サテライトキャンパス、2014年10月26日、単独
- ・西崎有多子「新しいことばの創造と受容を通して日本語と外国語を考える指導—江戸時代から現代に至る異文化流入とその影響を通して—」第13回小学校英語教育学会神奈川大会（全国大会）、関東学院大学金沢八景キャンパス、2014年7月26日、単独
- ・西崎有多子「外来語を使って「外国語活動」と「国語」を連携させる授業を創る—児童の気付きとことばへの考察を促す教材としての外来語—」第21回日本児童英語教育学会九州沖縄支部研究大会、久留米大学福岡サテライトキャンパス、2013年10月27日、単独
- ・西崎有多子「外国語活動と国語科を連携させる教育の可能性—外国語活動と国語に共通することばの教材としての外来語を使って—」第13回小学校英語教育学会沖縄大会（全国大会）、琉球大学、2013年7月14日、単独
- ・西崎有多子「外国語活動における「桃太郎」を使ったオリジナル英語劇化に関する課題と民話としての「桃太郎」」2012年度愛知東邦大学地域創造研究所共同研究「子どもとことば」中間報告会発表、愛知東邦大学、2013年3月28日、単独
- ・西崎有多子「桃太郎」の英語劇化に伴う課題と民話としての「桃太郎」名古屋市国際理解教育同好会、第4回外国語活動勉強会、名古屋市立牧野小学校、2012年10月25日、単独

- ・西崎有多子「“Hi, friends!”における「桃太郎」を使ったオリジナル劇の指導」日本児童英語教育学会、中部支部研究大会、中部学院大学各務原キャンパス、2012年9月23日、単独
- ・木村友保・西崎有多子・佐藤雄大・服部しのぶ「学習者と教員の成長を目指した英語授業の事例研究ー中部支部授業学研究会の事例に基づいてー」大学英語教育学会、第51回国際大会シンポジウム、愛知県立大学、2012年9月1日、共同
- ・西崎有多子「小学校外国語活動におけるオリジナル劇の可能性ー新教材”Hi, friends!”より「桃太郎」を使ってー」小学校英語教育学会、第12回小学校英語教育学会千葉大会（全国大会）、千葉大学、2012年7月15日、単独
- ・西崎有多子「小学校外国語活動の現状と諸問題」日本メディア英語学会、中部地区第58回研究例会、愛知淑徳大学星ヶ丘キャンパス、2011年7月16日、単独

(特許)

- ・なし

(その他)

- ・新實広記・西崎有多子・柿原聖治・伊藤龍仁・中島弘道・伊藤数馬・白井克尚・今津孝次郎『「サービス・ラーニング」ハンドブック 第4版』愛知東邦大学教育学部子ども発達学科、2018年3月、共著
- ・新實広記・西崎有多子・柿原聖治・伊藤龍仁・中島弘道・伊藤数馬・白井克尚・今津孝次郎『「サービス・ラーニング」ハンドブック 第3版』愛知東邦大学教育学部子ども発達学科、2017年3月、共著
- ・新實広記・西崎有多子・柿原聖治・伊藤龍仁・中島弘道・伊藤数馬・白井克尚・今津孝次郎『「サービス・ラーニング」ハンドブック 第2版』愛知東邦大学教育学部子ども発達学科、2016年3月、共著
- ・今津孝次郎・新實広記・西崎有多子・柿原聖治・伊藤龍仁・白井克尚「教員と保育士養成における『サービス・ラーニング』の試み」(実践報告)『東邦学誌』2015年6月、第44巻、第1号、pp. 211-231、共著
- ・新實広記・西崎有多子・柿原聖治・伊藤龍仁・中島弘道・伊藤数馬・白井克尚・今津孝次郎『「サービス・ラーニング」ハンドブック 第1版』愛知東邦大学教育学部子ども発達学科、2015年3月、共著

○科学研究費補助金等への申請状況、交付状況（学内外）

- ・平成24年度：科学研究費補助金（基盤研究C）申請（代表者）ー採択
西崎有多子（研究代表者）基盤研究（C）研究課題番号：24520718 「言語力育成のための小学校国語科と外国語活動を連携させる新しい教育方法の研究」平成24年度～平成27年度、単独

○所属学会

大学英語教育学会、中部地区英語教育学会、小学校英語教育学会、日本児童英語教育学会

○自己評価

概ね達成できたが、多忙のため、出張も含め研究に使える時間が十分確保できなかった。

Ⅲ 大学運営

○目標・計画

(目標)

教育学部執行部メンバー、幼少課程委員会委員長、初等教育コース主任、小学校教育実習責任者、教務委員等での責任を果たし、関連する仕事に積極的に取り組み、大学運営に貢献する。

(計画)

教員養成において、教育実習、教員採用試験など、日程管理が多く、ミスのないよう、かつきめ細かな指導が求められる。できる限り計画的にこなしていきたい。

○学内委員等

自己点検・評価委員会委員、教務委員会委員、幼小教職委員会委員長、保育士養成課程委員会委員、教職課程再課程認定委員会委員

○自己評価

執行部に関する仕事が予想よりも多く、他の委員の仕事に加えて、小学校教員採用試験のための特別講座の運営にも深く関わった。卒業後に教壇に立つ卒業生が増加している中、教員養成における社会的責任を感じているところであり、今後も努力したい。

IV 社会貢献

○目標・計画

(目標)

現場での課題解決のための提案・助言等を行う。県内の状況を把握し、必要とされる現職教育に積極的に関わっていく。

(計画)

依頼を受けて、現職教育、指導助言、出前授業等を積極的に行う。

○学会活動等

小学校英語教育学会長崎大会での発表、大学英語教育学会中部支部授業学研究会、小学校英語自主研修会等月例会への参加、所属学会の関連プログラム、研究開発校を含む小学校における研究発表会・研究授業等への参加をした。

○地域連携・社会貢献等

文部科学省 英語教育改善プラン「平成 30 年度外部専門機関と連携した英語指導力向上事業」における研修会での講演「小学校外国語 ～次期学習指導要領で必要な指導力～」、2018 年 8 月 24 日、犬山市

○自己評価

概ね達成できた。

V その他の特記事項（学外研究、受賞歴、国際学術交流、自己研鑽等）

- ・2018 年度愛知東邦大学教員免許状更新講習「小学校外国語活動と小学校英語の教科化」2018 年 8 月 7 日（1～4 限）を講師として単独で担当。

VI 総括

ゼミを含む担当科目については、引き続き学生自らが学ぶ姿勢を持ち積極的に取り組む授業を目標に常に改善を続け、最新情報を取り入れながら、学生が興味深いと感じる内容を提供するための工夫を重ねた。実習において授業で学んだ指導法を実践して高い評価を得た学生、学会や小学校の研究発

表会に参加して意欲を高めた学生たちが育ちつつあり、主体的に学ぶ学生の成長が見られたことは喜ばしく、今後も発展的に行っていきたい。

研究活動においては、新学習指導要領を踏まえ、小学校外国語活動の中学年への導入と高学年における小学校英語教科化に実践的に対応できる小学校教員養成ならびに教員研修における有効な指導、提言、社会貢献ができるよう一層努力したい。

以 上

所属学部 学科	職位	氏 名
教育学部 子ども発達学科	教授	堀 篤実
最終学歴	学 位	専門分野
金城学院大学人間生活学研究科博士課程 人間生活学専攻修了	博士 (医学、 岐阜大学)、 博士 (学術、 金城学院大学)	臨床心理学

I 教育活動

○目標・計画

(目標)

心理学の基礎知識や心理的支援に関する知識を身につけ、子どもを取り巻く様々な問題に対し、心理学の視点を持って対応できる能力を高め、少子高齢化社会を支えて社会で活躍できる保育者・教育者を養成することを目標とする。

(計画)

発達心理学、教育心理学、発達障害論、認知心理学、精神保健、子どもの保健 I B ではわかりやすい授業を心がけ、各分野の基礎的な知識を習得させる。また、ミニッツ・ペーパーとしての「学習のあゆみ」を用い、毎週、学生に振り返りを促すとともに教員の側からもコメントを記載し、翌週返却する。学生の記述から話題を膨らませ、学生が興味関心を持った内容についての授業展開を目指すとともに、受講者数が多い講義形式の授業においても学生の意見を汲み双方向の授業となるようにする。他の演習科目については学生のコミュニケーション能力やソーシャルスキルを高められるようグループワークを体験させる。また、学生が自ら問題意識をもってテーマを設定し、その解決策を探求することに努めて研究を進め、その成果をまとめてプレゼンテーションできるようにするなど、さまざまなアクティブ・ラーニングを展開する。さらに、自己学習を促すような働きかけを積極的に行うことに加え、自己学習のヒントやポイントを授業内で扱い、学生の授業に対する意欲を啓発していく。

○担当科目（前期・後期）

（前期）発達心理学、発達障害論、認知心理学、サービス・ラーニング実習 I、基礎演習 I、専門演習 I、専門演習 III

（後期）教育心理学、子どもの保健 I B、精神保健、教育・保育相談、サービス・ラーニング実習 II、基礎演習 II、専門演習 II、専門演習 IV、卒業研究

○教育方法の実践

学生の理解度を高めるため、授業にビデオ、DVD などの教材の導入、グループディスカッションを積極的に取り入れた。また、講義科目においてはパワーポイントを使用し教育的効果を高める授業を展開することによって、学生の学習意欲を刺激し興味を深め知識を習得させた。基礎演習 I 及び II では大学生活の基礎の修得や基礎学力の修得の支援を行なった。専門演習 I 及び II ではカウンセリングの基礎知識や技術についてグループワークを中心に学び学生のカウンセリン

グマインドを高めるとともにピアヘルパー（日本教育カウンセラー協会認定資格）の取得をサポートした。また、専門演習Ⅲ及びⅣでは個々の学生の研究テーマに沿った研究及びその研究のプレゼンテーションの指導をした。

○作成した教科書・教材

授業ごとにオリジナルの教材を作成した。また、発達心理学、発達障害論、教育心理学、認知心理学、精神保健においては振り返りシートを作成し、専門演習Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳではワークシート、振り返りシートを作成した。

○自己評価

講義科目においては学生のニーズを感じとるため、「学習のあゆみ」という用紙に毎回、授業の感想を書いてもらい、それに対して教員がコメントを書き加え次回の授業で返却した。学生、教員の双方向でのやり取りを心がけ、全体で共有したほうが良い意見や質問をやり取りしたときは授業内で取り扱い、授業の内容を膨らませ他の学生とも共有した。演習科目においてはグループワークを積極的に取り入れ、より具体的、体験的授業を試みた。また、専門演習Ⅰ、Ⅱの受講生には積極的にピアヘルパー筆記試験の受験を促し、合格へと導いた。これらの結果、当初の目標・計画については、概ね目標を達成することができた。

しかしながら、学生の授業評価において今年度の「教育心理学」（2クラス開講）の1クラスにおいて例年より評定が低かった。この原因を究明するとともに今後の課題として学生が意欲的に授業に参加し、学生にとって学びの多い授業となるよう、さらなる授業研究をして改善していきたい。

II 研究活動

○研究課題

1. コミュニケーション能力及びカウンセリングの基礎知識を現場で生かすことのできる保育者、教育者の養成
2. 発達障害の傾向がある乳幼児に対する早期かかわりと子どもの自立を促す支援
3. 発達障害傾向の学生への就労支援のためのプログラム開発

○目標・計画

（目標）

《研究課題 1》

- ・学生のコミュニケーション能力を高める要因や背景を探ることにより、よりよい人間関係を築き他者から信頼される人格を形成できるようにする。
- ・地域諸機関での経験学習により、学生の成長・発達を促す。
- ・カウンセリングの基礎知識や技術を習得することにより、保育や教育の様々な場面で援助・支援することができるようにする。

《研究課題 2》

- ・発達障害の傾向がある乳幼児に対する早期のかかわりおよび親支援の効果について検証する。
- ・発達障害児の自立に向けた支援プログラムを開発する。

《研究課題 3》

- ・「発達障害」の診断に関わらず、発達障がい傾向を持つ学生の就労支援に向けたプログラムを開発し実践する。

(計画)

《研究課題 1》

- ・コミュニケーション能力の向上に関与する要因の検討をするとともに、保護者の様々なニーズや相談に対応できる保育者および教育者になるために、学生の中に習得すべきものについて検討をする。コミュニケーション能力を高めるための要素の一つとして、学生のソーシャルスキルに注目し、学生のソーシャルスキルについて検討する。
- ・地域諸機関での奉仕活動であるサービス・ラーニング実習を通じた経験による学びに関して学生の成長・発達に及ぼす影響を検討する。
- ・ピアヘルピングに関する資格取得を希望する学生に、カウンセリングの基礎知識やカウンセリングマインドについて勉強会を開催し、資格取得を支援しながら、学生のカウンセリングマインドを高めるようにする。それらをもとに、カウンセリングの基礎について学んだ学生には学習の前後で調査を実施し、学生のソーシャルスキルの修得やその傾向の分析をする。これらの結果をまとめ、学生が教育相談に活かすことができるよう、教育カウンセリング学会などで発表をするとともに論文にまとめ学術誌に発表する。

《研究課題 2》

アスペルガー症候群や ADHD など自閉症スペクトラム障害の子どもたちの自立に向けたプログラムの作成を試みてきた。また、これらの子どもたちと関わる大学生の支援やその効果について検討してきた。

今後さらに発達障害児に対する調査研究を継続するとともに、より効果的な支援プログラムへと発展させる。特に、就学前の「発達障害」の子どもたちや診断を受けていない子どもたちの可能性を広げるための支援者の早期のかかわりやグループ活動の効果について検討していく。また、母親が子どもの障害を受容していく過程や支援者とのかかわりが母親の心理的变化・発達に及ぼす影響について調査をする。これらの結果を基に発達障害の傾向を持つ子どもたちを支援するプログラム開発と、その子らの親を対象としたペアレントトレーニングという視点からの発達障害児の支援について考察する。そこで明らかになってきたことを心理関係の学会や学会誌に発表する。

《研究課題 3》

「発達障害」の診断を受けてはいないが、一般学生の中には発達障がい傾向をもつ学生がいる。このような学生は、対人関係や場の理解をする能力、将来を見通す能力に共通した弱さをもっている。そのため、このような学生をピックアップするため、これまでの研究で発表してきた見通し力尺度および就業意欲に関する尺度を実施する。そこで対象となった学生に、個別プログラムを作成する。このような学生のニーズに合わせて、話し合いのできる雇用先でのアルバイトを試みたり、そこでの失敗体験を具体的に聞き取り、社会スキルの解説やロールプレイングによる疑似場面を再現したりすることにより、対処スキルの向上を目指す。また、時間感覚の鈍い学生に対し、中間地点の目標作成や携帯電話のアラームやメモスケジュール等を活用し、時間の流れをチェックしながら管理させていく方法を試みる。大学等の教育機関のみならずハローワーク等でも活用が期待される尺度とプログラムを開発していきたいと考えている。開発した尺度の運用や応用に関して障害のある学生の心身の発達や学習の課程としてまとめ、心理関係の学会や学会誌に発表する。

○2011年4月から2019年3月の研究業績（特許等を含む）

(著書)

- ・肥田幸子、堀篤実、鈴木美樹江「自閉症スペクトラム障害傾向を有する学生のための「見通し力」尺度作成の試み」、日本学生相談学会、第 37 巻第 1 号、2016、27-36
- ・宗貞秀紀、堀篤実、吉村譲、肥田幸子、宮本佳範、手嶋慎介、松村幸四郎、研究所叢書 20 号『人が人らしく生きるために 人権について考える』唯学書房、2013、担当部分：第 2 章子どもの発達と貧困、16-34

(学術論文)

- ・堀篤実「気になる子どもたちへの早期発達の援助の試み」、東邦学誌、第 44 巻第 1 号、2015、165-174
- ・堀篤実「発達障害をもつ子の自立にむけた生活スキル習得の試み—発達心理学の視点から—」、東邦学誌、第 41 巻第 2 号、2012、89-104
- ・堀篤実「ピアヘルピングに関する学習とソーシャルスキルの変化についての検討」、東邦学誌、第 41 巻第 1 号、2012、127-136

(学会発表)

- ・堀篤実、肥田幸子、鈴木美樹枝「ASD 傾向学生のための就業力尺度作成の試み（2）—尺度の再検査信頼性と妥当性の検証—」日本教育心理学会第 58 回大会 2016 年 10 月 9 日 日本教育心理学会発表論文集、478 頁
- ・肥田幸子、堀篤実、鈴木美樹枝「ASD 傾向学生のための就業力尺度作成の試み（1）—項目の作成と信頼性の検討—」日本教育心理学会第 58 回大会 2016 年 10 月 9 日 日本教育心理学会発表論文集、477 頁
- ・鈴木美樹枝、肥田幸子、堀篤実「ASD 傾向学生のための就業力尺度作成の試み（3）—見通し力が就業力に及ぼす影響—」日本教育心理学会第 58 回大会 2016 年 10 月 9 日 日本教育心理学会発表論文集、479 頁
- ・堀篤実、肥田幸子、鈴木美樹枝「見通し力尺度作成の試み（2）—尺度の信頼性と妥当性の検証—」日本教育心理学会第 57 回大会 2015 年 8 月 27 日 日本教育心理学会発表論文集、572 頁
- ・肥田幸子、堀篤実、鈴木美樹枝「見通し力尺度作成の試み（1）—大学生を対象として—」日本教育心理学会第 57 回大会 2015 年 8 月 27 日 日本教育心理学会発表論文集、571 頁
- ・鈴木美樹枝、肥田幸子、堀篤実「見通し力尺度作成の試み（3）—AQ 下位尺度が見通し力に及ぼす影響—」日本教育心理学会第 57 回大会 2015 年 8 月 27 日 日本教育心理学会発表論文集、573 頁

(その他)

- ・ガイダンスカウンセラー（スクールカウンセリング推進協議会認定）の資格を取得した（2011 年 7 月）

○科学研究費補助金等への申請状況、交付状況（学内外）

○所属学会

日本心理臨床学会、日本学校保健学会、日本家族研究・家族療法学会、日本発達心理学会、日本精神分析学会、日本教育カウンセリング学会、日本教育心理学会、日本学生相談学会、日本小児保健協会、日本健康レクリエーション学会、日本保育学会、日本キャリア教育学会

○自己評価

保護者のニーズに対応できる保育者・教育者を養成するため、学生の必要とされるソーシャルスキルについて継続的に調査している。また、専門演習でカウンセリングマインドについて学んだ学生には、その習熟度を測るため、資格取得と習熟度の関係について調べた。継続的に研究を重ね、コミュニケーション能力及びカウンセリングマインドをもつ保育者・教育者の養成に取り組んできた。しかしながらこれらの結果については今年度、関連学会等で発表するには至らなかった。次年度以降も検討を重ね、関連学会で発表していきたい。

発達障害をもつ子どもの継続的支援につながるプログラムの開発として、居場所づくりについて検討した。また、発達障害傾向の大学生の就労支援に向けたプログラム開発においては、支援に向けた就業力尺度を作成し、キャリア教育研究（日本キャリア教育学会）に投稿中である。これらの結果、概ね目標を達成することができた。

Ⅲ 大学運営

○目標・計画

（目標）

学部・所属委員会や学生相談に関与し、大学運営に貢献する。

（計画）

学部長補佐、教育学部執行部の一員として、学部長のもとに教育学部の運営や学生の教育に積極的に関わり、自ら考え、互いに学び合える環境づくりに努める。委員会関連では、積極的に委員会活動を実施していく。運営委員会では、委員の一人として、自覚と責任を持ち、大学運営に関わっていく。また、保育士養成課程委員会の委員長として、学生の一人ひとりが本人の個性を活かし社会から信頼されて活躍できるよう関わり、表現力豊かな保育者の養成に努める。保健・学生相談委員会の委員長として、教職員における適切な守秘義務と情報共有について検討していく。また、教職員と学生および保証人との信頼関係づくりに向けた研修などを検討していきたい。さらに学生相談では、学生および保証人のメンタルヘルスの向上に積極的に関わっていく。学生相談でのグループワークやロールプレイングを取り入れた活動を計画・実行し大学生やその保護者の充実した学生生活に貢献する。

○学内委員等

衛生委員会委員、運営委員会委員、学生・保健相談委員会委員長、全学教職課程委員会委員、幼小教職委員会委員、保育士養成課程委員会委員長、教職課程再課程認定委員会委員

○自己評価

保健・学生相談委員会委員長としては重要課題を（1）学生状況の把握（2）合理的配慮支援の充実（3）組織的な支援体制の確立とし、課題を整理し取り組みを行った。学生の心身の健康の保持・向上に向け健康診断や保健調査票の運用について取り組むことができた。集団守秘義務のもと必要に応じて学生の情報を共有することにより学部、演習担当教員、職員との連携もできつつあり、学生のメンタルサポートを充実させることができた。また、定期試験における「合理的配慮」の実施体制を作り、前期末および後期末試験において実施した。さらに試験のみならず、授業等における合理的配慮に関する支援までの流れの明確化と「障がい学生支援委員会」の新設を決めた。この他、学生相談室の活動においては演習担当教員に対し、担当学生および保証人への対応について相談に乗りメンタルヘルスに努めた。以上のことから概ね目標を達成することができた。

また、保育士養成課程委員会委員長としては重点課題として例年同様 (1) 保育士資格取得のための実習 (保育実習ⅠA・ⅠB・Ⅱ・Ⅲ) を円滑に行う (2) 実習について委員への周知と理解を図り、報告を行う (3) 実習先の保育所・施設等と連携し、愛知県保育実習連絡協議会での実習先の確保と縁故での実習先の確保に努めた。また、今年度は児童福祉法施行規則第6条の2第1項第3号の指定保育士養成施設の修業教科目及び単位数並びに履修方法の一部改正、2019年4月1日の適用に合わせて委員の先生方の協力のもと2019年度からの新カリキュラムを作成し申請を行った。

IV 社会貢献

○目標・計画

(目標)

地域社会の人々のメンタルヘルスの向上や発達障害の研究が広く社会に役立つように臨床や啓発活動に努める。

(計画)

臨床に加えて講演などの社会啓発活動を積極的に行う。発達障児・者のグループ活動にディレクターとしてかかわり障児・者を支援するとともに支援者の養成にもかかわっていく。

○学会活動等

日本健康レクリエーション学会理事 2016年11月～現在

○地域連携・社会貢献等

NPO 法人アスペ・エルデの会 ディレクター 2003年4～現在

○自己評価

NPO 法人アスペ・エルデの会ディレクターとして、発達障がいの子供たちとかかわり自立支援に努めるとともに、学生ボランティアの指導をした。また、日本健康レクリエーション学会の理事として学会の発展に貢献することができ、概ね目標を達成することができた。

V その他の特記事項 (学外研究、受賞歴、国際学術交流、自己研鑽等)

VI 総括

教員としての研究テーマは教育・保育職における子どもおよび保護者の心理的支援である。これは次世代育成支援の一つであり、子どもたちの未来へつながる重要な研究であると考えている。また、発達障児・者にかかわる社会的活動も近年、地域・社会から要請され期待されるものである。これらの分野に少なからず貢献する研究・教育活動を継続することができた。

保育士養成課程委員会委員長として、保育士資格を希望する学生が全員取得できるように施行規則変更にとまなう新しいカリキュラムの申請や実習体制の充実を行った。保健・学生相談委員会委員長としては合理的配慮の実施を行うことができた。

今後はこれらの研究および活動にさらに積極的にかかわり、大学の教員として邁進していきたい。

以 上

所属学部 学科	職位	氏 名
教育学部 子ども発達学科	教授	水野 伸子
最終学歴	学 位	専門分野
放送大学大学院修了、 京都市立芸術大学大学院博士（後期）課程在籍	修士	音楽教育学・音楽心理学

I 教育活動

○目標・計画

（目標）

授業の目的と理解の程を自分で把握できる自作のワークシートを毎時に配布し、学生一人ひとりが目的意識を持って授業に臨み、授業の内容及び達成度のわかりやすい授業を目指す。

また、そのワークシートは毎授業後に集め、一人ひとりの学修状況を確認し、必要な場合は、励ましたり助言を書き入れて渡し、授業意欲の維持を目指す。

（計画）

全体的には、基礎から応用へと段階を経て内容を計画する。演習科目では毎時、机上の学習と実践学習（演奏・音楽作り等）を両方組み込み、集中できる時間を効果的に用いる。また実践では、仲間の前で自分の表現を臆することなく表せ、皆と協力して音楽作りや演奏表現できる能力を育成する。

○担当科目（前期・後期）

（前期）音楽Ⅰ、保育内容（音楽表現）、総合演習Ⅰ、専門演習Ⅰ

（後期）音楽表現技術、音楽科教育法、音楽Ⅱ、総合演習Ⅱ、専門演習Ⅱ

○教育方法の実践

アクティブラーニング、グループディスカッション、グループワーク等を取り入れた。

○作成した教科書・教材

保育内容（音楽表現）・音楽科教育法において、毎授業ごとに学生のワークシートを作成した。

○自己評価

本学で勤務する初年度であり、学生の学修実態に即した授業内容の構成に向けて試行錯誤の連続であったが、概ね、目標を達成することができた。

II 研究活動

○研究課題

- ・音楽的発達と音楽的文化化と観点から幼児期のリズム感の発達を明らかにする。
- ・人の音楽同期の現象を科学的に究明する。

○目標・計画

（目標）

- ・昨年、リズム実験を実施したD幼稚園での実験結果を分析し児童や成人の結果と比較検討する。
- ・同期のシステムを明らかにするためのピアノ演奏データ記録装置の開発を行う。

（計画）

- ・科研費助成による研究が最終年となるため、結果をまとめ9月末までにまとめ学会で発表する。

- ・研究チームと定期的に研究会を開き、装置の作動実験を実施しながら開発を進める。

○2011年4月から2019年3月の研究業績（特許等を含む）

（著書）

- ・横井志保, 水野伸子, 他『表現（新・保育実践を支える）』福村出版、2018年、pp. 81-87（学術論文）
- ・石井玲子, 水野伸子 他『実践しながら学ぶ子どもの音楽表現』保育出版社、2013年、pp. 96-97, 101-104

（学術論文）

- ・水野伸子・津崎 実「幼児期における拍知覚の発達：同期度による検討日本音楽知覚認知学会平成30年度秋季研究発表会資料、pp. 78-81、2018年度
- ・水野伸子「生演奏とDVD再生演奏による音楽聴取時における手拍子同期の解析比較」（査読付）音楽教育学第47巻第2号（日本音楽教育学会）、pp. 13-24、2017年度
- ・水野伸子「9歳の壁」論と学童期における音楽的発達との関連—音楽聴取時の手拍子解析から—（査読付）同朋大学論叢第101号、pp. 21-40、2016年度
- ・水野伸子「生演奏とDVD再生演奏による音楽の内容の知覚感受比較—鑑賞後に実施したアンケートから—（査読付）同朋福祉第22号、pp. 93-107、2015年度
- ・水野伸子・安藤久夫・吉田昌春「児童の音楽的拍感の獲得—授業行動分析装置改良に伴う手拍子情報直接取得により—」（査読付）岐阜女子大学紀要第44号、pp. 53-61、2014年度
- ・水野伸子「児童の西洋的リズム感覚における発達の検討—8ビート、シンクペーションに着目して—」岐阜女子大学初等教育学研究報告vol. 3、pp. 25-30、2013年度
- ・水野伸子「教師の捉える現代の子どものリズム感とその指導」（査読付）岐阜女子大学紀要第43号、pp. 53-61、2013年度
- ・水野伸子「音楽鑑賞時の手拍子反応にみる幼児の音楽理解」日本教育工学会研究報告集 JSET12-3、pp. 153-160、2012年度
- ・水野伸子「コード伴奏を自ら弾き歌いする能力の育成—ピアノ伴奏法初級テキストの改善—」岐阜女子大学初等教育学研究報告vol. 2、pp. 29-38、2012年度
- ・水野伸子「音楽聴取反応分析への転用における授業行動分析装置の有効性の検討及び改良について」（査読付）岐阜女子大学紀要第42号、pp. 21-28、2012年度
- ・水野伸子「調性感・ハーモニー感の獲得による幼児の音楽理解」Open Forum 放送大学大学院教育研究成果報告書、pp. 48-53、2012年度
- ・水野伸子「音楽文化の中で培われる日本人の調性感・ハーモニー感」初等教育学研究報告等vol. 1、pp. 41-52、2011年度
- ・水野伸子「幼児期の音楽理解—鑑賞時の身体反応に注目して—」学校音楽教育研究（日本学校音楽教育実践学会）「第16巻」（pp. 173-174）、2011年度
- ・水野伸子「4歳児における音楽理解—リズム的体制化の過程—」（査読付）岐阜女子大学紀要第41号、pp. 61-67、2011年度

（学会発表）

- ・水野伸子「「幼児期における拍の知覚発達—音楽聴取時の手拍子同期度による検討—」日本音楽教育学会第48回大会（岡山大学）、2018年度
- ・水野伸子・津崎実「幼児期における拍知覚の発達：同期度による検討」日本音楽知覚認知学会平

成 30 年度秋季研究発表会（龍谷大学）

- ・水野伸子・植田恵理子・寄ゆかり・本多峰和「アクティブ・ラーニングの導入には何が必要かー音楽表現活動の可能性ー」日本保育学会第 69 回大会（東京学芸大学）、2016 年度
 - ・Nobuko Mizuno, Musical Enculturation through the Acquisition of Key and Harmonic Knowledge in Japanese Preschool Children The 17 PECERA Annual Conference 2016 (Pacific Early Childhood Education Research Association) (Chulalongkorn University, Ba
 - ・水野伸子・安藤久夫・吉田昌春・福本徹「タッピングと手拍子による音楽同期反応の解析比較」日本教育工学会第 32 回全国大会（大阪大学）、2016 年度
 - ・水野伸子「幼児の調性感・ハーモニー感獲得にみる音楽的文化」日本音楽教育学会第 47 回大会（横浜国立大学）、2016 年度
 - ・Nobuko Mizuno, The Study on the Acquisition of Musical Perception of Beat among Japanese Children PECERA2015 16th Annual Conference (Pacific Early Childhood Education Research Association) (Macquarie University, Sydney, Australia)
 - ・水野伸子, 安藤久夫, 吉田昌春, 福本徹「生演奏と DVD 再生演奏時における手拍子の解析」日本教育工学会第 31 回全国大会（電気通信大学）、2015 年度
 - ・水野伸子「異なる演奏形態における音楽の内容の知覚感受比較ー生演奏と DVD 再生演奏に注目してー」日本音楽教育学会第 45 回大会（シーガイアコンベンションセンター）、2015 年度
 - ・水野伸子「生演奏と記録媒体における音楽の知覚感受比較」同朋学会 2015 年度学術大会（同朋大学）
 - ・水野伸子・安藤久夫・福本徹「同期反応による児童の音楽的拍感の分析」日本教育工学会第 30 回全国大会（岐阜大学）、2014 年度
 - ・水野伸子「児童期における拍感の獲得過程ー音楽鑑賞時に発生する手拍子の解析からー」日本音楽教育学会（聖心女子大学）、2014 年度
 - ・水野伸子「手拍子分析にみる音楽的発達の質的転換「9 歳の壁」」日本音楽教育学会東海地区例会（愛知教育大学）、2014 年度
 - ・水野伸子・安藤久夫・福本徹「幼児の音楽的拍感覚にみるピアジェの直観的思考」日本教育工学会第 29 回全国大会（秋田大学）、2013 年度
 - ・水野伸子「幼児期における音楽理解の発達ーリズム的体制化に着目してー」日本保育学会第 65 回大会（東京家政大学）、2012 年度
 - ・水野伸子「音楽鑑賞時の手拍子反応にみる幼児の音楽理解」日本教育工学会研究会（京都大学）、2012 年度
 - ・水野伸子・安藤久夫「行動分析装置を用いた幼児の音楽理解の発達の検討」日本教育工学会第 28 回全国大会（長崎大学）、2012 年度
 - ・水野伸子「4 歳児における音楽理解ーリズム的体制化の過程ー」日本保育学会第 64 回大会（玉川大学）、2011 年度
 - ・水野伸子「幼児期の音楽理解ー鑑賞時の身体反応に着目してー」日本学校音楽教育実践学会第 16 回大会（花園大学）、2011 年度
- 科学研究費補助金等への申請状況、交付状況（学内外）
- ・2013-2015 年度科学研究費補助金 基盤研究 C「音楽的発達と音楽的文化化の観点から検討した小学校のリズム指導カリキュラムの開発」（課題番号:25381219, 研究代表：水野伸子）

- ・2016-2018 年度科学研究費補助金 基盤研究 C「音楽的発達と音楽的文化化の観点から検討した
幼小連携リズム指導カリキュラムの開発」(課題番号:16K04176, 研究代表 : 水野伸子)

○所属学会

日本音楽知覚認知学会、日本音楽教育学会、日本学校音楽教育実践学会、日本教育工学会、保育学会

○自己評価

科学研究費補助金の助成により研究資金を得られたことで、音楽リズム実験を3歳児から小学生6年生まで実施できたこと、およびその実験遂行にあたり工学系研究者からの支援を得られたことが、研究を大きく発展させることができた。目標は概ね達成された。

III 大学運営

○目標・計画

(目標)

研究活動委員会・入試委員会のメンバーとして、活動の内容を理解し精励する

(計画)

研究活動委員会の仕事としては、5月には研究論文の校閲、6月以降には投稿規程等の見直しを行う予定である。入試委員会の仕事としては年間通しての入試業務を行う。特に、今年度より始める「自己ピアール入試」において、意欲のある学生の入学増加に向け具体的な内容を検討する。

○学内委員等

研究活動委員会委員、入試委員会委員、幼小教職委員会委員、保育士養成課程委員会委員

○自己評価

研究活動委員会委員として、大学研究紀要が来年度よりリポジトリ化されるため、その整備、および紀要原稿の校閲を行い、本学の研究活動が向上するよう努力した。入試委員として、AO入試、推薦入試等の面接を行い、大学で勉学に励もうとする意識のある学生の入学に力を注いだ。目標は概ね達成された。

IV 社会貢献

○目標・計画

(目標)

幼児の発達に応じた音楽の楽しみ方を、保育園や幼稚園等で行う出前コンサート「音で遊ぼう～わいわいコンサート」や、保護者向けの講話「音楽の窓から覗いた幼児の発達」等で、広く知ってもらおう。

(計画)

従来より実践してきており、園側からの依頼に応じて行う。

○学会活動等

特になし

○地域連携・社会貢献等

- ・水野伸子「音で遊ぼう～わいわいコンサート」羽島市発達支援センター「発達教室もも」、一宮市立富士保育園にて公演

- ・水野伸子「一宮市教養講座：みんなで歌おう」一宮市高年福祉課主催
- ・水野伸子「子どもはリズムでぐんぐん育つ」(講演) 同朋幼稚園

○自己評価

回数は多くはないが、保護者や保育者向けの講演が増え、自身の研究してきた内容を社会へ還元できる機会を得た。目標は概ね達成された。

V その他の特記事項 (学外研究、受賞歴、国際学術交流、自己研鑽等)

京都市立芸術大学大学院 音楽研究科 博士(後期)課程 の1回生として、音楽心理学の研究を行なった。

VI 総括

2018年度は、愛知東邦大学赴任して初年度であり、授業では学生の実態を理解しそれに即した指導をしていくことを最大の目標に掲げ、努力した。授業評価アンケートから推察する限りでは、学生から一定の評価を得た。学生一人ひとりが授業に対する意欲を持ち、授業の中で成長感・達成感を得られ、教員から(友達からも含め)認められている満足感を感じられる授業を目指し、継続して努力する。

研究活動では、科研費の助成による研究が最終年度を迎え研究のまとめの段階に入った。幼児の音楽的発達研究において一定の成果を出すことができた。

大学運営においては、研究活動委員会と入試委員会という大学の研究分野を支援する機関、学生募集の要となる機関である。真摯に、誠実に仕事に向き合うことを心がけてきた。委員長をはじめとする委員の教職員に教示教えてもらいながら無事に勤めることができた。

社会貢献では、自身の研究成果を社会へ還元していくために依頼された内容に応えるよう努力した。

以 上

所属学部 学科	職位	氏 名
教育学部 子ども発達学科	教授	矢内 淑子
最終学歴	学 位	専門分野
国立音楽大学院音楽研究科声楽専攻修士課程修了	修士 (芸術学)	声楽、音楽教育

I 教育活動

○目標・計画

(目標)

専門教育として、子どもに音楽を指導する際の必要な音楽基礎能力（音楽的感性、表現力、技能）や、子どもの音楽的発達や表現活動を観る目を育成するとともに、自ら主体的な学びができるようにする。

(計画)

①「音楽Ⅰ」「音楽Ⅱ」では、保育・教育の基礎技能としてのピアノ演奏技術の習得するために、学生の進度に合わせた少人数による個別指導と音楽基礎理論（楽典）の授業を併用して行うことで、音楽理解を深め、学生の意欲・向上に繋げる。②「音楽表現技術」では、子どもの発達を促す保育の内容を理解し、子どもの遊びを豊かに展開するために必要な知識や技能として、子どもの音楽表現活動に適した教材選択力や、子どもの歌や弾き歌いを中心に学ぶ。③「音楽Ⅲ」は、これまで音楽関係授業で学んだ保育内容理解を深めると同時に、保育者として保育現場で子どもの音楽的表現活動を支えるための音楽表現能力や感性を高める授業内容、実習や就職を意識した教材研究も取り入れる。④「総合表現技術」は、表現科目「身体表現」「音楽表現」、「造形表現」担当の教員で行う。これまで個々の表現科目で学んだ知識・技術を統合して、表現活動に係る教材の活用と作成を通して、保育環境構成や遊びの展開のための実践をグループ発表形式で行う。⑤「総合演習Ⅰ・Ⅱ」「専門演習Ⅰ・Ⅱ」では、学生が興味・関心持って臨めるように、個々の研究課題を持ちながらグループでも音楽教材研究を行う。さらに、児童を対象にした行事を計画・実施して、実践力を付ける。⑥「専門演習Ⅲ・Ⅳ」は、個々に関心のあるテーマについて調査・研究をして、その成果を論文や制作として発表する。

○担当科目（前期・後期）

（前期）音楽Ⅰ、音楽Ⅲ、総合演習Ⅰ、専門演習Ⅰ、専門演習Ⅲ

（後期）音楽表現技術、総合表現技術、音楽Ⅱ、総合演習Ⅱ、専門演習Ⅱ、専門演習Ⅳ、卒業研究

○教育方法の実践

①音楽Ⅰ・音楽Ⅱの授業では、保育士・教員を目指す学生としての目的と概要、到達目標を踏まえて、学ぶべきピアノ演奏曲目、楽典内容を提示し、ピアノ演奏と楽典で学ぶべき内容を関連づけながら分かりやすく説明することを徹底して行い、今まで以上に自分の力でピアノ演奏技術を高める道筋を示すようにした。さらに、曲の理解やイメージを表現に繋げるために、ラー、アーでの唱法やリズムを動き通して体感できるような方法で、音楽理解に繋がれた。音楽Ⅱでは無理のない指のトレーニングとして、大人のハノンから抜粋して使用したことも腕の脱力と音の変化に気付く一助となった。前期・後期各2回、クラス全員で互いの演奏を聴き合い、自他の課題を記入することで、表現の本質の理解に繋げることができた。②音楽Ⅲでは、保育者の資質として必

要な演奏技術、音楽表現能力、音楽的感性を総合的に高めることで、保育現場における子どもの感性に良い影響を与えることができる保育者を育成することにある。1・2年生で習得したピアノの音楽表現能力のみならず、保育者として子どもの音楽表現を支えるための音楽教材研究（手遊び・わらべうた・絵描き歌・日本の伝統的な遊び他）、楽器演奏、指揮、リトミック教育の理論や実践を学び、グループで模擬保育を行い、振り返りを行うことができた。③総合演習Ⅰ・Ⅱでは、乳幼児の音楽表現理解の上に立って、学生の興味関心のある教材研究（伝承あそび、楽器演奏、ピアノ演奏、手遊び、ペープサート、歌唱）を行い、地域の子どもたちを招いて行う大学祭のキッズ広場や名東児童館のクリスマス会を企画・実施し、最後の演習授業でポスター発表を行うことができた。さらに、地域と連携した授業・活動報告会で、クリスマス会の企画・実施計画、作成物の展示、ポスター発表をすることで、学びを深めることができた。④音楽表現技術では、幼児教育コース（必修）・初等教育コース（選択）の学生で幼稚園実習を履修する学生は全員履修するように指導した。1年生で培った音楽表現技術を確かなものにするだけでなく、ピアノを使用した子どもの歌の弾き歌い・歌唱を中心に学び、レパートリーを増やすように指導した。弾き歌いが苦手な学生には基本コード進行C・F・G・G7を提示し、簡単な歌でも簡易伴奏で弾けるように示すことで、達成感ややる気を促した。中間・最後の発表では、互いの弾き歌い・歌を聞くことで、互いの課題を共有し、音楽能力の育成に繋げる。⑤総合表現技術では、身体表現、音楽表現、造形表現で学んだ知識と技術を統合して、表現活動にかかる教材の活用と作成を通して、保育環境の構成や、遊びの展開のための実践を行う。今年度は、現場の発表会等で使用できる脚本を書き方（テーマ、キャラクターの設定、ストーリー構成、箱書）を提示し、グループでイメージを共有しながら進めるようにして、最終授業で近隣の幼稚園園児を招いて、グループごとに発表したことで、より総合表現の理解を深めることができた。⑥専門演習Ⅰ・専門演習Ⅱでは、自らが興味・関心のある事柄について、資料・文献を収集・講読・発表することで問題意識を共有して醸成することで、自らのテーマを見つけることができた。また、名東児童館において2年生と協働してクリスマス会に参加し、保育実践力を高めた。⑦専門演習Ⅲ・専門演習Ⅳでは、研究計画に基づいて取り組み、調査・文献・情報を整理し、数名ずつ学びの過程と成果をまとめ発表することができた。特に専門演習Ⅳでは、専門演習Ⅲに続く演習として、個別指導を中心にを行い、論文指導に努めた。

○作成した教科書・教材

なし

○自己評価

①音楽Ⅰ・音楽Ⅱでは、昨年に引き続きシラバスの授業概要で学ぶべきバイエルの曲番と内容を具体的に提示することで、学生にとっては目標を持って臨めるようになり、バイエルの進度を早めることができた。一方、ピアノ初心者や苦手意識を持つ学生にとっては、教員も学生の素質・進捗状況を考慮しながら選曲するものの、バイエル前半で苦慮する学生もいた。楽典については、昨年度の反省を踏まえ、今年度は音楽Ⅰのみで楽典の基礎の部分を中心に行ったことで、楽曲理解に繋げることができた。次年度の音楽基礎は楽典をクラス授業にして、リズム練習の実践や子どもの歌を教材にすることで、個々の音楽技術能力を高めるべく検討していく。②音楽Ⅱは、再履修者クラスを担当した。個々の進度の合わせて無理のない指のトレーニングとして、大人のハノンから抜粋して使用して腕の脱力と音の変化に気付くことで、毎日少しずつ自己練習ができるようになり、よい成果へと繋がった。③音楽Ⅲでは、幼稚園実習があるため弾き歌いの課題をす

る時間を多くとることになり、音楽教材研究の時間を縮小することになった。また、リトミック教育については保育実践に繋がる内容を検討していきたい。③総合演習Ⅰ・Ⅱでは、学生自身で担当を決めて計画した行事を通して多くの経験知を得たと考えるが、グループ活動の意義と実践、方法の提示、綿密な授業計画不足は否めない。④音楽表現技術では、今年度は初等教育コースで幼稚園実習を履修する学生にも履修指導したことは、評価したい。ピアノに苦手意識を持っている学生にはコード進行C・F・G・G7コードを徹底して指導し、簡単な歌でも簡易伴奏で弾けるようにした。さらに今後、候補曲の選曲、伴奏付け形態・採点方法を3段階評価にするなど検討して、学生にとって取り組みやすく、やる気に繋げるようにしていきたい。⑤総合表現技術では、脚本の資料を提示、近隣の幼稚園園児を招いて発表したことで、一部の学生を除き、モチベーションを維持することができ、学生自身もグループ運営の難しさ・楽しさ、身体表現・音楽表現・造形表現で学んだことをどこで生かすことができているか少しずつ理解しながら行うことができた。⑥専門演習Ⅰ・専門演習Ⅱでは、同じ文献を購読し、自らが興味・関心のあるテーマについて示すことはできたが、資料・文献を収集して検討し、テーマを再考するところまでには至らなかった。名東児童館において2年生と協働してクリスマス会に参加して、音楽教材に関わる実践力を高めることができた。4年生は教育実習、就職活動で忙しい時期でもある。今年度の反省を踏まえて、3年次において論文作法についての基本を段階的に学びながら、テーマの沿った文献を集めて、まとめるように指導していきたい。⑦専門演習Ⅲ・専門演習Ⅳでは、研究計画に基づいて取り組み、調査・文献・情報を整理し、数名ずつ学びの過程・成果をまとめ発表することができたが、個別指導に移行した段階で、前半の学びが上手く移行できなかった。これまで3年次では行事参加も行ってきたが、3年次から段階的に卒業論文を仕上げていく過程を大事にしていきたい。

Ⅱ 研究活動

○研究課題

1. 保育士・教員養成課程の表現科目に関する研究。
2. 保育士・教員養成課程における音楽授業研究
3. 保育士・教員養成課程における歌唱研究
4. 演奏・指揮活動

○目標・計画

(目標)

1. 継続研究として、「保育士・教員養成課程の表現科目における共感的要素を使った教授法Ⅳ」と題して行う。ヴィゴツキーの最近領域を応用して、音楽表現、身体表現、音楽表現の3教科を受講して、学生が各教科の何を身に着けたか調査し、3教科の共感的要素を見つける。保育士・教員養成校の学生が、その表現科目を利用して表現力をのばすことのできる教材・環境は何かについてまとめる。
2. 「保育士・教員養成校における楽典指導～「音楽Ⅰ」「音楽Ⅱ」のピアノ表現を深めるために～」の継続研究として行う。
3. 保育士・教員養成課程における子どもの歌について検討する。
4. オペラ、演奏活動

(計画)

1. 音楽表現・造形表現・身体表現の担当者と共に、学生がそれぞれの授業を受講して何を身につ

けたかアンケート調査結果を集計し、ヴィゴツキーの最近領域を応用して、音楽表現・造形表現・身体表現の共感的要素をまとめる。

2. 今回の成果としては、僅かではあるが読譜力の基礎理解、音楽的興味・意欲の向上、楽譜の理解を促すなど効果は見られたが、楽典の内容・個別レベルでの対応等に課題もある。そこで、今期の楽典の授業内容を検討・実施し、学生アンケートによる理解度を調査する。
3. 現在出版されている子どもの歌本や現場で使用されている歌本について調査する。
4. 自らの専門を生かしたソロ活動、日本のオペラ活動を行う。

○2011年4月から2019年3月の研究業績（特許等を含む）

（学術論文）

- ・ 矢内淑子・酒井国作・藤田桂子・夏目佳子・鷺見鶴子、久野明子「保育士・教員養成課程における楽典指導～「音楽Ⅰ」・「音楽Ⅱ」のピアノ表現を深めるために～」
- ・ 古市久子・新實広記・矢内淑子・伊藤数馬「保育士・教員養成課程の表現科目における共感的感覚を使った教授法Ⅲ～造形表現の授業分析を通して～」愛知東邦大学紀要『東邦学誌』第46号第1号（2017年6月）
- ・ 古市久子・矢内淑子・伊藤数馬・新實広記「保育士・教員養成課程の表現科目における共感的感覚を使った教授法Ⅱ～授業実践を通して～」愛知東邦大学紀要『東邦学誌』第45巻第2号（2016年12月）
- ・ 古市久子・矢内淑子・新實広記・伊藤数馬「保育士・教員養成課程の表現科目における共感的要素を使った教授法Ⅰ－保育実践教科書を分析する－」愛知東邦大学紀要『東邦学誌』第44号第2号（2015年12月）
- ・ 矢内淑子・古市久子：「保育者養成機関におけるソルフェージュ力の育成」愛知東邦大学紀要『東邦学誌』第44巻第1号（2015年6月）
- ・ 矢内淑子・古市久子：領域「表現」から教科「音楽」「体育」への連続性に関する課題の検討。愛知東邦大学紀要『東邦学誌』41巻第3号（2012年12月）

（学会発表）

- ・ 柴田好章・付洪雪・福島孝・中島淑子・鈴木稔子・近藤茂明・矢内淑子「子どもの発言を基に構成される授業分析（1）－単元を通じた個の思想の変容過程との要因を中心に－、日本教育方法学会51回大会（2015年10月）
- ・ 矢内淑子・古市久子：「リズム感を通じたソルフェージュ力の育成（Ⅲ）」日本保育学会第68回大会、椋山女学園大学（2015年5月）
- ・ 矢内淑子・古市久子：「リズム感を通じたソルフェージュ力の育成（Ⅱ）」日本保育学会第67回大会、大阪総合保育大学・大阪城南女子短期大学（2014年5月）
- ・ 矢内淑子・古市久子：「リズム感を通じたソルフェージュ力の育成」日本保育学会第66回大会、中村学園大学・中村学園大学短期大学部（2013年5月）
- ・ 矢内淑子：「拍感の消失－歌唱を通して－」日本保育学会第65回大会、東京家政大学（2012年5月）

（その他）

<リサイタル>

- ・ 日本歌曲連続演奏会「矢内淑子メゾソプラノリサイタル～中田喜直の世界～」ピアノ：安田正昭、会場：岡山県立美術館ホール（2012年3月）

<オペラ>

- ・創作オペラ「忠臣蔵」戸田役。名古屋演奏家ソサエティー主催。作曲：森 彩音、指揮：濱津清仁、台本・演習：瀧本晴都子。会場：名古屋市芸術創造センター（2018年12月22日・23日）
- ・【芸創コラボ】オペラ「藤戸」波の精役。名古屋二期会・名古屋市芸術創造センター連携企画公演。作曲：尾上和彦、原作：有吉佐和子、指揮：奥村哲也、演出：堀口文成。会場：名古屋市芸術創造センター（2018年3月3・4日）
- ・受け継がれゆく唄（日本民謡集～川口耕平による～）、編曲：川口耕平、指揮：小原恒久。会場：（2018年3月3・4日）
- ・名古屋ソサエティー35周年記念オペラジャパネスク「閻魔街道夢ん中」、おとよ役。作曲：森 彩音、台本・演出：瀧本晴都子、指揮：高谷光信、主催：名古屋ソサエティー、会場：名古屋市芸術創造センター（2016年12月）
- ・創作オペラ「桜幻想」、母お静役。作曲：森 彩音、台本・演出：瀧本晴都子、指揮：金丸克己、主催：名古屋ソサエティー、会場：名古屋市芸術創造センター（2015年5月）
- ・創作オペラ：「古事記～矢岐の大蛇～」、キクリ姫。作曲：森彩音、台本・演出：瀧本晴都子、指揮：高谷光信、主催：名古屋演奏家ソサエティー、会場：名古屋能楽堂（2014年2月）。
- ・創作オペラ「荒城の月」、廉太郎の母（まさ）役。作曲：森彩音、台本・演出：瀧本晴都子、指揮：澤脇達晴、主催：名古屋演奏家ソサエティー、会場：名古屋市芸術創造センター（2012年12月）。
- ・創作オペラ「おんな忠臣蔵」、たん役。作曲：森彩音、台本・演出：伊豫田静弘、指揮：倉地竜也、主催：アド・フォンテス、（公財）名古屋市文化振興事業団、会場：名古屋市芸術創造センター（2011年12月）。
- ・オペレッタ「天国と地獄」、世間役。作曲：ジャック・オッフエンバック、演出：たかべしげこ、指揮：曾我大介、名古屋二期会 2011年オペラ定期公演、愛知県文化振興事業団第291回公演。主催：一般社団法人名古屋二期会、（財）愛知県文化振興事業団、愛知芸術文化センター、会場：愛知県芸術劇場大ホール（2011年10月）。

<演奏・研究発表>

- ・全国大学音楽教育学会第34回全国大会、《仙台大会》研究演奏会出演。主催：全国大学音楽教育学会、会場：仙台ガーデンパレス。（2018年8月）
- ・クリスマスコンサート。主催・会場：聖イエス会使徒教会（2008年～2017年12月）。
- ・東日本大震災チャリティーコンサートに出演。主催：一般社団法人名古屋二期会、会場：電気文化会館ザ・コンサートホール。（2011年4月、2013年3月～2015年3月）
- ・総社芸術祭 2015P&B ジョイフル・コンサート～吉備から発信する日本の歌～。主催：総社市・総社市教育委員会・第2回総社芸術祭 2015 実行委員会、会場：総社市民会館（2015年5月）
- ・歌の玉手箱～懐かしき家路へ～童謡の世界、～心に残る懐かしき愛唱歌～。主催：名古屋二期会、会場：しらかわホール（2011年9月～2012年9月、2013年11月、2015年11月～2017年11月、2018年8月）
- ・全国大学音楽教育学会第30回全国大会《東京大会》研究演奏会出演。主催：全国大学音楽教育学会、会場：音楽の友ホール。（2014年8月）。
- ・岡山混声合唱団第66回定期演奏会。「オペラコーラス・アラカルト」アルトソリスト。主催：岡山混声合唱団、会場：岡山市立市民文化ホール（2012年10月）
- ・愛光園創立20周年記念演奏会「Love&Brilliance」。主催・会場：（福）鴻仁福祉会、特別養護老人ホーム（2012年6月）。

- ・全国大学音楽教育学会第27回全国大会《東北・裏磐梯大会》研究演奏会出演。主催：全国大学音楽教育学会、会場：裏磐梯ロイヤルホテル（2011年9月）。

<審査・講評>

- ・第85回NHK全国学校音楽コンクール愛媛県コンクール審査員。主催：NHK松山放送局・全日本音楽教育研究会・日本教育音楽協会愛媛県支部、会場：松山市民会館大ホール
- ・第76回～第86回NHK全国学校音楽コンクール岡山県大会審査員。主催：NHK岡山放送局・全日本音楽教育研究会・日本教育音楽協会岡山県支部、会場：岡山市立市民文化ホール・岡山市建部文化センター（2010年8月～2018年8月）
- ・第43回・44回・第49回・50回、第51回、53回、岡山県学生音楽コンクール本選審査員。主催：岡山県高等学校音楽協議会、会場：くらしき作陽大学（2014年8月～2016年8月、2018年10月）
- ・第67回岡山県合唱コンクール審査員。主催：岡山県合唱連盟、朝日新聞、会場：岡山市立市民文化ホール（2014年8月）
- ・第67回岡山県合唱フェスティバル講評。主催：岡山県合唱連盟、会場：岡山シンフォニーホール（2014年6月）。

<指揮>

- ・第61回～第69回岡山県合唱フェスティバル。主催：岡山県合唱連盟、会場：岡山シンフォニーホール（2010年6月～2018年6月）
- ・第34回～第43回記念倉敷合唱フェスティバル。主催：倉敷市合唱連盟・倉敷市文化連盟。会場：倉敷芸文館、倉敷市民会館ホール（2010年12月～2019年1月）
- ・第15回おかやま県民文化祭参加事業、倉敷市50周年記念市民発案事業「コーラスふるさとを歌う」主催：倉敷文化連盟、コーラス「ふるさと」を歌う実行委員会、協賛：倉敷市、会場：倉敷市民会館（2017年11月）
- ・女声合唱団萌え木第3回定期演奏会。主催：女声合唱団萌え木、会場：岡山県立美術館ホール（2017年10月）
- ・瀬戸内混声合唱団第17回定期演奏会—チャレンジコンサート—主催：瀬戸内混声合唱団、共催：倉敷市文化連盟、会場：児島市民交流センタージーンズホール（2017年5月）
- ・女声合唱団萌え木第2回定期演奏会。主催：女声合唱団萌え木、共催：倉敷市文化連盟、会場：岡山県立美術館ホール（2016年1月）
- ・倉敷市東公民館文化展コンサート。主催・会場：倉敷東公民館（2009年11月～2015年11月）
- ・第13回サンセットフェスタ in こじま。主催：サンセットフェスタ in こじま実行委員会、会場：鷺羽山第二展望台（2015年9月）
- ・第34回～第41回倉敷サマーコンサート。主催：倉敷市文化連盟・倉敷市合唱連盟、会場：倉敷アイビースクエア（2008年～2016年8月）
- ・瀬戸内混声合唱団創立30周年記念演奏会。主催：瀬戸内混声合唱団、会場：倉敷市児島文化センター（2015年1月）
- ・女声コーラスアンコーラ The10thAnniversary Concert。主催：女声コーラスアンコーラ、会場：倉敷市立美術館ホール（2014年9月）
- ・女声合唱団萌え木第1回定期演奏会。主催：女声合唱団萌え木、会場：岡山県立美術館ホール（2014年4月）

- ・岡山県ヴォーカルアンサンブルコンテスト。主催：岡山県合唱連盟、会場：岡山シンフォニーホール（2012年2月、2013年2月）
- ・女声合唱団萌え木 Christmas Concert。主催：女声合唱団萌え木、会場：日本福音ルーテル岡山教会（2012年11月）
- ・第10回おかやま県民文化祭メインフェスティバル。主催：岡山県・おかやま県民文化祭実行委員会、会場：倉敷芸文館大ホール（2012年9月）
- ・東北の皆さんへ、わたくしたちのうたごえを届けよう!!～フォーレのレクイエム（抜粋）を歌おう。主催：東邦学園歌声サークル、会場：東邦高校（2012年5月）
- ・第9回おかやま県民文化祭メインフェスティバル。主催：岡山県・おかやま県民文化祭実行委員会、会場：岡山市民会館大ホール（2011年9月）

○科学研究費補助金等への申請状況、交付状況（学内外）

○所属学会

名古屋二期会会員、日本保育学会会員、日本音楽教育学会、日本音楽表現学会、日本学校教育実践学会会員、全国大学音楽教育学会会員、日本教育方法学会会員、日本音楽療法学会会員

○自己評価

教員や保育士の採用試験は地域差があるが、ピアノ演奏や弾き歌いの試験の他に、教科として音楽科の試験が課せられることがある。近年本学の入学生はピアノ未経験が多く、読譜の点で困難を感じる学生が多いのが現状であり、少しピアノ経験があったとしても、楽譜の読み方に関する部分「楽典」に対する理解度の差が顕著である。これまで本学では、「楽典」は、「音楽Ⅰ」「音楽Ⅱ」におけるピアノ個人レッスンの中でピアノ技術の習得に合わせて指導してきたが、無理があった。そこで、今年度は、保育士・教員養成課程における音楽授業研究として、「保育士・教員養成課程における楽典指導～「音楽Ⅰ」・「音楽Ⅱ」のピアノ表現を深めるために～」と題して、東邦学誌第47巻第1号（2018年6月10日発刊）において問題の背景を探り、現状と課題をまとめ、2019年度からの授業運営に反映することができた。今後、さらに指導方法の改善について検討していきたい。

専門分野では、日本の創作オペラに毎年1本参加している。新作オペラ上演は、経済的・人的な問題を抱えており、上演が難しいのが現状である。日本で生まれた総合芸術であるオペラが、世界へ発信されることを願っている。

Ⅲ 大学運営

○目標・計画

（目標）

全学委員会で与えられた委員を全力で務め、関係者と連携して大学運営に貢献する。教育学部子ども発達学科の教員として、担当業務を果たす。大学が関係する学内外や課外活動に積極的に参加する。

（計画）

学生委員会の副委員長、学生寮運営委員会副委員長、人権問題委員会委員として大学の方針を理解し、各委員会が抱える問題・課題解決に向けて責務を果たす。教育学部子ども発達学科の分掌に従い、幼児教育コース担当教員として、より良い保育士・教員を育てるべく責務を果たす。愛

知東邦大学吹奏楽団の部長、団の活動状況の把握や学生指導を努めるとともに、大学のよいイメージ作りに貢献する。

○学内委員等

人権問題委員会委員、学生委員会委員、学生寮運営委員会委員、幼小教職委員会委員、保育士養成課程委員会委員、愛知東邦大学吹奏楽団顧問（部長、強化指定クラブ）

○自己評価

人権問題委員会委員として委員長・関係教職員と共に、相談事例に関して「人権侵害の防止等に関する規程」および対応フローを確認、対応した。人権侵害、問題に対する啓発活動については資料収集にとどまったが、現代社会においては「人権問題」は重要かつ身近な問題である。今後、日常生活に生起する身近な話題から学生と考えていくことが重要であると考え。

学生生活委員会委員として委員長・関係職員と共に重要課題について検討し、概ね達成することができた。担当業務である生活指導（マナー教育）については、前後期のガイダンスで学生委員会資料・キャンパスガイドを基に、学年別に要点を踏まえて注意喚起を行った。本年度は、近隣住民から本学学生への苦情やその他の問題に関する注意・指導がなかった。委員会としても嬉しいかぎりである。前後期のガイダンスで禁煙ルール・マナー指導、違法・迷惑駐車違法駐車について注意喚起を行い、懲戒処分の規則を運用して継続的に取り組んできた成果と考える。2020年3月に受動喫煙防止法が施行されるのを受けて、今後も生活指導に関する重点項目を伝えることで、学生が過ごしやすい大学、社会の一員としての自覚を持てるようにしていきたい。

「TOHO Learning House」は3年目を迎え、寮生で取り組む度合いに差があるものの、地域に根差した連携活動、他大学との交流プログラムの実施、学内外の発表・報告会への参加等、安定的な運営が可能になり、寮生活の基盤作りができたと考えている。学生寮運営委員会委員としては、寮の行事への参加、寮生との関わりを持つことを心掛けたい。

愛知東邦大学吹奏楽団は、今年2名の学生が学長表彰、保育者養成協議会表彰を受けることができた。団員数の少ない中で、大学の行事、クラブの応援、地域のさまざまなイベントの他、昨年からは東邦公式バンド TOHO MARCHING BAND 活動も加わり、年間の演奏回数が約44回とである。今後4年生が6人卒業して9人での活動となり負担も多くなってくる。今後も継続的な支援をしていきたい。

IV 社会貢献

○目標・計画

（目標）

従来に引き続き地域活動に参画したいと考えている。学生達と一緒に地域のイベントに積極的に関わり、地域社会の文化向上に貢献する。

（計画）

高大連携授業、教員免許講習、保育士試験採点委員、学生音楽コンクール、合唱審査活動を行う。

学生とともに地域社会と連携した行事を企画、実施する。合唱団指導や指揮活動、審査活動を行う。

○学会活動等

全国大学音楽教育学会第34回全国大会、《仙台大会》研究演奏を担当。

○地域連携・社会貢献等

- ・「保育者・教員養成における歌唱表現指導法」と題して教員免許講習の講師を担当(2018年8月)。
- ・名東児童館からの依頼を受け、総合演習Ⅱ、専門演習Ⅱの学生達で「名東児童館クリスマス会～みんなでハッピークリスマス」を開催(2018年12月)。
- ・平和が丘小学校PTA土曜企画「作ってみよう自分だけの楽器！奏でてみよう楽しいリズム♪」と題して、平和が丘小学校体育館で音楽ワークショップを開催(2019年1月)。
- ・総合演習Ⅱの学生達で、愛知東邦大学地域連携委員会主催「地域連携した授業・活動報告会」で名東児童館の行事についてポスター発表をした。地域貢献賞を得る。(2019年2月)

○自己評価

教員免許講習では、歌唱表現活動を通して、楽曲や歌詞の内容のイメージを表現に繋げる歌唱法を体験的に学習し、今後の実践的な指導に活かしてもらいたいで行った。4コマ続きで行ったためペース配分に苦慮した。今後も内容の検討を行いながら有意義な講座になるよう努めたい。今年も名東児童館からの依頼があり、総合演習・専門演習の学生と協働して第4回目のクリスマス会を実施することができた。幼児・小学生を前にしてプログラムを実践することで、学生にとっても自らの表現力について考えるよい機会になると同時に、自主性、責任感を育むことができたと考える。平和が丘小学校PTA企画は、児童34名の参加があった。前半でいろいろな音色やリズムを体験してもらい、最後に保護者も一緒に全員で、学生の打楽器、講師のマリンバ・ピアノでエル・クンバンチェロの音楽で協演することができた。学校・学年により子どもたちの理解度・実践力の違いが分かり、今後の実践に役立てていきたい。ここでも総合演習・専門演習の学生、他の教育学部の学生の手伝いがあった。

教育学部として地域と連携した授業・行事活動は、社会貢献であると同時に、教員養成糧において、真に信頼して事を任せうる人格の育成にあるように、責任感がある「真面目」に物事に取り組むことができる広い教養と深い専門知識を持った学生の育成に繋がってくると考える。その他、教育学部教員として、専門性を生かした活動、演奏活動、合唱指揮活動、コンクールの審査員、保育士試験視点委員として、地域における文化向上に微力ではあるが貢献することができたと考える。

V その他の特記事項(学外研究、受賞歴、国際学術交流、自己研鑽等)

特になし

VI 総括

教育活動、研究活動、大学運営、社会貢献、十分ではないがバランスを維持しながら行うように心掛けた。教育活動については、新任の音楽教員と、音楽Ⅰ・音楽Ⅱ・音楽表現技術の授業改善に努めることができた。また、非常勤講師を巻き込んでの研究を重ねることで、教職課程再課程認定のカリキュラム「音楽基礎」において、ピアノレッスンと並行して楽典のクラス授業を行うことが可能になった。今年度は、保育士・教員養成課程の表現科目に関する研究課題を成果としてまとめることができなかったが、継続的に行っていききたい。地域連携行事としては、学生の実践力を育成するためにも、新たな場所を検討していきたい。今後も、実践力のある保育者・教員を育成するために、これまで以上に研鑽に努めたい。

以上

所属学部 学科	職位	氏 名
教育学部 子ども発達学科	准教授	伊藤 数馬
最終学歴	学 位	専門分野
広島大学大学院教育学研究科博士課程前期修了	教育学修士	体育科教育学、サッカー

I 教育活動

○目標・計画

(目標)

講義や課外活動等を通して、学生に「真に信頼して事を任せうる人格」が形成できるよう、教育活動を実践する。また学生が主体的な学びを実践できるよう、各分野で努める。授業評価アンケートの結果を踏まえ、事前事後学習ができるよう授業内容の仕組みを工夫する。教育現場で生きる実践力を養う授業内容を展開する。

(計画)

幼児・児童が体を動かすことを好きになる運動指導の実践を研究し、学生に理解させる。学生の主体的な取り組みを引き出すため、アクティブ・ラーニングを導入する。課外活動においては、競技力の向上はもちろん社会から必要とされる資質（礼儀・マナー等）を養成する。

○担当科目（前期・後期）

（前期）保育内容（身体表現）、体育、体育科教育法、サービス・ラーニング実習Ⅰ、基礎演習Ⅰ、専門演習Ⅰ、専門演習Ⅲ

（後期）総合表現技術、保育内容（健康）、専門スポーツ実習（球技）、サービス・ラーニング実習Ⅱ、基礎演習Ⅱ、専門演習Ⅱ、専門演習Ⅳ、卒業研究

○教育方法の実践

昨年度同様、実技科目を多く担当しているので、「言葉」だけの説明ではなく、動画等視聴覚教材を活用し、学生の理解を深める工夫を行った。なぜそうするのか、なぜできたのか、できなかったのか等、原因や根拠を明確にしてフィードバックができるよう、振り返りの時間を設定、理解を深める工夫を行った。教員側からの一方的な情報発信型講義ではなく、学生達の主体的な取り組みが生まれるよう、ディスカッション及びグループワークを取り入れ、双方向型授業を実践した。

○作成した教科書・教材

すべての科目において、最新時事情報を盛り込んだ補助資料を作成し活用した。

○自己評価

学生の授業評価における数値はまずまずの結果だった。実技科目は、学生達にとって学びやすい科目ともいえるが、学生達とのコミュニケーションを大切にしながら行えた結果だと考える。今後ただ実践して終わりとするのではなく、実践した先に考えや工夫が生まれるような仕組みを考えて取り組んでいきたいと考える。

II 研究活動

○研究課題

- ・児童の体力低下に関する要因分析とその課題解決における実践事例の研究

- ・サッカーにおける指導実践
- ・「表現力」を重視した教材・教授法の研究
- ・地域と連携した人材育成の現状と課題

○目標・計画

(目標)

研究課題をまとめたものを研究成果物として学外に発表できるよう努める。学生の身体表現能力を伸ばすことについては、保育士・教員養成校であるからこそ、その必修科目を利用して、表現力をより伸ばすことのできる教材・環境は何かについて研究を行う。

(計画)

- ・児童の体力低下に関する調査報告や先行研究を収集、考察する。
- ・大学サッカー部を対象に指導を実践しその成果を検証する。
- ・2016年度より身体表現・音楽表現・造形表現の担当者と共に、実験的調査を行ったので、それらを踏まえ、より実践的な方法を探っていきたい。

○2011年4月から2019年3月の研究業績（特許等を含む）

(著書)

- ・今津孝次郎、西崎有多子、白井克尚、中島弘道、新實広記、伊藤龍仁、柿原聖治、伊藤数馬「教員と保育士の養成における『サービス・ラーニング』の実践研究」唯学書房、2019年2月

(学術論文)

- ・伊藤数馬「領域『健康』の指導法に関する一考察 ～保育実践教科書の分析を通して～」東邦学誌 第46巻 第2号 2017、2017年12月
- ・古市久子、矢内叔子、新實広記、伊藤数馬「保育士・教員養成課程の表現科目における共感的要素を使った教授法Ⅱ—授業実践を通して—」東邦学誌 第45巻 第2号 2016、2016年12月
- ・房野真也、塩川満久、沖原謙、磨井祥夫、上田毅、大塚道太、菅輝、伊藤数馬、川口諒「ボール供給方向の違いがサッカーのインサイドキックに及ぼす影響」運動とスポーツの科学 第21巻 第1号 2015、2015年12月
- ・古市久子、矢内叔子、新實広記、伊藤数馬「保育士・教員養成課程の表現科目における共感的要素を使った教授法Ⅰ—保育実践教科書を分析する—」東邦学誌 第44巻 第2号 2015、2015年12月
- ・出口達也、上田毅、東川安雄、草間益良夫、斉藤一彦、沖原謙、國木孝治、伊藤数馬、丸山啓史、塩川満久、大塚道太「柔道の「背負投」動作における熟練者と未熟練者の比較」運動とスポーツの科学 第19巻 第1号 2013、2013年12月
- ・古市久子、伊藤数馬「「総合表現」の教育的価値は何か～哲学的視点から考える」東邦学誌 第42巻 第2号 2013、2013年12月
- ・伊藤数馬「児童の体力に関する一考察—基本的動作—」子ども学論集 創刊号、2013年4月

(学会発表)

- ・大塚道太、森木吾郎、房野真也、伊藤数馬、梶山俊仁、山本英弘「ゴール型球技におけるコート
の広さの違いが運動内容に与える影響—サッカーゲーム中のパス頻度に着目して」日本体育学会
第69回大会 徳島大学、2018年8月
- ・大塚道太、森木吾郎、房野真也、伊藤数馬「サッカーグラウンドの広さの違いが運動強度と内容
に与える影響—正規グラウンドと面積1/2グラウンドの比較検討—」日本運動・スポーツ科学学

会 第 25 回大会 広島大学、2018 年 6 月

- ・伊藤数馬、大塚道太、房野真也、塩川満久、沖原謙、大場渉「児童の中間疾走と新体力テスト 50m 走の関連性の検討」日本教科教育学会 第 37 回全国大会 沖縄大学、2011 年 11 月

○科学研究費補助金等への申請状況、交付状況（学内外）

○所属学会

日本体育学会、日本運動とスポーツ科学学会

○自己評価

今年度は共著ではあるが著書を 1 冊、共同研究として学会発表を 2 本することができた。次年度は今年度に引き続き学内外に研究成果を発表していきたいと考える。

Ⅲ 大学運営

○目標・計画

（目標）

大学・学部における校務および委員会の活動を積極的かつ円滑に行う。

（計画）

【全学】

- ・キャリア支援委員会 ・東邦STEP運営委員会
- ・幼小教育課程委員会 ・保育士養成課程委員会
- ・教職支援センター運営委員会
- ・名古屋グランパス教育連携WG

【学部】

- ・保育実習（施設）副担当 ・初等教育コース運営委員（介護等体験実習等）
- ・スポーツ大会実行委員 ・基礎演習とりまとめ

【課外活動】

- ・男子サッカー部 監督

○学内委員等

キャリア支援委員会委員、東邦STEP運営委員会委員、幼小教職委員会委員、保育士養成課程委員会委員、男子サッカー部顧問（監督、強化指定クラブ）

○自己評価

教職支援センター運営委員会委員としては、教職に関する方策等を検討し、特に教職合宿の計画立案、運営に主として携わった。またキャリア支援委員会委員として、学内就職、キャリア教育に関する事項に対し尽力することができた。学部での分掌については、特にスポーツ大会実行委員や基礎演習のとりまとめを担当した。男子サッカー部に関しては、2016 年度より監督として、競技力向上のみならず学生生活の質の向上についても指導を心掛け遂行することができた。

Ⅳ 社会貢献

○目標・計画

（目標）

地域に根ざした大学・学部であるよう社会貢献活動に積極的に参加する。

(計画)

教育学部の教育活動（サービス・ラーニング等）を通じた地域貢献事業や名東区子育て支援ネットワーク関連の事業への参加、サッカーを媒体とした地域貢献活動（少年サッカー大会・少年サッカースクール・近隣幼稚園への指導）を企画・実践する。

○学会活動等

愛知東邦大学地域創造研究所所員

○地域連携・社会貢献等

珉光幼稚園における園児を対象としたボール遊び指導（不定期）

東海学生サッカー連盟 常任委員を担当（競技、会計）

○自己評価

教育学部の教育活動（サービス・ラーニング等）として名東区小学校の運動会ボランティア、男子サッカー部の活動として、サッカー大会への審判派遣ボランティア、近隣幼稚園でのボール遊び指導に学生を引率しながら参加することができたが、十分な取り組みとはいえない。次年度はさらに活動の範囲を広げていければと考える。

V その他の特記事項（学外研究、受賞歴、国際学術交流、自己研鑽等）

・愛知東邦大学における教育活動・授業実践への学長表彰 2018年2月

VI 総括

研究面では、共著で著書を1冊出版することができた。今後の課題として、教員養成系学部における表現系科目の在り方の検討や課外活動における教育的効果についてなど研究成果を学内外に発表できればと考える。

教育面に関しては、これまでの授業実践の成果に対し学長表彰をいただくことができた。今後も学生の視点を忘れず、学習内容の理解を深めることができる授業実践を心掛けていく。また、様々な課題を抱えている学生に対し、傾聴を心掛け学生指導することを意識した。学生それぞれがその課題に取り組むことができ、その支援の一助を担えたのではないかと考える。

以 上

所属学部 学科	職位	氏 名
教育学部 子ども発達学科	准教授	梶浦 恭子
最終学歴	学 位	専門分野
岐阜大学大学院教育学研究科 教科教育専攻・家政教育専修（修士課程）	修士	幼児教育

I 教育活動

○目標・計画

（目標）

幼稚園実習において学生は意欲的な取り組みや援助が実践できたか

（計画）

学生が、実習を終え、自己評価を総合的に行う。さらに、自己課題においてはどうかを具体的に アンケートや記述式で答え、評価をする。そこで、

- ・ 学生の実践が、自発的に行動でき意欲的な態度ができていたか、
- ・ 幼児の発達や特性をふまえた効果ある援助の動きや取り組み方ができたか

等を実証する

○担当科目（前期・後期）

（前期）教育実習Ⅰ 事前事後指導、サービス・ラーニング実習Ⅰ、基礎演習Ⅰ、総合演習Ⅰ、専門演習Ⅰ、教育実習Ⅰ（幼稚園）

（後期）保育内容（環境）、生活、生活科教育法、教職実践演習、サービスラーニング実習Ⅱ、基礎演習Ⅱ、総合演習Ⅱ、専門演習Ⅱ

○教育方法の実践

①幼稚園実習において、【学生へ意欲的な取り組みや援助が実践できたかについて】

「教育実習Ⅰ 事前事後指導」担当科目の事前指導（前期、後期）で、

- ① 学生による・「個人票」の記述、
 - ・ 実習の心構え「実習にあたって」の作文
 - ・ 実習園訪問による報告書作成等。

学生の履歴文書や実習園環境へ臨む意欲を文章化した書類を添削した後、幼児の内面理解と、援助の具体的な方法を学生に指導し文脈を整理する。

「実習園訪問報告書」等、提出期日厳守の働きかけを行い、準備を入念に行った。

- ② 実習日誌、部分（全日・一日）実習指導計画案3案を実習前（後期）に作成する演習期間を教育実習Ⅰ（幼稚園）後期に向けて、夏季休業に設定し自主的行動を促す計画を実践する。

○作成した教科書・教材

個別面談のための、自己評価のためのアンケート作成をしたところ、スムーズな振り返りと記述効果が得られた。

そこで、「愛知県私立幼稚園連盟 愛知県保育実習連絡協議会 幼稚園教育実習要項」内にある成績評価基準の内容を基本に、成績表とタイアップした自己評価票（前期、後期の二種類）の作成に取り組んだ。学生の自己評価に役立て、次年度の実習意欲の効果や成果を実証するための教材として利用する。

○自己評価

提出物の提出日より遅れて出す学生が目立ったことを省察する。意欲を喚起できるよう内容を具体的に説明し、課題・疑問・問題を自分なりに整理し提出が促進される計画をすべきと思えた。

・今後に向けて

現場の保育者は毎日を真剣に、子どもたちと楽しく遊び・学び、仕事内容の責務を持ってこなしている。それを理解するには、やさしさ、誠実さ、柔軟性と意欲ある取り組みが日々の学生生活においても普通にできる学生であると思う。そのような資質、態度を身につけている真面目な学生を今後、地道に育てたい。

各教科において、素直に取り組み、真剣で誠実にそして意欲的に学ばせたい。今は何をどうすべきかといった真っすぐな感覚をつかみ、その感性を切磋琢磨しようとする姿勢をもった学生を育みたい。

だが、基礎演習や総合演習、専門演習の授業において、授業内の課題の取り組みや行事をもおろそかにせず、活かすことをしてきたらどうか。まず、そこから考えたい。

教員は学生と協力体制を持ち、生活一般の態度や授業に取り組む意欲や志が、継続的で向上心が持てるよう 15 コマを構造化（幹からでる枝葉となるゼミ生の特徴を生かした考え方による）していく必要が見いだせると良い。学生においても受け身でなく、工夫や計画が生れるよう共に考え、立案し判断し実行できていく流れを作り、独自のものという自信となる自尊感情になるはずである。

自己の未来の目標に向かう気持ちを見失わず、今、何が大切なことかを考えられる自分を失わずに行動できるような人、そして自分の生活を作る意思を一人一人が持ち、自分の意見を持ち、現実を一つ一つ考え生き抜く力を持つ人と、意欲的で自主的な行動ができる実践力を持つ人を育みたい。

教員は、教材、テキスト、資料環境を計画的に提示し、仲間と協同学習、あるいは自己研究・探求作業活動するその流れを各自が自分自身でつくれるようにしたい。任せてばかりではなく、随時、確認は怠らない。また、事前に何を学習しておくか、理解しておくか、スムーズに目的をもって行動する仕組みをつくるようにしたい。こぼれ落ちる学生に目をかけすぎて、流れがつかれなかった。個別対応をするが、自分で考えさせ判断力を持たせていく。

反省の多い1年であったことを心得、社会へ一歩ずつ踏み出せる学生を育むために、挑戦的意欲がもて、自信が芽生える研究、追究する学生生活を送れるよう、教員自身が覚悟して臨みたい。

II 研究活動

○研究課題

自然環境と幼児について

○目標・計画

(目標)

幼児が自然環境とどのように出会いどのような遊びをつくり出すのか

(計画)

方法は、幼児の行為・動作を、カメラ撮影し、遊び場を研究者が抽出する。幼児の行動は心情の現れと考え、動きを観察し、捉え、事例を収集する。自然体験活動は危険を伴うが教育的意義は豊富にあり、幼児が表現する行為を、物的な環境と人的な環境を通して導きたい。

その目標に向かうために継続的に「森のようちえん」という自然体験活動フィールドを訪問する計画である。

○2011年4月から2019年3月の研究業績（特許等を含む）

（著書）

- ・江田司 梶浦恭子 田中まさ子 谷口篤 横井志保 他8人『教育実習の手引き（幼稚園・小学校）』一粒書房、2016年、第1章第3節 幼児教育に携わる者に求められる専門性 第2章第3節 指導案の立て方・指導案（サンプル）35-36、43-46

（学術論文）

- ・梶浦恭子「0～3歳児の自然体験遊びについて」名古屋学院大学論集. 社会科学篇 = Journal of Nagoya Gakuin University 54 (4) , 171-181, 2018
- ・梶浦恭子, 西澤彩木「自然物を手にする幼児はどのような表現をするのか：幼児の行動記録を手がかりに」名古屋学院大学論集. 人文・自然科学篇 = Journal of Nagoya Gakuin University 53 (2) , 125-138, 2017-01
- ・梶浦恭子, 今村光章「“森のようちえん”の幼児が触れる自然物に関する実証的研究」環境教育 = Environmental education 25 (1) , 176-183, 2015-07 日本環境教育学会（査読有）
- ・梶浦恭子, 今村光章「なぜ幼児は「森のようちえん」で枝を拾うのか」環境教育 = Environmental education 24 (3) , 137-144, 2015-03 日本環境教育学会（査読有）
- ・梶浦恭子「幼児の手が会える森の世界」岐阜大学大学院教育学研究科修士論文, 216, 2014-03
- ・木澤光子, 三輪聖子, 梶浦恭子, 馬淵知子「子育て支援の託児・ベビーマッサージを通して得た学生の学び」岐阜女子大学紀要 41, 143-150, 2012-03-15
- ・内田裕子 梶浦恭子 森俊夫「幼児の絵の色彩特徴と形態特徴の評価」日本色彩学会誌 36, 134-135, 2012-05-01
- ・木澤 光子, 三輪 聖子, 梶浦 恭子, 馬淵 知子「子育て支援「ママパパの宝物」の取り組み」岐阜女子大学紀要 41, 151-158, 2012-03-15

（学会発表）

- ・梶浦恭子「自然体験活動からの学び：対象（自然）物に向き合う場面において幼児と保育者が並列の位置で育むもの」一般社団法人日本環境教育学会, 2018-08
- ・梶浦恭子「自然物に出会う幼児の表現行為を探る」一般社団法人日本保育学会, 2018-05
- ・梶浦恭子「自然物にふれる乳幼児の表現行為を探る：0～3歳児の抱っこや手つなぎから」日本乳幼児教育学会, 2017-11
- ・梶浦恭子「乳幼児が自然物とかかわる意味を探る：森の世界の出来事における手の行為場面から」一般社団法人日本環境教育学会, 2017-9
- ・梶浦恭子「自然物は幼児にどのような表現行為を生みだすのか：森のおやこクラス「おさんぽさん」の素朴な見える動きから」一般社団法人日本保育学会, 2017-05
- ・梶浦恭子「保育者から研究者へ - 現場出身者の課題を共有する」日本乳幼児教育学会, 2016-11
- ・梶浦恭子「自然物に触れて遊ぶ幼児の手が作り出す表現を探る」日本乳幼児教育学会, 2016-11
- ・梶浦恭子「自然物を用いた幼児の造形活動における指導のあり方」日本環境教育学会, 2016-8
- ・梶浦恭子 作品発表「かくれんぼ絵本」絵本学会, 2016-5
- ・梶浦恭子「自然物に触れて遊ぶ幼児の手の動きに注目して」日本保育学会, 2016-5
- ・梶浦恭子「自然物（枝など）に触れて遊ぶ幼児の行動からみえるもの」日本環境教育学会, 2015-

- ・梶浦恭子「枝を持って遊ぶ幼児に関する一考察」日本保育学会，2015-5
- ・梶浦恭子，今村光章「森のようちえん」で磨かれる感性（2）日本環境教育学会，2014-8
- ・今村光章，梶浦恭子「幼児が「森のようちえん」で枝を拾う意味」日本環境教育学会，2014-8
- ・梶浦恭子「人と人がつながるあそび かんたん手づくりえほん」絵本学会，2014-5
- ・梶浦恭子「幼児の手が会える森の世界：行動記録を手がかりに」日本保育学会，2014-5
- ・梶浦恭子「森のようちえんで磨かれる感性」日本環境教育学会，2013-8
- ・梶浦恭子「森のようちえんで幼児は何に触れるか」日本保育学会，2013-5
- ・杉山喜美恵 梶浦恭子「実習記録簿に対する保育所の意識 2. 調査よりわかること」日本保育学会，2013-5
- ・梶浦恭子 杉山喜美恵「実習記録簿に対する保育所の意識 3. 自由記述から見えるもの」日本保育学会，2013-5
- ・森俊夫 梶浦恭子「幼児にできる草木染めと科学遊び一色の不思議を感じる一」日本保育学会，2012-5
- ・梶浦恭子「絵本のイメージと色彩的特徴—絵本の見方の一考察—」日本保育学会，2012-5

○科学研究費補助金等への申請状況、交付状況（学内外）

○所属学会

一般社団法人日本環境教育学会、一般社団法人日本保育学会、日本乳幼児教育学会、日本野外教育学会、絵本学会

○自己評価

（学会発表）について、最近3年間参加できていない絵本学会がある。日本野外教育学会も、本年度は参加していない。日程が合わないからである。今年度もそうであるなら、削除する方向も考える。学会発表を励みに、参加する方向であるが研究内容に重厚さがあるように、著書を読み、現場の実践も積み、研究において、落ち着いて取り組めるよう基盤づくりをしていく。

諸々の事務処理を丁寧にする一方、すみやかに行うよう努力する。

（学術論文）について、すでに書き上げた学会発表内容を、一つの論文に仕立て上げたいと考えている。だが、対象児の乳幼児の発達はめざましく成長することもあるため、問題・課題（や新たな認識）が湧き上がってくる。何とか各事例の学びの構造の共通性を見出し、実践の一般化の検討になるよう理論づけたい。

III 大学運営

○目標・計画

（目標）

- ・総務委員会の委員として、本学の教育・研究活動の環境を改善するための課題解決に向けた提言を行う
- ・防災教育・個人情報保護委員会の委員として、見直し確認しながら意識向上に努める
- ・国際交流委員会の委員として、留学生の受入、派遣の企画・実施等を行う。また、学生のための個別留学の推進をする（協議事項である）。

（計画）

月次課題の計画事業の要項を作成し、方法確認や、検討のため、月ごとに委員会会議を行う

○学内委員等

総務委員会委員、国際交流委員会委員、幼小教職委員会委員、保育士養成課程委員会委員

○自己評価

学内委員について、月ごとに学生にとって何を、どうしていくと良いかを考え合う機会を、他学科教職員とできるのが新鮮であった。内容を理解し、学生にかみくだいた説明（例：国際交流の海外研修）ができるようにしたいと思っている。

IV 社会貢献

○目標・計画

（目標）

人と人の心がつながる本を介した遊びを稲沢市の図書館で行う

学生が関わる内容を検討し、名東区のサービスマーケティングを地域とする学生の参考にする

（計画）

稲沢市中央図書館、祖父江の森の図書館で4月と11月に行う

内容は、“「くるくる絵が変わるしかけえほん」を親子でつくろう”を計画している。

○学会活動等

日本乳幼児教育学会 2018 第 28 回大会 12 月 8 日 研究発表 I-3 「保育環境 1」座長

○地域連携・社会貢献等

①愛知県立瀬戸北総合高校 1・2 学年イベント「学びをまなぶ」講義 2018 年 11 月 26 日

題目：『絵本の世界』-絵本は子どもにとって物語の世界？知識の世界？科学の世界？それだけ？-

②一般社団法人岐阜県私立幼稚園連合会巡回子育て相談員

訪問場所：かたびら幼稚園 第二かたびら幼稚園

③図書館イベント活動

活動場所：稲沢市中央図書館 4 月、祖父江の森の図書館 11 月 内容：「くるくる絵が変わるしかけえほん」を親子でつくろう

○自己評価

【地域連携・社会貢献等について】

①、②は、これまでの経験を社会に貢献できるチャンスととらえて、積極的に行うことができたと思える。

②については、授業に支障がないよう、現場を見るために、2 回を 4 回程度に計画し、岐阜県内の学生の出身地域の園を対象に巡回できるようにしたい。園の状況や最近の保育内容を視察できるものと考え計画する。

③においては、多様な職種の人材で構成されているボランティア活動である。目的は、図書館利用者によりよく利用できるような活動をと考えてきた。だが、仲間全体に仕事や家庭の事情によって活動を縮小せざるを得ない状況に来ている。そこで、年に 2 回のイベントを 1 回にしたり、団体会議は遠慮したりと、方向性を図書館担当者に申し出、最小限の活動で行う計画にし、乗り切っていくこととなった。

V その他の特記事項（学外研究、受賞歴、国際学術交流、自己研鑽等）

VI 総括

乳幼児にとって自然（環境）におけるモノ・ヒト環境とは何か。大人には理解されにくい乳幼児の行動には、逸脱ともいえる行為もある。多様な行動に目を向け、心身の発達、成長においての意味が必ずあると考え保育者としての対応課題として配慮、援助方法の具体を学生一人一人が追求できるようにしていく。自分にとって解明できていないこととして、未知を尋ねる研究を、学生と探り解いていきたい。

以 上

所属学部 学科	職位	氏 名
教育学部 子ども発達学科	准教授	白井 克尚
最終学歴	学 位	専門分野
兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科	博士 (学校教育学)	社会科教育, 生活科教育

I 教育活動

○目標・計画

(目標)

地域の教育諸機関と連携し、サービス・ラーニングを通じた活動を通して、学生主体の問題解決型の学習を組織し、総合的な企画力・調整力の育成をめざす。また、保育者、小学校教員として必要な実践力、表現力の育成をめざした教育方法の実践に積極的に取り組んでいく。

(計画)

講義・演習ともに、学生の興味・関心を大切にし、個々の問題意識にもとづいた研究活動を指導する。また、今年度は、これまでのサービス・ラーニングの実践を通じて、経験を通じた学習の検証を行い、さらに対話的で深い学びにつながるような手立てを行っていきたい。さらに、小学校教育実習担当、教職支援センターの運営委員として、小学校教育実習、小学校教員採用受験のサポートに引き続き取り組み、教職を志望する学生を支援する取り組みを進めていきたい。

○担当科目（前期・後期）

(前期) 社会、教育実習Ⅱ事前事後指導、サービス・ラーニング実習Ⅰ、基礎演習Ⅰ、総合演習Ⅰ、専門演習Ⅰ、専門演習Ⅲ、教育実習Ⅱ（小学校）

(後期) 生活、生活科教育法、社会科教育法、教職実践演習、サービス・ラーニング実習Ⅱ、基礎演習Ⅱ、総合演習Ⅱ、専門演習Ⅱ、専門演習Ⅳ、卒業研究

○教育方法の実践

教育方法の実践として、「教育実習Ⅱ（小学校）」「教育実習Ⅱ事前事後指導」の授業において、学習指導案作成や模擬授業などの活動を取り入れて、小学校現場経験を踏まえた指導を行うことができた。「教職実践演習」の授業において、プロジェクト型の学習や模擬授業を行い、四年間の学修の振り返りを行った。また、専門科目では、「社会」の授業において、名東区まちたんけんの活動を行い、教材研究について体験を通じて考えさせることができた。「社会科教育法」の授業において、模擬授業を通じて、学生たちに小学校現場を想定した社会科授業運営のあり方について考えさせることができた。「生活」の授業では、学校たんけんの活動を通じて、探究型の活動を行い、学生同士の交流を深めることもできた。「生活科教育法」の授業では、平和公園たんけんを通じて、身近な環境からの教材づくりについて考えさせることができた。「基礎演習Ⅰ」の授業において、劇団うりんこの川原美奈子氏をゲスト・スピーカーとして招聘し、人間関係育成のワークショップを実施することができた。「総合演習Ⅱ」の授業において、同川原氏より、保育実習・教育実習を控える学生たちに対して、現場で活用できるアクティビティを教えていただくことができた。「サービス・ラーニング実習Ⅰ」「サービス・ラーニング実習Ⅱ」の授業において、名東区内小学校、幼稚園、名東文化小劇場や名東図書館と連携し、サービス・ラーニング実習をサポートすることができた。

○作成した教科書・教材

授業の内容理解を促すために、自作プリントや、スライド資料、映像教材を編集、作成した。名東区内諸機関との連携に向けた『サービス・ラーニング ハンドブック（第5版）』をサービス・ラーニング委員会との共同で編集・刊行した。

○自己評価

教育活動に関する自己評価として、実習科目に重点的に取り組んだことがある。とりわけ、「教育実習Ⅱ（小学校）」「教育実習Ⅱ事前事後指導」の授業において、小学校教育実習関係の連絡・調整を意識的に取り組み、学生の小学校教実習経験をサポートできた。「サービス・ラーニング実習Ⅰ・Ⅱ」の授業において、地域や学内外での様々な行事や活動に、学生を積極的に参加させることができた。また、講義科目では、パワーポイントを活用したり、DVDなど視覚に訴える教材提示を行ったりして、学生の興味を惹きつけることができた。さらに、演習科目では、学生の問題意識を引き出し、個人やグループでの追究テーマに基づいた探究型の学習活動を行うことができた。協同的な活動を通して、学生同士の交流も深まったことが評価できる。

Ⅱ 研究活動

○研究課題

問題解決学習を創出した社会科授業研究に関する基礎的研究

○目標・計画

（目標）

本研究は、問題解決学習を創出した社会科授業研究に関して、愛知県東三河地方における社会科授業研究を事例として、資料分析及び質問紙調査により、その実態を解明することをめざす。

（計画）

問題解決学習を創出した社会科授業研究に関して、愛知県東三河地方における社会科授業研究の資料収集及び検討を行う。事例の一つとして、新城市立新城小学校が構築した「授業研究システム」がある。それは、普段の授業づくりに多くの示唆を得ることをめざし、効率的で実質的な校内授業研究会の手続きとして確立されたものである。新城小学校の「授業研究システム」が、その後の社会科授業研究に与えたインパクトについて、資料分析により、その実態を解明することをめざす。

○2011年4月から2019年3月の研究業績（特許等を含む）

（著書）

- ・白井克尚「第3章 小学校の授業参観とサービス・ラーニング」pp. 27-37 「第9章 サービス・ラーニング実習におけるリフレクション」pp. 95-110 愛知東邦大学地域創造研究所編『教員と保育士の養成における「サービス・ラーニング」の実践研究』唯学書房, 2019年2月
- ・白井克尚『子どもの思いや気づきを生かす生活科の授業づくり—新教科創設期の実践に学ぶ—』（平成27（2015）年度～平成29（2017）年度 JSPS 科研費 若手研究（B）課題番号 15K17411 研究成果報告書）三恵社, 2018年3月, 全70頁
- ・白井克尚「社会科における野外観察・地域調査」原田智仁編著『社会科教育のルネサンス—実践知を求めて—〔第2版〕』教育情報出版, 2016年3月, pp. 97-100
- ・白井克尚「社会科における野外観察・地域調査」原田智仁編著『社会科教育のルネサンス—実践知を求めて—』保育出版社, 2016年4月, pp. 97-100

- ・白井克尚「過去の解釈型歴史学習実践に学ぶー山本典人実践と加藤公明実践よりー」土屋武志・岡崎市社会科研究会編著『実践から学ぶ解釈型歴史学習ー子どもが考える歴史学習へのアプローチ』梓出版社, 2015年3月, pp. 26-38

(学術論文)

- ・渡邊巧・白井克尚・村井大介・岡田了祐「生活科カリキュラムにおける教科論の変容とその社会的背景ー子どもの生活環境としての「家庭」に注目してー」初等教育カリキュラム学会『初等教育カリキュラム研究』第7号 2019年3月 共著 (査読有り)
- ・Katsuhisa Shirai: Characteristics of Social Studies Lesson Study in Mikawa Area, Aichi Prefecture, Japan: The Case of 6th Grade “I want to know more about the nearest country, Korea!” The Indonesian Journal of Social Studies Vol 2, No 1 (2018) 2019年2月 pp. 108-117 (査読有り)
- ・白井克尚「問題解決学習を創出した社会科授業研究の論理と実際ー愛知県新城市立新城小学校の授業研究システムを手がかりにー」日本社会科教育学会『社会科教育研究』第135号 2018年12月 pp. 27-39 (査読有り)
- ・白井克尚・行田臣「主体的・対話的で深い学びを実現した総合的学習の時間のカリキュラム・マネジメントに関する事例研究ー小3『詩のボクシング』の実践の検証を通じてー」愛知東邦大学『東邦学誌』第47巻1号, 2018年6月, pp. 19-36 (査読無し)
- ・白井克尚「新教科創設期における生活科の授業づくりに関する研究ー愛知県宝飯郡御津町立御津南部小学校の開発研究を事例としてー」日本教科教育学会『日本教科教育学会誌』第40巻4号, 2018年3月, pp. 1-11, (査読有)
- ・白井克尚「新教科創設期における生活科のカリキュラム開発に関する研究ー愛知県宝飯郡御津町立御津南部小学校の『単元指導計画』の作成過程を中心にー」愛知東邦大学『東邦学誌』第46巻2号, 2017年12月, pp. 47-67
- ・白井克尚『『伝統と文化』に関する総合的学習の意義についての一考察ー地域の伝統芸能を生かした実践の検証を通じてー』『東邦学誌』第46巻1号, 2017年6月, pp. 1-16 (査読無)
- ・白井克尚『『新しい郷土教育』実践史研究の課題と方法ー教師のライフヒストリー・アプローチを手がかりにー』『教育実践学論集創立20周年記念特別号』兵庫教育大学連合大学院学校教育学研究科, 2017年2月, pp. S41-S48
- ・白井克尚・伊奈和彦・鶴飼雅弘・成瀬友弘・尾崎綾亮・佐藤公保「大学における地域の埋蔵文化財を活用した体験型歴史学習のプログラム開発ー愛知県埋蔵文化財調査センターとの連携を通じてー』『東邦学誌』愛知東邦大学, 第45巻2号, 2016年12月, pp. 129-143
- ・白井克尚「大学における地域の歴史遺産を活用したNIE実践の開発ーピースあいちとの連携を通じてー』『東邦学誌』愛知東邦大学, 第45巻1号, 2016年6月, pp. 111-123
- ・白井克尚「1950年代前半における郷土のフィールド・ワークを活用した社会科授業づくりに関する考察ー東京都世田谷区東玉川小学校の福田和による『新しい郷土教育』実践を事例としてー』『社会科教育研究』日本社会科教育学会, 第126号, 2015年12月, pp. 27-37 (査読有)
- ・今津孝次郎・新實広記・西崎有多子・柿原聖治・伊藤龍仁・白井克尚「保育士と教員の養成における『サービス・ラーニング』の試み』『東邦学誌』愛知東邦大学, 第44巻第1号, 2015年6月, pp. 211-232
- ・白井克尚「1950年代前半における『新しい郷土教育』実践の創造課程に関する歴史的研究ー郷土

教育全国連絡協議会の教師たちの取り組みを中心に」 博士学位論文, 兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科, 2015年1月

- ・白井克尚「1950年代前半における『新しい郷土教育』実践の創造課程に関する一考察—郷土教育全国連絡協議会の『理論』と『実践』の関わりに焦点を当てて—」『東邦学誌』愛知東邦大学, 第43巻第2号, 2014年12月, pp. 59-76
- ・白井克尚「1950年代前半における戦後の郷土教育運動の地域的展開—岡山県・月の輪古墳発掘運動の中の教育実践に着目して—」『教育実践学論集』兵庫教育大学連合大学院学校教育学研究科, No. 15, 2014年3月, pp. 67-78 (査読有)
- ・白井克尚「相川日出雄による郷土史中心の小学校社会科授業づくり—『新しい地歴教育』実践の創造過程における農村青年教師としての経験と意味—」『社会科研究』全国社会科教育学会, No. 79, 2013年11月, pp. 13-24 (査読有)
- ・白井克尚「1950年代の中学校における郷土教育実践の特質に関する一考察—愛知県知多郡横須賀中学校の杉崎章の取り組みに即して—」『学校教育研究』日本学校教育学会, No. 28, 2013年7月, pp. 97-108 (査読有)
- ・白井克尚「社会科教員の専門性形成に『考古学』を活かす—愛知県埋蔵文化財調査センターとの連携を通して—」『探究』愛知教育大学社会科教育学会, No. 24, 2013年3月, pp. 24-31
- ・白井克尚「相川日出雄のライフヒストリー研究—小学校社会科としての専門性形成に焦点を当てて—」『歴史教育史研究』歴史教育史研究会, No. 10, 2012年12月, pp. 25-47
- ・白井克尚「(研究ノート) 相川日出雄の郷土教育実践を支えた考古学研究—『考古学と郷土教育』を手がかりに—」『社会科教育研究』日本社会科教育学会, No. 115, 2012年2月, pp. 90-102 (査読有)

(学会発表)

- ・渡邊巧・白井克尚・村井大介・岡田了祐「社会科の専門家たちは、いかに生活科の構想・発展に取り組んできたのか—成立期における議論とその構造に注目して—」兵庫教育大学, 加東市, 社会系教科教育学会, 第30回研究発表大会, 2019年2月10日)
- ・白井克尚「戦後の郷土教育運動における「地理教育」の展開—渋谷忠男の「世界地理の学習」に焦点を当てて—」(兵庫教育大学, 加東市, 社会系教科教育学会, 第30回研究発表大会, 2019年2月9日)
- ・渡邊巧・岡田了祐・白井克尚・村井大介「中野重人はいかに生活科の構想・発展に取り組んできたのか—生活科教育の具体化とその過程—」初等教育カリキュラム学会, 第3回大会(第4会場), 広島大学 2019年1月6日
- ・白井克尚「問題解決学習を創出した社会科授業研究の論理と方法—愛知県新城市立新城小学校の「授業研究システム」を手がかりに—」日本社会科教育学会 第68回全国研究大会(奈良教育大学, 奈良市) 2018年11月3日 『日本社会科教育学会 全国大会発表論文集』第14号, pp. 38-39
- ・渡邊巧・白井克尚・村井大介・岡田了祐・永田忠道「(自由企画型フォーラム) 社会科の専門家たちは、いかに生活科の構想・発展に取り組んできたのか—各地域における授業論の語りと実際より—」全国社会科教育学会 第67回全国研究大会(山梨大学, 甲府市) 2018年10月20日 『全国社会科教育学会 第67回全国研究大会 発表要旨集録』 p. 51

- ・渡邊巧・白井克尚・村井大介・岡田了祐「生活科カリキュラムにおける教科論の変容とその社会的背景—子どもの生活環境としての「家庭」に注目して—」日本教科教育学会 第44回全国大会（日本体育大学世田谷キャンパス, 東京都世田谷区） 2018年9月8日 『日本教科教育学会全国大会論文集』44, pp. 20-21
- ・白井克尚・行田臣「主体的・対話的で深い学びを実現する総合的な学習の時間のカリキュラム・マネジメントに関する事例研究—小3「詩のボクシング」の実践の検証を通じて—」日本生活科・総合的学習教育学会 第26回全国大会（札幌市） 2017年6月16日 『日本生活科・総合的学習教育学会 第26回全国大会 北海道大会』p. 243
- ・白井克尚「地域における多文化共生社会を理解する教員・保育士養成の実践—教育学部ゼミでのフィールド・ワークを通じて—」第56回 愛知県世界史教育研究会, 2018年3月31日（愛知大学 笹島キャンパス, 名古屋市）
- ・Katsuhisa Shirai: Research on Lesson Study for the Curriculum Development of Life Environment Studies During Establishment as a New Subject in Japan, **World Association of Lesson Studies (WALS) International Conference 2017 26 November 2017, Nagoya University, Japan, Abstract Number: 20110**
- ・白井克尚「愛知県東三河地域における社会科授業研究の系譜に関する一考察—新城市立新城小学校の「授業研究システム」を事例として—」全国社会科教育学会 第66回全国研究大会（広島大学, 東広島市）『全国社会科教育学会 第66回全国研究大会 発表要旨集録』p. 82
- ・白井克尚・原田三朗「小学校教師における生活科授業像の形成過程とその要因—新教科創設期に焦点を当てたライフヒストリー的アプローチを通して—」日本生活科・総合的学習教育学会 第25回全国大会（豊島区立西池袋中学校, 東京都） 2017年6月17日 『日本生活科・総合的学習教育学会 第26回全国大会 東京大会』p. 116
- ・白井克尚（招待）「地元埋蔵文化財を活用した体験型歴史学習—ハンズオン—」第2回インタラクティブ・ティーチング中部研究会, 2017年5月27日（名古屋大学教育学部, 名古屋市）
- ・白井克尚（ポスター）「新教科創設期（1989-1991）における生活科の授業づくり—愛知県宝飯郡御津町立御津南部小学校の取り組みに焦点を当てて—」ほのくに生活科・総合的学習研究会, 2017年2月（Book Café Nido, 豊川市）
- ・白井克尚「1950年代後半における郷土をふまえて考える小学校社会科教育実践に関する考察—渋谷忠男による「世界の地理」学習を対象として—」全国社会科教育学会 第65回全国研究大会, 社会系教科教育学会 第28回研究発表大会 合同研究大会, 2016年10月（兵庫教育大学, 加東市）
- ・白井克尚「新教科創設期における生活科に関する研究推進校の授業づくりに関する一考察—愛知県宝飯郡御津町立御津南部小学校の取り組みを事例として—」日本学校教育学会 第30回研究大会, 2016年8月（名古屋市立大学, 名古屋市）
- ・白井克尚「新教科創設期における生活科授業づくり—研究推進校の校内授業研究会を事例として—」日本生活科・総合的学習教育学会 第25回全国大会, 2016年6月（宮城学院女子大学, 仙台市）
- ・白井克尚「1950年代前半における郷土のフィールド・ワークを活用した社会科授業づくりに関する考察—東京都世田谷区東玉川小学校の福田和による「新しい郷土教育」実践を事例として—」愛知教育大学歴史学会, 2015年12月（愛知教育大学, 刈谷市）
- ・白井克尚「愛知県三河地方における戦後生活綴方運動の地域的展開—愛知作文教育者協議会の結

成と解散をめぐって」教育史学会第61回大会, 2015年10月(宮城教育大学, 仙台市)

- ・白井克尚「1950年代前半における『新しい郷土教育』実践の創造過程に関する検討—郷土教育全国連絡協議会の『理論』と『実践』の関わりに焦点を当てて—」日本社会科教育学会第63回大会, 2014年11月(静岡大学, 静岡市)
- ・白井克尚「1950年代前半における東京都の郷土教育実践の特質について—東玉川小学校の福田和による社会科授業実践の分析を通して—」社会系教科教育学会第25回研究発表大会, 2014年2月(大阪教育大学, 柏原市)
- ・白井克尚「桑原正雄による社会科教育論の構築過程—1950年代前半における郷土のフィールド・ワークの経験に関わって—」全国社会科教育学会第62回大会, 2013年11月(山口大学, 山口市)
- ・白井克尚「1950年代前半における戦後の郷土教育運動の地域的展開—岡山県・月の輪古墳発掘運動の中の教育実践に着目して—」日本学校教育学会第28回大会, 2013年7月(鳴門教育大学, 鳴門市)
- ・白井克尚「1950年代前半における小学校社会科教師の力量形成—相川日出雄の個人史研究を通して—」全国社会科教育学会第61回大会, 2012年10月(岐阜大学, 岐阜市)
- ・白井克尚「相川日出雄のライフヒストリー研究—小学校社会科教師としての専門性形成に焦点を当てて—」歴史教育史研究会第8回例会, 2012年10月(岐阜市文化センター, 岐阜市)
- ・白井克尚「1950年代前半における郷土教育運動が社会科教師教育に果たした役割—『青いリンゴの運動』に着目して—」日本社会科教育学会第62回大会, 2012年9月(東京学芸大学, 小金井市)
- ・白井克尚「1950年代前半における小学校社会科教師の専門性形成について—相川日出雄の場合—」日本学校教育学会第27回大会, 2012年7月(武蔵大学, 東京都練馬区)
- ・白井克尚「社会科教師の専門性育成に考古学を活かす—愛知県埋蔵文化財調査センターとの連携を通して—」日本社会科教育学会第61回全国研究大会, 2011年11月(北海道教育大学, 札幌市)

(その他)

- ・白井克尚「書籍紹介 教員と保育士の養成における『サービス・ラーニング』の実践研究部会」『愛知東邦大学地域創造研究所所報』No. 24, 2019年3月, p. 7
- ・白井克尚「郷土教育への関心の現在地」郷土教育全国協議会『郷土教育』第713号, pp. 2-3, 2018年12月
- ・白井克尚・長坂康代「地域における多文化共生社会を理解する教員・保育士養成の実践—教育学部ゼミでのフィールド・ワークを通じて—」愛知県世界史教育研究会『世界史教育研究』第4号, pp. 101-108, 2018年6月
- ・白井克尚「「アクティブ・ラーニングの視点を問う—小・中・高・大学で『主体的・対話的で深い学び』を育むために—」『愛知東邦大学地域創造研究所所報』No. 23, 2018年3月, pp. 4-5
- ・白井克尚「敬慕 黒川知文先生～生涯につながるご縁～」愛知教育大学歴史学会『歴史研究』第64号, 2018年3月, pp. 191-193
- ・白井克尚「愛知東邦大学における『ピースあいち』と連携した教育活動」『ピースあいち メールマガジン』Vol. 81, 2016年8月, p. 8
- ・白井克尚「教員と保育士の養成における『サービス・ラーニング』の実践研究部会」『愛知東邦大学地域創造研究所所報』No. 21, 2016年3月, p. 2
- ・白井克尚「情報読解力を育てるNIE学習」『社会科教育』明治図書, No. 663, 2014年7月, p. 7

- ・白井克尚「社会科授業で法的資質・能力を育む」『社会科教育』明治図書, No. 648, 2013年4月, p. 105
- ・白井克尚「6年『縄文から古墳へ』＝この発問→こう知覚化」『社会科教育』明治図書, No. 641, 2012年9月, p. 62
- ・白井克尚「6年『天皇中心の国づくり』＝この発問→こう知覚化」『社会科教育』明治図書, No. 641, 2012年9月, p. 63
- ・白井克尚「知っているようで知らない問題でQづくり」『社会科教育』明治図書, No. 637, 2012年5月, pp. 42-43
- ・白井克尚「ふれあい楽しみ、学力アップ」『社会科教育』明治図書, No. 635, 2012年3月, p. 9

○科学研究費補助金等への申請状況、交付状況（学内外）

- ・全国社会科教育学会：平成30年度研究推進プロジェクト事業 「社会科の専門家たちは、いかに生活科の構想・発展に取り組んできたのか？－教員養成・研修の理念と実践を中心にして－」研究期間：2018年4月－2019年3月 代表者：渡邊巧（研究分担者：白井 克尚、村井 大介、岡田了祐）
- ・愛知東邦大学地域創造研究所：教員養成における主体的・対話的で深い学びの実践研究 研究期間：2018年4月 代表者：白井克尚（研究分担者：今津孝次郎、西崎有多子、柿原聖治、伊藤数馬、橋村晴美、丹下悠史、水野正朗）
- ・平成27（2015）年度～平成29（2017）年度 JSPS 科研費 若手研究（B）課題番号15K17411 研究代表者「子どもの思いや気づきを生かす生活科の授業づくり－新教科創設期の実践に学ぶ－」

○所属学会

- 日本社会科教育学会会員（平成11年4月～）
- 全国社会科教育学会会員（平成11年4月～）
- 愛知教育大学歴史学会会員（平成12年4月～）
- 日本生活科・総合的学習学会会員（平成12年4月～）
- 日本グローバル教育学会会員（平成12年4月～）
- 日本教師教育学会会員（平成23年4月～）
- 日本学校教育学会会員（平成24年4月～）
- 社会系教科教育学会会員（平成24年4月～）
- 教育実践学会会員（平成24年4月～）
- 教育史学会会員（平成24年4月～）
- 日本教育方法学会会員（平成27年4月～）
- 日本カリキュラム学会会員（平成27年6月～）
- 日本教科教育学会会員（平成28年4月～）
- 日本公民教育学会会員（平成29年4月～）
- 社会科の初志をつらぬく会会員（平成29年4月～）
- 日本教材学会会員（平成30年10月～）

○自己評価

研究活動に関する自己評価として、個人研究では、研究目標・計画に基づいて、三本の査読付き論文を刊行できたことがある。また、学会発表として、研究目標・計画に基づいて、7回の研究大会での発表を行うことができた。さらに、愛知東邦大学地域創造研究所共同研究「教員と保育

士の養成における「サービス・ラーニング」の実践研究」の研究成果を、愛知東邦大学地域創造研究所編『教員と保育士の養成における「サービス・ラーニング」の実践研究』（唯学書房, 2019年2月）としてまとめることができた。今後も継続して研究を積み重ねていきたい。

Ⅲ 大学運営

○目標・計画

（目標）

各分掌の担当に責任をもち、協力して大学運営に当たる。

（計画）

学生委員会委員、地域創造研究所運営委員、入試問題作成委員会委員、小学校教育実習担当、ゼミ分け総合・専門、1・2年生スポーツ交流会提案、サービス・ラーニングリーダーなど、与えられた仕事に責任をもち取り組んでいきたい。

○学内委員等

地域創造研究所運営委員会委員、学生委員会委員、入試問題作成委員、幼小教職委員会委員、保育士養成課程委員会委員、教職支援センター運営委員

大学祭担当、スポーツ大会提案者、サービス・ラーニングリーダー

○自己評価

大学運営に関する自己評価として、各分掌においてそれぞれの役割を果たすことができたことがある。小学校教育実習担当として、学生の小学校教育実習をサポートすることができた。教職支援センターの運営委員として、小学校教育実習、小学校教員採用受験のサポートに取り組み、教職を志望する学生を支援することができた。学生委員として、学生生活の向上に向けて活動することができた。地域創造研究所運営委員として、講演会の運営に貢献した。入試問題作成委員会では、与えられた役割分担に責任をもって取り組むことができた。ゼミ分け総合・専門演習担当として、ゼミ分けの希望調査、集計を行った。大学祭担当として、学部企画のキッズ広場の企画・運営を行うことができた。スポーツ大会提案者として、1・2年生のスポーツ大会の提案・運営に関わった。サービス・ラーニングリーダーとして、サービス・ラーニング委員会を開催し、授業運営をスムーズに行うことができた。

Ⅳ 社会貢献

○目標・計画

（目標）

研究成果を教育活動・社会活動に活かすことができるよう地域の諸機関との連携を深め、協力・協働した取り組みを進める。

（計画）

地域の教育諸機関と連携した教員と保育士の養成におけるサービス・ラーニングの実践を、積極的に推進する。授業において、近隣小学校や近隣幼稚園、劇団うりんこなどの名東区を中心とした地域諸機関と連携した教育・研究活動を進める。また、演習活動を通じて、サービス・ラーニングに積極的に参加し、理論と実践の往還を図る。

○学会活動等

全国社会科教育学会会員（平成11年4月～）

理事（平成29年4月～）

愛知教育大学歴史学会会員（平成 12 年 4 月～） 常任委員（平成 12 年 4 月～）

日本生活科・総合的学習学会会員（平成 12 年 4 月～） 会計監査（平成 29 年 6 月～）

○地域連携・社会貢献等

- ・平成 31 年 2 月 12 日 東邦高等学校高大連携授業講師「小学校教師になるには」担当（愛知東邦大学）
- ・平成 30 年 11 月 12、19、26 日 東邦高等学校高大連携授業講師「野球・サッカー・世界のスポーツの歴史」担当（愛知東邦大学）
- ・平成 30 年 10 月 27 日 第 68 次 愛知県教育研究集会「教育条件整備」分科会 助言者（ウインクあいち）
- ・平成 30 年 8 月 23 日 教員免許更新講習 講師「特別支援の子どもと保護者の対応」（愛知東邦大学）

○自己評価

社会貢献に関する自己評価として、様々な地域機関と連携して活動することができたことがある。今後も、様々な地域機関との連携の可能性を探りながら、協力・共同体制を構築していきたい。

V その他の特記事項（学外研究、受賞歴、国際学術交流、自己研鑽等）

VI 総括

大学教員として 5 年目の生活を迎え、落ち着いた環境の中で教育活動・研究活動・社会貢献活動を行うことができた。これも教職員の皆様のご支援・ご協力の賜物だと考える。

教育面では、とりわけ、実習科目に重点的に取り組んだことがある。「教育実習Ⅱ（小学校）」「教育実習Ⅱ事前事後指導」の授業において、小学校教育実習関係の連絡・調整を意識的に取り組み、学生の小学校教実習経験をサポートできた。「サービス・ラーニング実習Ⅰ・Ⅱ」の授業において、地域や学内外での様々な行事や活動に、学生を積極的に参加させることができた。

また、研究面では、個人研究として問題解決学習を創出した社会科授業研究の論理と実際に関する検討を深め、査読付論文としてまとめることができた。さらに、地域創造研究所共同研究「教員と保育士の養成におけるサービス・ラーニングの実践研究」部会主査として研究を進めてきた成果として、愛知東邦大学地域創造研究所編『教員と保育士の養成における「サービス・ラーニング」の実践研究』（唯学書房、2019 年 2 月）を刊行することができた。

さらに、大学運営面においては、とりわけ、教職支援センターの運営委員として、小学校教育実習、小学校教員採用受験のサポートに取り組み、教職を志望する学生を支援することができた。そして、社会貢献面においては、「サービス・ラーニング」を通じた地域諸機関との連携や、学内外での講師など様々な活動を行うことができた。

次年度も、小学校教育実習担当、教育実習Ⅱ事前事後指導担当、教職実践演習担当、教職支援センター運営委員などの活動に、意欲的に取り組み、教職員の方々と協働し、地域諸機関との連携を深めながら、研究活動、教育活動、社会貢献に積極的に取り組んでいきたい。

以 上

所属学部 学科	職位	氏 名
教育学部 子ども発達学科	准教授	新實 広記
最終学歴	学 位	専門分野
愛知教育大学大学院教育学研究科 芸術教育専攻修士課程	修士 (学術)	図画工作・造形

I 教育活動

○目標・計画

(目標)

小学校教諭・保育者（幼稚園教諭及び保育士）養成課程において、学生が主体的に学ぶ姿、学べる環境を大切にしたい。さらに、卒業後にも教育・保育実践力を自ら育てていくことができる人材を育成することが重要であると考えている。そのためには、地域連携を活用した教育を授業に取り入れ、大学での学びと現場での学びを効果的に構成し学生の実践力を育てていくことが重要であると考えている。私が目標とするものは「実践力」を大学在籍中にどのようにしたら十分に身につけられるかではなく、将来現場で「実践力を自ら主体的になって育てていくことができる人間力」を身につけることである。それは「真に信頼して事を任せうる人格の育成」と一致する目標である。そのためには、連携して頂ける教育現場、保育現場を大学周辺地域に増やし信頼を得ながら学生が主体的に学べる地域連携授業の教育プログラムの整備に今年度も継続して努力し続けることが不可欠である。愛知東邦大学の学生が地域に信頼される学生になり卒業時には人間力をもって現場で活躍できる人材になるように全力でサポートをしていくことが目標である。

(計画)

- ・サービス・ラーニングへの参加を促し、子供との触れ合いや現場教員との関わりから、不安や苦手意識を克服できるようにサポートする。
- ・保育・教育現場における実践例の最新の情報や方法を学会や現場教員と共有し、授業内において学生にも伝えていく。その方法としては、映像や画像の視覚資料を多く準備し、具体的に保育者の姿をイメージできるように心掛ける。
- ・学生の主体的な学びになるように、計画、準備、実施、評価を学生主体で体験的に学べる環境を整える。
- ・学生の体験的な理解を大切にするために、地域向との連携を通して造形ワークショップを行う。

○担当科目（前期・後期）

（前期）図画工作、サービス・ラーニング実習Ⅰ、基礎演習Ⅰ、総合演習Ⅰ、専門演習Ⅰ、専門演習Ⅲ

（後期）保育内容（造形表現）、図画工作科教育法、総合表現技術、サービス・ラーニング実習Ⅱ、基礎演習Ⅱ、総合演習Ⅱ、専門演習Ⅱ、専門演習Ⅳ、卒業研究

○教育方法の実践

昨年度から継続している授業改善の目標として、「授業の事前事後学習」がある。今年度は、図工室を希望者に授業時間外に開放するシステムを整備した。

さらに近隣の幼稚園と連携して、学生が大学で学んだことの実践の場として、保育、教育現場で

復習を試みることができる環境も促した。

○作成した教科書・教材

- ・新實広記、西崎有多子、柿原聖治、伊藤龍仁、白井克尚、中島弘道、伊藤数馬、白井克尚、今津孝次郎「サービス・ラーニングハンドブック 第4版」発行 愛知東邦大学 教育学部 2019（平成31）年3月
- ・新實広記、西崎有多子、柿原聖治、伊藤龍仁、白井克尚、中島弘道、伊藤数馬、白井克尚、今津孝次郎「サービス・ラーニングハンドブック 第4版」発行 愛知東邦大学 教育学部 2018（平成30）年3月
- ・新實広記、西崎有多子、柿原聖治、伊藤龍仁、白井克尚、中島弘道、伊藤数馬、白井克尚、今津孝次郎「サービス・ラーニングハンドブック 第3版」発行 愛知東邦大学 教育学部 2017（平成29）年3月
- ・新實広記、西崎有多子、柿原聖治、伊藤龍仁、白井克尚、中島弘道、伊藤数馬、白井克尚、今津孝次郎「サービス・ラーニングハンドブック 第2版」発行 愛知東邦大学 教育学部 2016（平成28）年3月
- ・新實広記、西崎有多子、柿原聖治、伊藤龍仁、白井克尚、今津孝次郎「サービス・ラーニングハンドブック 第1版」発行 愛知東邦大学 教育学部 2015（平成27）年3月

○自己評価

図画工作、造形表現関連科目の学生による授業評価アンケートの結果では、今年度も「この授業の事前事後学習を行ないましたか」は、他の項目に比べ評価は低かった。しかしながら、図工室を開放するシステムを整えたことで、模擬授業の準備をするなど一定の効果が見られ、「学生が主体的に取り組める学習方法」にも繋げることができたようだ。今後も学生が主体的に取り組めるような授業づくりを試み、事前事後学習する学生としない学生の差が出ないように、グループワークなどを取り入れていきたい。

幼稚園と連携した演習活動では、学生中心の計画、準備、実践、評価を行うことができた。学生が保育・教育実践力を身につけるため、今後も学生が主体になって学べる教育環境づくりに力を入れていきたい。

II 研究活動

○研究課題

- ・教育学部におけるサービス・ラーニング
- ・保育現場、小学校における子どもの造形遊び（教材・題材）研究とその意義
- ・美術空間の創造
- ・図画工作科教育法の教科書執筆

○目標・計画

（目標）

今年度も、サービス・ラーニングを活用して、行政や教育現場、企業と地域連携し、さまざまな造形ワークショップ、展覧会を開催する。活動を通して、子ども達やその保護者、教育現場教員に体験的に美術教育の意義を理解していただき、美術教育の意義を伝えていくことを目標とする。また、学生や 幼・保・小・中の教育現場へ授業プログラムとして提供できるように教科書の執筆や現場教員の研修にも講師として取り組む。

(計画)

- ・小学校教諭、保育者養成における表現関係科目の造形に関する教材、題材、技法、造形表現活動の意義についてこれまでの研究成果を論文にまとめる。
- ・現在執筆中の図画工作科教育法の教科書の完成をする。
- ・今年度も、美術作品の展示と鑑賞教室、アーティストトークで学校の校舎を美術館にする「学校美術館」を行う。
- ・日本美術教育学会学会誌編集委員を継続して行う。
- ・空間と彫刻表現の可能性を探る作品制作と展示を行う。

○2011年4月から2019年3月の研究業績(特許等を含む)

(著書)

- ・『教員と保育士の養成における「サービス・ラーニング」の実践研究』共著第5章 幼稚園・小学校におけるサービス・ラーニング(新實 広記)唯学書房 2019(平成31年)2月
- ・樋口一成 新實広記 他 『幼児造形の基礎 乳幼児の造形表現と造形教材』共著 萌文書林 第3章 幼児の造形教育の教材-材料や技法の基礎理解「版画①」版の種類や用具の使い方 pp. 68-69 第4章 幼児造形教育への実践-大学での実技体験や教育現場での実践例「コラージュ」pp. 130-131、「ゴム版をつくろう」pp. 156-157、「木を切る・打つことからの展開」pp. 166-167、「共同での制作-ものづくり交流の教材実践」pp. 200-201 2018(平成30年)11月
- ・大橋功(著, 監修, 編集) 『美術教育概論 新訂版』共著 日本文教出版 幼児造形表現 カリキュラムマネジメント 2018(平成30年)10月
- ・辻泰秀 新實広記 他 『造形教育の手法 えがく・つくる・みる』共著 萌文書林 第3章 「版画」スチレン版画 pp. 66-67 第5章 「デザイン・映像メディア表現」 モダンテクニックとその活用 pp. 118-119 モダンテクニックを活用した紙芝居づくり pp. 120-121 モザイクで表す pp. 170-171 2017(平成28年)3月
- ・辻泰秀 新實広記 他 『幼児造形の研究 保育内容「造形表現」』共著 萌文書林 第3章 「幼児の造形教育の教材-材料や技法の基礎理解」pp. 68-69 第4章 「幼児造形教育への実践 -大学での実技体験や教育現場での実践」pp. 126-127 pp. 148-149 pp. 158-159 pp. 194-195 2013(平成26年)4月

(学術論文)

- ・古市久子、新實広記、矢内淑子、伊藤数馬、「保育士・教員養成課程の表現科目における共感的要素を使った教授法 III -造形表現の授業の分析を通して-」東邦学誌 第46巻第1号 2017(平成29年)6月10日発行
- ・辻泰秀、早矢仕晶子、新實広記、江村和彦「造形教育における美術鑑賞の指導法(2)」-「学校美術館」でのギャラリー・トークの方法-岐阜大学教育学部研究報告 人文科学 第65巻 第2号 2017(平成29年)3月
- ・古市久子、矢内淑子、伊藤数馬、新實広記「保育士・教員養成課程の表現科目における共感的要素を使った教授法 II -授業実践を通して-」東邦学誌 第45巻第2号 2016(平成28年)12月発行
- ・古市久子、矢内淑子、新實広記、伊藤数馬「保育士・教員養成課程の表現科目における共感的要素を使った教授法 I -保育実践教科書を分析する-」東邦学誌 第44巻第2号 2015(平成27年)12月発行

- ・新實広記「保育者養成課程における地域連携を活用した造形表現科目の授業改善—保育実践力の育成を目指した取り組み—」東邦学誌 第43巻1号 2014（平成26）年6月発行
- ・新實広記、藤重育子、西濱由有、矢藤誠慈郎「保育者養成課程における表現関係科目の教育内容に関する研究（2）」東邦学誌 第41巻2号 2012（平成24）年12月発行
- ・辻泰秀・清水英樹・新實広記・林和貴子「地域における『学校美術館』の実践（1）—『学校美術館』の意義と実践事例—」岐阜大学教育学部研究報告 教育実践研究 第15巻 2012（平成24）年3月
- ・新實広記、藤重育子、西濱由有、矢藤誠慈郎「保育者養成課程における表現関係科目の教育内容に関する研究（1）」東邦学誌 第41巻2号 2012（平成24）年12月発行

（学会発表）

- ・山田唯仁、辻泰秀、新實広記「学校美術館」鑑賞教育プロジェクト2—作品・アーティスト・子どもをつなぐ活動— 美術科教育学会 2017（平成29）年3月28日
- ・新實広記「世界子ども絵画展の可能性」ものづくり教育会議 日本美術教育学会東海地区研究会ポスター発表 2015（平成27）年12月
- ・新實広記「大学・学校・園・美術館との連携による学校美術館と造形ワークショップの実践」2015（平成27）年11月 全国造形教育連盟 日本教育美術連盟 岐阜県造形教育連盟
- ・新實広記 公開授業II アーティストによる造形ワークショップ 2015（平成27）年11月 全国造形教育連盟 日本教育美術連盟 岐阜県造形教育連盟
- ・新實広記 公開授業I「学校美術館」アーティストによるギャラリートーク 2015（平成27）年11月 全国造形教育連盟 日本教育美術連盟 岐阜県造形教育連盟
- ・新實広記「ガラス廃棄便を生かした造形教育活動の可能性」口頭発表 ものづくり教育会議 2014（平成26）年11月
- ・「学校美術館」の可能性 ポスター発表 大学美術教育学会 辻泰秀、山本政幸、新實広記 2013（平成25）年10月13日

（その他）

<報告書>

- ・「てのこば—あそび、つくる、育ちの日々—」ものづくり教育会議 vol.3 2018（平成29）年7月
- ・「てのこば—あそび、つくる、育ちの日々—」ものづくり教育会議 vol.2 2017（平成29）年7月27日
- ・今津孝次郎、新實広記、西崎有多子、柿原聖治、伊藤龍仁、白井克尚「教員と保育士の養成における「サービス・ラーニング」の試み」東邦学誌 第44巻第1号 2015（平成27）年6月
- ・新實広記「ガラス廃棄瓶を使用した教材研究—小学生・幼児を対象とした造形ワークショップの取り組み—」ものづくり教育研究 NO.5 ものづくり教育会議 2014（平成26）年3月
- ・新實広記「保育者養成校における地域連携事業—小学生・幼児を対象とした造形ワークショップの取り組み—」ものづくり教育研究 NO.4 ものづくり教育会議 2013（平成25）年3月
- ・新實広記「大人と子どもが共に学ぶワークショップ」ものづくり教育研究 NO.3 ものづくり教育会議 2012（平成24）年3月

<主要作品発表>

- ・新實広記「Vessel」コミッションワーク 野外彫刻 2019年1月 PARK FRONT 香椎照葉 /東区・福岡

- ・新實広記「itoten」グループ展 2018年10月代官山ヒルサイドテラス/代官山・東京
- ・新實広記「第7回 現代ガラス展 in 山陽小野田」土屋良雄審査員賞 2018年7月
山口県立萩美術館 / 山口
- ・新實広記「VESSEL-光のうつわ-」個展 2018年7月 豊田市民芸の森 日本多静雄亭/ 豊田・愛知
- ・新實広記「光の図形」個展 2018年4月 masayoshi suzuki gallery / 岡崎・愛知
- ・新實広記「十人十色 ガラスの展覧会 Vol.5～伊賀秋色～ イートーテン」 2017年11月 史跡旧
崇広堂 /伊賀市
- ・新實広記 「十人十色ガラスの展覧会 ～黒壁秋色～ イートーテン」 2017年10月 慶雲館 /
長浜市
- ・新實広記 「新實広記展-名づけられた光-」個展 2017年5月 Cassina ixc. DELL' ARTE Art
Gallery/青山・東京
- ・新實広記 「BOX展-繋ぐ」日本建築美術工芸協会 優秀賞 2017年4月 建築会館 (東京)
- ・新實広記 「現代ガラスの表現展」グループ企画展 2016(平成28)年12月 大一美術館(愛
知)
- ・新實広記 「第3回街に飛び出す作品展」2016(平成28)年10月 AACA 建築会館 (東京)
- ・新實広記 「とよたルミアール・プロジェクト 新實広記展」個展 企画展 2016(平成28)年
8月 豊田市役所東庁舎展示スペース (愛知)
- ・新實広記 「feeling in glass 感じとるかたち」グループ企画展 2016 (平成28)年4月 富
山市ガラス美術館 (富山)
- ・新實広記 「街なかミュゼ」中野哲学堂集合住宅コンペ野外彫刻採用 2016(平成28)年1月
AACA 建築会館 (東京)
- ・新實広記 「大手町 JX タワーホトリア広場野外彫刻設置」2015(平成27)年12月 大手町 JX
タワー (ホトリア広場)
- ・新實広記 「農村舞台アートプロジェクト」個展 平成26年度文化庁 地域発・文化芸術創造発
信イニシアチ 2014(平成26)年8月 (加塩町加塩神社農村舞台) 主催/豊田市・豊田市教育
委員会(財)豊田市文化振興財団
- ・新實広記 「時の記憶 -美術展-」グループ展 2014(平成26)年2月 知立市文化会館パティオ
池鯉鮒
- ・新實広記 「ヒカリノカケラ」個展 2013(平成25)年5月スペース AQUA
- ・新實広記 「Vessel」個展 企画展 2013(平成25)年4月 Masayoshi Suzuki gallery
- ・新實広記 「ARTISTS FILE 04」グループ展 2012(平成24)年8月 Masayoshi Suzuki gallery
- ・新實広記 「足助の町並み芸術さんぽ」企画展 2011(平成23)年11月 主催/AT21倶楽部・足
助観光協会 後援/豊田市教育委員会 協賛/足助商工会・足助交流館(株)三州足助公社 足助
中央商店街協同組合
- ・新實広記 「豊田市制60周年記念農村舞台アートプロジェクト」個展 2011(平成23)年9月
(細田町細田神社農村舞台) 主催/豊田市・豊田市教育委員会(財)豊田市文化振興財団
- ・新實広記 「SELECTION:01」グループ展 2011(平成23)年9月 Masayoshi Suzuki gallery
- ・新實広記 「新實広記・畑中篤 二人展」瀬戸新世紀工芸館企画展 2011(平成23)年4月 主催
瀬戸市文化振興財団、瀬戸新世紀工芸館、瀬戸市

○科学研究費補助金等への申請状況、交付状況(学内外)

- ・科学研究費助成事業研究分担者 基盤研究（B）（一般）申請
研究代表者 名古屋経済大学短期大学部 准教授 藤田雅也
研究課題名『みること』に重点を置いた保育・幼児教育のプログラム開発と実践的研究
研究期間 平成 29 年度～平成 30 年度）不採択

○所属学会

日本美術教育学会、大学美術教育学会、日本保育学会、日本建築美術工芸協会、全国大学造形美術教育教員養成協議会、ものづくり教育会議

○自己評価

保育者養成における子どもの造形表現指導法では、これまでの研究成果を『幼児造形の基礎 乳幼児の造形表現と造形教材』共著 萌文書林 に執筆してまとめることができた。さらに幼稚園、保育園、子ども園におけるカリキュラムマネジメントの重要性について、『美術教育概論 新訂版』共著 日本文教出版に執筆してまとめることもできた。

また、2014 年度から取り組んできた「サービス・ラーニング」についても『教員と保育士の養成における「サービス・ラーニング」の実践研究』共著 唯学書房にまとめることができた。

小学校教諭の養成における図画工作科目の指導法を、これまでの研究成果を生かして『明日の小学校教諭を目指して子どもの資質・能力を育む 図画工作科教育法』（萌文書林）で現在共著執筆中である。発行は、2019 年夏を予定としている。また、毎年継続的に行っている「スクールミュージアム」の実施を今年度も行うことができ、現場小学校教諭と鑑賞学習の研究会も開催して美術の力、美術の鑑賞教育の可能性を考察することができた。

Ⅲ 大学運営

○目標・計画

（目標）

配属された教務委員会の業務を的確に迅速に行って円滑な運営に努めることはもとより、問題解決のための新たな可能性を常に考え、イノベーションを試みる。

（計画）

常に学生の教育効果を考え学生が主体的に学べる環境をつくることに努力する。新たな提案・改善を行う時は一時的な解決だけではなく「持続できる」仕組みを考え、組織的に他の委員会、教職員と連携しながら、より良い教育環境を整えていく工夫を凝らす努力を続ける。

○学内委員等

教務委員会委員、幼小教職委員会委員、保育士養成課程委員会委員、教職課程再課程認定委員会委員

○自己評価

再過程認定運営委員会ではカリキュラムの見直しや、再過程認定に必要な書類の準備、的確に議論できるように、教員への説明、協力を依頼してきたが、今年度無事に認可されることができた。教務委員会においては、教育学部初年度から携わっており、来年度からの新カリキュラムと旧カリキュラムに関する問題点や課題を教職員からの意見も交え整理しカリキュラムの改善、履修登録の説明の工夫、履修モデルの改善などを行うことができた。

大学運営においては、与えられた業務を的確に迅速に行って、今年度も円滑な運営に努めることができた。今後も学生と向き合いながら、教員と職員との連携を大切にして、情報や課題を共有

しながら学生が主体的に学ぶことのできる環境を積極的に工夫していきたい。

IV 社会貢献

○目標・計画

(目標)

地域や教育現場との連携を大切にし、自らの専門知識を地域に還元し、教育現場や社会における多様な課題に積極的に取り組む。

(計画)

学内においては、地域と連携した教育を通して積極的に地域の教育活動に貢献する。学外においては、学会活動や教育現場、行政、企業などと協力し、子どもの造形ワークショップ、展覧会の企画、運営を行う。また、これらの研究成果を社会に発信し、愛知東邦大学と地域との連携をさらに深める。

○学会活動等

- ・ものづくり教育会議 会員 (2012～現在) 会長 (2018～)
- ・日本美術教育学会 会員 (2010～現在) 大会編集委員 (2010～)
- ・大学美術教育学会 会員 (2010～現在)
- ・日本保育学会 会員 (2012～現在)
- ・全国大学造形美術教育教員養成協議会 (2015～現在) 事務局 (2016～)

○地域連携・社会貢献等

- ・教員免許状更新講習 選択領域 6 時間「幼児造形・図画工作研究」講師 2018 (平成 30) 年 8 月
- ・「弥富市立十四山東部小学校学校美術館プロジェクト」作品展示・鑑賞教室・アーティストトーク 講師 2018 (平成 30) 年 12 月 弥富市立十四山東部小学校
- ・愛知県私立幼稚園連盟 2 年目教員研修会 講師 2018 (平成 30) 年 6 月

○自己評価

今年度は、これまで行ってきた造形表現指導の研究成果を愛知県私立幼稚園連盟の 2 年目研修会の講師として教育現場に伝えることができた。地域連携では、近隣の幼稚園と連携して造形ワークショップを行ったり、小学校での鑑賞学習などを通して、今後の個人の課題、保育現場の課題などを知ることができた。たくさんいただくことができた。毎年、継続的に教育現場から造形ワークショップの依頼があることから、地域に造形活動の意義や信頼を得られていると評価したい。

今後も地域の保育、教育現場の多様な課題と向き合い、造形表現活動の意義とその可能性を研究していきたい。

V その他の特記事項 (学外研究、受賞歴、国際学術交流、自己研鑽等)

- ・平成 30 年度とよしん育英財団 教育文化奨励賞 2019 (平成 31) 年 3 月 28 日 (公財) とよしん育英財団
- ・「第 7 回 現代ガラス展 in 山陽小野田」土屋良雄審査員賞 2018 年 7 月

VI 総括

今年度は、これまでの研究成果を共著で著書3冊にまとめられた。現在は、図画工作教育法の研究成果を教科書に共著でまとめ、来年度春の完成に向けて執筆を開始できた。今後も美術教育の理論及び実践の研究を深めていき、実践事例に基づいた指導案や図版、を実践集としてまとめ、教育・保育の現場に頒布することで、その知見と開発した方法論を提供していきたい。

また、教育活動においては、事前事後学習に関して学生が主体的に取り組める教授方法、環境整備を工夫し実行することができた。その結果、授業時間外の図画工作科目における学生の自主的な学習時間も増えた。しかしながら、授業評価アンケートの結果からは、今年度も「事前事後学習の改善」に取り組んだ学生とそうでない学生の差が大きく出てしまった。今後は幼稚園や小学校と連携して「サービス・ラーニング」実習を事前事後学習に組み合わせる工夫をしていきたい。

そして、研究活動と合わせて各委員会で与えられた業務を迅速かつ的確に行い、様々な改善や提案をしながら、共に働く仲間、共に学ぶ学生に「感謝」して大学教育全体の発展へとつなげていくことを目標としていく。

以 上

所属学部 学科	職位	氏 名
教育学部 子ども発達学科	准教授	橋村 晴美
最終学歴	学 位	専門分野
名古屋経済大学大学院人間生活科学研究科修了	修士 (保育学)	カリキュラムマネジメント、 幼児指導法 (領域「言葉」)

I 教育活動

○目標・計画

(目標)

「教えられる学習者」から、「自ら探求する学習者」へと転換させる。

(計画)

さまざまな教科や実習で得たものを総合し、自分自身の子ども観や保育観を形成させていく。養成段階においては、まだ表面的にしか現場を捉えることができない。そこで、新鮮なものの方を生かすため、視聴覚教材の活用または継続的な保育現場観察を通して、保育実践者と自身の立場を比較させながら、自らの課題に気づかせ、「知識」が「知恵」に変容していくプロセスを体験させていく。

○担当科目 (前期・後期)

(前期) 保育実習事前指導 I A、アカデミックライティング、サービス・ラーニング実習 I、基礎演習 I、専門演習 I

(後期) 保育内容 (言葉)、保育実習指導 I A、保育実習 II 事前事後指導、サービス・ラーニング実習 II、基礎演習 II、専門演習 II、保育実習 I A、保育実習 II

○教育方法の実践

一方的な授業とならぬよう、ディスカッション、ディベート、プレゼンテーション等を導入して、常に双方向型の授業の運営に努めた。また演習では、実習の場において効果を発揮できるよう、量の獲得よりも質を意識した保育実践力の育成に重点を置き、指導を行った。

○作成した教科書・教材

○自己評価

集団はもちろんのこと、個別対応も大切に授業運営にあたった結果、担当科目全てにおいて、概ねの学生から安定した評価を得ることができた。

II 研究活動

○研究課題

領域「言葉」における発達の連続性に着目した保育活動の検討

○目標・計画

(目標)

乳児期のことばと幼児期のことばの連関を図る保育指導法の構築を図る

(計画)

保育現場では、乳幼児の言葉を導く保育教材として広く絵本が活用されている。しかし、大半の

保育者が絵本を場つなぎ的な道具と捉え、主活動教材として活用しているわけではない。

領域「言葉」のねらいでもある、言葉の伝え合いを可能にするためには、園全体で作成された保育課程あるいは教育課程をもとに、子どもの発達に応じた綿密な指導計画が立案されなければならない。そこで、発達の連続性を意識した絵本を使った保育活動のあり方について検討を行いたい。分析の対象は、長期指導計画と公開保育時に提示された短期指導計画の記述内容の分析を通して行うことにする。

○2011年4月から2019年3月の研究業績（特許等を含む）

（著書）

- ・井上孝之、小原敏郎、三浦主博、飯島典子、岩崎基次、請川滋大、小野瀬剛志、塩谷香、高橋貴志、恒川丹、西垣吉之、西本佳子、橋村晴美、堀田浩之、松本純子、宮本和行『つながる保育原』みらい、2018年、78-90頁
- ・成田朋子、木元有香、鈴木恒一、岸本美紀、山野栄子、橋村晴美『新・保育実践を支える人間関係』福村出版、2018年、156-203頁
- ・那須川知子、大方美香、鈴木裕子、二見素雅子、大庭三枝、富田久枝、田村佳世、西垣吉之、橋村晴美、木曾陽子『MINERVA はじめて学ぶ保育⑤保育内容総論（乳幼児の生活文化）』ミネルヴァ書房、2018年、175-187頁
- ・谷田貝公昭、大沢裕、杉山倫也、斎藤真、富山大士、小原倫子、橋村晴美、松田久美、治田哲之、細野美幸、稲葉健、大槻千秋、野澤純子、塚越康子、山田徹志、野末晃秀『幼児理解 新版』一藝社、2018年、68-77頁
- ・谷田貝公昭、大沢裕、杉山倫也、斎藤真、富山大士、佐藤秋子、小原倫子、橋村晴美、松田久美、治田哲之、大須賀隆子、稲葉健、大槻千秋、野澤純子、塚越康子、野末晃秀『幼児理解』一藝社、2017年、81-90頁
- ・伊藤健次、和泉美智恵、伊藤玲、小川英彦、荻原はるみ、小野里美帆、川上輝昭、小崎恭弘、酒井教子、園山繁樹、楯誠、一色澄、和泉美智恵、今泉依子、小野里美帆、小原榮子、塚本恵信、丹羽健太郎、橋村晴美、松下浩之、三島美砂、役田享、安原千香子、吉住敦子、吉弘淳一『新・障害のある子どもの保育 第3版』みらい、2016年、240-254頁
- ・小林重雄、伊藤健次、野呂文行、熊谷恵子、園山繁樹、平雅夫、宮本信也、青山真二、浅香由起江、雨貝太郎、阿部博志、池田奈津世、石井亜希子、伊藤玲、今本繁、内山千鶴子、大久保賢一、大隈紘子、緒方明子、小澤直美、小野學、衣笠広美、金珍熙、木村拓磨、倉光晃子、小島美枝子、今野義孝、佐竹真次、佐藤大策、塩原彩子、宗和敏明、田崎卓見、高橋甲介、高浜哲郎、多田裕夫、楯誠、谷晋二、塚本恵信、徳永一富、中島正典、新川明子、新川泰弘、野口幸広、橋村晴美、東原文子、肥後祥治、藤村義博、裴虹、松岡勝彦、松下浩之、三浦剛、水野浩、村本浄司、安川直史、山岡信夫、山口日奈子、山口昌保、山崎友紀、山中克夫、若松千春、渡辺匡隆『自閉症教育基本用語事典』学苑社、2012年、247頁
- ・伊藤健次、和泉美智恵、伊藤玲、小川英彦、荻原はるみ、小野里美帆、川上輝昭、小崎恭弘、酒井教子、園山繁樹、楯誠、一色澄、和泉美智恵、今泉依子、小野里美帆、小原榮子、塚本恵信、丹羽健太郎、橋村晴美、松下浩之、三島美砂、役田享、安原千香子、吉住敦子、吉弘淳一『障害のある子どもの保育 第2版』みらい、2011年、225-238頁

（学術論文）

- ・八桁健、橋村晴美『領域「表現」に関する素材遊びについての応用』中部学院大学・中部学院

大学短期大学部教育実践研究（4）、2018年、115-123頁

- ・橋村晴美『領域「言葉」における言葉の感覚が養われる教育方法についての一考察—学生の選書から見えてきたもの—』中部学院大学・中部学院大学短期大学部教育実践研究（3）、2018年、19-28頁
- ・西垣吉之、橋村晴美、西垣直子『環境に関わって生み出される遊びにおける非認知能力の評価に関する研究』、中部学院大学・中部学院大学短期大学部教育実践研究（3）、2018年、79-88頁
- ・西垣直子、西垣吉之、橋村晴美『幼児の発達に応じた身体表現活動を可能にする保育者への支援に関する研究—領域「健康」における子どもの育ちを読み取る視点を広げるために—』中部学院大学・中部学院大学短期大学部教育実践研究（3）、2018年、1-10頁
- ・明石英子、橋村晴美『保育者養成校に求められる「社会人基礎力」とは—学生の意識調査から見える実習指導の課題』幼年教育 WEB ジャーナル（1）、2018年、21-28頁
- ・西垣吉之、小木曾友則、橋村晴美、西垣直子『幼児の人間関係を育む教師の役割—幼児同士の関わりを表したエピソードの解釈から読み取ったことを中心に—』中部学院大学・中部学院大学短期大学部教育実践研究（1）、2017年、45-54頁
- ・西垣吉之、西垣直子、橋村晴美『身体の動きを伴う幼児の活動の評価の諸相に関する研究—領域「健康」における子どもの育ちを読み取る視点を広げるために』中部学院大学・中部学院大学短期大学部教育実践研究（1）、2017年、33-44頁
- ・西垣吉之、橋村晴美、西垣直子『幼児期の遊びにおける学びに関する研究—幼児の知的発達に着目して—』中部学院大学・中部学院大学短期大学部教育実践研究（2）、2017年、1-15頁
- ・西垣吉之、橋村晴美、平岡康代、西垣直子『幼児の実態を把握する保育者の視点についての分析—幼児の実態把握と環境の関連に着目して』中部学院大学・中部学院大学短期大学部教育実践研究（2）、2017年、55-65頁
- ・橋村晴美、西垣吉之、西垣直子『幼稚園新規採用教諭の専門性の育ちと指導・助言の関連に関する研究』中部学院大学・中部学院大学短期大学部教育実践研究（2）、2017年、35-44頁
- ・西垣吉之、橋村晴美、西垣直子『子どもの心の動きから捉えた異年齢保育の意味に関する研究』成育支援研究（7）、2016年、62-70頁
- ・西垣吉之、橋村晴美、西垣直子『保育において肯定的なまなざしを向けることの意味—保育者が受け入れがたい子どもの事例を通して—』障害支援研究（16）、2016年、34-42頁
- ・上田敏丈、平野仁美、羽根由美子、橋村晴美、松葉百香、二橋香代子、半澤幸恵、浦浜麗名『大学間授業研究の有効性に関する研究—保育者養成教員の指導方法の差異に着目して—』人間文化（26）、2016年、11-24頁
- ・西垣吉之、橋村晴美、Dalrymple 規子、小木曾友則、西垣直子『言葉の発達を促す指導・援助に関する実践研究—言葉の発達に弱さを抱えるA男の保育記録の解釈を通して—』中部学院大学・中部学院大学短期大学部教育実践研究（1）、2016年、99-109頁
- ・西垣吉之、橋村晴美、鈴木公二、西垣直子、Dalrymple 規子、岡田泰子、寺見陽子『個の適切な援助を促すための子どもの実態の読み取りの質に関する実践研究—個別支援計画に盛り込むべき内容への示唆—』中部学院大学・中部学院大学短期大学部教育実践研究（1）、2016年、

頁

37-

47頁

- ・橋村晴美、浅野俊和、塚本恵信『「教育・保育課程論」の授業テキスト（市販教科書）における記述内容の比較分析ー長期・短期指導計画の連動に関する説明部分を中心にー』中部学院大学・中部学院大学短期大学部教育実践研究（1）、2016年、121-30頁
- ・橋村晴美、塚本恵信、西垣吉之『保育者養成の初年次教育における観察力の育成ー初期段階における観察枠組みの獲得ー』病児保育岐阜（6）、2015年、20-33頁
- ・西垣吉之、橋村晴美、西垣直子『子どもを主体とした保育実践法に関する事例研究』障害支援研究（16）、2015年、34-42頁
- ・西垣吉之、西垣直子、橋村晴美『保育行為の妥当性を判断するための手立てに関する研究ー園で発達の課題を抱える子どもの生活の場を変えることに着目してー』障害支援研究（15）、2015年、30-34頁
- ・西垣吉之、岡田泰子、脇田和子、橋村晴美、西垣直子、Dalrymple 規子『5歳児期の音楽に関わる指導・援助の質に関する研究ー音や音楽に関わる活動における規則性不規則性に着目してー』障害支援研究（15）、2014年、4-19頁
- ・橋村晴美、塚本恵信、伊藤健次『幼稚園教育実習における実習日誌の改訂ー教育課程「ねらい」「内容」の理解と考察を促す様式』幼児教育研究紀要（26）、2014年、27-39頁
- ・橋村晴美、伊藤健次『絵本の「集団読み聞かせ」に関する教育心理学的考察：対話による相互作用の効果についての検討』幼児教育研究紀要（25）、2013年、27-45頁
- ・橋村晴美、塚本恵信、伊藤健次『保育所職員の省察の声から改善への課題を探る試み（3）他者園への言及に関する検討（1）』幼児教育研究紀要（23）、2011年、17-27頁
- ・塚本恵信、橋村晴美、伊藤健次『保育所職員の省察の声から改善への課題を探る試み（4）他者園への言及に関する検討（2）』．幼児教育研究紀要（23）、2011年、29-41頁

（学会発表）

- ・橋村晴美、西垣直子『異年齢の子どもが関わることの意味に関するー考察ー人間関係における「あこがれ」という言葉に着目してー』日本保育学会第70回大会、2017年
- ・塚本恵信、橋村晴美『保育における援助方法の理解を促す試みー保育者の援助とプロンプトー』日本保育学会第70回大会、2017年
- ・橋村晴美、塚本恵信『幼稚園教育実習事後指導における自己評価から見た学生の現状と課題ー課題克服への具体的手立ての記述からー』日本教育心理学会第58回総会、2016年
- ・橋村晴美『保育実践場面における学生の省察の特質』一般社団法人保育教諭養成課程研究会第3回研究大会、2016年
- ・橋村晴美、塚本恵信『幼稚園教育実習の事後指導のあり方に関するー考察』日本保育学会第69回大会、2016年
- ・橋村晴美、塚本恵信『保育指導計画における記録の問題点ーねらい・反省・自己評価の対応ー』日本保育学会第69回大会、2016年
- ・橋村晴美、塚本恵信『初年次における相互観察演習：保育観察力の育成に向けて』全国保育士養成協議会第54回研究大会、2015年
- ・橋村晴美、塚本恵信『保育指導計画の理解を促す授業実践の試み：保育内容「言葉」における実践演習』日本教育心理学会第57回総会、2015年

- ・橋村晴美、塚本恵信『保育における観察力（1）初年次教育における相互観察の実践』日本保育学会第68回大会、2015年
- ・塚本恵信、橋村晴美『保育における観察力（2）初年次教育における観察枠組みの育成』日本保育学会第68回大会、2015年
- ・塚本恵信、橋村晴美『絵本の集団読み聞かせにおける読後の対話活動：保育における言語力の育成』日本教育心理学会第56回総会、2014年
- ・羽根由美子、上田敏丈、平野仁美、橋村晴美『保育者養成校における授業カンファレンスに関する研究』全国保育士養成協議会第53回研究大会、2014年
- ・橋村晴美『指導計画の立案を促す実践演習：「ねらい」の理解』全国保育士養成協議会第53回研究大会、2014年
- ・橋村晴美、塚本恵信『言葉の伝え合いを促す保育実践法の検討（3）養成課程における技能の育成：授業の構成と展開』日本保育学会第67回大会、2014年
- ・塚本恵信、橋村晴美『言葉の伝え合いを促す保育実践法の検討（4）『言葉』『人間関係』における保育技能：「言語力」の育成』日本保育学会第67回大会、2014年
- ・塚本恵信、橋村晴美『絵本の集団読み聞かせにおける読後活動としての対話的相互作用』日本社会心理学会第54回大会、2013年
- ・橋村晴美『保育者養成における言語力育成の試みー領域「言葉」「人間関係」につなげる授業の構成を実践ー』全国保育士養成協議会第52回研究大会、2013年
- ・塚本恵信、橋村晴美『言葉の伝え合いを促す保育実践法の検討（1）絵本の読み聞かせにおける保育者と幼児の対話：実験的検討』日本保育学会第66回大会、2013年
- ・橋村晴美、塚本恵信『言葉の伝え合いを促す保育実践法の検討（2）絵本の読み聞かせにおける保育者と幼児の対話：継続的実践の効果』日本保育学会第66回大会、2013年
- ・橋村晴美、塚本恵信『保育の質を探る試み（3）個人的規準と実践の質』日本保育学会第65回大会、2012年
- ・塚本恵信、橋村晴美『保育の質を探る試み（4）再構成への可能性』日本保育学会第65回大会、2012年
- ・塚本恵信、橋村晴美『保育活動に関する言及の質的分析による組織的な問題および改善課題の検討』日本社会心理学会第52回大会、2011年
- ・塚本恵信、橋村晴美『保育の質を探る試み（1）「ねらい」に関する言及から』日本保育学会第64回大会、2011年
- ・橋村晴美、塚本恵信『保育の質を探る試み（2）「実践」に関する言及から』日本保育学会第64回大会、2011年

○科学研究費補助金等への申請状況、交付状況（学内外）

○所属学会

日本教育心理学会会員、絵本学会会員、日本保育学会会員、一般社団法人保育教諭養成課程研究会会員

○自己評価

今年度4月着任後、新たな環境に順応することに時間を割かれ、同年5月に開催された日本保育学会の参加取り消し（発表準備間に合わず）を皮切りに、研究者としての活動（学会参加、発表、

論文作成：活字化等) が全く疎かになってしまった。次年度は今回の反省を踏まえ、研究活動と学務分掌を区別して行動し、研究活動の時間を確保していくよう努めたい。

Ⅲ 大学運営

○目標・計画

(目標)

地域創造研究所運営委員会、キャリア支援委員会、全学教職課程委員会の委員として、日本社会を取り巻く保育環境に目を向けながら、地域・学生の意識高揚に向けた計画・取り組みを実施していく。

(計画)

就職ガイダンスや各種対策講座を実施するだけでなく、卒業生のホームカミングデーを企画・運営していく。その際には、卒業生と在校生が交流を図れる場を設けたり、保育現場もしくは教師・講師として働く卒業生に実践現場を語ってもらうなどして、在校生の職業意識に対する高揚を図っていく。さらに、卒業生へのフォローアップ研修も検討し、卒業生が足を運びやすい環境を整えていく。

○学内委員等

地域創造研究所運営委員会委員、キャリア支援委員会委員、幼小教職委員会委員、保育士養成課程委員会委員

○自己評価

キャリア支援委員会委員、幼小教職委員会委員においては、従来の流れを俯瞰して課題を見出し、また改善に向けての提言を行い、一定の成果を得ることができた。しかしながら、学務分掌に挙げられていない保育特講の運営を任されたことにより、公務員5名輩出、受講者による高授業評価の成果を得るものの、架空業務に大幅の時間が費やされ大きな負担となった。次年度は、学部全体で問題点を明らかにし、養成校としてのあり方を模索、大学運営に貢献していきたい。

Ⅳ 社会貢献

○目標・計画

(目標)

行政や行政管轄の保育現場ならびに私立幼保、認定こども園等と連携して、保育の資質向上に向けた助言を行う。

(計画)

行政や民間から申し出のあった仕事（子育て支援員研修、公開保育指導、園長研修会・副園長研修会・新卒研修会等）に、実務家経験のある講師として参加する。またその際は、保育現場にとって実践の一助となるよう、具体的な助言を心がけ、理論と実践の融合を図っていくよう努める。また、月に1度、岐阜県各務原市中部学院大学を会場に、公立保育所に勤務する保育者を対象に勉強会を開催して、そこでの成果を共同研究として学会で発表する。

○学会活動等

○地域連携・社会貢献等

・全国保育士養成協議会『平成30年度全国保育士養成セミナー』話題提供者、2018年

- ・岐阜県保育研究協議会『岐阜県保育等キャリアアップ研修会』講師、2018年
- ・中部学院大学『子ども未来セミナー』パネリスト、2018年
- ・岐阜県恵那市『公開保育指導ならびに研修会』講師、2017年～現在に至る
- ・岐阜県各務原市『公立保育士自主勉強会』講師、2017年～現在に至る
- ・岐阜県各務原市『公開保育指導ならびに研修会』講師、2015年～現在に至る
- ・岐阜県各務原市『子育て支援員』指導講師、2015年～現在に至る
- ・岐阜県瑞穂市『子育て支援員研修会』講師、2015年～現在に至る
- ・中部学院大学『子育て実践プログラム』講師、2014年～2018年

○自己評価

行政ならびに現職保育者から、具体的かつ理解しやすい指導であると高評価を得ることができた。

V その他の特記事項（学外研究、受賞歴、国際学術交流、自己研鑽等）

積極的に保育現場に出向き、現代社会における保育の実態について情報収集を行った。収集した情報は、授業内で学生にフィードバックするなどして、保育者養成に必要とされる指導のあり方について模索・探求を続けた。今後も現場との交流を密にして自己研鑽に努めていきたい。

VI 総括

実務家教員として成すべき役割を意識して任務遂行してきたが、新しい環境への順応性が不十分であったため、自身の研究活動を円滑に進めることができなかった。次年度は学部全体で問題を共有し、実習態勢の整備・改善に勤めながら自身の研究活動も充実させていきたい。

以 上

教員 自己評価報告（その他）

所属学部 学科	職位	氏 名
	教授	増田 孝
最終学歴	学 位	専門分野
東京教育大学教育学部芸術学科書専攻	博士 (文学)	日本文化史

I 教育活動

○目標・計画

（目標）

真に人から信頼され事を任せうる人格の育成をめざして、教養としての歴史学を学修し、自己の人間形成の一助とする。

（計画）

日本の歴史を各時代にわたり、主として日本文化に焦点を当てて学ぶ。

○担当科目（前期・後期）

（前期）歴史学、日本文化論

（後期）歴史学

○教育方法の実践

「歴史学」では『もう一度読む日本史』（山河出版）をテキストとし、原始・古代から近世にいたる通史を概観するようにつとめた。

「日本文化論」では近世初期の和歌をとりあげ、その解説、解釈、人物論などを行った。

○作成した教科書・教材

撮影した古文書の写真データ等を教材として活用

○自己評価

特になし

II 研究活動

○研究課題

日本人の書いた書を歴史的に考察し、日本人と書のかかわりについて研究する。

○目標・計画

（目標）

難読難解な古文書の新資料に数多く取り組みたい。

（計画）

解説、調査の回数をできる限り増加させ、研究の一層の深化を求めたい

○2011年4月から2019年3月の研究業績（特許等を含む）

（学術論文）

- ・「飛鳥井雅康の手紙」（『茶の湯』518号 2019.4.1 茶の湯同好会）
- ・「豊蔵坊孝雄の手紙・法童坊孝以の手紙」（『茶の湯』519号 2019.5.1 茶の湯同好会）

- ・「柏舟宗趙の手紙・鳥尾忠晴の手紙」(『茶の湯』520号 2019.6.1 茶の湯同好会)
- ・「沢庵宗彭の手紙」(『茶の湯』521号 2019.7.1 茶の湯同好会)
- ・「島津義久の手紙・曾我古祐の手紙」(『茶の湯』522号 2019.8.1 茶の湯同好会)
- ・「藤原惺窩の手紙・江月宗玩の手紙」(『茶の湯』523号 2019.9.1 茶の湯同好会)
- ・「松花堂昭乗の手紙」(『茶の湯』524号 2019.10.1 茶の湯同好会)
- ・「烏丸光広の手紙・清巖宗渭の手紙」(『茶の湯』525号 2019.11.1 茶の湯同好会)
- ・「後水尾天皇宸翰消息」(『茶の湯』526号 2019.12.1 茶の湯同好会)
- ・「古田織部の書の謎に迫る(その1)」(『茶の湯』527号 2020.1.1 茶の湯同好会)
- ・「古田織部の書の謎に迫る(その2)」(『茶の湯』528号 2020.2.1 茶の湯同好会)
- ・「古田織部の書の謎に迫る(その3)」(『茶の湯』529号 2020.3.1 茶の湯同好会)
- ・「江月宗玩の手が書風三様」(『関』第28号 2019年5.19 全日本石州流茶道協会)
- ・「前田利政の書はなぜ光悦流なのか」(『江戸千家便覧』131号 2019.6 江戸千家連合不白会)
- ・「小堀遠州の手紙-宝積経要品の短冊をめぐる-」(『江戸千家便覧』132号 2019.11 江戸千家連合不白会)

○科学研究費補助金等への申請状況、交付状況(学内外)

なし

○所属学会

日本古文書学会 書学書道史学会 茶湯文化学会

○自己評価

個人の研究会である「東京手紙の会」(会員48名)を毎月開催し、新資料の発表と積読を実施している。既に40年已上継続している会で有、成果を上げていると評価している。

III 大学運営

○目標・計画

(目標)

(計画)

○学内委員等

○自己評価

IV 社会貢献

○目標・計画

(目標)

各種講演会やテレビ出演等、知の社会還元に努めたい。

(計画)

特になし

○学会活動等

特になし

○地域連携・社会貢献等

- ・「名古屋NHK文化センター講座（手紙に読む書と歴史 月1回）」
- ・「朝日カルチャー講座」（手紙から読み解く古文書 月1回）」
- ・「中日文化センター講座」（手紙から読み解く日本史 月1回）」
- ・東海東京証券主催 プレミア講座（豊田市）」

○自己評価

テレビ東京系「開運なんでも鑑定団」（出張鑑定，スタジオ鑑定）の出演が相当数にのぼった。

V その他の特記事項（学外研究、受賞歴、国際学術交流、自己研鑽等）

新発見史料がたいへんに多く、その意味では極めて成果の多い一年であったと感じている。

VI 総括

この研究分野は、ひとえに新資料の発見とその研究であるから、今後も一層の充実を期したいところである。

以 上

